

# 堀部第1遺跡

鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査1



2005年3月

島根県 鹿島町教育委員会

# 堀部第1遺跡

鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴う調査1

## 例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が鹿島町福祉ゾーン整備事業に伴い実施した城部第1遺跡の発掘調査の記録である。
2. 調査地は、島根県八束郡鹿島町大字南講武752-1、754-1、754-2、771、773、774-1、776、777に所在したが、調査後、福祉ゾーン整備事業に伴って大字界の変更と地番変更が行われた。現在の地番は大字北講武885-4、885-5である。
3. 調査は、平成10年1月8日から平成11年11月1日まで2カ年度にわたって実施した。調査体制は以下のとおりである。なお、肩書きは調査時点を表記させていただいた。

事務局 鹿島町教育委員会 教育長 安部 登（平成11年9月まで）

鹿島町教育委員会 教育長 黒田翠義（平成12年1月から）

鹿島町教育委員会 教育次長 青山甚・（平成13年3月まで）

鹿島町教育委員会 教育次長 古瀬 篤（平成13年4月から）

調査指導 田中義昭（島根大学法文学部教授）

石井 慎（宍道町立宍道中学校教頭）

足立克己（島根県教育庁文化財課）

椿 真治（島根県教育庁文化財課）

岩橋孝典（島根県教育庁文化財課）

守岡正司（島根県教育庁文化財課）

家根祥多（立命館大学文学部）

藤田 等（静岡大学名誉教授）

片岡宏一（福岡県小郡市教育委員会）

山内靖吉（島根大学総合理工学部）

中野益男（帯広畜産大学）

井上貴火（鳥取大学医学部）

千葉 豊（京都大学大学院）

調査員 鹿島町教育委員会 文化振興係長 赤澤秀則（調査担当）

鹿島町教育委員会 主事補 川西 学

鹿島町教育委員会 瞽託 中村丈二

鹿島町教育委員会 瞽託 徳永 隆（平成13年10月から主事補）

鹿島町教育委員会 瞽託 徳永桃代

調査協力 時枝克安（島根大学総合理工学部）、道岸史子（同志社人文学文学研究科）、松山智弘、増田浩太（以上；島根県埋蔵文化財調査センター）

遺物整理員 中島美喜子（鹿島町立歴史民俗資料館）、瀬田明子、丹羽野輝子、井上忠志、坂上祐一（鹿島町教育委員会嘱託 平成13、14年度）

4. 調査にあたっては、鹿島町役場福祉課の協力をいただいた。

5. 現地調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々に有益なご教示をいただいた。記して感謝の意を表させていただきます。（敬称略、肩書きは調査時）

佐原 真、春成秀爾、小林謙一（以上；国立歴史民俗博物館）、金関 懇、宮崎泰史、林日佐子（以上；大阪府立弥生文化博物館）、渡邊貞一、山田康弘（以上；島根大学）、小池伸彦、岡村道雄、坂井秀弥、加藤真一（以上；文化庁文化財保護部）、井上洋一（東京国立博物館）、光谷拓実、深澤芳樹、牛嶋 茂（奈良国立文化財研究所）、松本岩雄、角田麻季（以上；島根県埋蔵文化財調査センター）、常松幹雄（福岡市博物館）、山崎純男（福岡市教育委員会）、福岡澄男、藤田憲司（以上；大阪府文化財調査研究センター）、西谷 正（九州大学）、伊東照雄（下関市立考古博物館）、石川口出志（明治大学）、北島人輔（明治大学大学院）

6. 掲載図面の縮尺は、遺構図1/30、出土土器1/3、出土石器（小）1/1、1/2、出土石器（大）1/3、出土木製品1/6を原則としているが、これに從えないものはその都度縮尺を明記するようにした。

7. 本文中の石材についての記述は、島根大学総合理工学部山内靖喜教授のご教示によっている。このうち閃綠岩はいわゆる大芦御影を指し、一部はんれい岩も含んでいる。

8. 本書の執筆分担は、目次に記すとおりである。

9. 出土遺物のうち、穴帶文土器、網文後期粗製土器は、いなか舎に委託して団化したものを含む。
10. 出土遺物、実測図および写真などの資料は、鹿島町立歴史民俗資料館において保管している。

作業に参加した人々 青山明生、青山聰雄、青山貴美枝、青山喜美枝、青山清雄、青山久仁美、青山貞重、青山起也、青山忠平、青山泰、青山浪男、青山信行、青山典明、青山秀春、青山茂登子、青山幸夫、青山由春、安立 学、安立 努、安達敬一、安達源二、安達鉢二郎、安達哲治、安達輝子、安達徳重、安達大志、安達善也、安達良治、安達林作、井川浩子、石津仁吉、石津満子、伊藤静香、伊藤美代子、井上一栄、井上 栄、井上準之助、井上 健、井上忠志、上野美紀子、上山良太郎、影山夏世、柏木真理子、加藤和枝、金坂一吉、狩野勇二、川谷恵六、川下晴夫、木村愛子、木村 悟、草本京子、倉本 和、小澤千鶴、小下賢二、後藤裕臣、後藤みづ子、後藤善男、古原直美、佐々井克文、嶋田洋平、曾田眞佐美、染次史之、曾山 誠、太子裕貴、高橋洋子、田角由香、谷口 勉、田淵由紀子、田村行識、津森折也、長岡美江子、秦勝洋、浜岡卓男、原 浩二、深田邦子、松浦安子、山本卓治、山本智恵子、山本正男、山本義延、山本有史、渡辺 久美子、渡部さゆ

## 本文目次

第1章 調査にいたる経緯	赤澤… 1
第2章 位置と歴史的環境	〃 … 2
第3章 調査の経過	〃 … 8
第4章 調査の概要	11
第1節 土層	川西… 11
第2節 水路群の調査	〃 … 11
第3節 墳墓群の調査	18
西区の調査	赤澤… 22
1号墓	〃 … 22
2号墓	〃 … 24
3号墓	〃 … 27
24号墓	〃 … 29
30号墓	〃 … 29
25号墓	〃 … 29
15号墓	〃 … 30
4号墓	〃 … 32
16号墓	〃 … 32
17号墓	〃 … 35
19号墓	〃 … 42
20号墓	〃 … 45
21号墓	〃 … 45
22号墓	〃 … 49
23号墓	〃 … 50
26号墓	〃 … 52
27号墓	〃 … 53
28号墓	〃 … 54
56号墓	〃 … 55
57号墓	〃 … 57
東区の調査	德永… 58
5号墓	〃 … 59
6号墓	〃 … 66
7号墓	〃 … 67
8号墓	〃 … 69
9号墓	〃 … 70
14号墓	〃 … 71
10号墓	〃 … 73
11号墓	〃 … 74
12号墓	〃 … 75
13号墓	〃 … 77
29号墓	〃 … 77
北東区の調査	赤澤… 78
44号墓	〃 … 78
50号墓	〃 … 78
31号墓	〃 … 78
32号墓	〃 … 82
33号墓	〃 … 82
34号墓	〃 … 82
35号墓	〃 … 83
45号墓	赤澤… 83
55号墓	〃 … 84
54号墓	〃 … 84
51号墓	〃 … 85
52号墓	〃 … 85
53号墓	〃 … 86
37号墓	〃 … 86
36号墓	〃 … 87
46号墓	〃 … 88
47号墓	〃 … 88
42号墓	〃 … 88
38号墓	〃 … 88
39号墓	〃 … 89
40号墓	〃 … 90
41号墓	〃 … 90
43号墓	〃 … 91
48号墓	〃 … 91
49号墓	〃 … 91
墳島群標石の石材	〃 … 91
第4節 遺構に伴わない遺物	
内区：遺構に伴わない遺物の出土状況	徳永… 94
内区：遺構に伴わない弥生土器	〃 … 94
西区：遺構に伴わない突帯文土器	〃 … 94
東区：遺構に伴わない遺物の出土状況	〃 … 98
東区：遺構に伴わない弥生土器	〃 … 98
東区：遺構に伴わない突帯文土器	〃 … 101
O・P・Q区：遺構に伴わない遺物の出土状況	〃 … 113
O・P・Q区：遺構に伴わない弥生土器	〃 … 113
O・P・Q区：遺構に伴わない突帯文土器	〃 … 113
B・C区：遺構に伴わない遺物の出土状況	〃 … 113
B・C区：遺構に伴わない弥生土器	〃 … 113
B・C区：遺構に伴わない突帯文土器	〃 … 122
遺構に伴わない石器	丹羽野… 126
第5節 編文時代後期包含層の調査	
B 5 区編文後期土器出土状況	徳永… 136
B 5区出土編文後期土器	〃 … 136
C 3区出土編文後期土器出土状況	徳永… 136
C 3区出土編文後期土器	〃 … 138
編文後期の石器	丹羽野… 150
第5章 特論	
壙部第1遺跡調査に伴う花粉・珪藻分析	
渡辺正巳… 152	
壙部第1遺跡の人骨について	
井上貴央・川久保善智… 158	
壙部第1遺跡出土木棺材の <sup>14</sup> C年代測定	
地球科学研究所… 165	

鳥根県鹿島町堀部第1遺跡出土炭化米の <sup>14</sup> C年代測定	
……小林謙一・春成秀爾・坂本 稔・	
尾寺大真・新免成靖・松崎治之	167
木棺棺材樹種 覧	吉田生物研究所
第6章 結語	池永重
堀部第1遺跡墳墓一覧	170
	177

## 挿図目次

図1	鹿島町位置図	1
図2	占補遺跡25号・26号人骨	2
図3	堀部第1遺跡と周辺の遺跡	3
図4	北溝式氏元遺跡出土上器	4
図5	堀部遺跡群と周辺の遺跡(1/7500)	5
図6	稗田遺跡木製品出土状況	6
図7	堀部遺跡群全体図(1/3000)	7
図8	遺跡全体図(1/400)	9
図9	1層図	10
図10	水路群平面図	11
図11	2号溝出土遺物実測図	12
図12	3号溝出土遺物実測図(1)	13
図13	3号溝出土遺物実測図(2)	14
図14	3号溝出土遺物実測図(3)	15
図15	4号溝出土遺物実測図	15
図16	6号溝実測図	16
図17	6号溝上層図	17
図18	6号溝出土遺物実測図	17
図19	墳墓群配図図	19
図20	西区墳墓配置図(礫石)	20
図21	西区墳墓配置図(盛塙)	21
図22	1号墓実測図	23
図23	1号墓出土遺物実測図	23
図24	2号墓実測図	25
図25	2号墓出土遺物実測図(1 上器、石鏡)	26
図26	2号墓出土遺物実測図(2 腰斧、石鏡)	26
図27	2号墓出土遺物実測図(3 棺材)	26
図28	3号墓出土遺物実測図	27
図29	3号墓実測図	28
図30	3号墓棺材実測図	28
図31	24号墓実測図	29
図32	30号墓実測図	30
図33	30号墓出土遺物実測図	30
図34	25号墓実測図	30
図35	25号墓棺材実測図	30
図36	15号墓実測図	31
図37	15号塗棺実測図	31
図38	4号墓実測図	33
図39	4号墓出土遺物実測図	34
図40	4号墓棺材実測図	34
図41	16号墓出土遺物実測図	35
図42	16号墓実測図	36
図43	16号墓棺材実測図	37
図44	17号墓実測図	38・39
図45	17号墓山上遺物実測図	40
図46	17号墓棺材実測図	41
図47	19号墓出土遺物実測図	42
図48	19号墓実測図	43
図49	19号墓棺材実測図	44
図50	20号墓実測図	46
図51	20号墓出土遺物実測図	46
図52	21号墓実測図	47
図53	21号墓出土遺物実測図	48
図54	22号墓実測図	49
図55	22号墓出土遺物実測図	50
図56	23号墓実測図	50
図57	23号墓出土遺物実測図	51
図58	23号墓棺材実測図	51
図59	26号墓実測図	52
図60	26号墓出土遺物実測図	52
図61	27号墓実測図	53
図62	27号墓出土遺物実測図	53
図63	28号墓実測図	54
図64	28号墓出土遺物実測図	55
図65	56号墓実測図	56
図66	56号墓出土遺物実測図	56
図67	36号墓棺材実測図	57
図68	57号墓実測図	57
図69	57号墓出土遺物実測図	57
図70	東区墳墓配置図(標石)	58
図71	東区墳墓配置図(墓壙)	59
図72	5号墓実測図	60・61
図73	5号墓出土遺物実測図	62
図74	6号墓実測図	64・65
図75	6号墓出土遺物実測図	66
図76	6号墓棺材実測図	66
図77	7号墓実測図	68
図78	7号墓出土遺物実測図	69
図79	8号墓実測図	70
図80	8号墓出土遺物実測図	70
図81	9号墓実測図	71
図82	14号墓実測図	72
図83	14号墓出土遺物実測図	72
図84	10号墓実測図	73
図85	11号墓実測図	74
図86	11号墓出土遺物実測図	74
図87	12号墓実測図	75
図88	13号墓実測図	76
図89	13号墓出土遺物実測図	76
図90	29号墓実測図	77
図91	北東区墳墓配置図	79
図92	44号墓・50号墓実測図	80

図93 44号墓・50号墓出土遺物実測図	80
図94 31号墓実測図	81
図95 31号墓出土遺物実測図	81
図96 32号墓実測図	81
図97 32号墓出土遺物実測図	81
図98 33号墓実測図	82
図99 33号墓出土遺物実測図	82
図100 34号墓実測図	83
図101 34号墓出土遺物実測図	83
図102 35号墓実測図	83
図103 45号墓実測図	84
図104 55号墓実測図	84
図105 55号墓出土遺物実測図	84
図106 54号墓実測図	84
図107 51号墓実測図	85
図108 51号墓出土遺物実測図	85
図109 52号墓実測図	85
図110 52号墓出土遺物実測図	85
図111 53号墓実測図	86
図112 37号墓実測図	86
図113 36号墓実測図	86
図114 36号墓出土遺物実測図	86
図115 46号墓実測図	87
図116 46号墓出土遺物実測図	87
図117 47号墓実測図	87
図118 42号墓実測図	87
図119 38号墓実測図	88
図120 38号墓出土遺物実測図	88
図121 39号墓実測図	89
図122 39号墓出土遺物実測図	89
図123 40号墓実測図	89
図124 40号墓出土遺物実測図	89
図125 41号墓実測図	90
図126 43号墓実測図	90
図127 43号墓出土遺物実測図	90
図128 48号墓実測図	90
図129 49号墓実測図	91
図130 1号墓樹籬岩	92
図131 標石石材の同定と使用場所(1)	92
図132 標石石材の同定と使用場所(2)	93
図133 道構に伴わない土器出土状況(1; 西区)	95
図134 道構に伴わない土器出土状況(2; 東区)	96
図135 道構に伴わない土器出土状況(3; 東区)	97
図136 西区出土弥生土器(1)	99
図137 西区出土弥生土器(2)	100
図138 東区出土弥生土器(1)	102
図139 東区出土弥生土器(2)	103
図140 東区出土弥生土器(3)	104
図141 北東区出土弥生土器	105
図142 B・C区出土弥生土器(1)	106
図143 B・C区出土弥生土器(2)	107
図144 B・C区出土弥生土器(3)	108
図145 西区出土突帯文土器(1)	110
図146 西区出土突帯文土器(2)	111
図147 西区出土突帯文土器(3)	112
図148 東区出土突帯文土器(1)	114
図149 東区出土突帯文土器(2)	115
図150 東区出土突帯文土器(3)	116
図151 東区出土突帯文土器(4)	117
図152 東区出土突帯文土器(5)	118
図153 東区出土突帯文土器(6)	119
図154 東区出土突帯文土器(7)	120
図155 東区出土突帯文土器(8)	121
図156 東区出土突帯文土器(9)	122
図157 北東区出土突帯文土器	123
図158 B・C区出土突帯文土器(1)	124
図159 B・C区出土突帯文土器(2)	125
図160 突帯文期～弥生前期層出土石器(1)	127
図161 突帯文期～弥生前期層出土石器(2)	128
図162 突帯文期～弥生前期層出土石器(3)	129
図163 突帯文期～弥生前期層出土石器(4)	130
図164 突帯文期～弥生前期層出土石器(5)	131
図165 突帯文期～弥生前期層出土石器(6)	132
図166 突帯文期～弥生前期層出土石器(7)	133
図167 突帯文期～弥生前期層出土石器(8)	134
図168 突帯文期～弥生前期層出土石器(9)	135
図169 B・C区出土繩文後期土器出土状況	136
図170 C・3区出土繩文後期土器出土状況	137
図171 B・5区出土繩文土器	139
図172 C・3区出土繩文土器(1; 精製)	140
図173 C・3区出土繩文土器(2; 精製)	141
図174 C・3区出土繩文土器(3; 精製)	142
図175 C・3区出土繩文土器(4; 精製)	143
図176 C・3区出土繩文土器(5; 精製)	144
図177 C・3区出土繩文土器(6; 精製)	145
図178 C・3区出土繩文土器(7; 精製)	146
図179 C・3区出土繩文土器(8; 精製)	147
図180 C・3区出土繩文土器(9; 精製)	148
図181 C・3区出土繩文後期土器	151
図182 試料採取地点	152
図183 16号墓の花粉ダイアグラム	153
図184 6号溝の花粉ダイアグラム	156
図185 6号溝の花粉ダイアグラム	157
図186 6号溝の孢子総合ダイアグラム	157
図187 検出歯牙分類図	160
図188 歯牙片および人骨の検出状況(1)	161
図189 歯牙片および人骨の検出状況(2)	162
図190 麻午駒正座率密度分布	168
図191 標石の形態分類	171
図192 堀部第1遺跡と類似の支石・標石墓	175
図193 弥生前崩壊墓の分布図	176

表1 遺構に伴わない石器 器種別出土地区一覧	135	表5 木棺内法	172
表2 出土人骨一覧	163・164	表6 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果一覧	173
表3 測定結果と樹年校正年代	168	表7 弥生前期墳墓一覧	176
表4 木棺棺材樹種一覧	169	表8 墓部第1遺跡墳墓一覧	177

図版1	掘部第1遺跡航空写真	図版22	19号墓・20号墓標石 19号墓蓋板検出状況	図版40	9号、14号、29号標石 9号墓掘り上げ状況
図版2	西区標石航空写真 東区標石航空写真	図版23	19号墓出土十器 19号墓棺材	図版41	9号墓質残存状況 14号墓掘り上げ状況
図版3	北東区標石	図版24	20号墓掘り上げ状況 同出土十器	同上	同出土状況 同出土上器
図版4	19号墓木棺 掘部第1遺跡出土遺物	図版25	21号墓標石 同十器出土状況	図版42	10号墓、11号墓標石 10号墓掘り上げ状況
図版5	6号溝断面 6号溝出土遺物	図版26	同掘り上げ状況 21号墓出土上器	図版43	11号墓掘り上げ状況 同出土遺物
図版6	東西標石と水路群 西区墓標	図版27	同塗壁堅御 同棺材	図版44	12号墓掘り上げ状況 13号墓標石
図版7	1号墓標石 1号墓掘り上げ状況	図版28	22号墓標石 同掘り上げ状況	図版45	同掘り上げ状況 北東区標石航空写真
図版8	1号墓作菜風景 1号墓蓋板断面 1号墓出土十器	図版29	23号墓掘り上げ状況 同出土石鏡	図版46	50号・41号・51号標石 31号墓標石
図版9	2号墓標石 2号墓掘り上げ状況	図版30	26号墓標石 同掘り上げ状況	図版47	32号墓標石 44号、50号、31号、32号墓 出土上器
図版10	2号墓東小口 同管玉出土状況 同出土十器	図版29	27・28号墓標石 27号墓掘り上げ状況	図版48	33号墓標石 33号墓出土土器
図版11	3号墓はか標石 3号・24号墓掘り上げ 状況	図版30	28号墓出土十器 同出土器	図版49	34号墓標石 同出土十器
図版12	3号墓出土状況 同出土上器 同石鏡・石鏡	図版31	27・28号墓出土石鏡 56号墓掘り上げ状況 56号墓出土遺物 上器	図版50	36号墓標石 46号墓標石 42号墓標石
図版13	30号墓掘り上げ状況 同石鏡	図版32	57号墓掘り上げ状況 西区掘り上げ全景	図版51	36号墓、46号墓出土土器 38号墓標石
図版14	15号墓検出状況 15号墓金棺 壇棺	図版33	西区作菜風景 東区標石 東区掘り上げ状況航空 写真	図版52	38号墓出土土器 39号墓標石 40号墓標石 40号墓出土土器
図版15	4号墓標石 4号墓掘り上げ状況	図版34	5号墓標石 5号墓標石基礎	図版53	A「1区遺物出土状況 A3斜面突帯文土器出土 状況
図版16	4号墓東小口土崩 同出土上器・石鏡 同内小口板	図版35	5号墓掘り上げ状況 同出土遺物	図版54	C3区十器出土状況 「長者の墓」削平前
図版17	16号墓標石 16号墓掘り上げ状況	図版36	6号墓標石 6号墓標石基礎	図版55	第2回現地説明会 調査参加者
図版18	16号墓底板検出状況 同底板	図版37	6号墓掘り上げ状況 6号墓出土十器	図版56	遺構に伴わない弥生十器
図版19	16号墓棺材	図版38	7号墓標石 同掘り上げ状況	図版57	区版57 遺構に伴わない突帯文土器
図版20	17号墓標石 同墓標と石材 同掘り上げ状況	図版39	7号墓出土十器 8号墓標石 同掘り上げ状況	図版58	遺構に伴わない石器 (突帯文期～弥生前期)
図版21	17号墓出土土器 17号墓棺材			図版59	縄文後期土器1
				図版60	縄文後期土器2

# 第1章 調査にいたる経緯

鹿島町で計画された福祉ゾーン整備計画は、大字北講武から人字南講武にかけて8.2ha余りを対象とするもので、この計画区域内には周知のものだけで1988年に圃場整備事業にともない一部の調査を実施した北講武氏元遺跡、1980年代初頭の水田区画整理事業の際に中世の土師質土器が採集されていた堀部遺跡（のちに堀部第1遺跡と改称）、堀部古墳群の3個所の遺跡が知られていた。

町教育委員会では、1996年度、交通安全施設整備に伴う佐太講武貝塚の調査を終えた後、佐太南地区農村活性化作環境整備事業に伴う志谷奥遺跡公園化のための志谷奥B遺跡での試掘調査の結果をもとに、同事業と今後の調査について協議中であった。しかし、福祉ゾーン整備事業計画にかかる造成予定地は、遺跡の多い講武盆地内でも中央部に位置し、予定地内の埋蔵文化財は周知の遺跡だけでは終わらないことが予想された。このため、佐太南地区農村活性化作環境整備事業に伴う志谷奥遺跡公園は同事業で実施することは困難と判断し、その旨調整した上で、1996年11月から福祉ゾーン計画区域内の第1次の試掘調査を開始した。

この29個所にトレーナーを設定した第1次試掘調査には1997年2月までを要した。この試掘によって、從来中世遺物が採集されていた堀部遺跡は、弥生時代前期と繩文時代後期の遺物を包含する遺跡に、一方、堀部第2遺跡、同第3遺跡、同第4遺跡を新たに確認するところとなった。また、堀部古墳群の所在する尾根上に設定した調査区からは尾根高所の堀部1号墳から5号墳だけでなく、尾根先端部まで古墳が連続とつながっていることが判明したのであった。

一方、計画区域内でも進入部分に位置する北講武氏元遺跡は、さきの県営圃場整備事業に伴い一部調査をおこなっていたが、今回のゾーン区域の進入路に相当し、面的な調査を必要とするうえに早期の調査実施が必要と判断された。このため、一部試掘調査を後年度振りりし、1997年2月27日から調査を行った。調査では、先年の調査区の弥生時代前期および美帝文の包含層の中心をわずかに外れており、遺構、遺物の出土は比較的に多くなく、調査そのものは順調に推移し、7月4日終了した。

1997年7月調査を開始した堀部第2遺跡では、近代の養蚕に伴う桑樹用の溝列が検出され、続いて碧玉片、ガラス玉等が出土しはじめ、弥生時代終末頃、管長を中心とする玉作りを行っていたと考えられた。また、数多くの溝が検出され、これにおびただしい遺物が含まれていた。さらに掘立柱建物1棟、

堅穴住居3棟を検出し、98年8月調査を終了した。

この間に並行して試掘を再開し、第2次試掘調査として堀部第2遺跡に隣接する山林の尾根、斜面向に設定した11個所の調査では、中世のものと考えられる掘立柱建物が数多く存在し、面積も広い堀部第5遺跡を確認した。

98年1月から堀部第1遺跡の調査を開始した。

98年7月調査を開始した堀部第3遺跡では、やはり数多くの溝からおびただしい遺物が出土したほか、柵列状の柱穴列、柱穴に碧玉製ハンマーを埋納した布掘建物を検出したほか、ここでも弥生時代終末頃にやはり碧玉による工作りを行っていたと考えられる刺片、碧玉製角玉などを検出した。注目すべき遺構として北部九州製の大型壺が埋納された壺かと考えられるものもあった。堀部第1遺跡と調査を平行して99年8月に終了した。



図1 鹿島町位置図

## 第2章 位置と歴史的環境

島根半島のはば中ほどに位置する講武盆地は、半島部では持田・川津平野と並ぶ広い耕地面積をもち、その水田は180haに及ぶ。盆地は谷奥から流れ出す講武川によって運ばれた土砂による沖積地で、肥沃な耕作地となっており、古代から中世にかけてのものと考えられる条里が敷かれていたことも知られる。縄文時代 佐太講武貝塚が現在鹿島町域内で知られる最も古い遺跡であり、1933年に史跡指定を受けている。この貝塚では、貝塚本体は縄文時代前期の所産と判明したが、貝層に面する低湿地部での調査では、貝層に対応する層とそれ以後の中期、後期、晚期、弥生時代、古墳時代にわたる遺物包含層が、良好に残存することを確認している。

貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、海水産の貝はわずかである。このことから貝塚が形成された縄文時代前期、周辺部が汽水湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この汽水湖は、後の『山云國風土記』にいうところの「佐太水泊」「志雲陂」の前身と考えられ、貝塚は南北にそれぞれ汽水域をひかえる分水嶺に位置しており、地形的にも卓越した地点にあることがわかる。こうした汽水域からヤマトシジミを中心とする貝類を採取する一方、貝層中には堅果類の果皮が大量に含まれ、周辺の山野で堅果類をもとめていたことが明らかになった。また、隨遷別の結果、貝層中には海水産の魚よりも、コイ、フナ科の魚骨が大量に含まれ、魚類についてもヤマトシジミの採取と類似した水系での漁労活動が推定できる。しかし、貝塚を形成した人々の集落そのものはいまだ明らかでない。

鹿島町域内の縄文時代の様子は佐太講武貝塚を除いてまだよく判明していない面があるが、今回報告の堀部第1遺跡<sup>3</sup>で多数の後期土器と晚期系の突帯文土器が、北講武氏元遺跡<sup>4</sup>でも晚期系の突帯文土器が出土するなど、徐々にその姿を現しつつある。

弥生時代 弥生時代には北講武氏元遺跡で遠賀川系の弥生土器が出上りし、講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが想定される。ここでは遠賀川系の弥生土器とともに縄文晚期系の突帯文土器が出土しており、遠賀川系の土器を使うひとびとと突帯文系の土器を使うひとびとがともに集落を形成していた可能性がある。北講武氏元遺跡から300mの堀部第1遺跡は、北講武氏元遺跡に暮らした人々の墳墓と考えられる遺跡である。集落では遠賀川系と突帯文系の両者の土器を使いながら、墳墓には遠賀川系の土器のみを供獻しており、興味深い。一方、日本海沿

岸の古浦砂丘遺跡では、やはり弥生時代前期から中期の集団埋葬が検出されている。ここでは60体以上の人が骨が発見されている。堀部第1遺跡のような大規模な標石はもたないようである<sup>5</sup>。

北講武氏元遺跡では、弥生時代の時期を異にして掘削された灌漑用と考えられる水路群、古代と中世の水田面も検出している。ここでは、時期が降るにつれて沖積して高くなる水田面に対応して、高所へ水路が移ってゆく様が明らかになっている。

古浦砂丘内側の潟湖を『山云國風土記』は「志雲陂」と伝える。この志雲陂の南岸の山腰には、銅鐸2、銅劍6を埋納した志谷奥遺跡<sup>6</sup>がある。銅鐸は、外縁付紐1式四隅に袈裟襷文のものと、偏平紐式四隅袈裟襷文のもので、銅劍はいずれも中広形に属する。周辺の集落での祭祀に使用されたものと考えられる。偶然の機会に発見されたものであるが、調査によって埋納壙が検出されている。

また、大量の木製品を検出した稗田遺跡<sup>7</sup>が、やはり「志雲陂」の西岸にあり、ここでは弥生時代中期から後期にかけての農具、建築材など多数が出土している。木製品には弥生時代終末から古墳時代前期の櫛材や準構造船材も含まれており注目された。木製品を多く含む木製品の出土状況からはこの遺跡に隣接して拠点的な集落が存在するものと考えられ

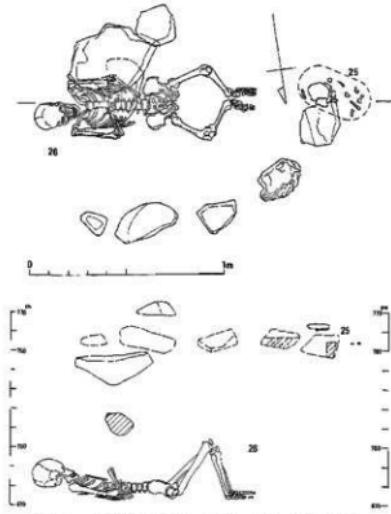


図2 古浦遺跡25号・26号人骨（注5書）

1. 加賀郡第1遺跡
2. 佐賀縣武丘跡
3. 古瀬原跡
4. 北瀬原片平元遺跡
5. 本谷塚遺跡
6. 鹿田塚遺跡
7. 佐久上山遺跡
8. 名分山遺跡
9. 佐賀市今宿遺跡
10. 南瀬原中野遺跡
11. 美子ヶ塚群
12. 鶴屋山古墳群
13. 名分山山古墳群
14. 仲ノツラ古墳
15. 滝面山古墳群
16. 例山古墳
17. 清水山古墳
18. 白堀古墳
19. 茂加古墳
20. 免目山古墳
21. 山川山古墳
22. 朝倉山の牛占塚
23. 岩崎山古墳群
24. 各所山古墳群
25. 与の原古墳群
26. 恋子塚古墳群
27. 系瀬山古墳群
28. 鶴まき等塚穴群
29. 鶴山古墳
30. 伊毛山古墳
31. 大瀬原山古墳
32. 戸山古墳
33. 他平古墳群
34. 下台古墳
35. 加賀郡第5遺跡



図3 堀部第1遺跡と周辺の遺跡 (1/50000)

る。断続はあるものの、縄文晩期から古墳時代前期までの遺物が出土しており、「恵登岐」周辺での初期農耕の成立があった可能性がある。墳墓である古墳遺跡に対応する集落である可能性も考慮される。

講武盆地南西端に位置する大字佐陀宮内にも弥生前期からの佐太前遺跡<sup>8</sup>が存在する。部分的な調査しか經ていないが、各時代にわたる大量な遺物、遺構が存在するよう、付近の拠点集落とも目される遺跡である。その一方で、弥生時代では前期の遺物のみを出土した佐太講武貝塚低湿地部、中期の遺物のみを出土した名分塚田遺跡<sup>9</sup>など、拠点集落からの分村を行ながらも、ごく短期間で撤退したと考えられる遺跡もあり、水田<sup>10</sup>耕作の開発は曲折を経ながら進行したものと考えられる。

その他、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡<sup>10</sup>が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系の土器が大量に出土した南講武草田遺跡<sup>11</sup>が知られている。南講武草田遺跡では近畿系を中心とする搬入土器が大量に出土しており、弥生時代終末、かなりの人数の集団がこの地を訪れたことが想定される。こうした直接的な交流を経て、地方が古墳時代を迎えるものと考えられる。

一方、佐太講武貝塚低湿地部では、縄文晩期前半



図4 北講武氏元遺跡出土土器

に相当する層から朝鮮半島の孔列文土器の影響を受けて製作されたと考えられる土器が、また、鹿島町沖の日本海海底からは楽浪郡製と考えられる丸貫土器が引き揚げられ、古浦砂丘遺跡では松菊里式の影響が考えられる土器が出土するなど、日本海に面する島根半島の位置を象徴する遺物もある。堀部第1遺跡での松菊里式土器や松菊甲系の土器なども、こうした海上交通の結果とを考えることができる。

古墳時代 古墳時代を迎えると、講武盆地を中心に水田を見下す丘陵上には奥才古墳群<sup>12</sup>をはじめ、果々と古墳群が築かれている。古墳は前期から後期までを通じての築造が確認できる。奥才古墳群では、疊床と呼ぶ小石敷き箱式石棺や木棺を土体部とする。この古墳群には、内向花文鏡、方格文鏡、右鉤や劔鍾車形石製品など、優秀な副葬品をもつものがいた。一方、「奥才型木棺」と仮称している長い疊敷きの木棺を2~3室に区切った木棺は、この島根半島と九州北部、丹後、但馬にはば分布が限られており、海上交通を通じての交流を端的に表わすものと考へられる。奥才古墳群第8支群<sup>13</sup>では、奥才古墳群本体に先行して築造されていることが判明している。

奥才古墳群と水田をはさんで向かい合う独立丘陵には10余基からなる鶴瀬山古墳群<sup>14</sup>が知られている。この古墳群中には柄鏡形の墳丘をもつ前方後円墳があり、前期にまで溯源する可能性があるほか、群構成も奥才古墳群に類似しており注目される。さらにこの北の丘陵上には、7基からなり、全長約40mの前方部の大きく開く古式の墳丘をもつ名分丸山古墳群<sup>15</sup>が知られており、高い密度で古墳の分布することが明らかになりつつある。

これらをはじめ、周辺の古墳群で土体部の判明するものでは、奥才古墳群と同様に疊床や箱式石棺あるいはその両者を採用するものが多く、箱式棺を有し、鐵劍等を出土した中ノソラ古墳<sup>16</sup>など、前期から後期前半代にまで古墳群毎に若干の時期差を有しながらも築造されており、非常に強い一貫性を示している。また、講武地区には70mを超える前方後円墳である可能性が高い堀部1号墳<sup>17</sup>が知られている。その他の地区では単独墳が主で群を成すとしても、2~3基程度のようだ。安定した水田を有する講武地区が卓越した生産力を有していたものと考えられる。後期にいたってもこの傾向は変わらず、やはり講武盆地に、横穴式石室を有していたと伝えられ、鐵劍や須恵器子持壺を出土した向山古墳<sup>18</sup>、切石造りの石棺式石室である岩原古墳<sup>19</sup>などの首長墓が築かれる一方、各地に横穴墓が営まれる。20穴以上からなる寺の奥横穴群、九天井形の寺尾横穴群、格正家形の恵谷横穴群などをはじめ、非常に多い。横穴墓群の分布からは古墳時代後期の段階には、現

300m

0

300m

0

300m

0

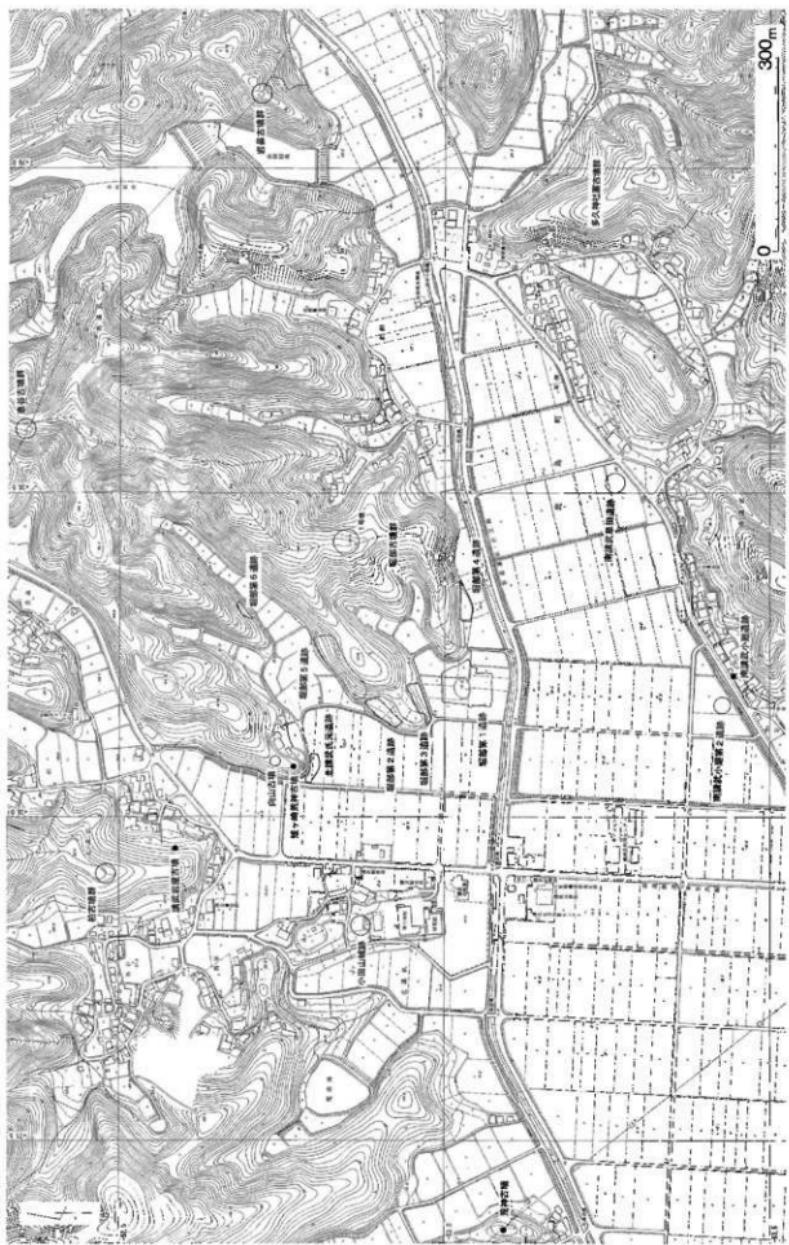
300m

0

300m

0

図5 塙部遺跡群と周辺の遺跡(1/7500)



在の集落の原形がすでに成立しているものと考えられる。

**歴史時代** 『出雲國風土記』の著された8世紀代には当町は島根郡、秋鹿郡にまたがり、古浦遺跡は秋鹿郡忠曇郷に、講武盆地は島根郡の余戸里や生忠郷の一部に含まれるようである。平安時代末には、佐太神社の周辺は安楽寿院に寄進され、佐陀莊が成立する。『風土記』に「佐太御子社」とみえる佐太神社は、出雲國一宮である熊野大社に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて大きな勢力を誇っていた。鎌倉時代初期に佐陀莊の下司職に補任された朝山氏は、承久の乱後、佐太神社神主を兼ね、莊園支配の実務にあたったと考えられる<sup>20</sup>。この朝山氏は佐陀氏を名乗り、南北朝期には佐陀城（芦山城）に拠り、戦乱に加わっている。佐陀莊は戦国末期には、尼子氏にかわって勢力をはった毛利氏の支配下に入り、毛利家臣による所領分割によって蚕食され、

莊園としての体制は失われていくようである。南北朝期から戦国期にかけての戦乱に際して、この一帯にも多くの山城が築かれており、殿山・海老山・大勝間・芦山・池平城跡など、相当の規模をもつものもある。このうち大勝間山城は、史料としての信憑性は低いが、『陰徳太平記』といった軍記物に名前が見えている。

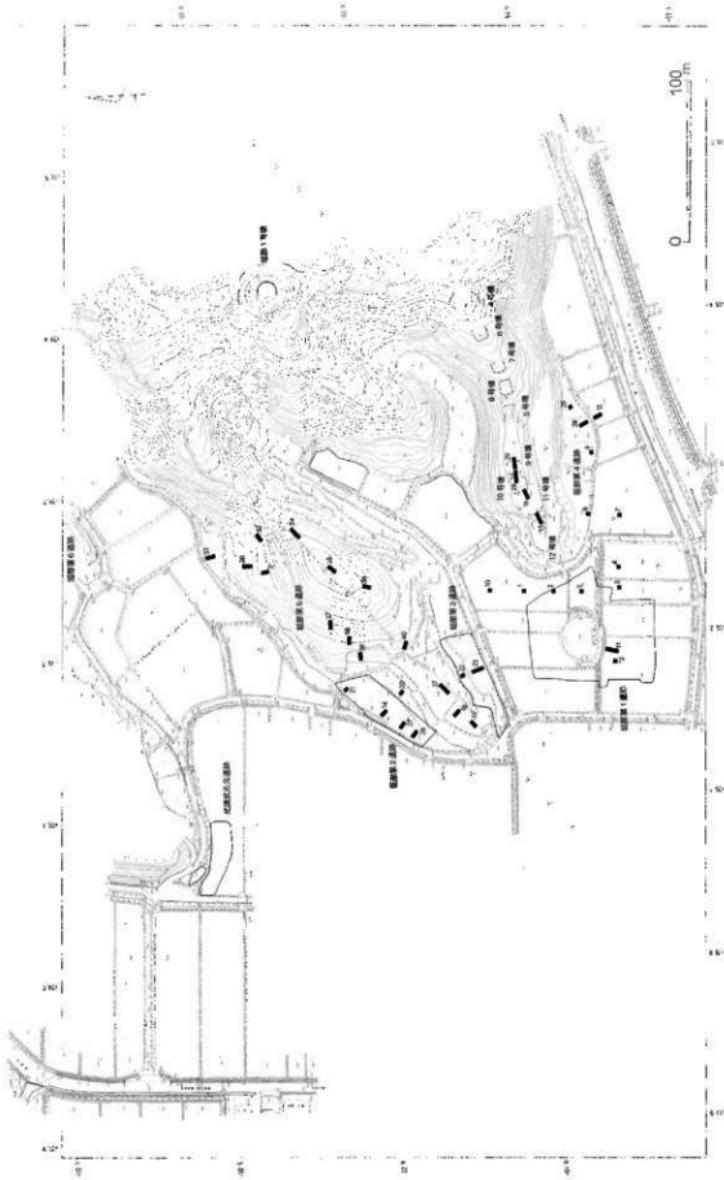
この頃には農・漁業の他に海岸部の恵曇・古浦地区では製塩が行われていたことがわかるほか、船便を利用した交易もあったことがわかっている。多様な生産・交易の舞台ともなっている。

近世には宍道湖から日本海へ抜ける人工の河川である佐陀川の開削があり、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に、流域の水田開発に大きく寄与したほか、宍道湖側との水運による交易が開かれ、この地域に経済的発展をもたらすこととなった。



図6 稗田遺跡木製品出土状況

图 7 城郭遗跡群全体圖 (1/3000)



## 第3章 調査の経過

塙部第1遺跡の調査は、当初‘長者の墓’と呼ばれる直径35mの独立丘の南側に東西50m、南北30mの調査区を設定して開始した。

付近は1980年代初頭の水田への整備事業の際に中世の土師質土器が、調査前の1996年1月に実施した試掘調査によっては弥生前期土器と縄文後期土器が、それぞれ出土しており、こうした遺物の包含される遺跡という認識であった。

1998年1月の調査開始後まもなく、南に隣接して流れる講武川の氾濫原と考えられる礫層を広く検出し、この洪水礫層に遺物が含まれるかにみえた。しかし、同年4月、調査区北辺沿いには粘質土の堅緻な基盤層があることが判明し、この層上面から弥生前期土器と突帯文土器が出土しはじめ、一抱えもある石の集積が弥生土器を伴って点々と認められるにおよんで、弥生前期の墳墓であることの可能性に思い至った。

さらにこうした石の集積は北の調査区外にのびており、9月、調査区を拡張してA'区を設定し、その全体像を把握しようとした。この結果、西区、東区の墳墓群を把握し、とくに東区の5号墓、6号墓は大形の石材を多用する規模の大きい標石で、注目された。この時点でマスコミ発表を行い、現地説明会を10月4日開催した。12月、ラジコンヘリによる標石検出状態の空中写真撮影を実施した。

この後、西区から標石を除去し、墳墓内の調査に着手した。最初に内部の調査を行った1号墓では側板、小口板など棺材が残存することが判明した。1999年3月、現地を視察された国立歴史民俗博物館佐原真館長の「日本最古の木棺」というコメントを地元紙がスクープしたのを皮切りにマスコミ各社が報道し、大きく注目されるところとなった。

一方、東区の標石の除去は、(株)京都科学に委託して、将来的に移築復元が可能なように移築用のケージを作成し、石材に番号を振り、必要なものには強化も行いながら、取り上げた。

この結果、墳墓は棺材が残るものが数多く検出され、棺材が残存せずとも上層からほぼすべての主体部で木棺の使用が推定された上、埋葬頭位を‘長者の墓’を基準として墳墓群全体でそろえているらしいこと、大人の墓に挟まるるように子どもの墓が存在することなど、弥生前期の集団埋葬の調査としては稀有な調査結果となっていた。

また、A3、A4区では突帯文土器の集積を、調査区南方では縄文後期土器が数多く含まれた土器涸りを検出した。

一方、東区の墳墓群は北の調査区外に向かって伸

びている可能性が考えられたため、東区北方で重機を使って耕作土を除去、清掃したところ、さらに標石が次々に検出され、こちら側にも墓域が広がっていることが判明した。このため、新たに北東区として調査区を設定した。調査区もO、P区を新たに設定した。北東区では、標石墓に東区から連続した弧状の配列が認められ、さらにこの弧から放射状にも墳墓が派生しており、非常に整然とした企画性がうかがえた。

この後、北東区は県教委、文化庁とも協議の上、福祉ゾーンの整備計画を一部変更して、現地で保存することとなつたため、標石の岡化と供献土器の採集のみを行い、主体部内の調査は行なっていない。

墳墓のほとんどは供献土器を伴い、いずれも弥生時代前期中葉に位置付けられるものであった。これにより計57基以上の墳墓がさほどの時期差をおかずに行なわれていることが判明したのである。さらに北東区の墓に沿うように伸びる最大幅7mの6号溝を検出し、これを追って調査区を拡大し、新たにQ、R区を設定することとなつた。結果的に‘長者の墓’を取り囲む計3,547m<sup>2</sup>と、当初計画の2倍以上の調査面積となつた。

調査区が低地のため、大雨によって調査区全体が水没する事態が何回かおこった。

ほぼ墳墓群の全体像を把握した1999年9月19日、2回目となる現地説明会を開催、約150人の参加者があった。この後、未着手であった16号墓の調査、人骨、棺材などの取上げ、調査終了時点の空中写真の撮影など、補足調査を行い、11月1日、調査を終了した。

調査終了後の1999年11月から翌2000年1月まで町立歴史民俗資料館において、「開拓者の眠るところ

速報！塙部第1遺跡木棺墓群」と題する連報展示を行ない、同名の展示図録を作成した。

出土木棺材は1999年度において放射性炭素年代測定を実施したうえ、1999年度～2000年度において高級アルコール法による保存処理および樹種の鑑定を行なった。あわせて2000年度には出土堅櫛の保存処理もおこなつた。

平成16年度、福祉センター地内で現地保存した北東区、東区の標石を移築した福祉センター隣接地、さらに隣接した尾根上の福井古墳群、塙部第5遺跡をあわせて塙部史跡公園として整備をおこなつた。

また、現地保存した塙部第1遺跡北東区は平成16年12月17日、県指定史跡となつた。

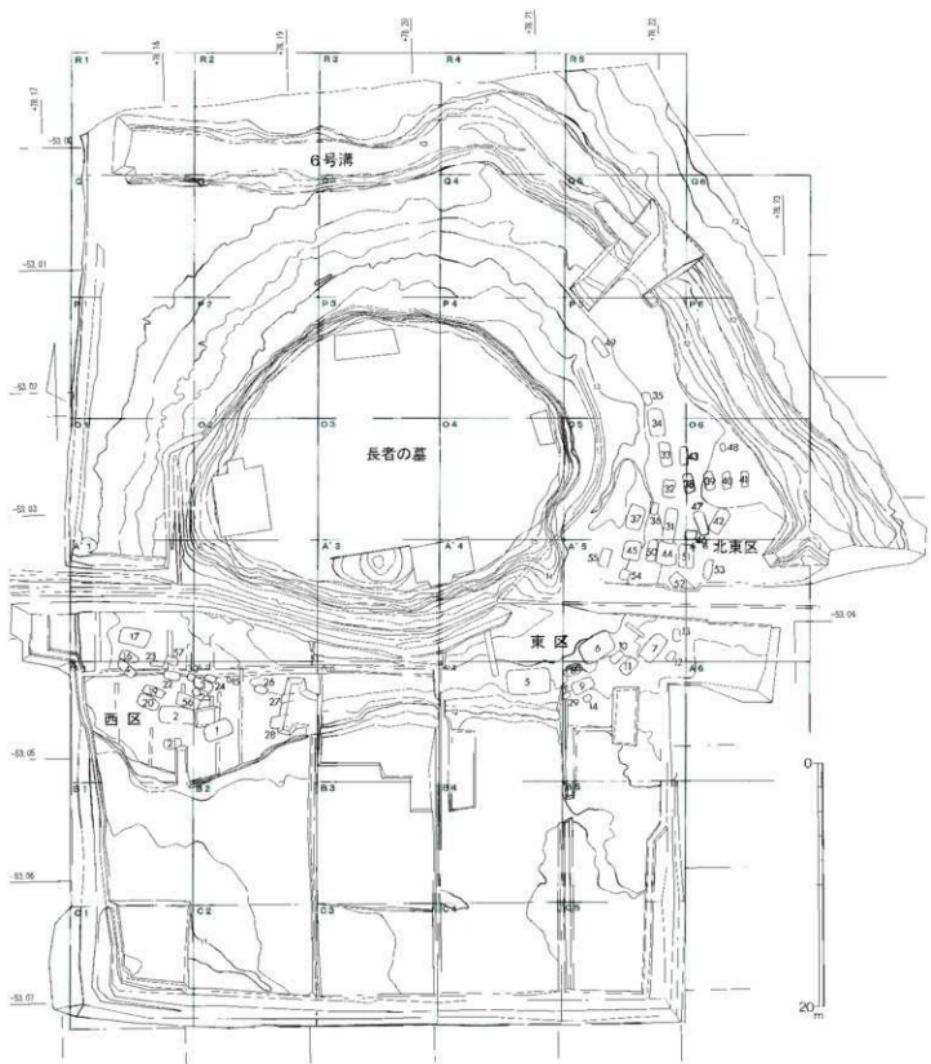


図8 遺跡全体図 (1/400)

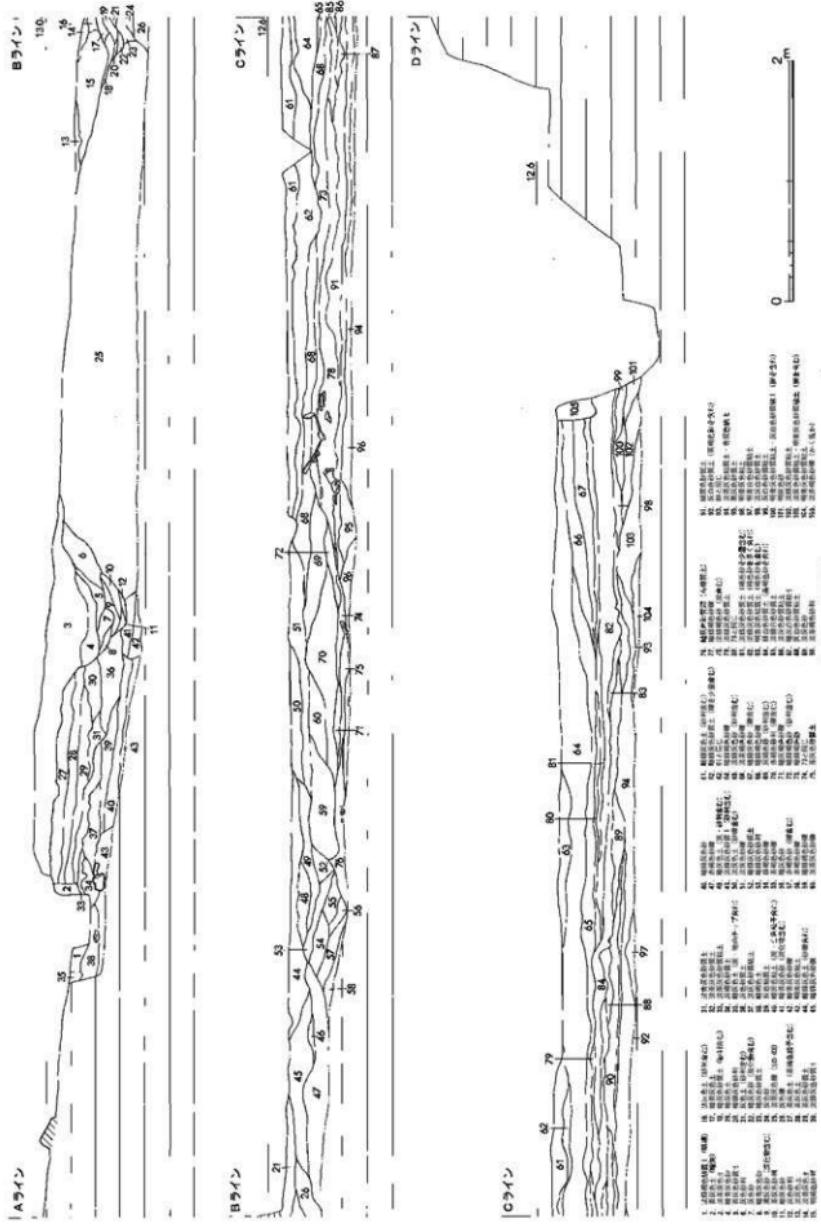


図9 土壌

## 第4章 調査の概要

### 第1節 上層

#### 第5ライン土層図(図9)

調査区に設定した基準杭A 5からD 5までの南北30mに1層観察用のトレンチを設定し、円丘裾部から河川へむけての、遺構検出面以下の堆積状況を調査した。

上層図の北端は弥生前期墳墓の基盤面であり、標高約13mを測る。それ以南の堆積はほとんどが砂疊や砂質土などの河川氾濫による堆積であり、その内で流路や有機質を含む薄い土層が確認できた。上層の観察からは、2号溝(3~12層)が3号溝(25層)を削り込む様子や、繩文後期中葉の土器を含む包含層(78層)が確認された。なお、調査区内では縄文後期初頭~中葉の遺物包含層を確認しているが、ここではそれに対応する土層は確認できていない。

### 第2節 水路群の調査

1号溝 調査区を南東から北西に横切るように長さ約20mにわたって検出した。断面逆台形の水路内には砂疊が充满し、最終的に洪水で埋没したものと考

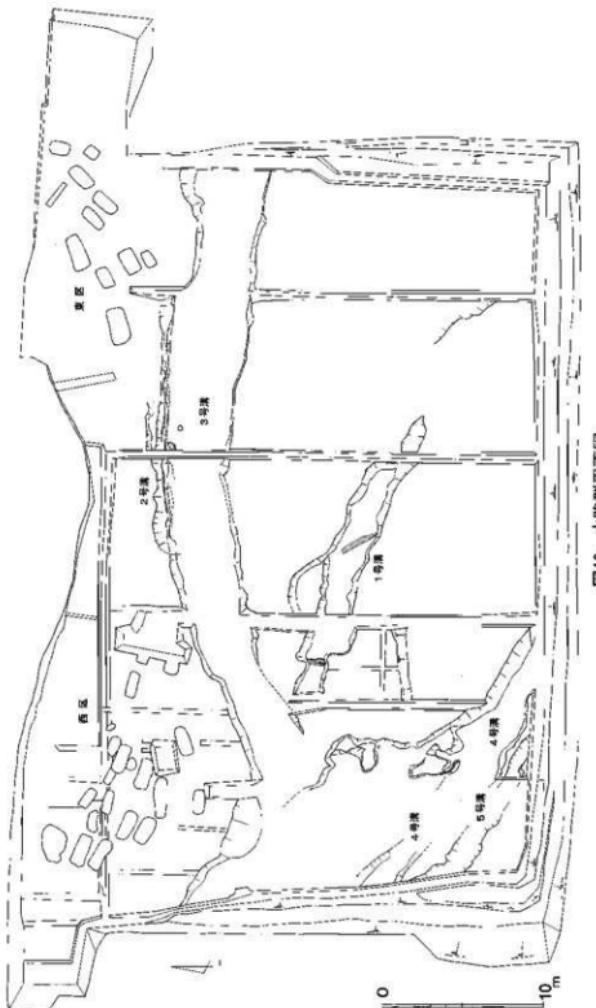


図10 水路群平面図

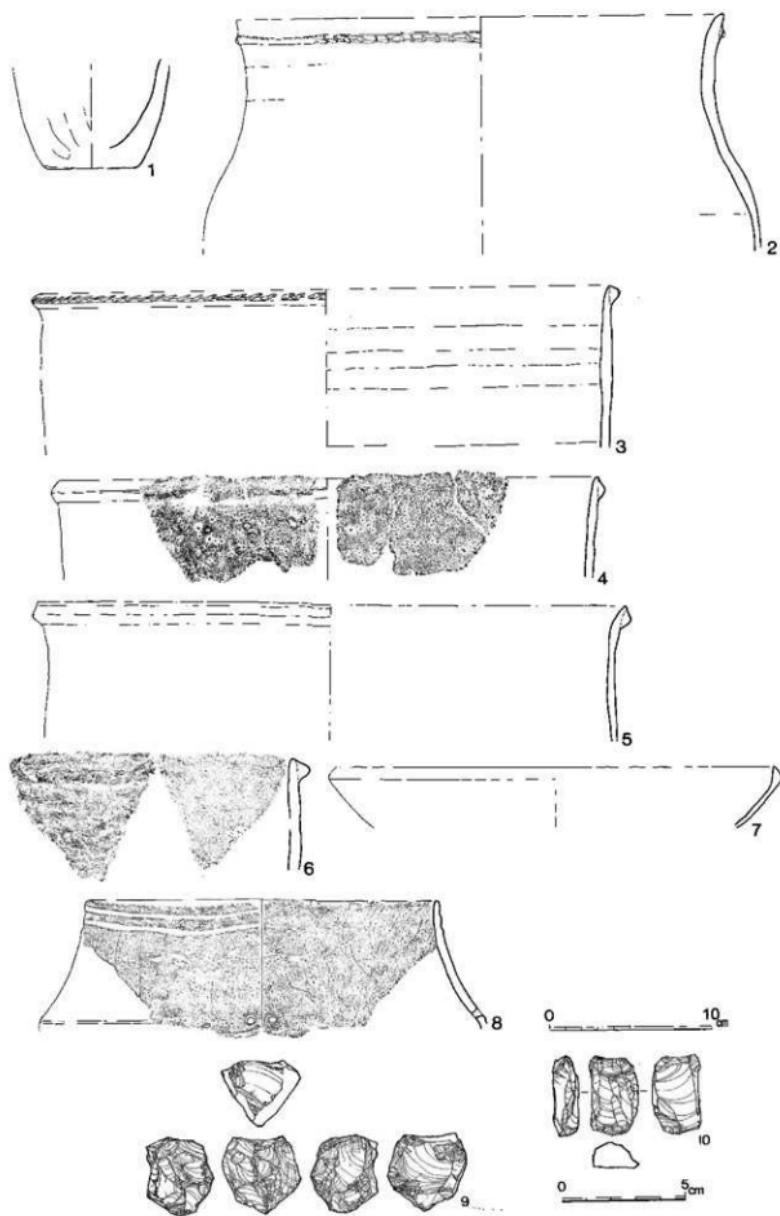


图11 2号沟出土遗物实测图

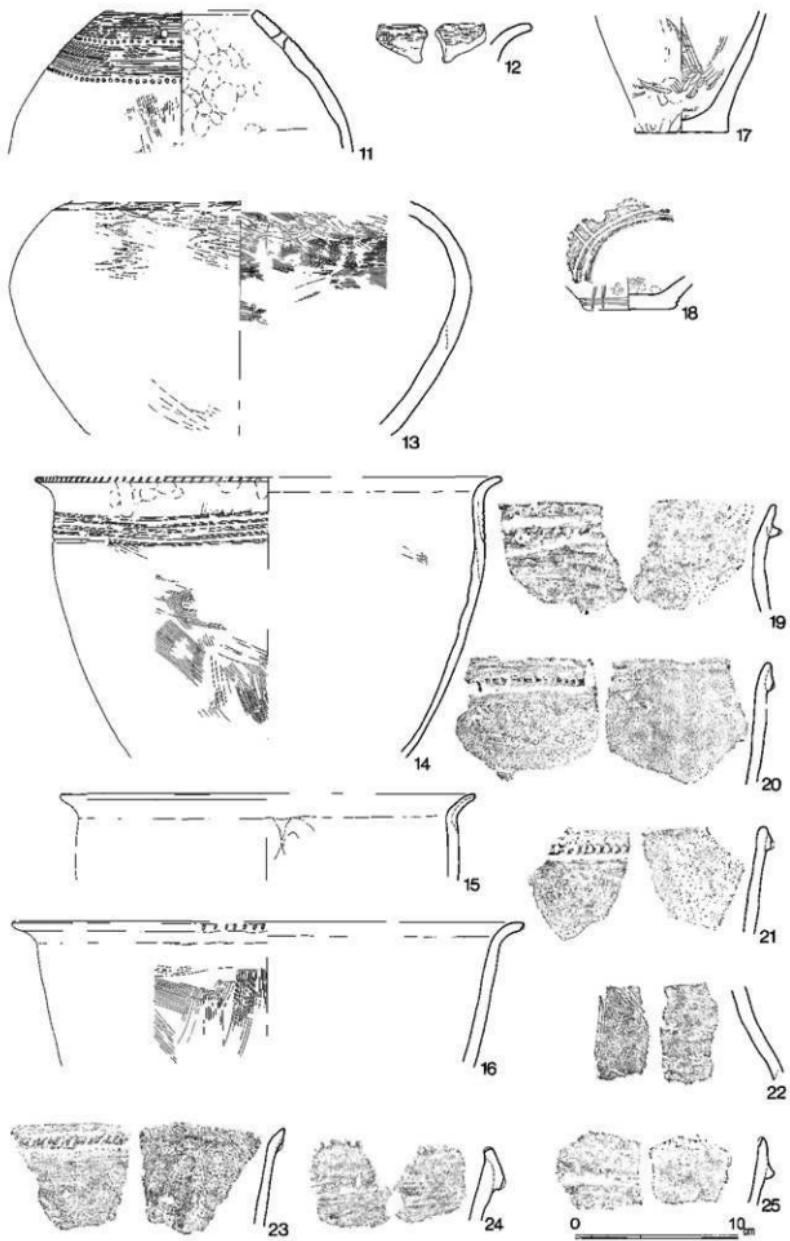


图12 3号墓出土遗物实测图(1)

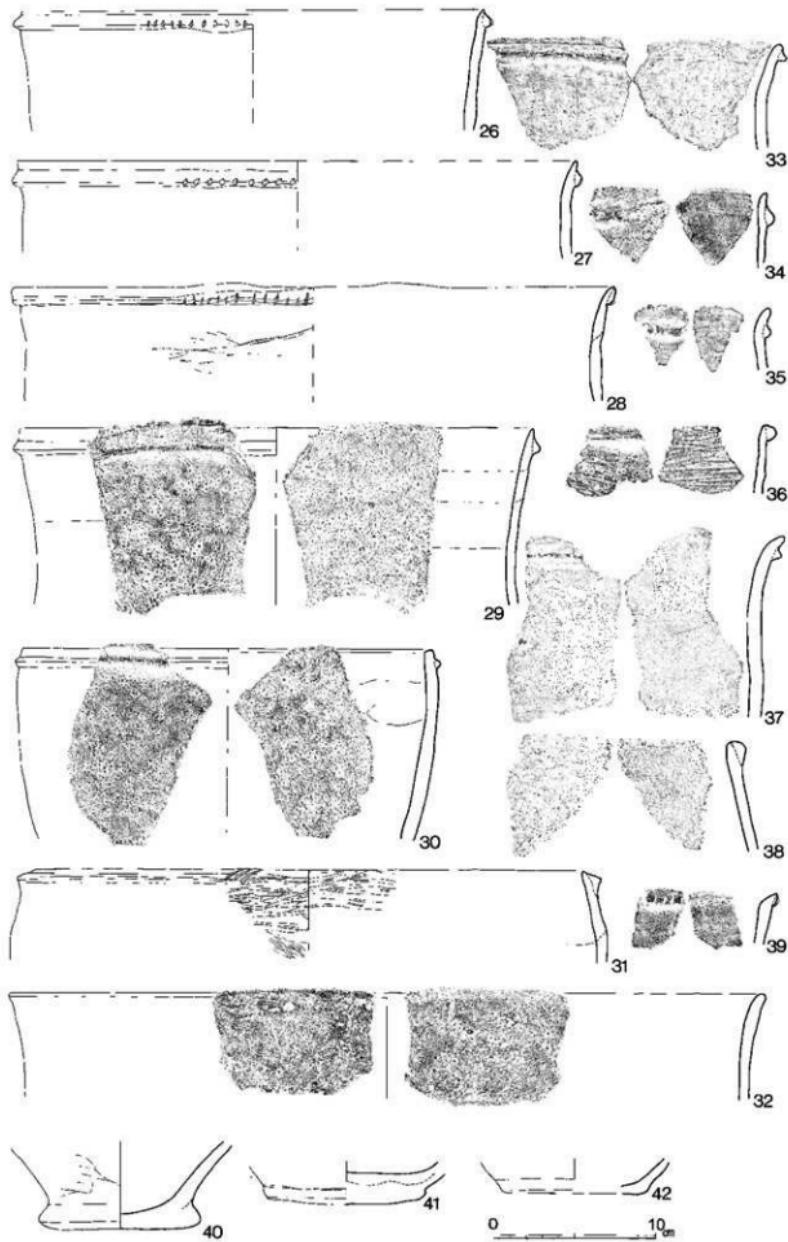


図13 3号溝出土遺物実測図(2)

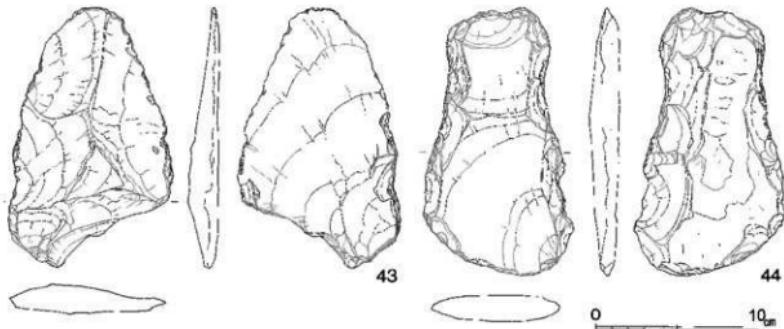


図14 3号溝出土遺物実測図(3)

えられる。この洪水砂の中には流木も含まれていた。遺物はスギと考えられる製材した板が1枚出土している。

**2号溝** A3区からA4区にかけて10mにわたって検出した浅い溝だが、その南半は3号溝に堆積した砂礫層を削っている。弥生土器と突帯文土器、黒曜石片を包含した。

このうち、突帯文土器は、この下層にあった突帯文期の包含層遺物を一部取り上げているものと考えられ、本来は1の上器が示す弥生時代の水路と考えられる。

**2号溝出土遺物** 1は時期不明だが、胎土から弥生土器と考えられる。2~8は突帯文系の上器で、深鉢2は、体部からやや外反して口縁が立ち上がり、口縁端からやや下がった位置に刻みを有する突帯を貼付けている。深鉢3~6は、口縁に接する位置に突帯を貼り付けるもので、3のみ突帯上に刻みをもつ。7は浅鉢、8は壺である。8は、体部の屈曲から内傾する口縁部をもち、口縁端には2条の沈線をもつ。外面屈曲部近くに糊正痕がある。また、体部に補修孔と考えられる焼成後の穿孔がある。黒曜石9は右核、黒曜石10は楔形石器である。

**3号溝** 調査区を東西に横切る流路で、幅3~5m、深さ0.7mを測る。ほぼ東西方向にある流れが、西区の墳墓に出会い付近でわずかに南に流れを変えている。溝内には厚く砂礫が堆積していたが、溝底面および北傾斜面には有機上の堆積が認められた。

この溝からは弥生土器、突帯文土器、石鍬が出土している。

**3号溝出土遺物** 11は、口縁部に櫛描文と列点文を施す無頸壺で、弥生中期。12、13は弥生前期の壺であろう。13は肩部に2条の沈線を有する。14~16は弥生前期の甕である。14は口縁端部に刻みと口縁下に5条のヘラ描き沈線をもち、16も口縁端部に刻み

を有する。底部17は、細長い器形が推定され、中期か。18は、底部付近に2条の沈線とそれと直交する2条1単位のヘラ描きの沈線がある。また、貫通しない焼成後の穿孔がある。胎土から弥生前期か。19~39は突帯文系の上器で、19~21、23~28は、貼り付けた突帯上を刻むもの。22は口縁下と考えられる破片でヘラ描きの文様がある。24、25は口縁端部を刻むものである。23、26~28、39は、口縁直下に突帯を貼付け、突帯上を刻むもの。29~31、33~37は、口縁直下に突帯を貼り付けるが、刻みをもたないものである。31は口縁に接して突帯を貼付け、突帯上を文様的に刻むものである。32は突帯をもたない粗製の深鉢である。40~42は、胎土から突帯文系の上器の底部と考えられる。43、44は石鍬である。

**4号溝** 調査区南西隅を横切る溝でやや深い。砂礫で埋まっていた。調査区内の17mを調査した。

**4号溝出土遺物** 出土土器45は、弥生土器壺の底部である。弥生中期か。

**5号溝** 4号溝に平行する流路で、やはり砂礫で埋まっていた。調査区内の延長11mを調査した。遺物は検出しなかった。

**6号溝** ‘長者の墓’を東から回り込むように検出した幅3~7mの溝で、延長約80mを調査した。断

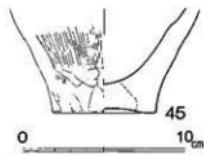


図15 4号溝出土遺物実測図



図16 6号溝実測図



図17 6号溝土層図

面は逆台形を呈する。溝の上層は砂礫が堆積するが、下層ではさほど水流が想定される土質ではなかった。この溝の性格を明らかにするため、覆土の花粉分析ならびに珪藻分析を実施した（第5章 渡辺正巳「堀部第1遺跡調査に伴う花粉・珪藻分析」参照）。結果、最終的には砂礫で埋没しているものの、掘削当初は空濠のような状態であったこと、アカガシ類の花粉が多く、林の中に掘られたような状態であったこと、イネの花粉が認められず、灌漑用の水路とは考えにくくこと、などが判明している。

この溝からは弥生前期の壺47と前期末の壺48が砂礫層から検出され、砂礫層以下で突帯文土器46が出土しており、埴輪群に先行する可能性があるが、出土遺物がわずかであるので、即断は控えたい。

6号溝出土遺物 46は突帯文土器深鉢で、口縁下に下方に垂れ下る突帯を貼り付けている。47は弥生前期の大形の壺頸部で、口縁下にかすかに段を有する。48は大きく開く壺口縁部で、頸部に刻みを有する突帯が2条貼り付けられる。弥生前期末か。

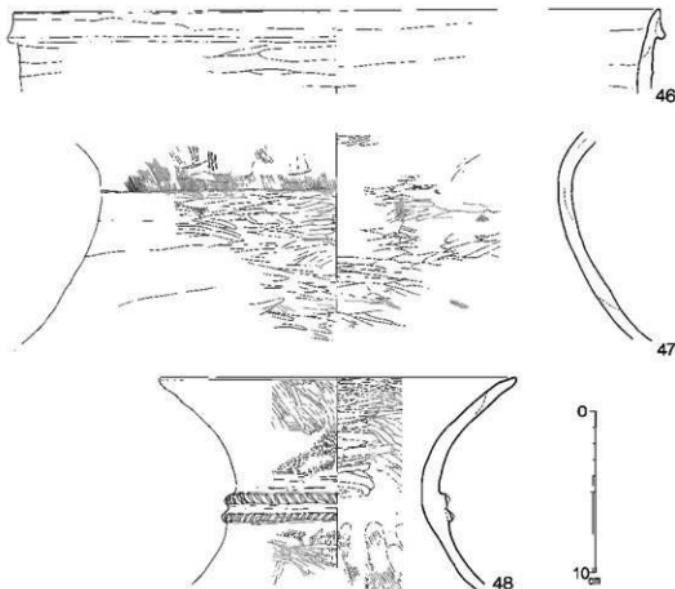


図18 6号溝出土遺物実測図

### 第3節 墳墓群の調査

墳墓群は、「長者の墓」と呼ばれる独立丘の南側から東側にかけて、この丘を半ば取り巻くように作られ、弧状に並んでいる。この「長者の墓」は、堀部古墳群の位置する丘陵先端から約20m離れて存在する平面形が梢円の独立した丘で、東西の径約35m、南北の径約30mである。この丘は、1981年の水田畠地整理事業によって七半を削平されているが、工事前の地形図では丘頂は標高19.5mで、墳墓群との比較は6~7mを測るものであった。

墳墓はおおよそ標高12.5~13.0mにかけての「長者の墓」の裾のこく緩やかな斜面につくられている。調査は、この裾部に西区、東区、北東区の各調査区を設定して行った。調査の便宜上、東区と北東区を分けているが、本来は一続きのものであった可能性もある。西区の墳墓は20基、東区は11基、北東区では約30基の墳墓が存在し、全体では60基余の墳墓群と考えられる。墳墓は、標石木棺墓とも称すべきもので、ほぼすべての墳墓が墓壇上に石材を使用した何らかの標示を行っている。なお、北東区は現地で保存することとなつたため、主体部内の調査は行っていない。

墳墓群の南は3号溝によって、東から北にかけては6号溝によって限られている。3号溝は弥生時代中期までの水路で、西区、東区の中間地点をえぐっている。また、6号溝は北東区の墳墓群の東に掘られているが、墳墓群との前後関係は明らかでない。

各区とも標石と周辺に散布する遺物を図化した後、西区から墳墓内の調査を開始した。まず尖瀬の終了した標石を除去してその下にある墓壇の検出作業を行った。標石が重なっているものについては複数次に分けて図化したところがある。図化は基本的に1/10で行った。標石下で検出した墓壇は4分割し、まず対向する位置を掘って土削を記録後、全体を掘り上げた。

また、墓壇底面直上で脂肪酸分析用の土壌サンプルを複数個所で採取し、採取位置の記録もあわせて作成した。さらに使用石材の同定も調査中に数回に分けて行った。遺跡の位置する講武盆地では崖出せず、地元「大芦御影」と呼ばれることがある閃綠岩が、かなりの墳墓で認められる。尾根を越えた日本海側からの搬入が想定されるという。とくに東区の5号墓ではこの石材の使用が顕著であった。

墓壇内にはかなりの比率で木棺が残存していた。木棺は、1段深く掘えた小口板を両側板で挟む組合せで、遺存状況が良好なものでは、重厚な板が使用されており、底板に凹凸駄状の材が転用されているなど、その具体的な姿が明らかとなった。また、子どもの埋葬と考えられる木棺では、小形ではあるが、

さまざまな長さの棺があり、子どもの身長にあわせて棺をあつらえているものと考えられた。

一方、人骨が残存しているものもあった。これによれば、いずれも膝を軽く折る屈股葬で埋葬されており、当時の埋葬方法を具体的に示すものとなった。また、人骨は残存しないが歯だけが残存するものがあり、頭位方向を知ることができたとともに、人類学的検討を可能とした。

西区では計20基の墳墓が存在し、このうち子どもの墓と考えられるものが多い印象であった。墳墓群のうち子どもの墓を除外して考えると、2基・対になることが注目される。

一方、東区から北東区では、弧状に並んだ大き目の墳墓から放射状に墳墓が派生する配列をとる。また、墓壇の全面を石材で覆う大型の標石が多い。「長者の墓」の裾に弧状に並ぶという点は共通するが、西区と東区・北東区とは墳墓群形成の法則が異なる可能性がある。

墳墓の多くでは供獻土器が認められた。すべて標石の脇か上部で検出されており、墓壇内や棺内に副葬するものはなかった。供獻土器はいずれも遠賀川系のものである。付近ではかなりの量になる突宍文系の上器が出土しているが、墳墓に供獻したと考えられるものは皆無であった。供獻土器は、壺を主とし、わずかに鉢があった。

そのほか標石付近で石鍬など石器を採取したものに2号、3号、30号、4号、16号、17号、22号、23号墓があって、西区に集中する傾向がある。棺内への副葬品は、西区では2号墓で管状、21号、56号墓で櫛、23号墓で石鍬。4号墓でエゴノキの実、東区では5号墓で炭化米をそれぞれ検出し、これも西区に集中しているといえそうである。また、副葬とは判断できないが、墓壇内で石鍬を検出したのは、西区で2号、3号、27号、28号、57号墓、東区で5号、11号墓である。

西区・東区で計30基の内部主体の調査を行ったが、人骨、歯、櫛などの出土によって、埋葬頭位が明らかになったのは12基であった。これらは例外なく東ないし北東方向を指向しており、頭位方向が判明していない墓も同方向を頭位としていたものと推測できる。さらに墓そのものの向きの異なる北東区にもこの原則が及んでいたとするならば、墳墓全体としては「長者の墓」に対して逆時計回りに頭位を配しているものと考えられる。

子どもの墓が数多く認められてはいるが、死亡率が最も高いとされる乳幼児の埋葬を考えられるのは、15号墓の壺棺1基のみで、あまりにも少ない。この年齢の子どもは墓域を異にして埋葬されているのか、あるいは埋葬されなかつた可能性を考慮しなければならない。

図19 墓群配置図

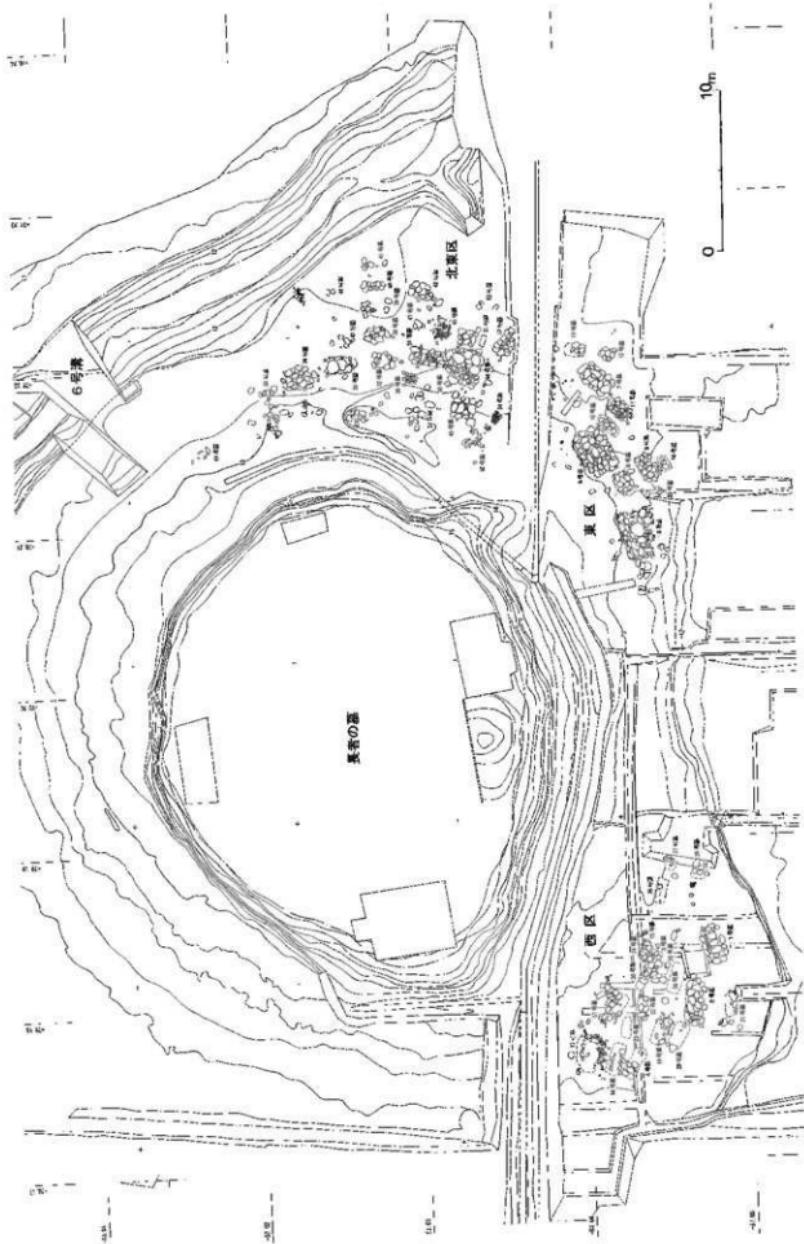


图20 西区填基配置图 (砾石)



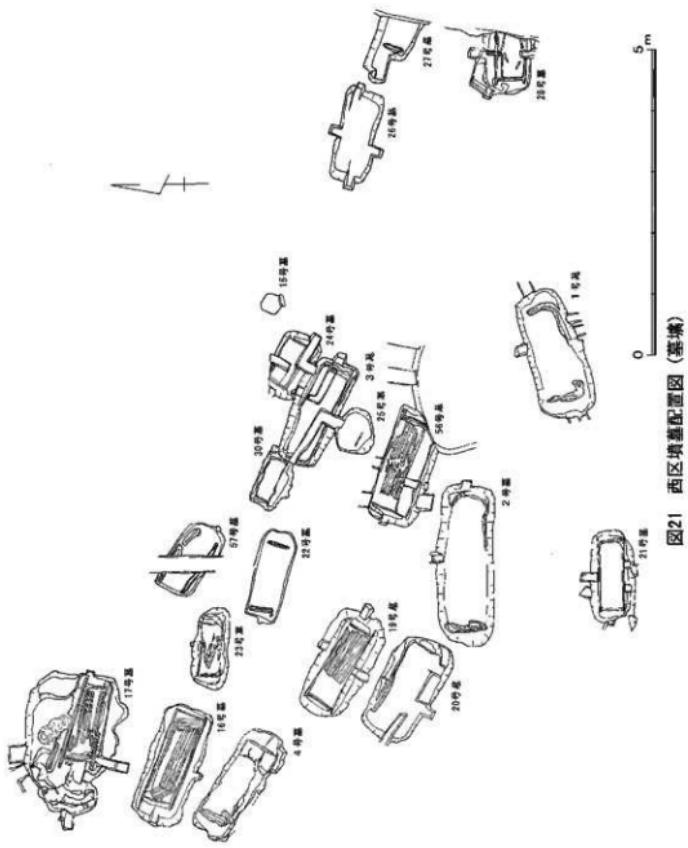


图21 西区陪葬配图 (墓域)

## 西区の調査

西区で最初にこの遺跡が弥生時代前期の墳墓群であることを確認したが、周辺は突堤文期の遺物包含層でもあり、多くの遺物、石材が散在して、墓の特定は困難を極めた。また、東区に比べて小堀埋葬と考えられる小形の墓が、比較的明瞭な人の墓に挟まれるように数多く存在したため、攪乱された石材なのか、下部に埋葬をもつ小形の墓なのかは調査の最終盤まで確定できないものがあった。最終的にサブトレンチを設定した結果、標石をもたない56号墓や、石材が大きく移動していたと考えられる57号墓などを確認した。西区では計20基の墳墓が存在したことになる。

標石についてみると、墓域の全面を石材で覆う標石は、1号、2号、3号、24号墓だけで、これら以外は墓域の両端を表示したり、墓域上に列状に並べるなど、比較的石材の使用が少ない標石が多いのが西区の特徴といえる。

また、墓域が掘り込まれる地盤が粘質土であるもののが多いためか、遺存状態の良好な木棺がいくつかあり、重厚な板材を使用するなど、当時の木棺の具体的な姿を目の当たりにした。

西区の墳墓20基のうち、子どもの墓と考えられるものが、亜棺である15号墓も含め9基と、多い印象であった。また、墳墓群のうち子どもの墓を除外して考えると、2基・対になることが注意される。具体的には、4号墓と16号墓、19号墓と20号墓、3号墓と36号墓である。試掘調査区で損壊しているため詳細は不明だが、27号墓と28号墓も一対になる可能性がある。こうした配列は、東区・北東区では認められず、東区・北東区と西区では別の規則で墳墓が作られている可能性がある。

一方、墳墓のうち1号墓、2号墓、21号墓、23号墓の4基は、他のものとは方位が異なり、墳墓群全体で見た場合、「長者の墓」を取り巻く弧の向きから外れたものとなっている。成人が埋葬されたと考えられる1号墓、2号墓は、2基・対のセットにも当てはまらず、この2基は別の基準に従って作られている可能性がある。

1号墓 標石が長さ2.5m、幅1.5mの範囲で検出された。墓域の縁を取り囲むようにやや小形の石を並べ、この内側に大形の石材を4個架け渡すように並べている。中央の石は西側から積んだことが石の重なり具合からわかる。また、周囲の石を積んだ後、中央の石を載せたものと検出状況から推測する。標石東側では石材を積み重ねている。使用石材は25個であった。

石材は周辺に並べられたものに盆地内で産出するドレライトが多く、他に流紋岩、玄武岩、礫岩が使

用され、中央には閃綠岩とドレライトが載せられている。後述するが下部に木棺をもつため、中央の石材は棺の腐朽に伴い、若干落ち込んだ状態で検出している。埋葬直後は、上まんじゅう状に盛り上がりた土の表面に石材を貼り付けるように並べていたものと考えられる。

これら石材を除去すると、外縁を取り開んでいた石材に相当する位置で墓域掘方を検出した。墓域は長さ2.2m、幅0.9m、検出面からの深さ0.3mのもので、やや浅い。墳底面は砂礫層となっている。墓域底面には小口板を立てた溝と側板用の溝の一部が残っており、土層でも小口板と側板の痕跡を確認している。墳底の溝および掘り下げ時の観察によれば、棺は両端の小口板を両側板で挟む構造と考えられ、内法長1.5m、幅0.5mのものと推定できる。棺の深さは標石の位置などを勘案すると、30cm程度のものであったと想定される。

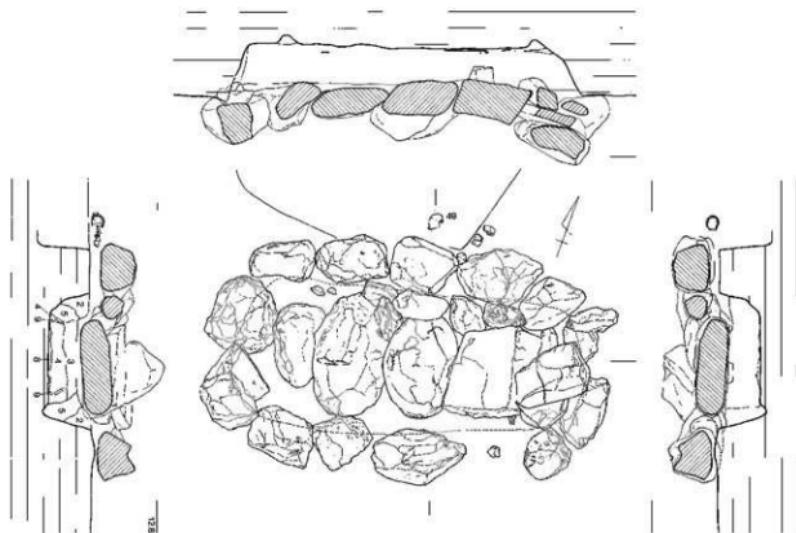
また、棺には底板があったようで、墓域底に木質がわずかに残存していた。木質には棺長軸に平行に木繊維をとどめるものと直交するものがあり、後述する16号墓のように複数枚の板を剥き並べて底板としていたものと考えられた。東端で棺長軸に直交する木質があるので、16号墓と同様、棺端部で短い板を長軸に対して直交させているものと推測された。なお、棺底から浮いた位置で木小片を検出しているが、これは棺の蓋ないし倒れ込んだ側板の一部が残存したものと考えられる。墳底には黒色土の付着も認められた。

境内には人骨は残存していないものの、墳底で歯を4点検出した。歯は木棺内の東に偏した位置にあり、この墓では東を頭位としていることがわかった。地表の標石は東側で石材を積み重ねており、これは、あるいは頭位方向を表したものであった可能性が考えられる。

なお、墓域、木棺とともに頭位側が狭く、足側が広いようである。屈肢葬で足を軽く折り曲げるためと考えられる。同様の知見は後述する19号墓でも得ている。

墓域の主軸はE-16°-Nで、西区のほかの墳墓よりもかなり北に偏した向きである。

1号墓出土遺物 標石の北側脇で小形の壺1(49)を検出している。この壺は、比較的長い肩部から短く外反する口縁部をもつもので、口径7.5cm、器高13.0cm、底径6.2cmである。底部はわずかに上げ底となっている。外面はみがいて仕上げ、内面下半にはハケメをとどめる。頸部内面にはシボリメが残る。特徴的に人粒の砂粒が混和され、弥生時代前期に含まれるものと考えられる。



1. 灰白色砂質土  
2. 青白色土  
3. 雪灰色砂質土  
4. 塗布灰黑色土  
5. 深青灰色砂質土  
6. 深青色粘土  
7. 暗青色砂質粘土  
8. 深褐色粘土  
9. 淡青灰色粘土

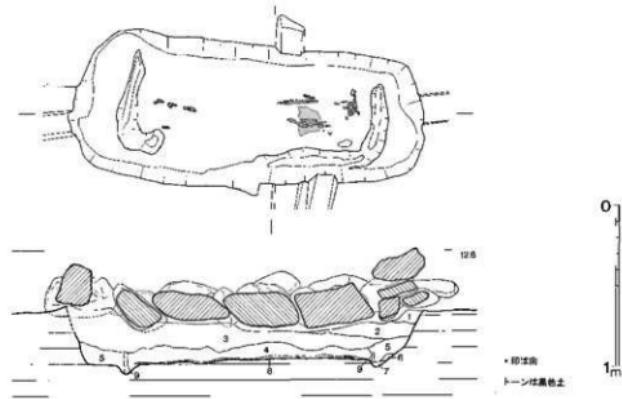


図22 1号墓実測図

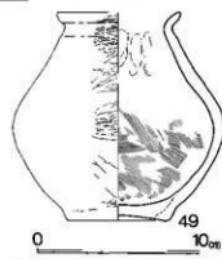


図23 1号墓出土遺物実測図

**2号墓** 1号墓の西に位置する。標石は幅1.2mだが、長さは3.3mと長い。標石の石材は、やや乱雜に積み重ねたかの感がある。石材を除去すると、標石最下部の墓壇両端の小口板にはほぼ相当する位置に、細長い石材を墓壇長軸に直交する向きに据えており、この石材から標石の配列が始まっているようである。使用石材は約30個で、やや人形のものが多い。石材は墓壇内にあった棺の腐朽に伴って中央部がいくらか陥没した状況を呈していた。標石に使用される石材は、ドンライトを主とし、一部に閃綠岩、流紋岩、礫岩を交えている。

標石北脇で竪1と西側の標石上で打製石鏡1を検出した。

標石をすべて除去すると、その範囲にほぼ一致する形で長い墓壇掘方を検出した。墓壇は長さ2.7m、幅0.9m。検出面からの深さ0.2mのものである。墓壇底面両端には小口板の木質が残存した深さ約10cmの溝が残っている。この溝は弧を描いており、この溝に立てられた小口板は、西小口で弧にそって年輪が観察でき、一本から削り出されたと考えられる材が使用されていた。このことから、小口板には丸木舟を切断したものないし2分割した削り抜きの井戸枠のような済用をもつ材が使用されたものと考えられる。後述するが、西小口に使用された材と東小口に使用された材は樹種が異なり、削り抜きの井戸枠にしろ、丸木舟舟材を使ったにしろ2個体分を使っていることになる。

この両小口板間に想定される棺は長さ2.3m、幅0.6mと細長い。底板や側板などの木質は残存しなかったが、横断面でも墳底面はゆるく弧を描いており、小口板ばかりではなく、棺身も丸木舟舟材のものが使用されている可能性がある。あるいは、専用の削り抜き式の木棺が使用されていた可能性がある。

墓壇底面では東端で碧玉製管4点が2個1対で出土した。この土はその出土状況から耳飾りであったものと考えられ、この部分に被葬者の頭部が相当するものと考えられる。このことから、埋葬頭位は東を向くものと判断される。墓壇の主軸はE-3°-Sである。

また、墳床面上に貼り付いた状態で打製石鏡14点が出土している。石鏡は墳床面東部と西端部にまとまっている。鏡は先端の向きがまちまちで、矢柄ごと副葬された状態とは考えられなかった。また、一部を欠くものが多く、埋葬された遺体に撃ち込まれていたものの可能性がある。さらに棺が伸展葬を想定しても長いこと、石鏡が東と西の2つにグルーピングできることから、棺内に2体が埋葬されていた可能性もある。

丸木舟を転用したかのような長い削り抜き木棺を

もち、板材を組み合わせて箱形を作る他の墳墓と棺の構造がまったく異なること、木棺には2体を埋葬した可能性があること、その2体は石鏡を撃ち込まれていた可能性があること、うち1体はこの墳墓群で唯一、碧玉製の管4点をもつことなど、この主体部は、墳墓群でも特異な存在といえる。

**2号墓出土遺物** 番50は、口縁部を欠くが、体部からの屈曲をもたない比較的長い頭部を有し、胴部最大径が器形の下半にある。胴部最大径は15.3cm、底径は5.8cmと、やや小振りのものである。肩部には段をもち、段以下にはヘラ描きの沈線で区画された文様帯をもつ。この文様帯の中に3段の無軸羽状文を描く。さらに文様帯の下に複線透弧文を加える。施用具は肋条をもたない一枚貝貝殻腹縁によるもののが可能性がある。

51は打製石鏡で、長さ16.3cm、幅9.7cmである。頁岩を石材とする。全体に使用による摩滅が認められる。重量は468gである。

52から55は碧玉製の管4点で、いずれもやや青みがかった濃緑色を呈し、両面穿孔のものである。管55には一部欠損が認められる。また、いずれもごくわずかだが赤色顔料の付着が認められる。法量は、以下のとおりである。

52/長さ1.03cm、径0.32cm

53/長さ1.19cm、径0.32cm

54/長さ0.92cm、径0.43cm

55/長さ1.05cm、径0.41cm

56~69が床面出土の打製石鏡である。いずれも凹基式に分類できるものだが、56、57、66、69は基部の削り込みが深い。一方、62、64は削り込みが浅く、平基式に近い形態である。

56から62が墓壇東半から出土したもので、すべて黒曜石製のものである。先端や基部を欠くものが多い。石鏡63から69が墓壇西端から出土したもので、63から65はサスカイトなど非黒曜石の石材で製作されている。66~69は黒曜石製のものである。これらも先端や基部を欠くものが多い。

石鏡の重量は、以下のとおりである。比較的軽量のものが多い。

56/0.419g 57/0.428g 58/0.183g 59/0.323g

60/0.236g 61/0.637g 62/0.965g 63/0.439g

64/0.812g 65/1.195g 66/0.964g 67/0.116g

68/0.292g 69/0.429g

70が残存した棺西小口材で、一本から削り出されたとされる材である。樹種はクスノキであった。この遺跡出土の棺材で、クスノキが使用される例はこの1点のみである。図示できないが東小口材の樹種はスギで、両小口では樹種が異なる材が使われていたことになる。

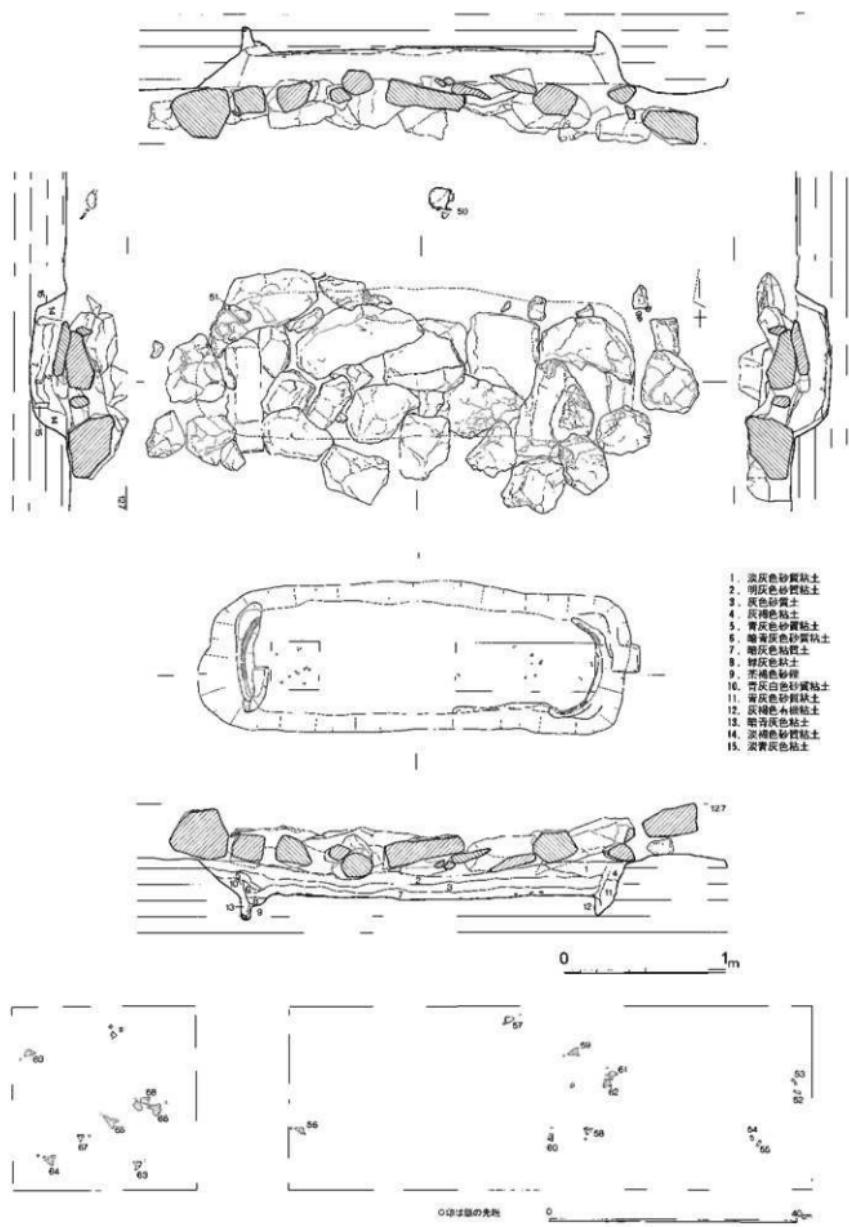


図24 2号墓実測図

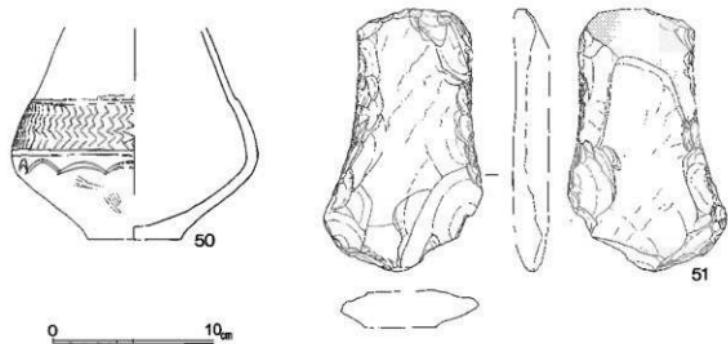


図25 2号墓出土遺物実測図（1 土器、石器）

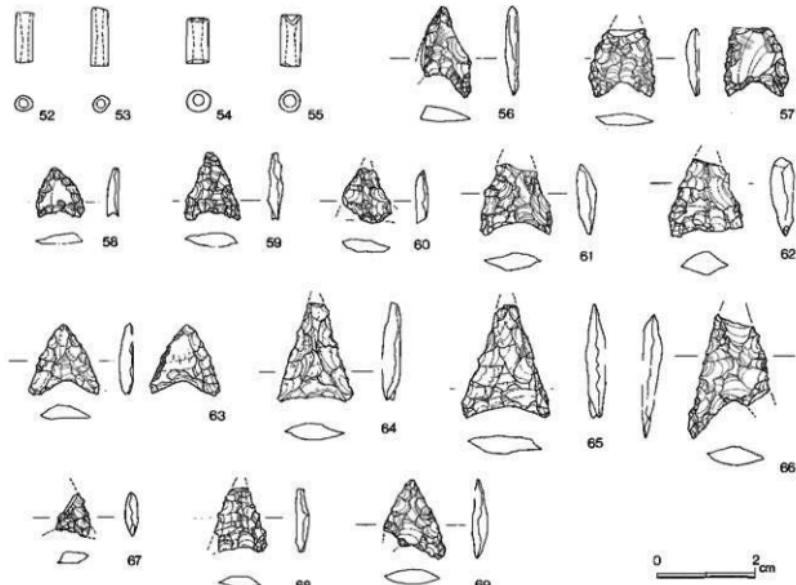


図26 2号墓出土遺物実測図（2 玉器、石器）

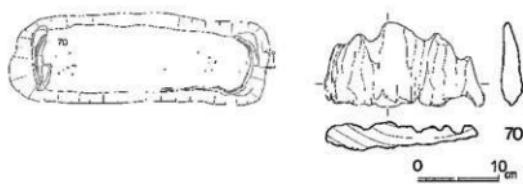


図27 2号墓出土遺物実測図（3 棺材）

**3号墓** 標石が $1.8 \times 0.8\text{m}$ の範囲に並べられ、中央西寄りにやや大形の石材がある。基本的に墓壇の長軸に沿って小形の石材を2列に並べ、その上に中心となるや人形の石材を重ねているものと考えられる。石材は下部にあった棺の崩壊とともにあって、わずかに内側に向かって傾いている。

標石の西端近くで標石に挟まれるように壺1個体が、つぶれた状態で出土した。標石上に底部が正位に据えられていたので、棺の陥没に際して、石材に挟まれて破損したものと考えられた。また、標石東部の石材の間から、折損した右鍬先端部1が出土した。

付近には3号墓標石以外にも、数多くの石材が散乱したかのような状況を早していたが、これらは3号墓に隣接する24号墓、25号墓、30号墓にそれぞれ伴う標石であることがわちに判明した。3号墓に伴うと考えられる石材は、約20個である。石材は、ドレライト、流紋岩を主とし、一部に閃錫岩を交えている。

3号墓の標石を除去すると、ほぼ標石の範囲に一致する墓壇掘方が検出された。墓壇は長さ1.9m、幅0.8m、検出面からの深さは0.3mのものである。また、あわせて検出した24号墓、25号墓、30号墓の小形の墓壇は3号墓墓壇は、それぞれ切って作られており、小形の墓壇3基が古く、3号墓の墓壇が新しいという新旧の関係と捉えることができる。この墳群では、埋葬終了後は石材を使用して墓壇の範囲を標示するため、基本的に墓壇の切り合は生じないが、この4基のみはあえて墓壇を切りあわせており、意図的に切り合の関係を生じさせる必要があったものと考えられた。

墓壇内には、木棺材を据えた溝が四隅に残っている。これによれば、この墓も内小口を側板で挟む形式の棺であった。一方、棺材そのものも、北辺の側板の一部と小口板の一部がわずかに残存した。また、南辺の側板も、かすかな膜状にその痕跡をとどめていたが、取上げられなかった。土層の観察においても、木棺小口板と側板の痕跡を明瞭に確認している。墓壇底面では、側板を据える溝よりも小口板を据える溝の方が深い。特に東小口板の溝は、西側のものより深い上、幅も広い。壇底面は東側がわずかに高くなっている。

棺内法は、この壇底面の溝から長さ1.6m、幅0.5mのものと復元でき、主軸はE-26°-Sである。棺内ほぼ中央部、床面からやや浮いた状態で打製石鎌が1点出土している。

**3号墓出土遺物** 標石上から出土した壺71は、屈曲して長い頸部、大きく開く口縁部をもつ。器高21cm、口径13cm、底径6.8cmを測る。口縁下端と肩部に段を有する。器壁は比較的薄い。底部は、円盤貼り付けによるものか、しっかりした台状を見せる。肋条を有する貝殻を押印することによって、沈線と無輪羽状文を肩部以下に描いている。これらの文様はおねぶりで、深くしっかりと施されている。

72は折損した右鍬の先端部で、頁岩製である。使用による摩耗がほぼ全面に認められるが、刃部には、摩耗後の剥離が一部認められる。73は黒曜石製で凹基式の石鎌である。先端部を一部欠く。

74は木棺東辺の小口板片で、樹種はスギである。板目の木取りが観察できる。図示できないが、側板材残片も樹種はスギであった。

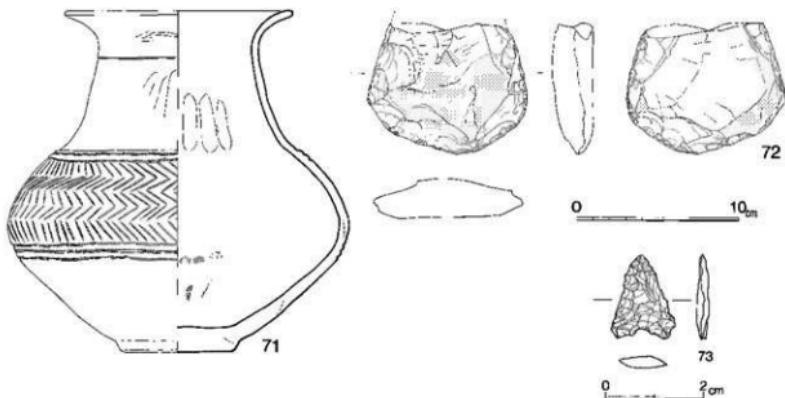


図28 3号墓出土遺物実測図

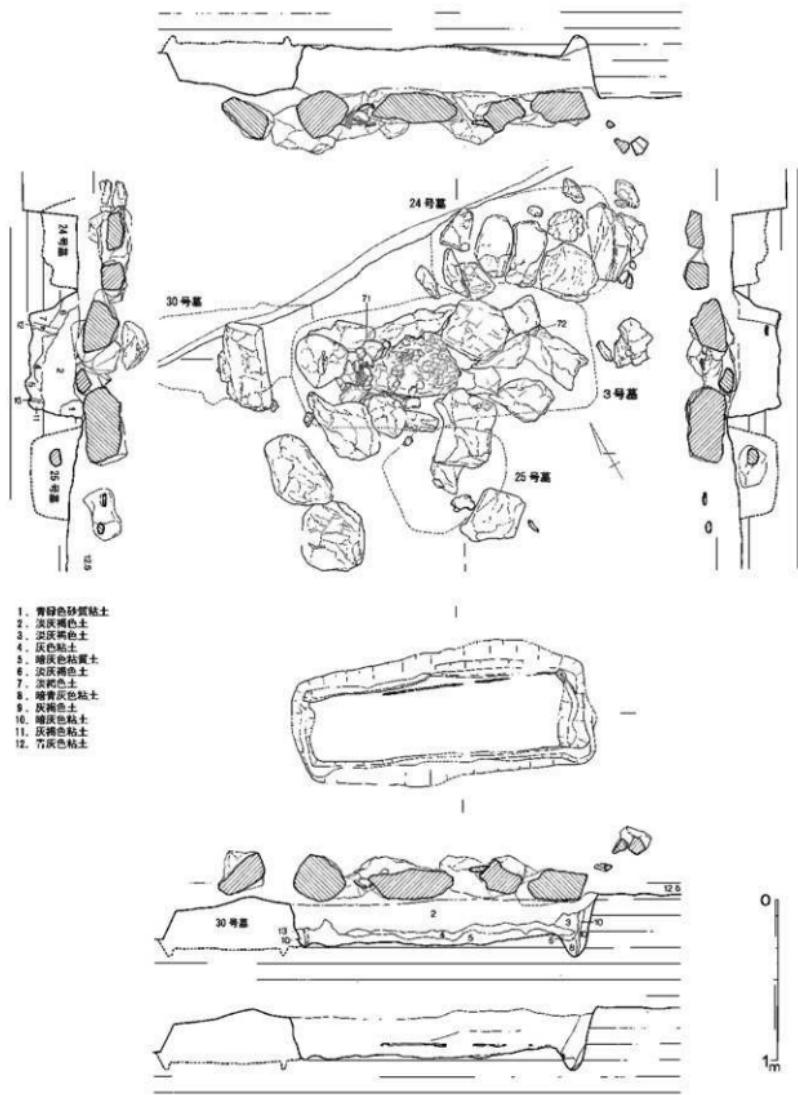


图29 3号墓实测图

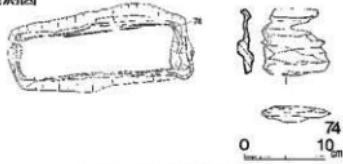


图30 3号墓棺材实测图

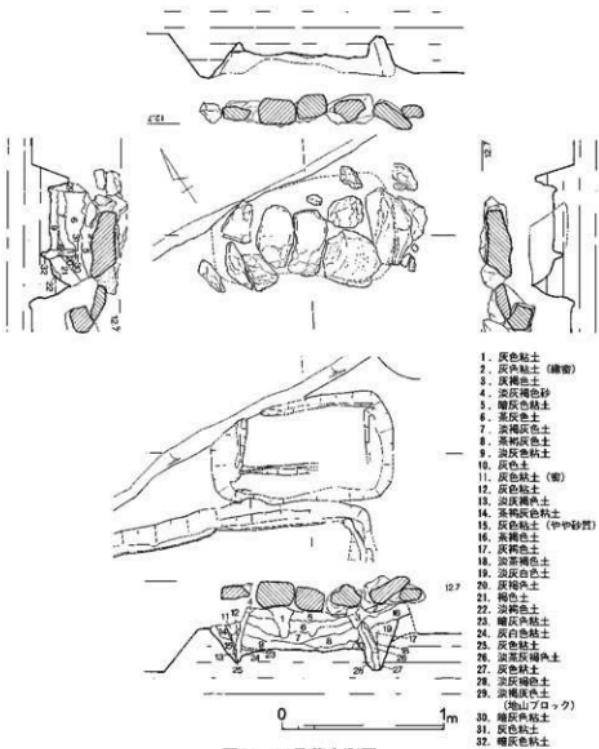


図31 24号墓実測図

**24号墓** 3号墓墓壇の北辺によって切られている墓で、墓壇長軸に対し、横位にやや小形の石材を約10個並べて標石としている。標石は、検出した墓域の範囲にはほぼ一致するものであった。石材はドレライト、礫岩、流紋岩からなる。

墓壇は長さ1.1m、幅0.6m、検出面からの深さ0.2mのものである。棺材は残存しなかつたが、土壙では棺の痕跡を明瞭に確認している。この痕跡によれば棺の深さは本来0.3m程度あったものと考えられる。墓壇底面には棺材を据えた溝が残り、小口板を側板で挟む形式の棺と考えられる。この溝によって棺内法は、長さ0.8m、幅0.4mのものとわかる。棺の主軸はE-32°-Sである。

内法から小児を埋葬したものと考えられる。棺南辺と墓壇の間には幅15cmの空隙がある。この墓に伴う出土遺物はなかった。

**30号墓** 3号墓の西辺によって切られている墓で、大きな目の標石が中央に1個だけ置かれている。こ

の標石は、流紋岩である。この石材の下から石鉢1点が出土している。

墓壇の一部を排水溝で切ってしまったため、正確ではないが、墓壇は長辺1.0m、幅0.5m、検出面からの深さ0.3mのものである。墓壇床面には木棺材を据えた溝が残り、北辺の側板が一部残存していた。底面の溝からは小口を側板で挟む形式の棺と考えられる。棺内法は長さ0.7m、幅0.25mを測る。これも小児用の棺と考えられる。墓壇の主軸はE-25°-Sである。この墓でも木棺南辺と墓壇壁の間に幅約10cmの空隙がある。

**30号墓出土遺物** 石鉢75は、長さ16.5cm、幅7.5cmを測る完形のもので、真岩製である。使用による摩耗はわずかに認められるにすぎない。重量は、462gである。

**25号墓** 3号墓の南辺によって切られる墓で、墓壇はさしわたり0.7mの不整形な円形である。標石と考えられる石材は2個で、うち1個が墓壇内に陥没

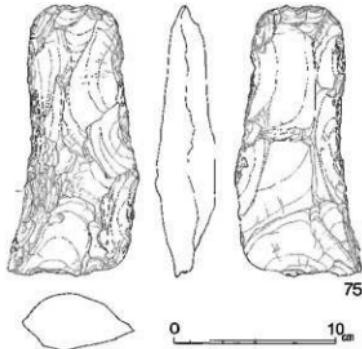


図33 30号墓出土遺物実測図

しており、本来この標石の下部に木棺の空間があったことが推測される。石材はドレライトであった。

境内には、棺材かと考えられる木片が1点残存した。樹種はキハダで、この墳墓群では唯一の使用材である。

これも既そのものが小さいことから、小児を埋葬したものと考えられる。墓壇が不整形で頭位などは不明だが、出土材がその出土位置から木棺の側板材の一部とすれば、主軸はE-30°-Sをとることになって、他の墓とも主軸方向では矛盾しない。

25号墓出土遺物 棺材76は、長さ28cm、幅2cmが残存する偏平な材である。樹種はミカン科キハダ属キハダである。

15号墓 やや大形の弥生土器を斜めに埋納したと考えられる遺構

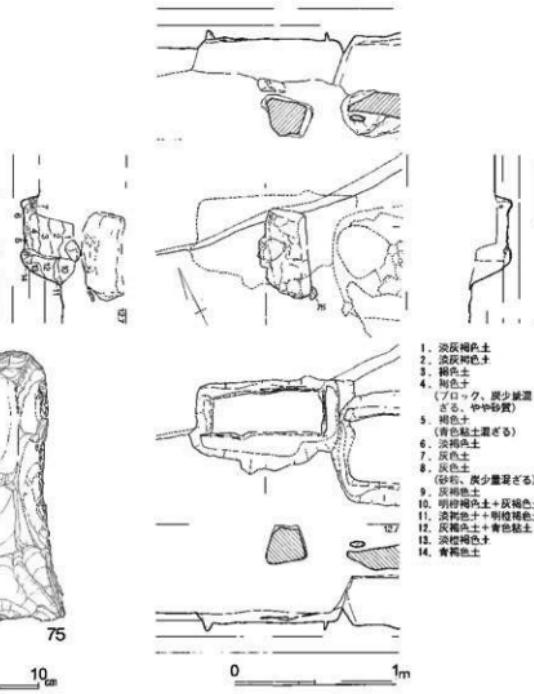


図32 30号墓実測図

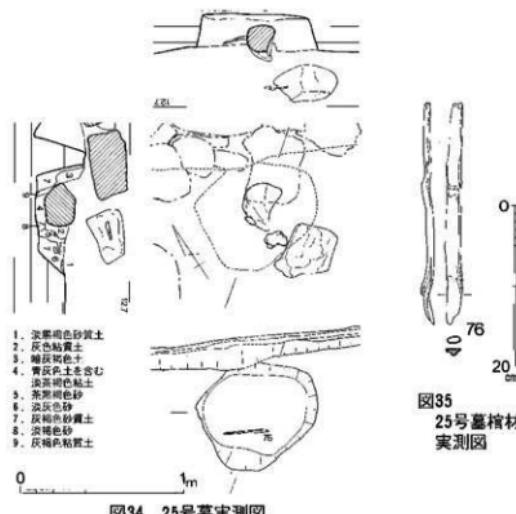


図34 25号墓実測図

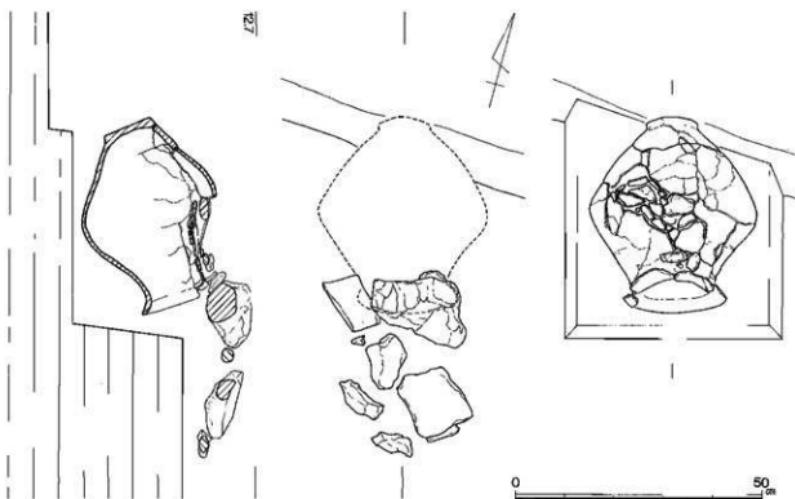


図36 15号墓実測図

で、口縁部に石材を重ねて口をふさいでいたようである。口縁は南南東方向に開口する。精査したが埋納埴を検出することができなかった。木棺に埋葬される以前の乳幼児を埋葬したものか考えられるが、埴棺と考えられるものは、この墳墓群ではこの1基のみである。

埋納された埴77は、高さ35cm、口径21cm、底径10cmを測るもので、口縁下部と肩部に段をもち、外面は磨いて仕上げる。内面にはわずかにハケメをとどめる。

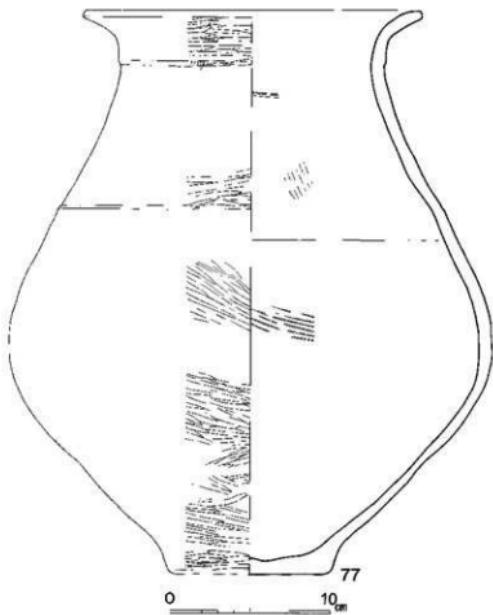


図37 15号埴棺実測図

**4号墓** 標石が長さ1.7m、幅0.9mで検出された。調査区の排水溝がこの主体部を横切った時点では石材のいくらかを取り上げてしまっていたので、検出時点では残存していた石材は7個である。本来は墓壇にはば等しい範囲に石材が載せられていたものと考えられる。石材は、ドレライト、流紋岩、閃緑岩、礫岩からなっている。

調査区の排水溝で側板材が見え、遺跡で最初に棺材の残存を確認した主体部である。下部に木棺をもつため、中央部の石材は棺の腐朽に伴い、若干落ち込んだ状態で検出している。上器片も破片となつたものを石材周辺で回収しており、標石上ないし標石脇に据え置かれていたものと考えられる。

石材を除去して墓壇内を掘りはじめるとき、棺内の床近くまで落ち込んだ状況で蓋板と考えられる木質が膜状になって残存していたが、取り上げることはできなかった。墓壇は長さ1.9m、幅0.8m、検出面からの深さは0.3mであった。墓壇底面では両小口材と北側の側板材、底板の一部が残っており、小口板を側板で挟む組合せである。墓壇の主軸はE-35°-Sである。小口板が良好に残存していたため、棺内法は長さ1.3m、幅0.45mと判断した。小口板は溝を掘って側板材より深く据えられている。また、墓壇底面に黒色土の付着が認められた。底板は、棺長軸方向に木織縦を沿わせる向きで敷かれている。

木棺材のうち小口板、底板はスギ、側板はカヤであった。カヤを材とするものは、この墳墓群では6号墓の小口板でも使用が確認されている。

棺内床面西側では、径約1cm弱のエゴノキの実約40点が検出された<sup>22</sup>。特に棺端付近に集中して認められた。

**4号墓出土遺物** 標石脇で出土した壺78は、体部片と底部片である。肩部にはヘラによる無軸の羽状文と3本の沈線が描かれる。外面は丁寧に磨いて仕上げる。胸部最大径19.7cm、底径5.7cmである。右銘79は、折損品で、基部を欠く。ほかの墳墓出土のものとくらべ、磨耗はさほどではない。

棺材80は、長めの側板材で、樹種はイチイ科カヤ属カヤである。厚さ約2cmを測る。81、83が両小口板で、厚さ約4cmのしっかりしたスギ材である。小口板81は幅46cm、83の幅が43cmで、これが木棺の内法幅の正確な数値と考えられる。82が底板の残片で、やはりスギを材とする。

**16号墓** 長さ2.0m、幅0.9mの墓壇に2列に並べられた標石が半ば沈み込むような状態で検出された。この標石の使用石材は10個である。石材は、ドレライト、流紋岩、閃緑岩、玄武岩からなる。東端の石材に大形のものが使用されており、頭位を表示していたものの可能性がある。この標石列の間に上部2点の底部が採集されている。本来は2列の標石

の間に据え置かれていたものと考えられる。隣接する4号墓とは規模、向きともによくそろっている。

墓壇を掘り下げるとき、棺内床面近くまで落ち込んだ蓋と考えられる膜状になった木質を検出した。この下部に底板と考えられる板材があったが、重なり合うものがあるなど、かなり移動している様子であった。さらにこの板材の下に人骨が残存しており、棺内に滲水して擾乱したことが予測された。検出した板が骨の上に乗った状態であったことから、蓋板の可能性も考慮されたが、いずれの板も側板、小口板で囲まれた棺の内法に収まるもので、棺の上面に架構することはできず、底板以外考えられない。

底板の下に人骨を検出したため、人骨の残存状況を鳥取大学医学部解剖学教室（調査当時：現同大学医学部機能形態統御學講座）の井上貴央先生に現地で指導いただいた。結果、人骨としての配列に乱れが認められないことから、埋葬後、間もない時点では棺内に滲水し、底板と遺体の上下が入れ替わる事態が起きたものと考えられる、とのことであった（第5章 井上貴央、川久保善智「壠部第1遺跡の人骨について」参照）。

ちなみに底板は、本来棺中央部に長手の板2枚を並べ、棺両端にこれと直交する向きに短めの板を並べていたものと考えられる。知めの板のうち、西側のものは穿孔のある板である。田下駄状の外観を呈する。

棺材は非常に良好に残り、両小口をそれぞれ側板で挟む形式のものである。棺内法長さ1.55m、幅0.45m、深さは0.3m以上あると考えられる。棺の七軸はE-22°-Sである。

墓壇は棺底より深く、一定しないが深さは0.6mである。

棺材が非常に良好に残り、墓壇も粘質土に掘り込まれて密閉性が高いと予想されたことから、棺内の土壤の花粉分析を実施したが、有意な結果は得られなかつた（第5章 渡辺正二「壠部第1遺跡調査に伴う花粉・珪藻分析」参照）。また、棺材のうち側板材は、スギの征目材に近いものであったので、年輪年代測定に供したが、年代の特定には至らなかつた。16号墓出土遺物 墓壇上面から壺2点と墓壇内から泥岩製の石器2点が出土している。

壺84は、長めの頸部から段をもち、短く直線的な口縁部につながる。肩部の段以下にはヘラ描きの沈線と羽状文をもつ。底部はしっかりした平底となつていて、口径9.3cm、器高14.0cm、底径5.0cmを測る。壺85は口縁部を欠くが、異形の壺である。頸部に2条の沈線を有し、底部は上げ底となる。胴部最大径16.0cm、底径6.7cmである。86、87はともに泥岩製の石器で、輕く、さほどの硬さはない。ときに87は軟質で80gと軽い。ともに石器として使用

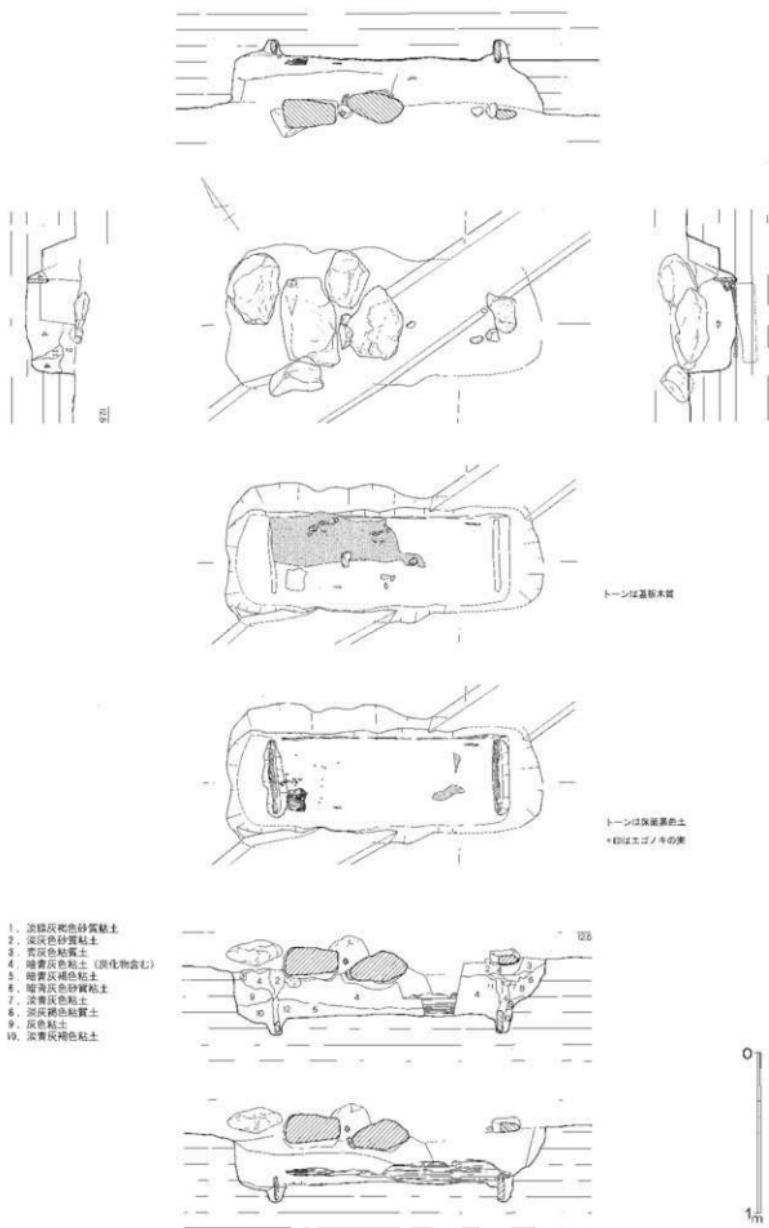


図38 4号墓実測図

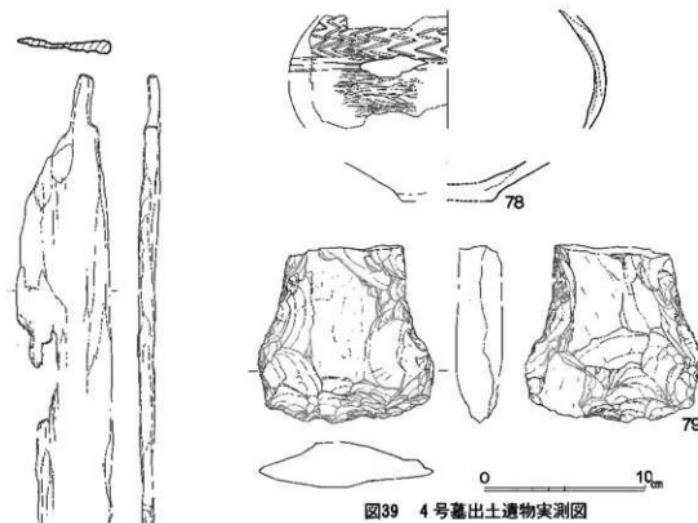


图39 4号墓出土遗物实测图

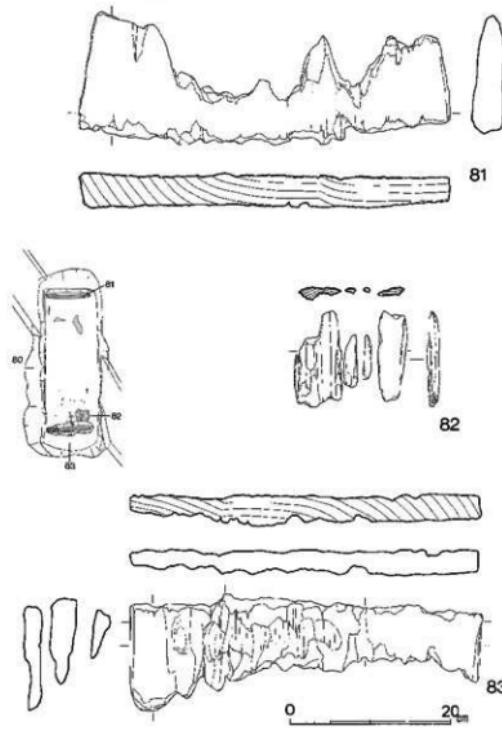


图40 4号墓棺材实测图

できたか疑問である。

88～95は棺材で、樹種は、92がマツ科モミ属である以外は、すべてスギである。

小口板88、95は厚さ5cm近い厚板を使用する。両板ともに相似した位置に節をもち、同一材から割り出されたもの可能性がある。側板材90、94はミカン割りにした材で、厚い面を下に据えていた。90は長さ179cm、幅23cm、最大厚3cmあまりの板である。94は、長さ165cm、幅29cm、最大厚5cmの重厚な板である。棺内両側には表面を平滑に仕上げた際のハツリ痕をとどめる。底板は、89、91～93の4枚を數き並べていた。93は、穿孔のある板を転用しており、円形の2穴がある。

17号墓 西区北端の墓で、検山時点でやや大形の石材とともに小形の礫が見えていた。やや大形の石材が地表にあって標石となっていたものと考えられる。標石は、2列に並べられ、さらに東端に1個の大形の石材が据えられている。この大形の石材は、頭位を表示するものであった可能性があり、隣接する16号墓の標石と右の配列がよく似ており、注意された。標石の石材は、2列に並べられたものには流紋岩が多く、東端に据えられたものが閃綠岩で、意図的に石材を選択しているようである。

検出した墓壙は、長さ2.3m、幅1.6mのもので、西端は木の根により搅乱を受けている。検出面からの墓壙の深さは0.5mである。墓壙内でも小形の石材が数多く検出され、墓壙と木棺の隙間に小石を充填したものと考えられた。この墳墓群で砾を木棺の挖えに積むのは、この1基のみである。

墓壙底面で検出した木棺は、棺材が木の根で移動させられているが、内法長さ1.1m、幅0.4mのもので、その大きさからは子どもの埋葬が想定される。棺の主軸はE-12°-Sで、両側板で小口板を挟むものである。小口板は側板より一段深く掘られた溝に据えられていた。蓋板は残存しなかったものの、小口板、

側板、底板ともに良好に遺存した。

17号墓出土遺物 墓壙上面からは、鉢96と壺97が出土し、木棺挖えに詰められた石材に石器98～102が含まれた。

鉢96は、球形に近い体部から屈曲して如意形の口縁部にいたる。底部は厚めである。体部外面上にヘラ描きの連弧文があるが、その刻線はごく浅く、文様も1周しないようである。口径18.3cm、器高12.0cm、底径6.7cmを測る。壺97は、大きく膨らむ体部を有し、底部、体部ともにやや厚い。胴部最大径17.7cm、底径6.6cmである。

石器98、100、102は泥岩の素材で、石鍛ないし石斧の木製品であろうか。いずれも歓質で軽く、石器としての用途に堪えるか16号墓出土の石器とともに疑問である。99は磨石で、全体に摩耗する。一端に敲打痕がある。101は叩き石で、やや偏平な材の縁にそって敲打痕がある。

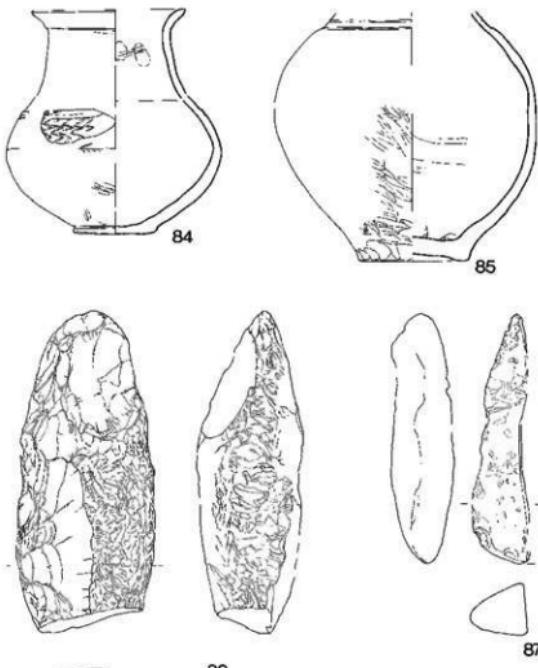


図41 16号墓出土遺物実測図

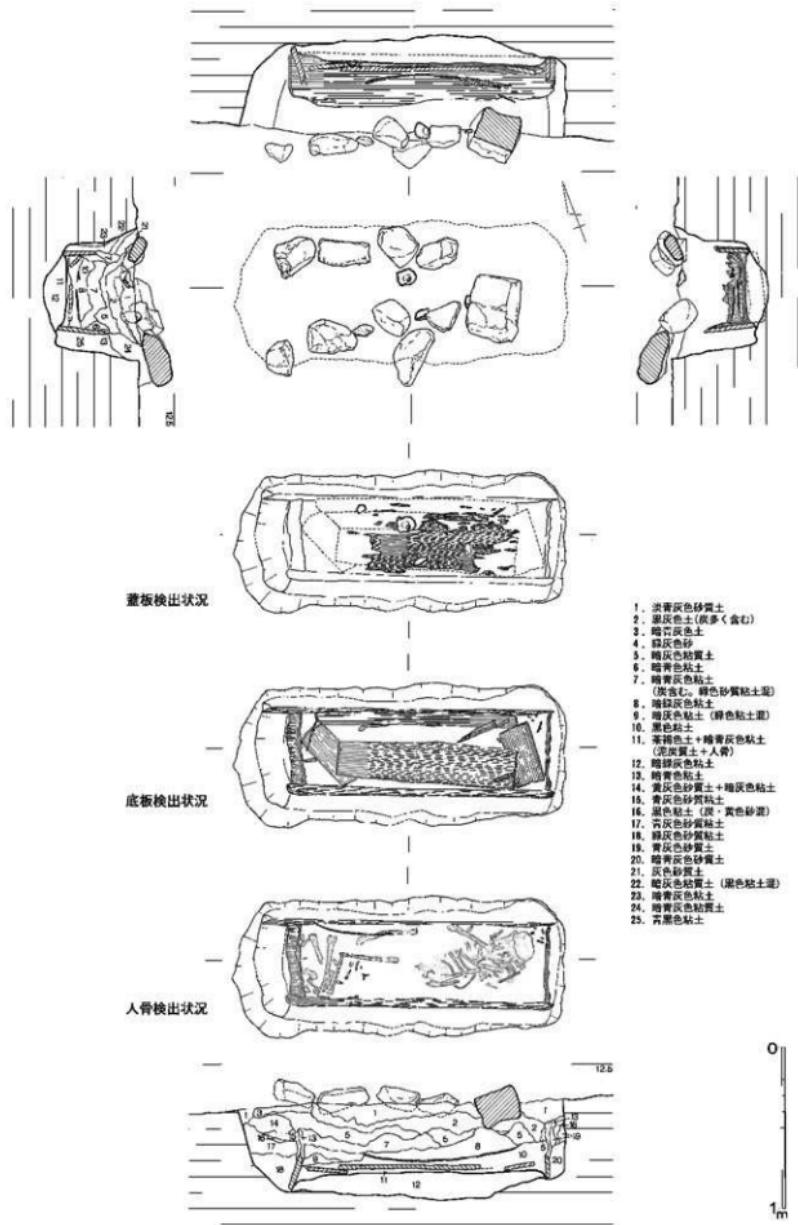


图42 16号墓实测图

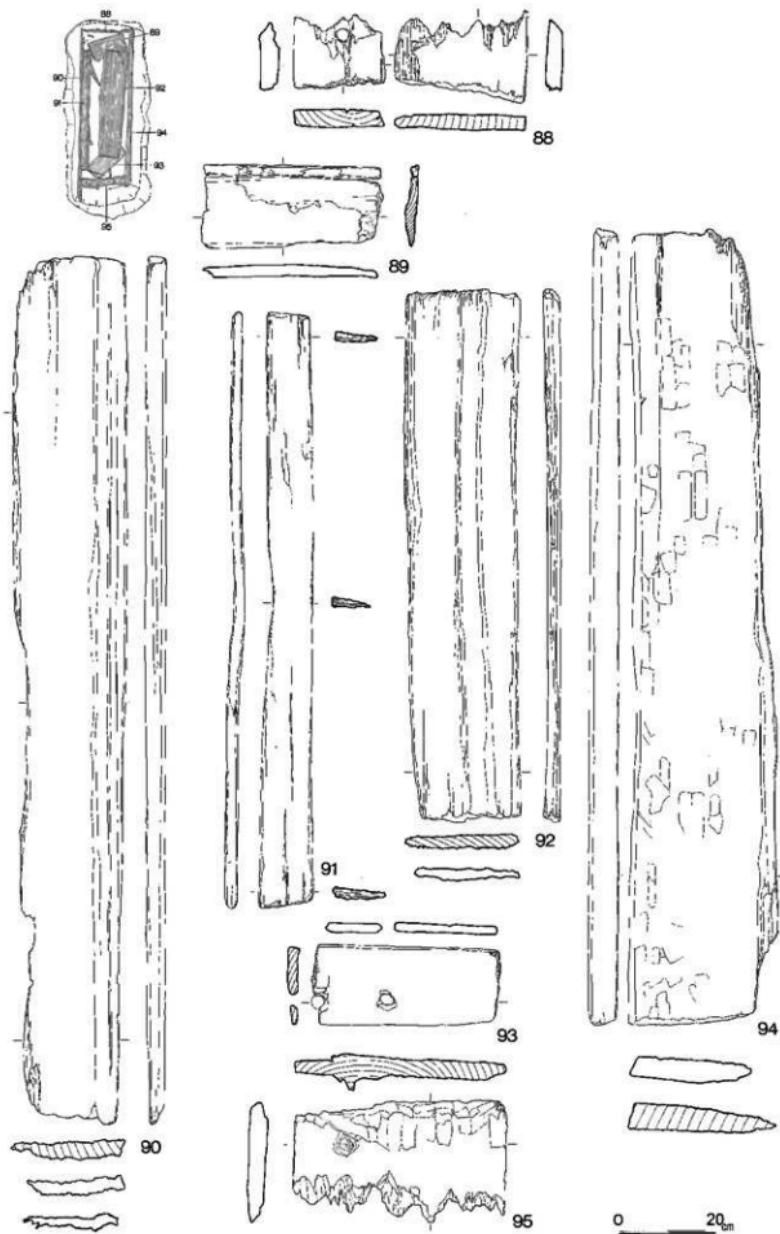


图43 16号墓棺材实测图 (1/10)

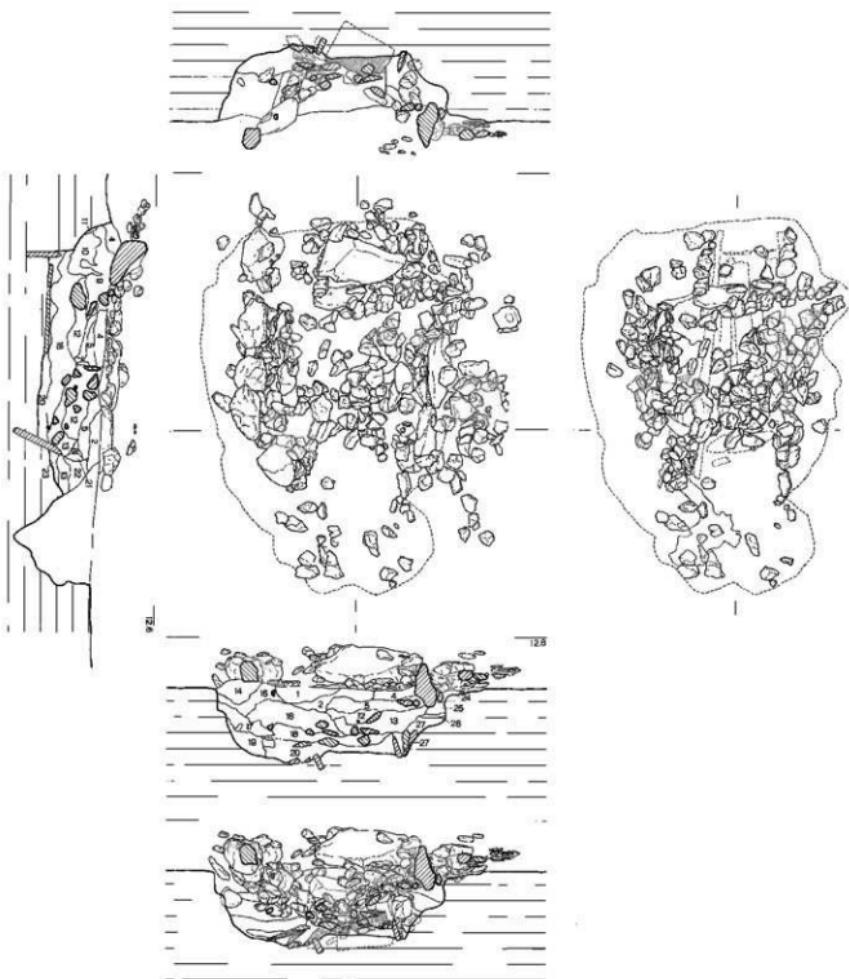
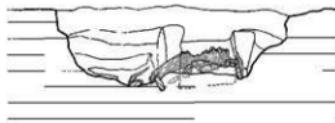
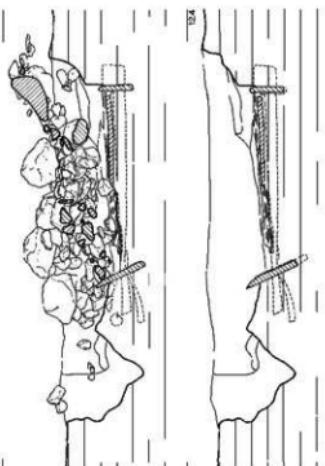
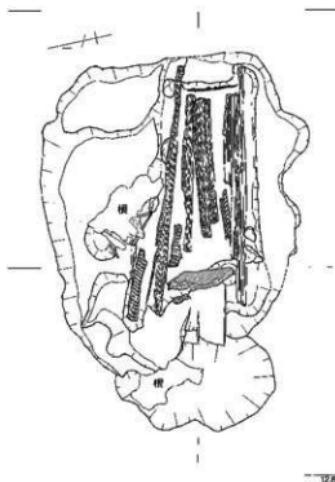
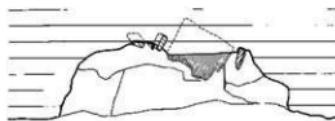


図44 17号墓実測図

103～111が木棺材で、樹種はすべてスギであった。側板104は長さ157cm、厚さ4cmあまりのしっかりした板で、両端近くにそれぞれ小口板を受ける削込みが加工されている。底板105～107は何らかの材を転用したものと考えられ、それぞれ切り欠きがある。底板108、109は小形の材だが、それぞれ105と107の切り欠きがある材の欠けた部分を補うように配されていた。これらの底板では墳底面全てを覆うことが

できず、隙間があったものと考えられる。側板材110も、何らかの用途をもっていた材を転用しており、9個所の斜め方向の穿孔がある。小口板103、111はそれぞれ厚さ約3cm強のしっかりした板である。幅はともに35cmあり、これが木棺本来の内法幅に等しいものと考えられる。小口板103は、スギの柾目材に近いものだったので、年輪年代測定に供したが、年代の特定には至らなかった。



0 1m

1. 淡灰褐色土に黒褐色土(層)とツブツブ混ざる
2. 灰褐色土と暗褐色土混ざる
3. 淡灰褐色土(バサバサ)
4. 淡灰褐色粘土
5. 淡灰褐色粘土
6. 暗褐色土
7. 灰褐色土、底(木材か)混じり、杣塗ライン
8. 青みがかった茶褐色土
9. 灰褐色土(ツブツブ混ざり)
10. 明青褐色砂質粘土
11. 淡褐色土(ツブツブ混ざり)
12. 淡褐色土
13. 暗青褐色土(底・ツブツブ混ざる)
14. 屋根色土(地山プロック含む)
15. 青褐色土に暗褐色土混ざる(木の根かく乱)
16. 青褐色土と暗褐色土混ざる(木質含む)
17. 暗青褐色土に暗褐色土混ざる(木の根のかく乱)
18. 青褐色粘土土に黒褐色土、ツブツブ混ざる
19. 黑褐色土(ツブツブ混ざる)
20. 暗灰色粘土土に茶褐色土、ツブツブ混ざる
21. 黑褐色土
22. 青灰色粘土土
23. 緑色砂質粘土
24. 黑褐色粘土土
25. 暗灰褐色土(ブロック混ざり)
26. 黑褐色土
27. 緑色粘土(ブロック・块含む)



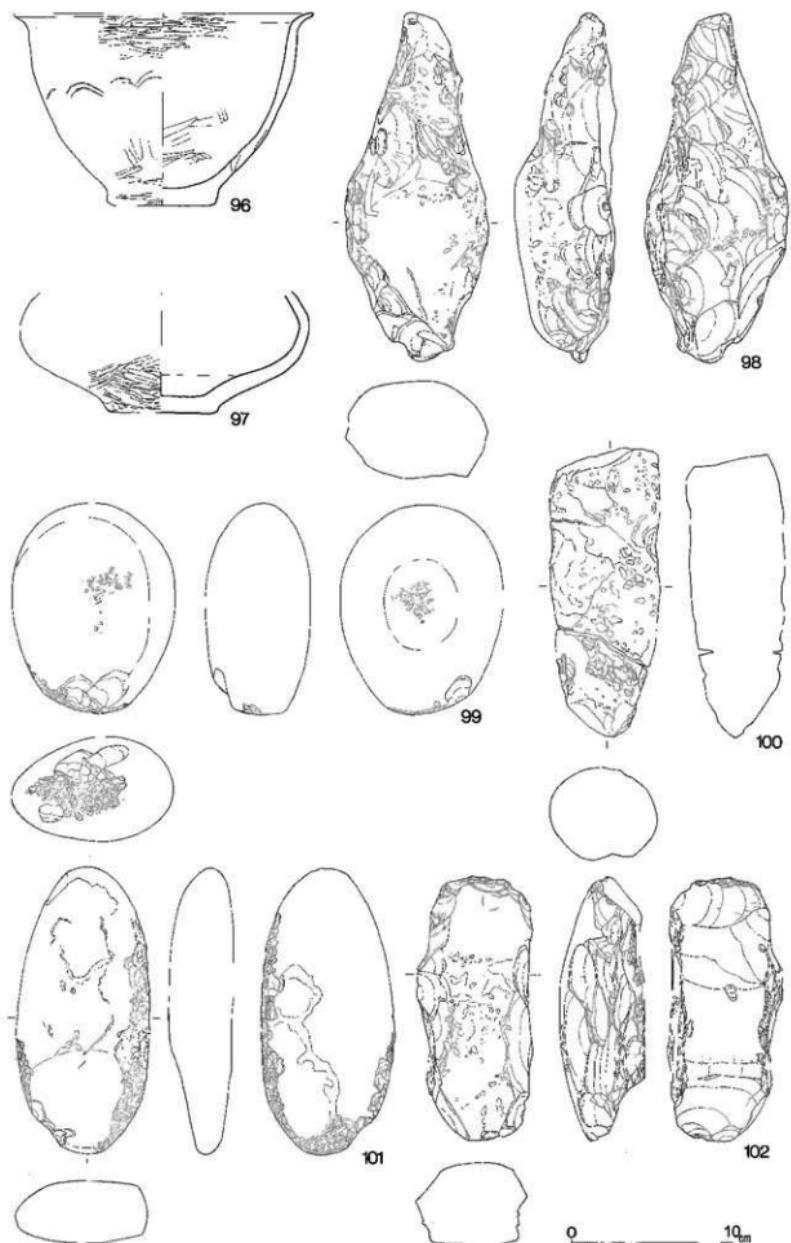


图45 17号墓出土遗物实测图

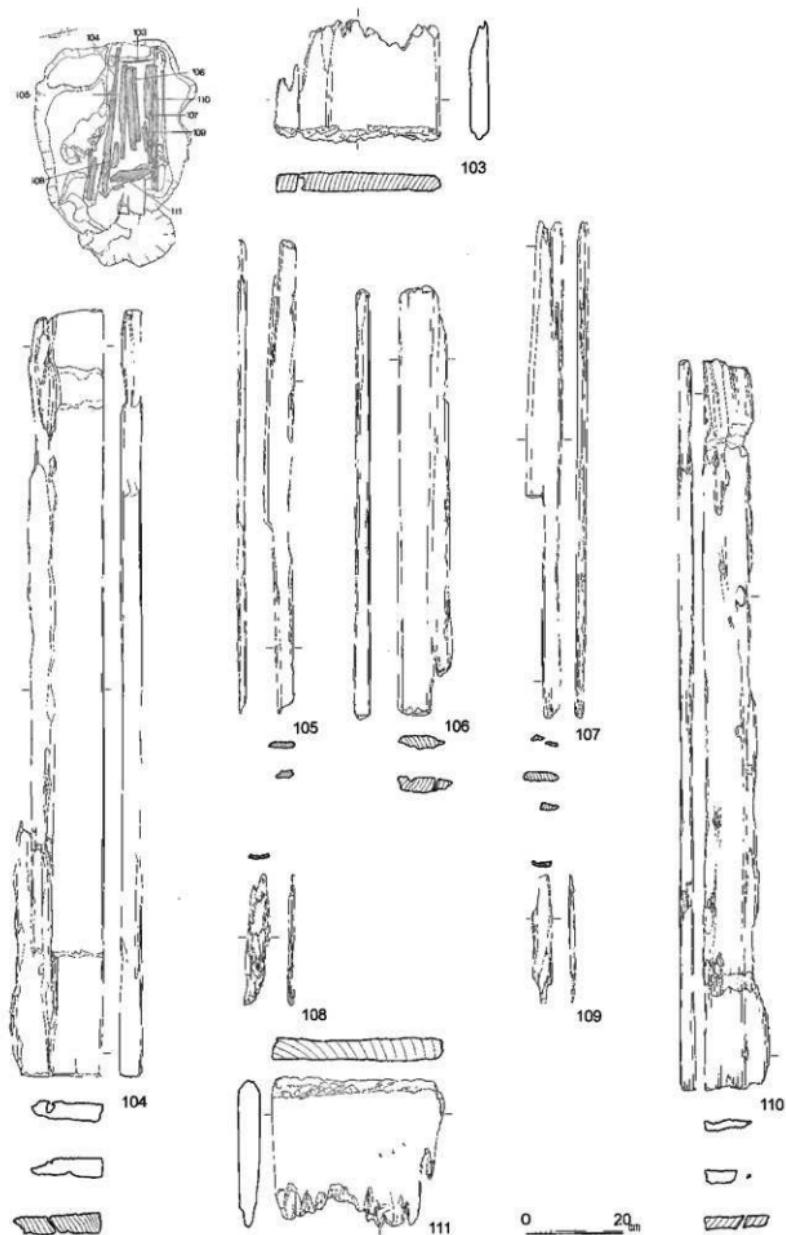


图46 17号墓棺材实测图 (1/10)

19号墓 1.7×0.6mの範囲で標石を検出し、この標石の外側で、墓壇掘方を確認した。標石は一抱えもある石材約15個を並べており、中心部では石材が重なっており、周辺に小形の石がいくらか散在する。標石のはば中央の石材に載った状態で壙上を検出した。標石と土器は下部にあった木棺の腐朽にともなって、墓壇内に半ば落ち込んだ状態で出土している。この壙は肩部に複線山形文をもつが、この文様は一周せず、文様をもつ部分ともない部分とがある。またかも土器に表裏があるかのことであった。出土状況から、文様がある面を西に向かた状態で供献されたものと考えられる。

標石の石材は、大形のものにはすべてドレライトが使用され、小形の石材に流紋岩とわずかに安山岩を交えている。

墓壇は長さ1.8m、幅0.8mである。壇内を掘り下げるに、底近くで薄片となった蓋板の木質を検出した。蓋板の木繊維は、棺長軸方向に平行するので、両小口間方向にかけ渡されるものであったことがわかる。棺材は、蓋板以外に底板、基部のみとなった側板と小口板が残存した。この残存した棺材からわかる棺の内法は、長さ1.3m、幅は棺の東で0.4m、西側で0.5mを測る。墓壇の深さは0.4mで、棺の深さは土層や標石の位置などを勘案すると0.2m以上あったものと考えられる。墓壇内の上層でも基部以上に上方にのびる棺材の存在を確認している。棺材は、両側板で小口板を挟む組合せであった。また、側板は壇底をわずかに掘りくぼめた溝に立てられているが、小口板は、壇底面をさらに1段深く掘りくぼめた溝に据えられている。

人骨は残存しなかったが、棺東端で歯を検出し、東頭位であることが知られた。棺の幅は足側よりも

頭位側が狭い。棺主軸はE-29°-Sである。

底板は棺内法より短い材2枚を使うもので、棺底東側に偏して敷かれている。棺西部では板材は認められなかったが、西端にわずかに木質が残っており、本来は棺底全面に板が敷かれていた可能性がある。この板材の木繊維は棺長軸と直交するので、この部分では東側の底板とは向きを違えた板が敷かれていたものと考えられる。

一方、棺底面西側では黒色の繊維状のものが一面に残存していた。この繊維状のものは東側の底板の上面にも一部認められ、棺底板の上にむしろ状のものが敷かれていた可能性がある。また、棺西部では、この繊維状のものの上にわずかだが赤色の付着物があった。この繊維状のものの下には、黒色上の付着が認められた。

19号墓出土遺物 墓壇際石の上から検出されたのが壙112である。全体にやや厚手ながら、長い頭部を有し、肩部および口縁部下端に段をもつ。肩部には複線山形文をもつが、この文様は一周せず、2条のヘラ描き沈線となる部分、文様をもたない部分とがある。外面はミガキで仕上げ、内面はハケメをとどめる。胸部最大径25.0cm、底径8.4cmで、復元される112径は14.5cmである。

木棺材113~118の樹種はいずれもスギであった。小口板113、118は基部のみをとどめるものだが、3cm以上の厚さの材が使用されていたことがわかる。側板材114、117も基部のみ残存した。長さ120cm以上、厚さ3cm近い板であったものと考えられる。この板の幅は、上層の痕跡から20cm以上はあったものと推測する。底板115、116は長さ80cmあまりの板である。2枚を並べて底板を構成していた。

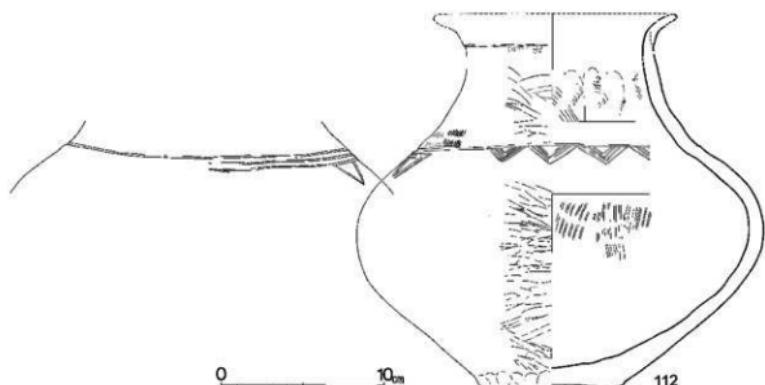


図47 19号墓出土遺物実測図

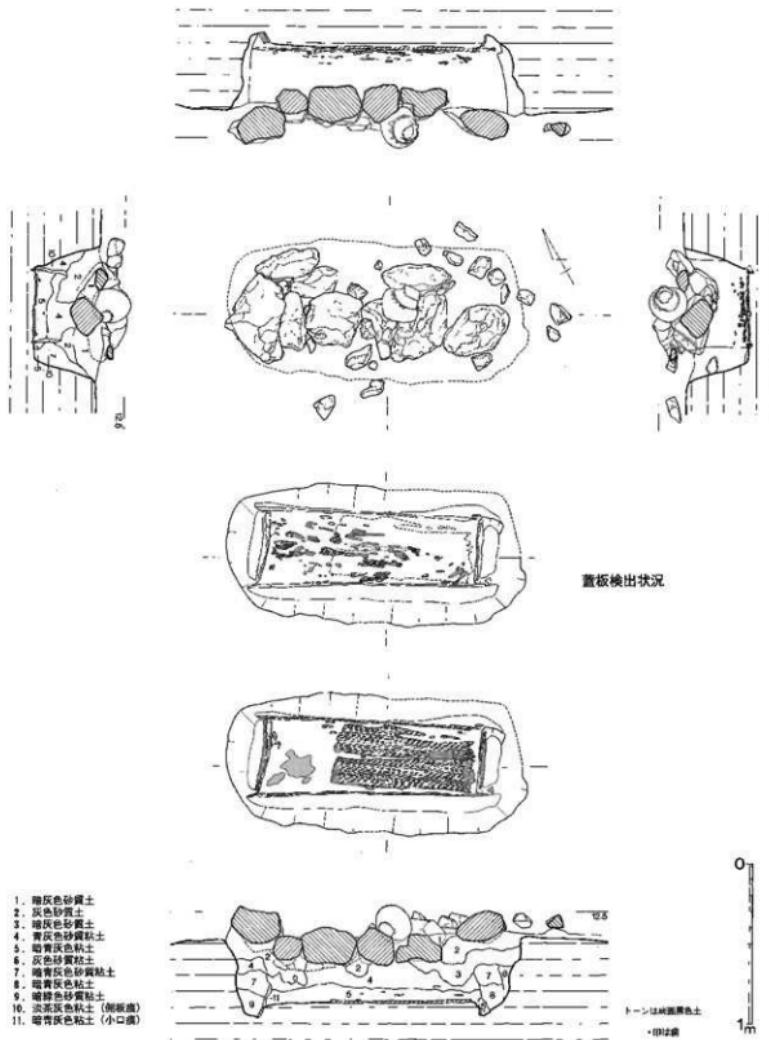


図48 19号墓実測図

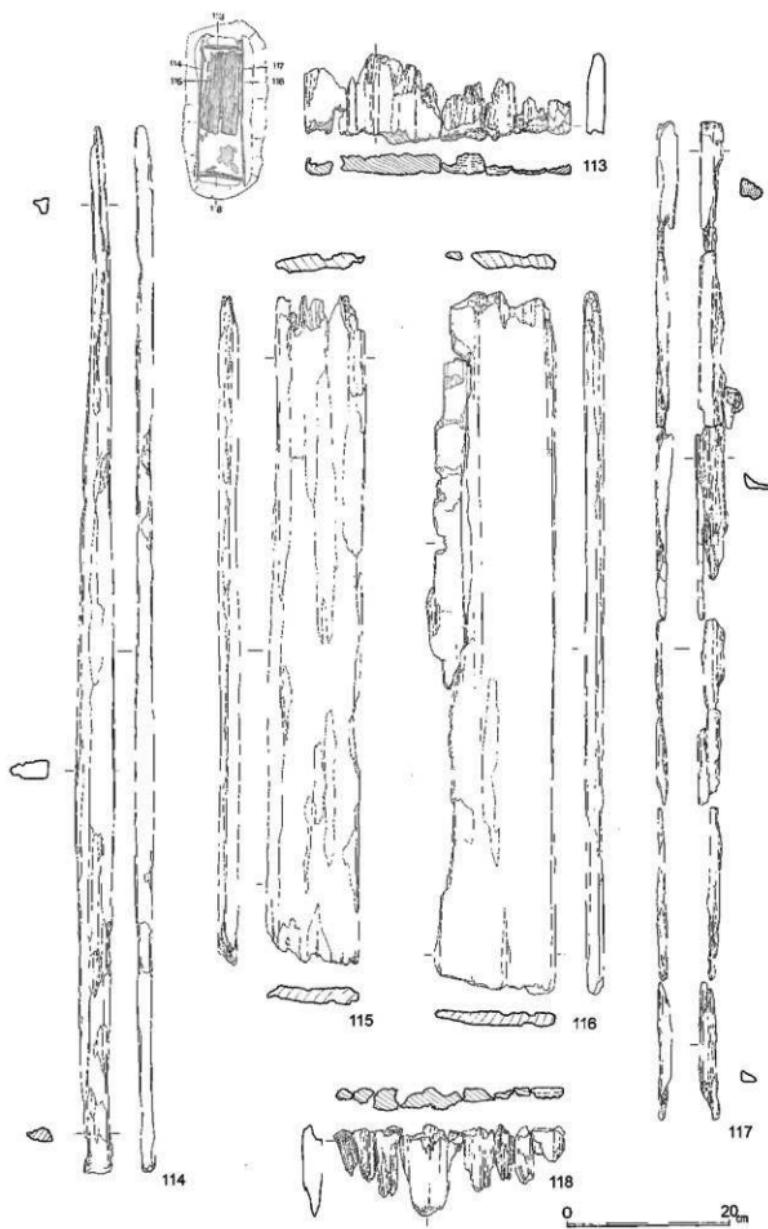


图49 19号墓棺材实测图

**20号墓** 19号墓の南に隣接して存在した長さ1.8m、幅1.0mを測る墓壙である。19号墓とは墓壙の規模、向きともによくそろっている。

標石は3個の石材からなり、墓壙の東西両端を標示していたと考えられる。東側の石材はドレライトで、西側は2個とも閃緑岩であった。西側にはやや大き目の石が使用されている。

下部にあった木棺の腐朽にともなって、壙内に落ち込んだ状態で、東側で鉢1が、西側で壺1が出土した。このうち鉢は完形のものであった。埋葬後、壺、鉢とともに墓壙上面に据えられていたものと考えられる。鉢は、器表にさほどの風化は認められず、比較的早くに木棺の腐朽に伴って埋没したものと考えられる。

壙の深さは0.25mで、隣の19号墓が深さ0.4mであることと比較すると浅い壙といえる。壙底面は砂礫層となっている。底面には棺材を据えた溝が残っていた。南北の側板を据えた溝と、東側の小口板を据えた溝である。西側の小口溝は認められないが、わずかに溝の存在を推測させる凹凸が壙底面にあつた。東側の小口板を据えた溝は側板用の溝よりも深く、広く掘られている。南側の側板用の溝からやや浮いた位置には、わずかながら木質が細く帯状に残存しており、側板材の残片と考えられた。これら壙底面の溝は明瞭ではないが、東小口溝が短いので、小口を側板で挟む形式の木棺であったと判断される。棺の主軸はE-30°-Sで、隣接する19号墓とはほぼ等しい。

西小口板の痕跡は明瞭には見えなかったが、棺内法は、十層もあるわせると長さ1.5m、幅0.5mを測るものであったと推測される。棺の深さは、上層や標石の位置から推して0.3m弱であろう。人骨や歯は検出しなかった。

壙底には、棺の南側板の外側と墓壙壁との間にやや広い空隙がある。

**20号墓出土遺物** 119は器高20.5cmのやや細身の壺で、18.2cmの胴部最大径は、器形のやや上部にある。口縁下端には段ではなく、かすかに描かれる1条のヘラ描き沈線のみで表現している。肩部にはわずかに段をついているようでもあるが、3条の沈線にしか見えない。外面と口縁内面を磨いて仕上げている。口径は11.8cm、底径は7.1cmに復元できる。底部には粉の压痕がある。

完形の鉢120は、壺と区別しづらい器形であるが、器高を11径がしのぐので、鉢と呼称しておく。9cmと怪の大きい底部から直線的に体部が立ち上がり、軽く外方に屈曲させる口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。口縁外面上には口縁を屈曲させた際の指痕压痕が残る。器高17.4cm、11径18.8cmを測る。内外面にハケメをとどめている。内外面ともに煮炊

きに使用した痕跡は見られない。比較的早くに木棺の腐朽に伴って陥没し、埋没したものと考えられ、器表にさほどの風化は認められない。

**21号墓** 2号墓の南2mに位置し、主軸を2号墓とそろえているようにみえる。墓壙の東西に相当する位置に標石が認められるが、西側の石材は墓壙西端を大きく外れており、一部移動している可能性が考えられた。本来は墓壙の両端を標示するか、墓壙の上面を覆う標石であったものと考えられる。東端では石材を重ねている。標石の石材は9個で、ドレライトを主体とする。壺1個体が、墓壙は中央に相当する位置に横転して、半ば沈み込んだ状態で検出されている。

墓壙は長さ1.5m、幅0.7mを測り、検出面からの深さは0.3mと比較的浅い。墓壙底面は砂礫層になっている。底面には、小口板と側板材がその基部のみであるが残存した。この棺材によれば、棺内法は長さ1.1m、幅0.35mである。棺材の組合せは、小口板を側板で挟む形式であった。棺の大きさからは子どもの埋葬が推定される。

両側板とも溝を掘って据えられているが、小口板は側板よりさらに深く掘られている。小口材と小口の溝には隙間がなく、溝を掘って小口板を据えるのではなく、小口板を打ち込んで立てているものと考えられた。東小口板はほぼ直立するが、西小口板はやや西に傾くように打ち込まれている。底板は残存していないが、十層において壙底面を覆う褐色粘土を認めており、これが底板の痕跡と考えられ、本来は底板も存在したものと推測される。棺底面は東端がやや高くなるように削り残されている。また、十層は棺西端で観察したので、ここでは蓋板の痕跡も観察できた。この蓋板や側板の痕跡から、棺の深さは0.3m弱であったことが推測される。棺底面東寄りには黒色土が付着して残存した。

この黒色土上面、棺東端近くで赤漆塗の堅墨1を検出したので、頭位は東を向くものと判断された。東端で重ねられていた標石は、頭位を標示したものであった可能性がある。また、壙底面の黒色土中央部にわずかに赤色の残留物の付着を認めた。

棺の主軸はE-2°-Sで、2号墓とほぼ等しく、西区の墳墓群が指向する向きとは異なる。

壙底には、棺の南側板外と墓壙壁との間にわずかだが空隙がある。

**21号墓出土遺物** 壺121は、器高18cmを測る無文のやや偏平な壺で、頸胴部の境は認められず、胴部最大径は、器形の下半にある。口縁部は下端の軽いアクセントを経て、外側に大きく屈曲する。底部はごくかすかに上げ底となって、内外面を磨いて仕上げる。11径13.4cm、底径6.9cmである。底部に顯著な黒斑がある。内面にかすかだが茶褐色の付着物が

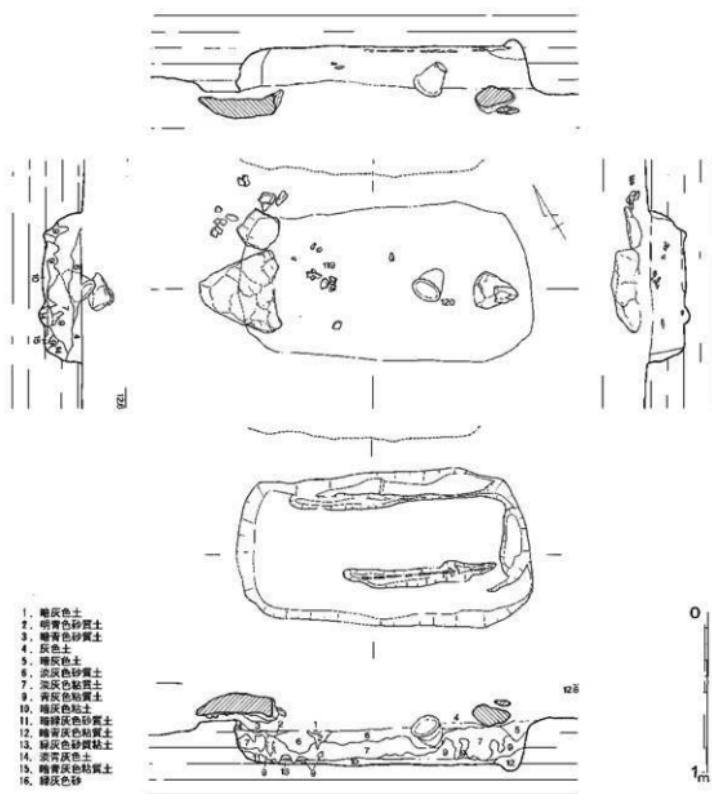


图50 20号墓实测图

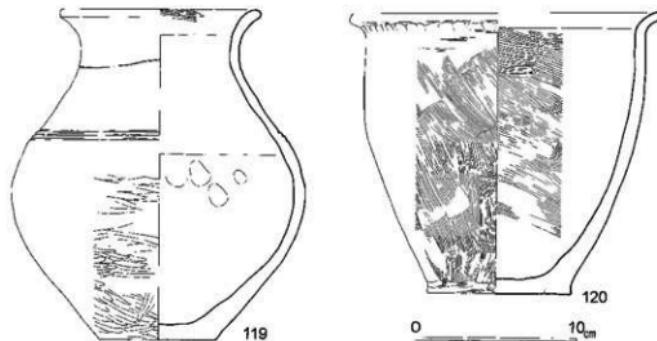


图51 20号墓出土遗物实测图

ある。器表は片面の風化が進んでおり、長らく地表にあったものと推測される。内面の茶褐色の付着物はこの風化面と対応した水平面となって付着しており、土器が転倒した時点以降も土器内に何らかの液状のものが入っていたことを示すものと考えられる。器形は松葉型系の土器と考えられる5号墓出土の158に似ている。

堅壁122～124は、10本前後の串を組み合わせて漆で塗り固めたものである。表面に垂布した漆膜のみが残存しており、樹歯などは残存していないが、漆膜裏面に痕跡として観察できる。3点で1個体となるものであろう。漆は、赤褐色を呈する。123と124は同一個体の表裏の関係にあり、上端は弧を描いている。両者とも弧状の溝があって、樹歯ごとに小さな透かし穴がある。122は、123と124の上部の弧に連なる環状部分の頂部の破片と考えられ、ここにも透かしがある。漆膜に残った櫛の歯は9本を数える

ことができる。本来は10本前後の歯があったものと考えられる。

125～127は棺材である。西小口板125は、地中に打ち込まれた基部のみが残存した。幅35cm、厚さ約2.5cmのしっかりした材で、下端には材を切り出した工具痕をとどめる。材を切り出すとともに、小口板として打ち込むために、いくらか材の先端を薄く仕上げて尖らせている可能性がある。この材の幅が、木棺の内法幅に一致する。東小口板もほぼ同様な材であったことが残存した材で観察できた。側板材126、127も、それぞれ基部のみが残存した。北側の側板材126は、厚さ5cm近い重厚な材が使用されている。長さは120cmである。南側の側板材127は、長さ125cm、厚さ2cmとやや薄手のものである。木棺材の樹種は図示できなかった東小口板も含め、いずれもスギであった。

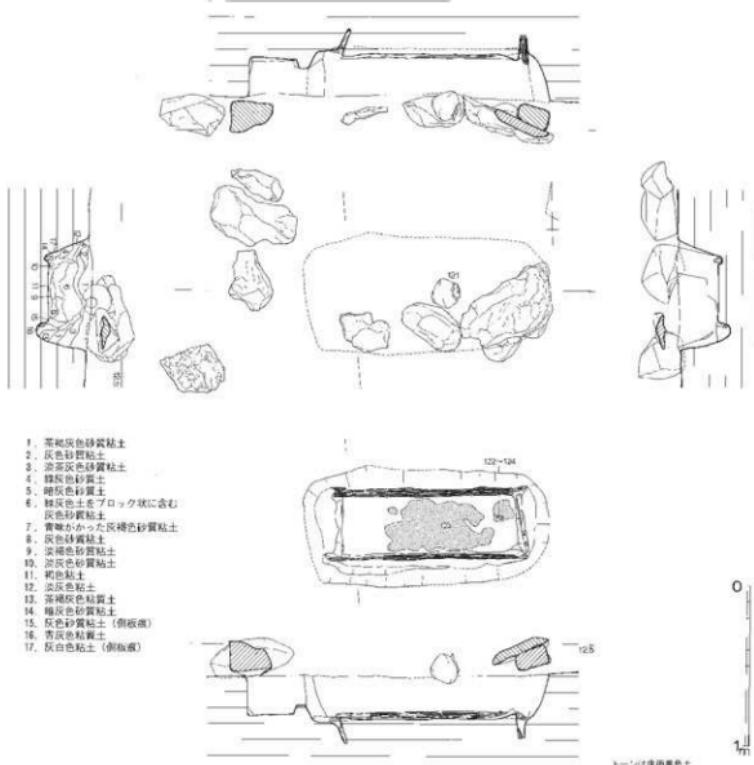


図52 21号墓実測図

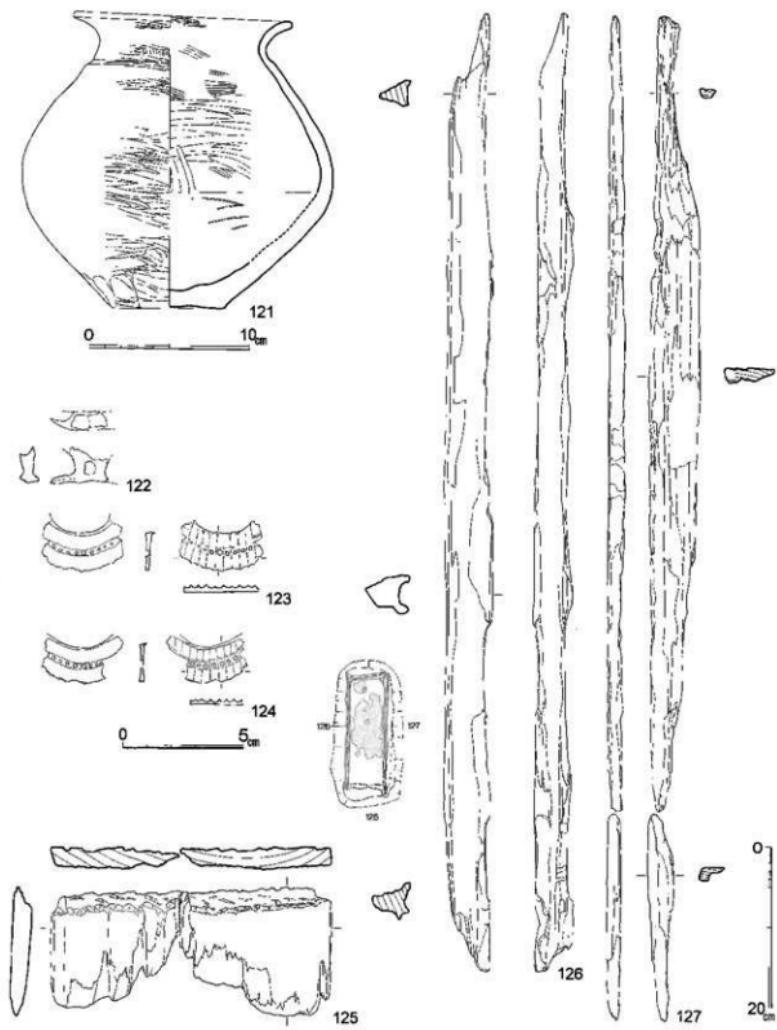


图53 21号墓出土遗物实测图

**22号墓** 19号墓の北東約1.5m、23号墓の南東に隣接する位置にある。1.5×0.6mの範囲に約10個からなる標石を検出した。石材は一抱えもあるや大形のものも使用されている。この標石の下部に、一部調査区の排水溝が墓壙の北西を切っているが、1.5×0.6mと、標石の範囲と一致する墓壙を検出した。のことから標石は墓壙の全面は覆わないものの、その範囲を標示するものであったと考えられる。標石の平面形は、特に形を意図して並べているようには見えなかった。標石中央部では石材が重ねられていた。標石は、下部にあった木棺の腐朽に伴って墓壙中央に向かっていくらか落ち込んだ状況であるので、本来は中央の石材が両端の石材よりも高い位置にあったものと考えられ、木棺を埋納した後の土まんじゅうの上部に石材を貼り付けたものであろう。石材は、礫岩、ドレライト、流紋岩、閃緑岩、安山岩と、各種の材からなっており、特定の石材を選択的に使用するといった様子ではなかった。

墳墓上面では、右側1個体が標石の間に挟まれて出土した。石鏡は先端を北東に向け、両側縁を立て

た状態であった。このように上面から石鏡が出土した墳墓には、2号、3号、4号、23号、30号墓があり、このうち方形の石鏡を出土したもののは2号、30号墓である。

石鏡のほかは、供獻土器などの遺物は認められなかった。

墓壙内には木棺材などは残存していなかったが、墓壙底面の東西両端には、小口板を立てた溝が残っている。土層の観察においては、小口板とともに側板材の存在も確認している。また、壙底の両側板が想定される付近はわずかに窪んでおり、本来はいくらか溝を掘り込んで側板材を据えていたものと考えられる。壙底の小口溝は35cmと短いものであるので、この木棺も小口板を側板で挟む形式のものと考えられた。一方、小口溝から復元できる棺内法は1.1×0.35mと小形の棺となり、子どもの埋葬であったと推測される。

小口溝の幅は、東溝が5cmであるのに対し、西のものが7cmで、西がわずかに広い。この差は、小口板の厚さの違いを反映している可能性がある。墳の

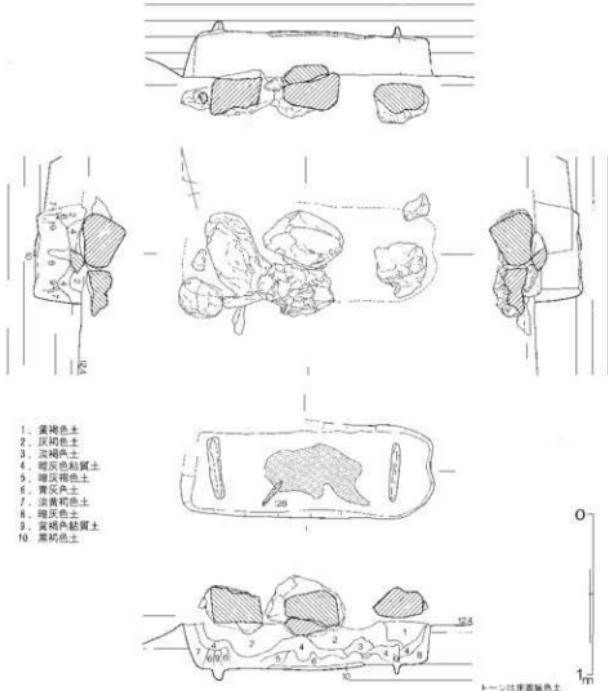


図54 22号墓実測図

深さは棺面から0.3mであるが、標石の位置などをあわせ考えると、いくらか上方から掘り込まれるものであったと考えられる。棺の深さは、土層で観察できた小口板、側板材の痕跡や、標石の位置を勘案すると0.2m前後であろう。棺底面は、東方が西方より約5cm高く掘り残されている。

また、棺底面中央部には黒色土が付着して残っていた。墓壙主軸はE-15°-Sである。棺内で人骨、歯や遺物は認められなかった。

**22号墓出土遺物** 標石の間から検出した石鉢128は、長さ18cm、幅9cm、厚さ2.5cmを測るやや扁平なものである。黒色頁岩製と考えられる。先端部をわずかに欠損しているほかは完形である。使用による摩耗はほとんど認められない。

**23号墓** 22号墓北西に隣接してあった23号墓は、墓壙上面に標石は認められなかった。墓壙は長さ1.3m、幅0.6mと小形である。検出面からの深さは0.5mであった。墓壙中から土器小片が出土しているが、この墓に供獻されたと考えられる土器は検出されなかつた。

境内には棺材が基部のみになって残存した。土層でも棺材の痕跡を確認している。これによれば棺の内法は0.8×0.35mと、この墳墓群中でも小形のもの、子どもの埋葬と考えられる。

土層で観察できた側板と小口板の痕跡などを勘案すると、棺の深さは0.2m強であったものと推測される。棺材の組合せは、小口板を側板で挟む形式である。人骨、歯などの残存はなかつた。木棺の主軸はE-4°-Sで、周辺の墓とは主軸方向がやや異なり、2号墓、21号墓と近い。

棺材は、両側板を壙底に浅く掘った溝に据え、両小口板をさらに深く掘った溝に据えている。東側の小口溝が特に深く、幅も広い。ここで注意されたのが、側板が一枚板ではなく、棒状の材を重ねて側板としていたことであった。残存した材では、本来の材の幅は不明だが、南北两侧板とも2段に材が重なっており、このような材をさらに積み重ねたものであったと考えられる。また、底板も複数の材を敷き並べたものであったが、材が重なるなど、不規則な配置で出土している。前述の16号墓と同様、

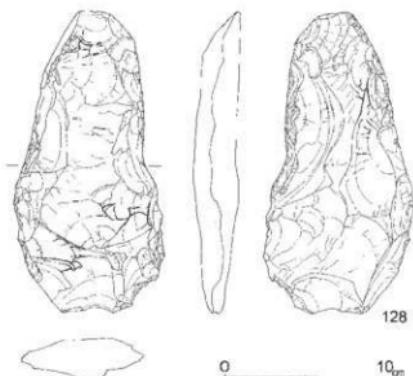


図55 22号墓出土遺物実測図

浸水による擾乱がここでも起こり、底板の配列を乱しているものと考えられた。底板も腐朽が進んで断片的にしか残存しないが、本来はもう少し材が存在したものとみられる。小口板も部分的にしか残存しておらず、全体像はつかみがたいが、材が小口溝に残存していた状況をみると、小口板には1枚板が使用されているものと考えられる。

また、床面近くから石鉢片、石錘の各1点が出土

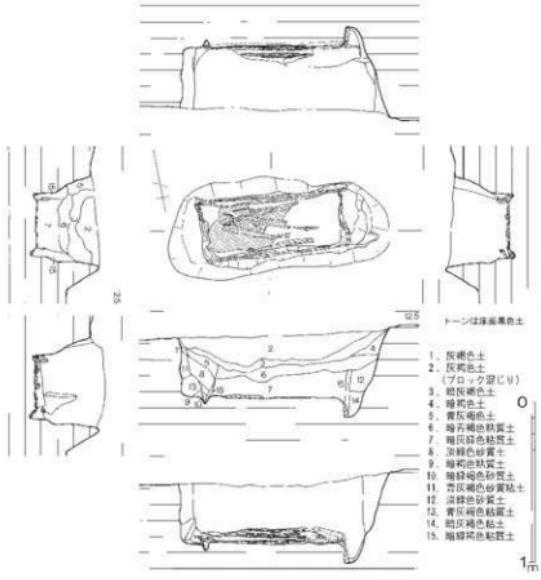


図56 23号墓実測図

した。床面西方には黒色土の付着が認められた。

23号墓出土遺物 129は黒色頁岩製かと考えられる石器片で、石鏃の先端の一部と考えられるが、全体に薄く、石鏃以外のものの破片である可能性がある。130がやはり黒色頁岩製かと考えられる円錐を素材とする石錘である。両端を打ち欠いて紐掛けをつくるもので、重さ61gである。

131から138は棺材である。いずれの材も腐朽が進んでおり、本来の厚さなどは不明である。側板材131が北辺上段に残存したもの、側板材132が下段に残存したものである。132は長さ85cmを測って、側板用の構の長さにはほぼ等しく、これが本来の長さに近いものと考えられる。底板134は、不規則な配列で検出した複数の材からなる底板を並べ直したものである。側板材138が南辺上段に残存したもの、側板材137が下段に残存したもので、長さ68cmを測る。

棺材の樹種は、底板134の最上段と最下段に図示した材がブナ科シイ属であった以外は、すべてスギであった。

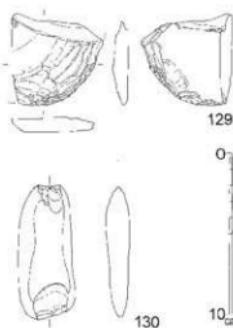


図57 23号墓出土遺物実測図

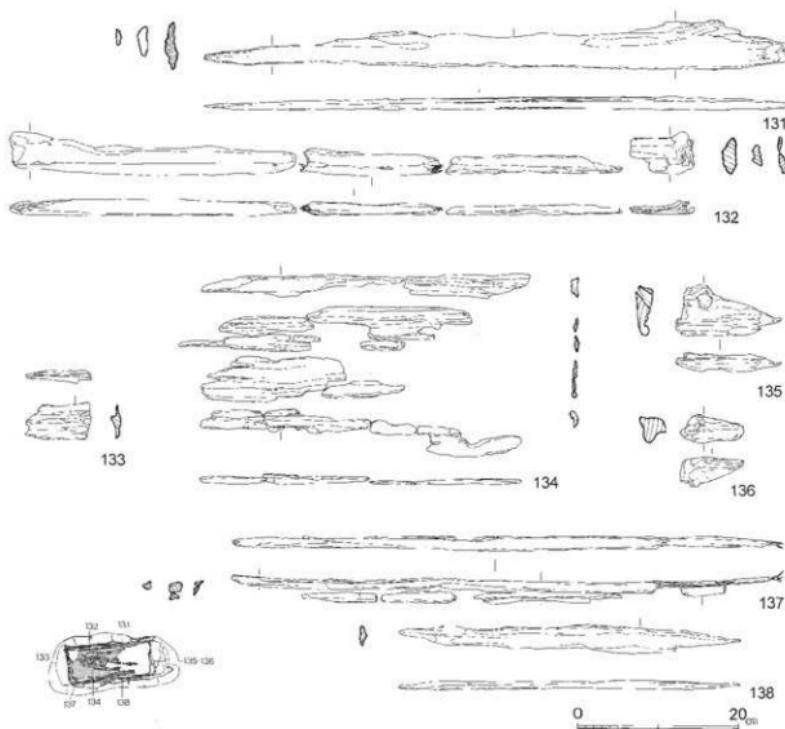


図58 23号墓棺材実測図

**26号墓** 3号墓の東3m、27号墓の西側に隣接する位置にある。やや大きめの2個の標石と小石3個があり、この周囲で長さ1.5m、幅0.6mの隅丸長方形の墓壇を検出した。標石は、ドレライトと閃緑岩からなり、小石は閃緑岩と流紋岩からなっていた。この標石はその位置から、蓋板の中心を標示したものと推測される。また、標石の周囲で供獻土器と考えられる並2個体を採集している。

石材のやや下に木質が残存した。膜状になって残っており、取り上げることはできなかったが、板状のものであったことがわかる。観察できた板の繊維方向は蓋板長軸方向に向くものであった。出土した高さから考えると、蓋板の一部が残存したものと考えられる。

検出した墓壇は、検出面からの深さ0.2mを測るが、標石の位置からは、さらに上面から掘り込まれるものであったと考えられる。壇の底面では棺材はもとより、棺材を据えた溝なども検出しなかった。また、壇内に堆積した土層の観察からも、積極的に棺材の存在をうかがえる様子はなく、木棺は設置していないものと判断された。標石下で木質を検出していることから、素掘りの土壤に蓋板のみ木材を使用するものであった可能性がある。この蓋板は、残存した木質の繊維方向から、蓋板長軸方向にかけ渡すものであったと考えられる。

蓋板のみで、木棺をもたない土壙墓であったとすれば、この墳墓群では例外的な主体部といえる。壇は、西区の墳墓群の各墓壇と比較すると短い部類に入り、埋葬されたの

は子どもであった可能性が高い。墓壇の主軸はE-14°-Sで、西区の墳墓群全体の主軸方向に沿ったものである。

**26号墓出土遺物** 壈139、140が標石跡で出土している。139は頸胸部の境が段をもつものの、直線的な体部になっており、やや背の高い器形になるものと考えられる。全体に砂質で、軟質な焼成である。口径11.8cmに復元できる。140はやや大形の壇肩部で、段を有する。

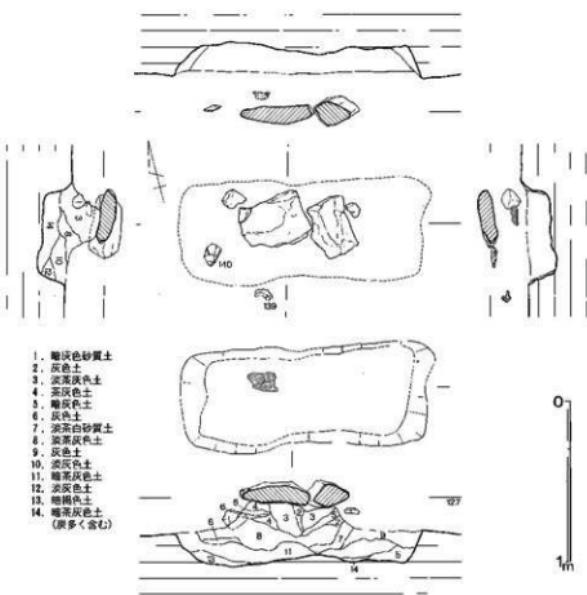


図59 26号墓実測図

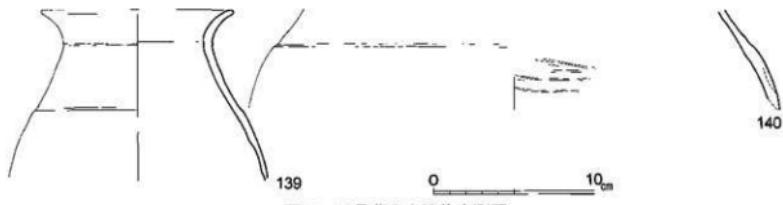


図60 26号墓出土遺物実測図

27号墓 28号墓の東に隣接する。試掘調査時のトレンチで東半を欠くが、墓壙上面に7個の比較的小形の石材からなる標石が認められた。この検出状況から、標石は墓壙の全面を覆うものではなかったと推察される。標石の石材は、閃緑岩、流紋岩とドレライトで構成されている。また、墓壙をわずかに外れた位置にやや大形の石が1個あり、この墓に伴うものが移動した可能性があった。この石はドレライトであった。

また、墓壙西端に相当する位置で、やや人形の壺下半部がつぶれた状態で出土した。この位置に据えられていたものと考えられる。

墓壙は幅0.7mのもので、検出面からの深さは0.3mを測るが、標石の高さからは、さらに上面から掘り込まれていたものと考えられる。長さは0.7mが残存する。墓壙底面には小口板を据えた溝が残り、木棺をもつ主体部であったことがわかる。この溝は知いものであるので、小口板を側板で挟む組合せの木棺であったと考えられる。また、この溝から棺は幅0.35m程度のものであったこともわかる。壙内の土質の観察によても、小口板、側板とともに存在したことが確認できる。これらの板の痕跡から推定される棺の深さは、0.2m強と考えられる。墓壙の主軸はE-15°-Sで、四区の墳墓群の向きに沿ったものといえる。

墓壙底面は先端部を欠く右鎌1を検出した。他の墳墓で認められているように、この墓でも東頭位をとっているとすると、右鎌は被葬者の足付近くにあることとなる。後述する28号墓でもよく似た位置から右鎌が出土している。墓壙内にはこの他の遺物は検出しなかった。

**27号墓出土遺物** 墓141は、しっかりした底部を有するや人ぶりなものである。底径は8.5cmで、胴部最大径は28.5cmに復元できる。表面は風化しており、調整や文様は認められない。大粒の砂粒

が立つ胎土である。黒曜石製の石鎌142は、半基式の基部のみが残存し、先端部を欠いている。

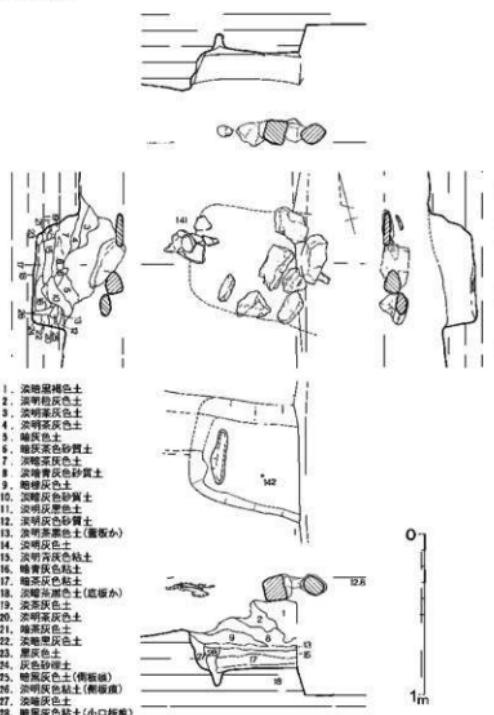


図61 27号墓実測図

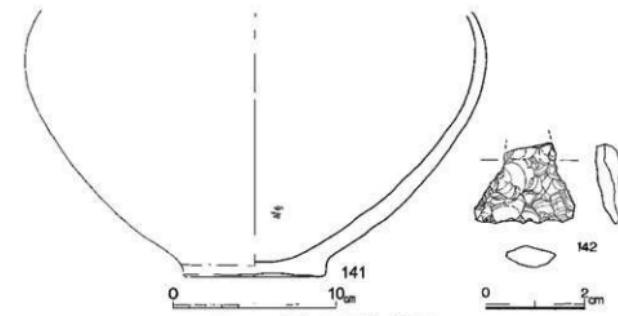


図62 27号墓出土遺物実測図

**28号墓** やはり試掘調査時のトレンチで東半を欠く。27号墓の南に約2m離れて、並んで存在した。やや大き目の7個の石材からなる標石が認められ、この下に墓壙西半が残存した。標石は、墓壙の上面にやや疊に並べ、その範囲を標示するものであったと考えられる。標石の北西では壺1個体がつぶれた状態で出土している。ほぼ完形に復元し得たので、この位置に据え置かれていたものと考えられる。また、標石下から壺底部片も1片検出した。標石の石材は、ドレーライトと流紋岩からなっていた。

ここでは標石下を掘り下げたところ、長さ1mが残存する墓壙を検出した。墓壙内では、棺側板、小口板材が溝状の痕跡となって検出された。棺材は北側の側板の一部が、この溝の中にごくわずかに残存していた。また、土層でも棺材の痕跡を確認している。検出面から棺底までの深さは0.2mである。標石の位置などを勘案

すると、墓壙はもう少し上向から掘り込まれていたものと考えられる。この溝状の棺痕跡から、小口板を側板で挟む形式の棺であったことがわかり、さらに木棺の内法幅は0.4mであったこともわかった。七層や標石の位置から、掘えられていた木棺の深さは、0.2m強のものと考えられる。

棺床面には人骨が認められた。人骨は下肢骨で、軽く膝を曲げた屈肢葬の状態で検出している。保存状態は不良で、指の骨などは残存しなかった。この人骨から、この墓も東を頭位としていたことがわかる。この下肢骨の間の棺床面で、石鐵1点が出土している。

墓壙底面はこの棺底面より約10cm下にあり、いくらか土を壙底に敷いて棺の底を作り出しているよ

うである。壙底面には、棺材を据える溝が掘られておらず、棺材は壙底に敷かれた土で固定されたものと考えられる。このように墓壙底が棺底となるしない墓は、16号墓でも認めている。また、側板を固定したと考えられる石材が、棺外北側で1個検出されている。石材を棺材のおさえに使用する例は、17号墓で多量の砾を棺外に詰めていた以外、西区の墳墓群では認められない。石材を使って側板材を固定したためか、木棺北側板材と墓壙壁の間にわずかに空隙がある。内区の墳墓群では、椎南辺に空隙があるのが通例だが、この墓はこの通例と異なる。

棺の主軸はE-0°-Sで、およそ西区の墳墓群の向きに沿ったものといえる。

**28号墓出土遺物** 標石脇から出土した壺143は、長い頸部をもち、肩部には2条と3条のヘラ描き沈線で上下を区画した文様帶のなかにやはりヘラ描きの

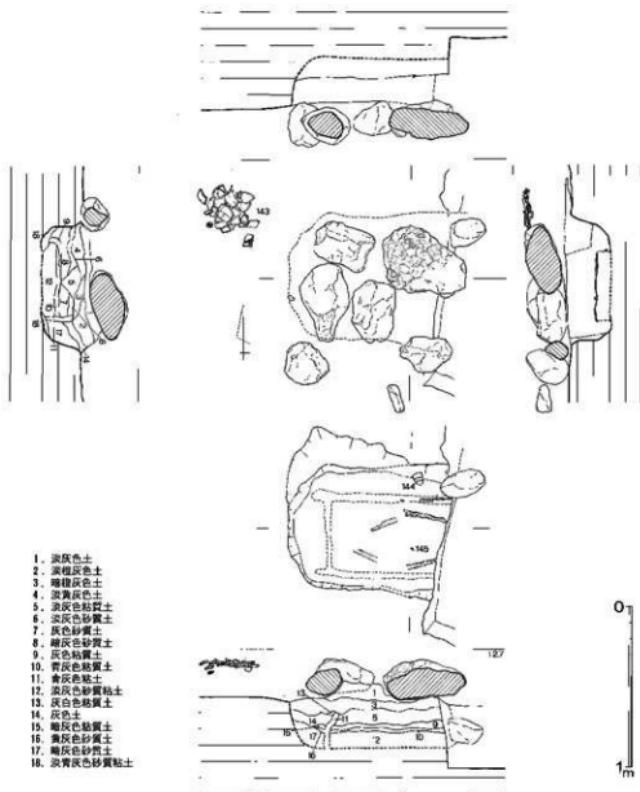


図63 28号墓実測図

無軸羽状文を5段に描いている。円盤貼付けのしっかりした底部をもつ、大粒の砂粒を含むが、精良な胎土である。口径11.8cm、器高19.5cm、底径7.4cmを測る。144は、同様の壺底部で、底径7.6cmに復元できる。黒曜石の石鏃145は、凹基の基部をもつもので、基部の一部をわずかに欠く。

図示できないが、側板材残片の樹種はスギであった。

#### 56号墓 2号壺の北東に隣接し、25号壺を挟んで3号

墓と並ぶ。墓壇上面には、小形の石が1個だけあって、標石とは考えにくく、標石をもたない墓と考えた方がよいものだろうか。ちなみにこの石材は流紋岩であった。標石をもたないため、調査の最終段階でサブトレーンチを設定して、墓壇の存在を確認した。また、墓壇を東に外れた地点で壺1個体を検出している。墓壇南東隅が試掘調査によって切られている。

1.9×0.8mの平面長方形を呈する墓壇を掘り下げたところ、北側に偏した位置で棺底板が検出された。墓壇の検出面からの深さは0.3mであった。

底板は腐朽が進んでいるが、比較的現状を保っていた東側の縁は直線にはならず、何らかの1枚板の人形部材を帳用しているものと考えられた。また、この板は南北方向にわずかに湾曲することを観察している。この底板は棺底面の全面を覆うものではなく、西端では底板が長さ0.2mにわたって途切れている。しかし、この部分では、墓壇長軸方向と直交する繊維方向をみせるわずかな木質を検出しておらず、この空白部分にも検出した底板とは向きをかえた底板が存在したものと考えられる。複数枚の板を敷いて底板が構成されていたものであろう。

一方、側板の痕跡は底板の南北の縁にあるが、さらに南0.2mにもう1枚側板と考えられる痕跡と溝を検出し、木棺南辺については側板が2重になった構造をもっているものと判断された。このため、棺長は1.5mだが、外側の側板位置と内側板用の溝から想定される小口板は0.6mとやや幅広い。一方、内側の側板から復元される棺の幅は0.45mである。土層によれば、内側の側板は、南北の側板よりも低いものであったことが観察でき、側板というよりも仕切り板のようなものが想定される。底板をもつ棺部分の南側に、仕切り板で区画された複室がある特異な構造といえる。

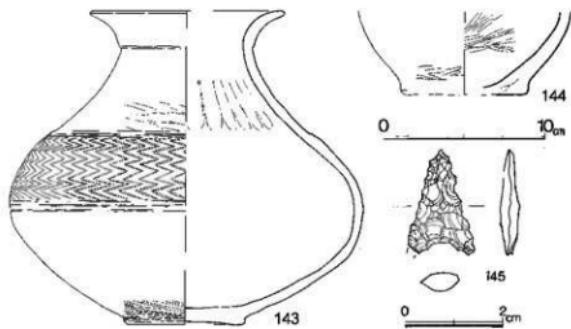


図64 28号墓出土遺物実物圖

壺床面の側板痕跡からは、幅の広い小口板を側板が挟む構造のようである。上層の側板痕跡が高い位置まで良好に残存しており、これにより木棺の深さは、0.3m程度と推定される。木棺壇は、検出面よりいくらか高い位置から掘り込まれていたものと考えられる。棺材は、底板のほかに北側板材、西小口材の木質が、わずかずつ現存した。なお、壇底面には、側板用と小口板用の溝が掘られており、南側板用の溝と小口板用の溝が深い。

棺底板上、東部で歯を、東端の北側板沿いで赤漆塗りの堅櫛片を検出し、棺は東を頭位とするものであった。棺底面は頭位のある東側がわずかに高い。棺の主軸はE-17°-Sである。向き、規模とも北側の3号墓によくそろっている。

56号墓出土遺物 壺146は、口径10cm、器高18cm程度に復元できるもので、口縁下端および肩部に段を有する。肩部には2条のヘラ描き沈線をめぐらし、羽状文、ヘラ描き沈線、羽状文という文様構成をもつ。ヘラ描き沈線に挟まれる文様帶の羽状文はその途中で向きを変えている。また、底部付近にも3条のヘラ描き沈線を有し、特異である。

漆塗りの堅櫛147~150は、木本1個体であったものと考えられ、漆膜のみが残存している。赤褐色を呈する。櫛歯を束ねた基部は環状になっており、この環状の部分の上方に147の飾りが付属するものと考えられる。149、150は148の裏面の破片と考えられる。櫛歯は148で14本の痕跡が確認でき、木本は15~16本程度の歯をもつものであったと考えられる。21号墓で出土した堅櫛122~124と比較すると櫛歯はこちらのものがやや太い。

151、152が棺底板の一部で、腐朽が進んでおり、一部しか復元できなかった。樹種は西小口に残存した材が樹種不明の広葉樹である以外は、底板、北側板材とともにスギであった。

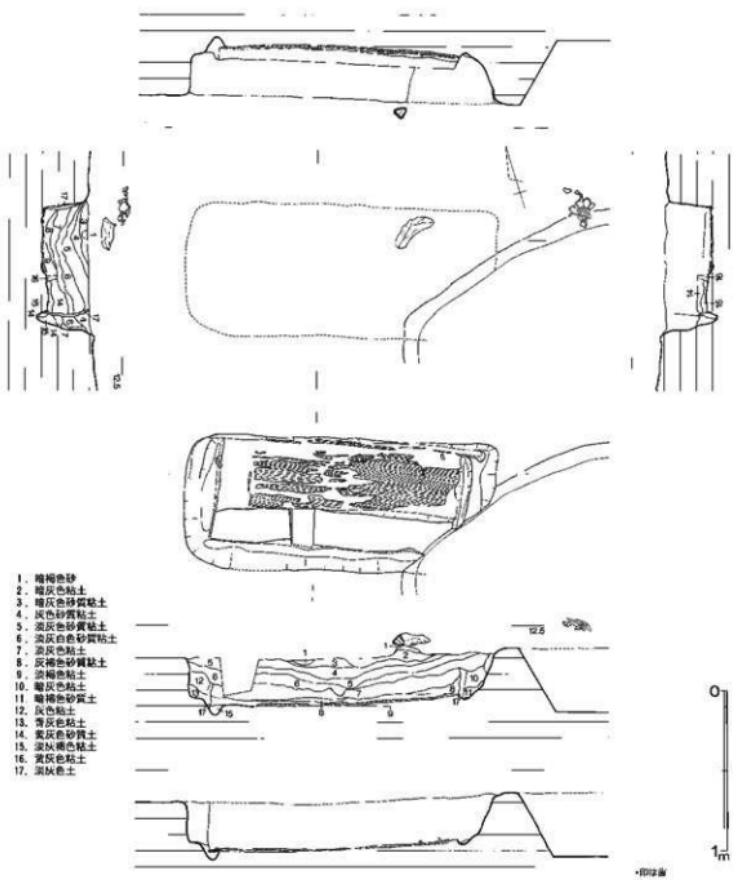


图65 56号墓实测图

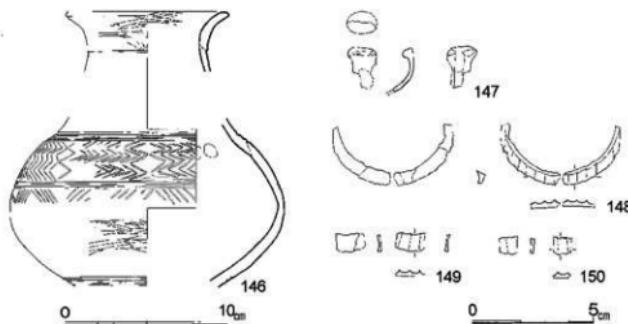


图66 56号墓出土遗物实测图

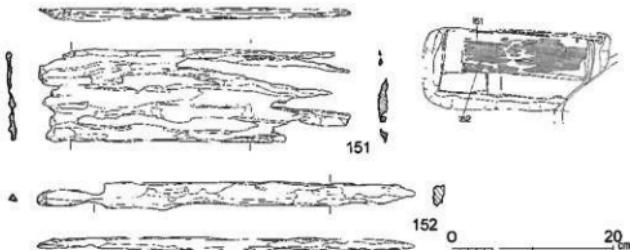


図67 56号墓棺材実測図

57号墓 23号墓の東2mに位置する。墓壙の上面には標石は少なく、付近に散乱した状態で標石を検出した。本来の標石は特定できない。この付近は後世の搅乱を受けているものと考え、早くに石材の除去を行ったので、この地点の石材の同定は行なっていない。サブトレンチを設定してこの主体部を検出した。墓壙上面に土器底部1があったが、周辺の石材の移動した状況からは、この墓に伴うとは断言できない。

墓壙は1.0×0.4mを測り、検出面からの深さは0.3mであった。底面に側板を据えた際の痕跡と考えられる溝が残存し、上層でも棺材の痕跡を確認している。この溝は墓壙のはば長辺いっぽいに残るので、木棺材は、小口板を両側板で挟むものと考えられる。小口板の痕跡は明瞭ではないが、復元できる棺内法は、0.9×0.4m程度と推測される。大きさから子どもの埋葬が考えられる。しかし、この埴輪群では、側板より小口板を深く据えるのが通例で、小口板よりも側板を深く据えたと考えられるこの例は例外的である。棺の深さは0.3m程度と推測される。墓壙の主軸は、E-33°-Sで、埴輪群の向きにおおむね沿ったものである。

57号墓出土遺物 153が墓壙上面で出土した土器底部である。5.0cmの底径からはさほど大きな器種とは考えられない。手探ねのものである可能性がある。154は墓壙内検出の黒曜石の石錐で、凹基式のものだが、先端部を欠いている。

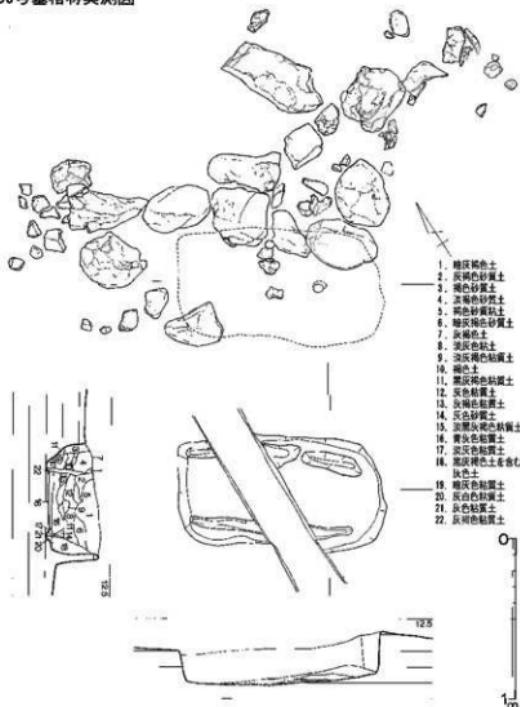


図68 57号墓実測図

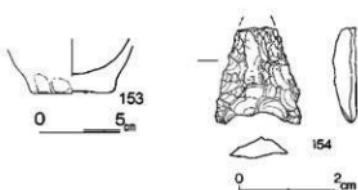


図69 57号墓出土遺物実測図

## 東区の調査

東区は中央の円丘からみて南東に位置する一群である。東区を1つの墓域と認定するにあたっては、北東区の境界に未調査部分が存在するため、一見連続する墓域のように思えるが、ピンボールを刺突した結果、少なくとも標石の存在は確認できず、ここに墓域を分断する空白域があるものとし、東区が1つの墓域を形成していると判断した。なお、この空白域には比較的まとまった弥生前期の土器片が出土しており、何らかの祭祀空間であった可能性が推測される。

東区からは11基の墳墓を検出した。墳墓の基數は他の墓域より少ないものの、5号墓、6号墓という墓群中最大規模の標石をもつ墳墓が存在しており、全墓群の中でもひと際目をひく墓域となっている。東区の墳墓の標石は墓壇上面を覆うように置かれるものが多く、西区の標石の置かれ方とは全体的に印象が異なり、大形墓の存在もあって標石の総量は西区を上回るものである。また、東区内からは標石をもたない墳墓は検出されなかった。

他の墓域と比べ、基盤となる旧地表面が緩やかな傾斜地になっているため、円丘から遠ざかるほど墳墓の標高が下り、墳墓の配置により高低差が生じる区域となっている。また、西区とは土質が異なり、茶褐色の酸性土壤が基盤となっているため、人骨、木棺等の残りが悪く、特に墓室内の遺物の残存状況は、西区に比べ得られる情報が制限されることとなった。また、墳墓の掘り込み面には西区同様細文晚期の遺物包含層があり、周囲には土器片等多数散乱した状態であった。基本的に東区の全墳墓がこの包含層を基盤とする構造を掘り込んでいるため、墓壇内にも包含層由来の遺物が検出される状態であった。

墳墓の配置については、8・9・14号墓、6・10・11号墓のように円丘から放射状に並列する単位が、全体に縦方向に連続して墓域を構成している。また、あまり顕著ではないが、5・6号墓や、9・11・7号墓のような中形規模以上の墓が、それぞれ

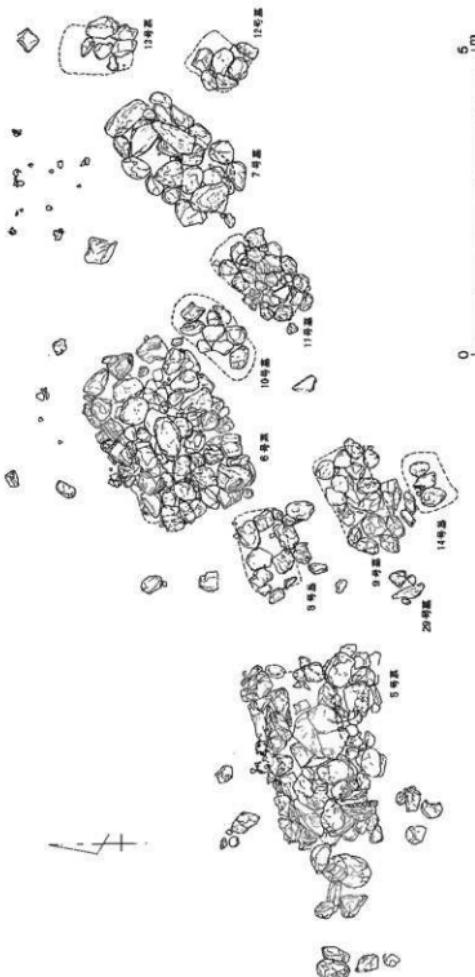


図70 東区墳墓配置図（標石）

に縦列に配置されているようにも考えられる。墓域全体が縦列を基本に配置されるなかで、さらに小単位の並列、縦列の配置規制の存在がうかがえる。なお、5・6号墓の大形墓の並びは、後述する北東区の大形墳墓が縦列して並ぶ軌道の延長線上にあり、墓域をまたいだ墳墓の縦列配置の規制があったことを

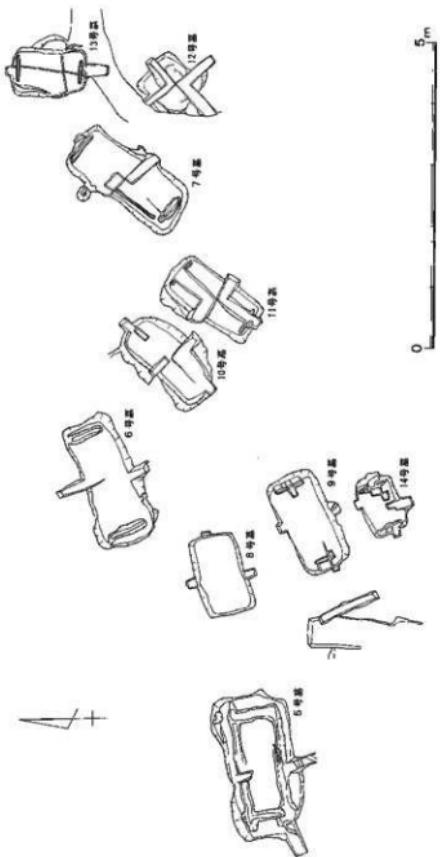


図71 東区墳墓配置図（墓域）

予測させる。また、墓群全体にいえることではあるが、ここでも子供の墓と考えられるものが、大人の墓の周囲に置かれている様子を観察できる。

**5号墓** 5号墓は、東区内で最も西側に位置し、西区と空白域を挟んで最初の墳墓である。

標石の規模は長さ3.2m、幅2.4mを測り、全墳墓中最大の規模を誇るものである。さらに標石に使用された石の数は150個を数え、平面規模では第2位の6号墓と比較しても2倍近い量の石材が使われており、また、1つ1つの石も他の墳墓のものに比べて大きく、上部構造において他に墳墓との圧倒的な格差を印象付ける墳墓である。標石の平面形は、南西側が排水用の暗渠により一部破壊されているが、

現存する石材の配置状況、隣接する6号墓から類推すると、均整のとれた長方形であったと考えられる。特に擾乱を免れた外周の石材が非常に丁寧に並べられており（図版34下段参照）、標石の構築が計画的な工程を踏んで行われていたことを想像させる。なお、5号墓西側に散乱する石材は、暗渠排水の布設時に動かされた5号墓の標石の一部と考えられる。

標石に使用された石材は、他の墳墓と比べて閃緑岩の占める割合が圧倒的に多く、次に近隣で採取可能なドレライト・流紋岩等の石材が使われている。しかも使用されていた石材の数は他の墳墓と比べ格段の差があり、特に閃緑岩の個数は40個を超え、それらの石を數キロ離れた海岸から運搬する労力を考慮すると、他の墳墓と石材の個数以上の差別化がなされていたことが推測できる。なお、閃緑岩は、最上段の大石にも使用されており、この石材が象徴的な役割を果たしていたことが想定できる。

標石の構築順序を石の上下関係から復元すると、まず基壇部の最外周の石が長方形に並べられる。次にその内側に、すでにある外周の石に半分重ねるように石を積んでいったことが判る。石を半分重ねて置くことについては、その行為そのものに意味があったか、もしくは、墓壇埋設後にできるマウンドに石を積み上げた結果であった可能性が考えられる。しかし、墓壇の掘り方から大きく外れた、墓壇埋設後の土盛りがない部分でも石の重なりが確認できるため、推測ではあるが、石を重ねることによって石材量を多く見せる視覚的な効果をねらったものと考えられる。その後の石の積み方は、墓壇への落ち込みが大きいため明確に復元できないが、基本的に墓壇部中央に石を積み詰めた後、その上に2段目の石を積み、さらにその上に差し渡し1m以上ある大きな板石を乗せたようである。また、ここでも石の重なり具合から、全体に標石は外から内に向けて、また西から東に向けて積まれたものと考えられる。東側の石が西側の石の積まれ方と比べて希薄になっていることも、作業手順が西から東へ石を積んだことを示唆するものと考えられる。

標石は最終的に150個超、総重量で数トンに及ぶ石が積み上げられていた。標石の高さは、墓壇内への落ち込みがあるため、現状では墓壇掘り込み面から10cm程の高さしかないが、築造当初では1m近い高さをもつ石積みであったと復元できる。なお、最上部の板石は数個の大型の石で支えられており、その下には、わずかな空間が設けられていた。

また、5号墓標石の築造前に、標石設置範囲の斜

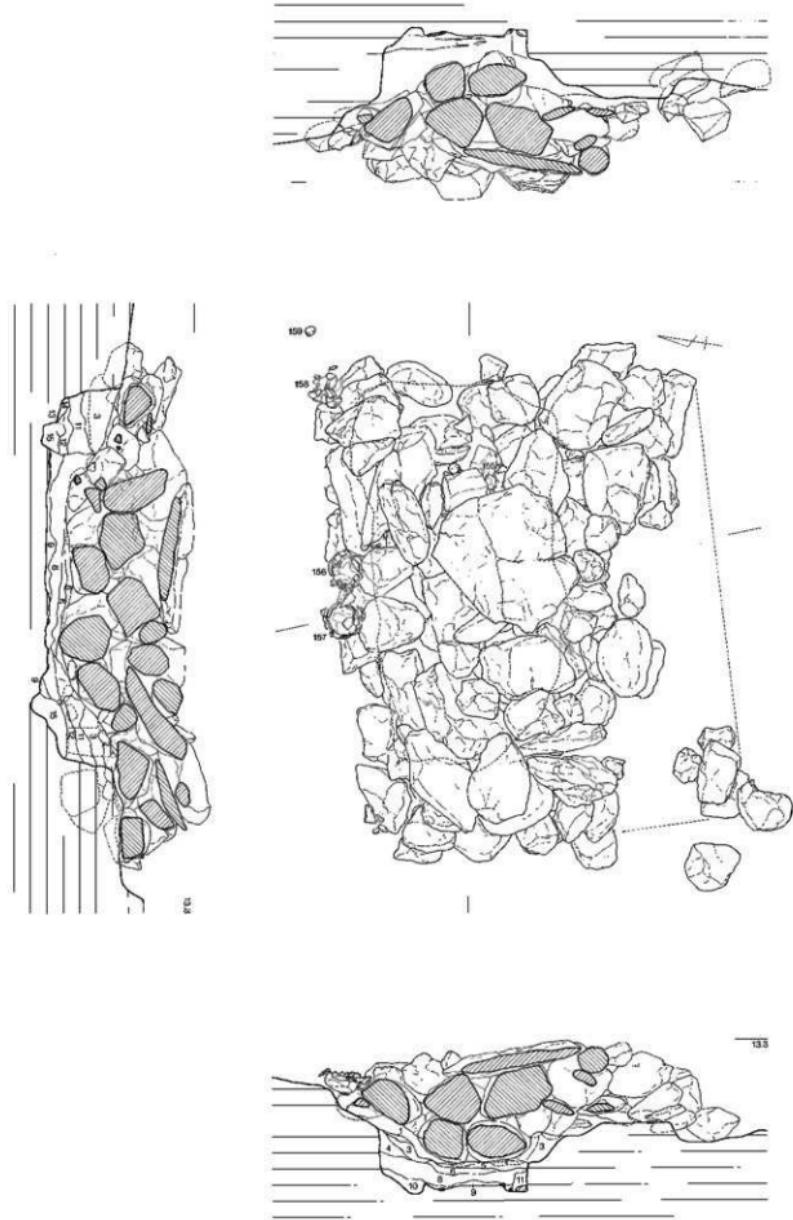
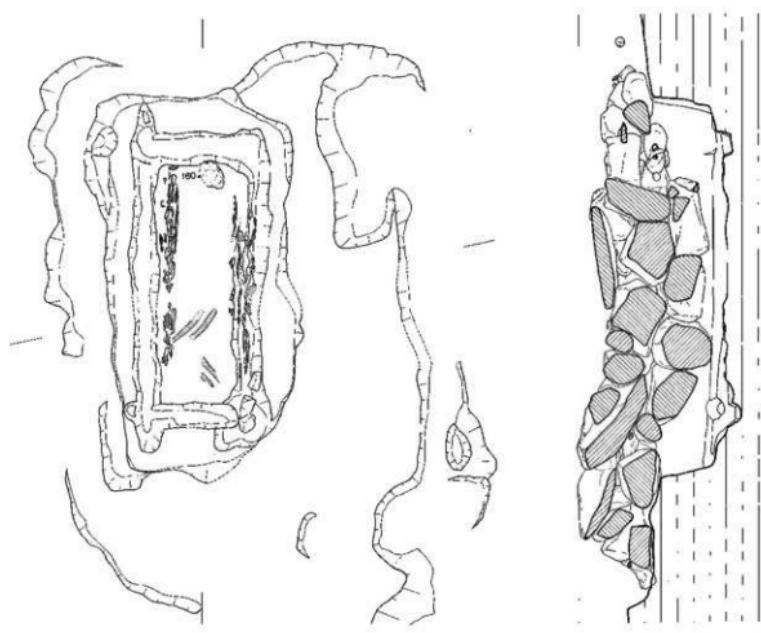


図72 5号墓実測図



1. 雜灰褐色土
2. 黑褐色土 (炭化物含む)
3. 黑褐色土
4. 黑褐色土 (暗灰色粘土混)
5. 淡灰褐色土
6. 淡灰褐色粘土
7. 朱褐色粘土 (赤山ブロック混)
8. 深褐色粘质土
9. 深灰褐色粘土
10. 黑褐色粘土
11. 淡茶褐色粘土
12. 淡灰褐色粘质土
13. 黑褐色土
14. 淡灰褐色粘质土 (炭化物含む)
15. 雜茶褐色粘土

0 1m

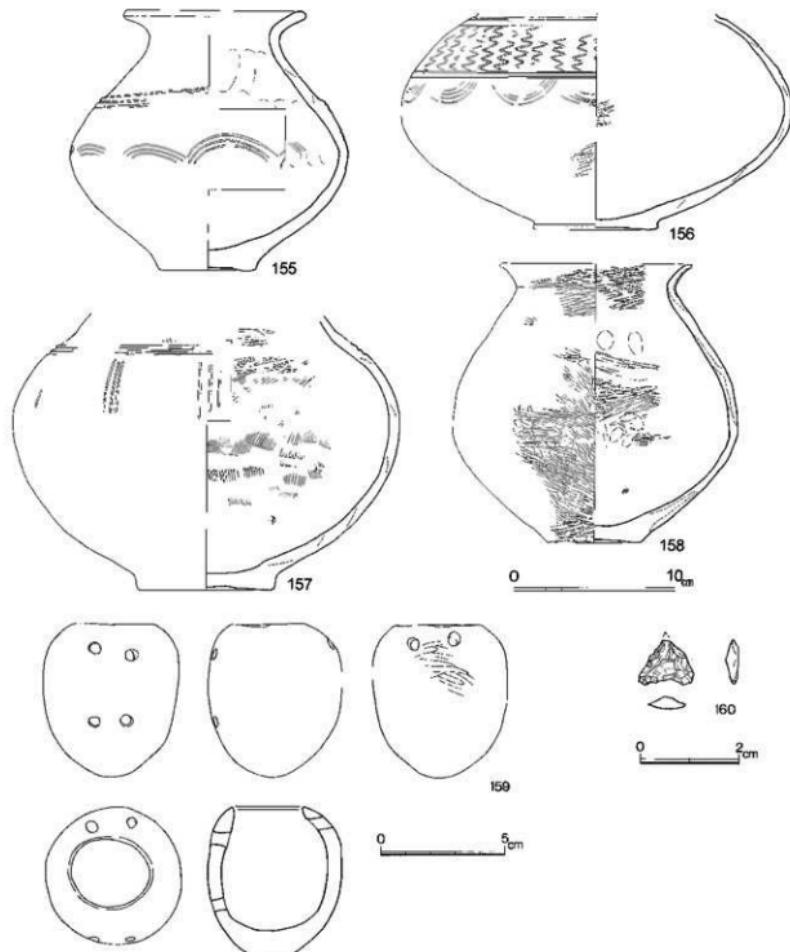


図73 5号墓出土遺物実測図

面を平坦に削りだして石を並べたようであり、標石の北辺には基盤を掘り込んだ段が検出された。

標石に伴う出土遺物は、前述した人石下の空間から壺155が、標石北辺のほぼ中央から基壇部最外周の右の上にのるようにして壺156、157が、標石北東隅に壺158が出土している。合計4個もの土器が、明らかに供献されていた墳墓は5号墓のみで、ここでも他の墳墓との格差が表されている。また、5号墓北東隅より、約30cm離れた場所から土笛159が

出土している。5号墓に共伴する遺物であるとすれば、土笛が墳墓に伴う初めての出土例となる。ただし、土笛の性格上、供獻されたと考えるよりは、埋葬祭祀に使用したものか、そのまま放置されたと考えたほうが妥当と思われる。

標石除去後、標石の落ち込みに対応して基壇が検出された。基壇は標石が覆っていた長方形の範囲の中央ではなく、標石の北側に沿うように位置しており、標石と基壇では中心がずれた状態であった。念

のため墓壙南側の標石下の空白域にもトレンチを開け、遺構の有無を確認したが、何も検出できなかつた。検出された墓壙は、長さが2.4m、幅が1.2mで、検出面からの深さは0.4mを測るものであつた。標石同様、他の墳墓のものより規模の人きな墓壙であつた。

主体部には木棺が使用されており、明瞭ではないが墓壙内の土層観察から小口・側板の立ち上がりと、床面からは底板の残部と考えられる木質が、また、両小口と両側板を据え置いた溝が墓壙床面から検出できた。なお、墓壙の南側は根による搅乱を受けており、南側側板溝内の木質は側板の残部か木の根によるものか判別できなかつた。木棺の構造は床面の掘り込み等から小口板を側板が挟み込む形のものであったと思われるが、ここでは例外的に側板を据え置くしっかりとした溝も検出された。また、南側側板の西端には裏込めと思われる石が3個検出された。上層断面の観察からは、棺の内法が長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.3mであったと推定できた。また、上部の標石が床面10cm近くまで落ち込んでいる様子が観察され、標石の総重量を考えると、標石築造からほとんど間を置かずして右に棺内に落ち込んだことが推測される。

墓壙床面からはかなり腐食してはいるものの人骨の一部が検出された。検出できたのは脛骨2、大腿骨2、上腕骨1、頭骨、齒質片と推定されるもので、骨の配置から頭位方向はE-9°-Nであり、埋葬姿勢が膝を曲げた屈肢葬であったことが確認された。しかし、人骨は腐食が著しく、身長、年齢、性別等を判別するには全らなかつた(第5章 井上貴火、川久保善智「壙部第1遺跡の人骨について」参照)。また、頭骨付近から石鎌160が出土している。欠損の状況から遺体に射こまれていた可能性も考えられるが、繩文晚期遺物の混入の可能性も否定できず、ここで即断は控えたい。

墓壙の調査中、貝小玉等の微細な遺物の存在を考え、頭部から胸部付近の覆土を採取し、現地での調査が終了後、その土塊のおよそ半分を水洗選別した。最終的に貝製品の破片等は発見できなかつたが、土壙内からは炭化米が検出された。持ち帰った覆土の量が壙部付近の一部であり、また、その半分を水洗したのみであるため、副葬された米の全体量は不明である。また、現地での確認ができなかつたため、どのような状況で副葬されたものかは判っていない。弥生前期の墳墓に米が副葬された類例は他に知らず、残存しにくいうえに発見も困難な遺物だけに、今後類似する事例の発見を期待したい。なお、炭化米は放射性炭素測定に供した(第5章 小林謙一ほか「島根県鹿島町壙部第1遺跡出土炭化米の<sup>14</sup>C年代測定」参照)。

その他、墓壙内からは墓壙掘削時に混入したと考えられる繩文晚期の遺物が多数出土している。

5号墓出土遺物 壺155は、標石中央部最上段の板石ドから、石の隙間に落ち込むように出土した。本米、板石下の空間に完形で置かれたものが、標石の墓壙内への崩落に伴って破碎し、落ち込んだものと考えられる。小形の壺で口縁部を一部欠くものはほぼ完形で出土している。口径10.9cm、胴部最大径17.2cm、底径5.8cm、器高16.1cmを測る。底部はわずかに上げ底で、やや広幅しながら立ち上がり、緩やかにカーブしてやや扁平な体部へとつなぐ。そこからほぼ直線的に内傾する頸部から口縁部は大きく外反して開いている。口縁部と頸部の境には段、沈線とともに無く、肩部にのみ接合によりできた僅かな肥厚部をミガキ原体で調整して作った微弱な段が作られている。文様はその肩部段の直下に2条の沈線を巡らし、腹部に弧を上に向かう3本単位の重弧文が描かれている。重弧文は胴部全体を巡るが、間隔も不均等で均整がとれておらず、稚拙な印象を受けるものである。壺156、157は埴輪馬に並置して供獻されたもので、いずれも口縁部、頸部が欠損している。東側に置かれた壺156は、底径7.6cm、最大径24.2cmを測り、体部が扁平な器形である。肩部には僅かな段が見られ、文様は肩部から腹部にかけて、2条沈線で区画された文様帶に羽状文が施されている。また、その文様帶の下に、弧を下に向かう4本単位の重弧文が描かれている。底部は比較的薄く、円盤貼付けによるもので、体部との屈曲部に1条の深い沈線を巡らしている。西側に置かれた壺157は、底径8.2cm、胴部最大径24.0cmを測る。底部はわずかに上げ底で、最大径が肩部に近い球形状の器形を呈する。肩部には僅かに段がつづられ、その直下に2条の沈線が施される。その横位の沈線から垂下するよう3~4cm程度の沈線が3条単位で、ほぼ等間隔に描かれている。内面には黒色の付着物がみられ、またその下半にはハケ調整の痕跡が多く残っている。壺158は標石北東隅に置かれたもので、口径11.9cm、最大径17.6cm、底径5.2cm、器高17.3cmを測る。無段無文の壺で、口縁部は頸部からくの字に屈曲して短く外反し、胴部最大径はやや下部に位置し、底部は僅かに上げ底状を呈している。外傾接合で形成され、全体に磨き調整が施されている。胎土は2mm程度の砂粒を多く含み、全体に赤橙色を呈している。口縁部が短く外反すること、無文、無段であること、特異な土色を呈していることなど、他の遠賀川系の壺とは一線を画しており、いわゆる朝鮮半島系譜の「松菊草式土器」に類似することから、ここでは「松菊草系I型」と呼ぶことにとする。

土笛159は、口径2.8~3.1cm、全長6.3cm、最大径5.5cmであり、器壁は颈部で0.6cm、底部で1.2cmを

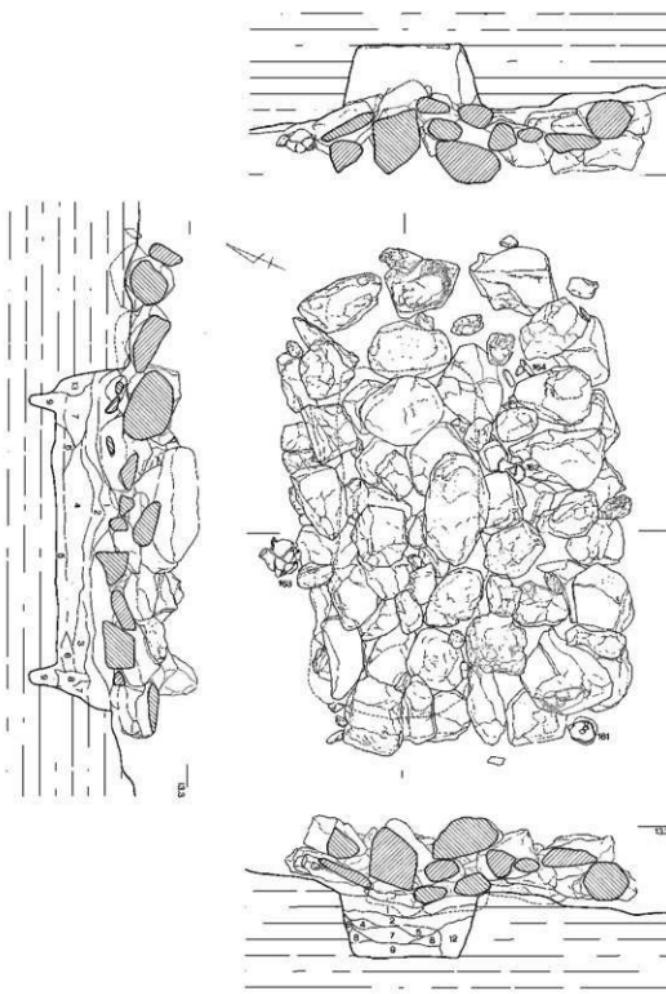
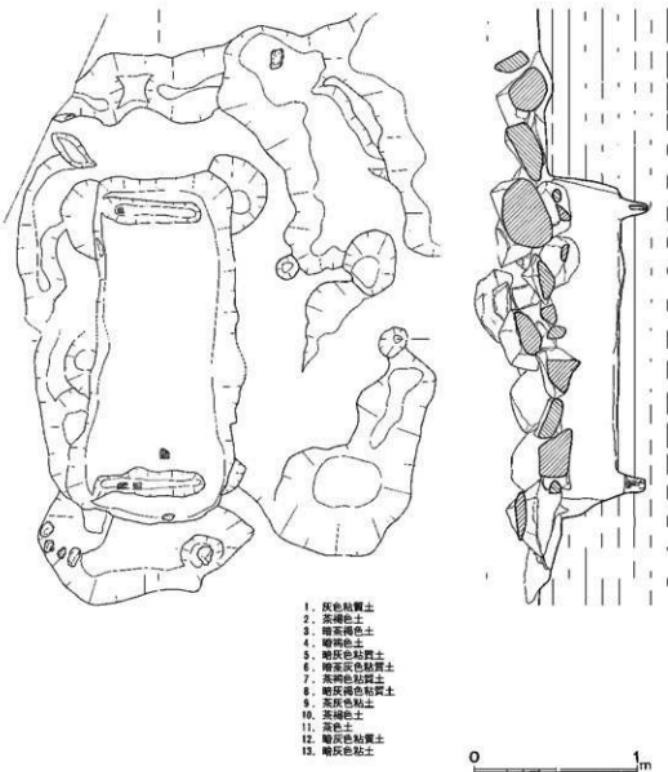


图74 6号墓实测图



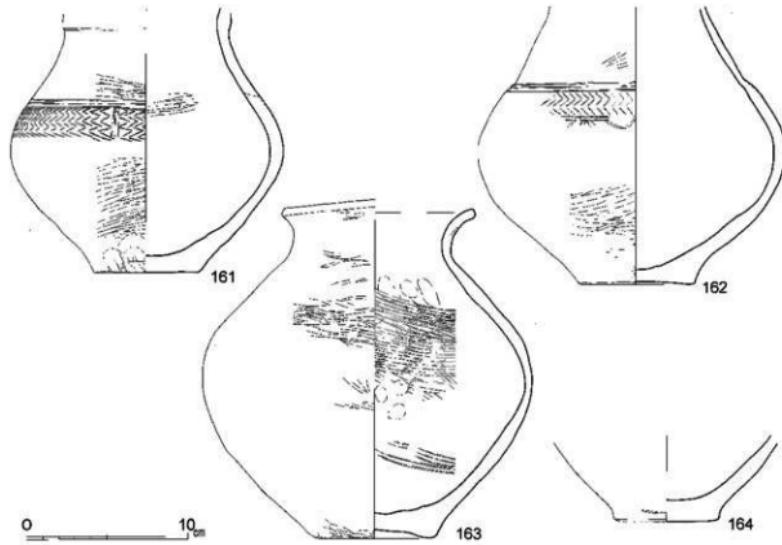


図75 6号墓出土遺物実測図

測る。直径5mm程度の孔が全面に4つ、背面に2つ開けられている。胎土は墓出土の前期土器同様の砂粒を含むもので、一部外面に磨き調査が確認できた。

石鏡160は円鏡をもつ黒曜石製で、先端は欠損しており、重さ0.182gのものである。頭部付近から出土しており、繩文晩期層からの混入でなければ、頭部に打ち込まれていた可能性も考慮される。

底板として残っていた棺材については、炭化できなかったが、樹種鑑定の結果、北側のものが針葉樹皮で、南側のものがスギであった。

5号墓 6号墓は5号墓北東に縦列するように位置する墳墓である。

標石の平面形は均整のとれた長方形で、規模は長さ3.1m×短軸2.1mを測り、幅が5号墓より若干狭いものの、長軸の長さは5号墓とほぼ同じで、墓群中で2番目に大きな標石をもつ墳墓となる。平面規模では5号墓と並んで他の墳墓を圧倒する墳墓ではあるが、使われた石の数は90個程度で、他の墳墓よりは格段に多い数とはいえるが、5号墓と比較すると3分の2程度しかなく、標石の質量的に5号墓とは格段の差が存在している。

標石に使用された石材はドレライト、流紋岩が多く、次いで閃綠岩が10数個確認できた。ここでも個別のには他の墳墓より多く閃綠岩が使用されているといえるが、割合的には平均的であり、閃綠岩の使

用が厚葬の要素と認めるならば、5号墓とは使用数、割合ともに大きな格差が存在する。なお、中央最上段の後形の右には閃綠岩が使われており、5号墓同様、墳墓を象徴するような石には閃綠岩が用いられることが確認できた。

標石の構築方法について、使用された石の数を除いては、ほぼ5号墓と共通する。まず草塙外周の石を長方形に置き並べ（図版36下段参照）、その内側に石を半分重ねるように2周目の石を置いていく。ただし、墓壇の落ち込みのせいか、石材の個数

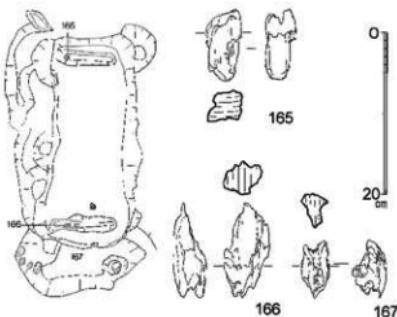


図76 6号墓棺材実測図

の差か、6号墓では両短辺で石を重ね置く様子は確認できない。つぎにその内側に石を充填して基壇を構築し、さらにその上に石を一段積み重ね、最後に俵形の大きな石を中心に入棺置き完成する。5号墓との差は主に2段目の右の個数に反映しており、5号墓では発見当初ほとんど基壇の石は見えないほど石が積まれていたが、6号墓ではほぼすべての石が見通せる状態であった。上部の石から除去していくと、基壇の石の一部が墓壇の位置を示すように落ち込んでおり、多少の墓壇埋め戻し土の盛り上がりも考慮すると、現状より高く標石が積み上げられていたことが推測できる。

墳墓に伴う遺物は壺3点と底部片1点が出土している。壺1(161)は墳墓の南西隅から出土し、壺1(162)が標石中央上面に、壺1(163)は北辺に接して置かれていた。また、標石の右の間に落ち込むように底部片1(164)が出土している。供獻土器の多さは5号墓に次ぐもので、その置かれた位置も北辺中央、標石隅、標石上と5号墓と共通した場所に置かれており、隣接する5号墓との類似がここでも認められる。また、供獻された土器の数が、墳墓築造時とのと同じであるとするならば、5号墓より1つ少ない供獻土器数であることが、標石の規格同様5号墓との優劣関係を意識したものである可能性も推測される。

標石を除去した後、墓壇の調査を開始した。墓壇に落ち込んだ標石から、およそその墓壇の位置が推測できたが、5号墓同様、墓壇が標石範囲内の北側辺に沿うように検出され、その南側にスペースが設けられる。これら以外の墳墓に標石と墓壇が離れている例はなく、軸そのものは標石と墓壇に大きなずれがないことから、5号墓、6号墓に共通して意識的につくられたスペースである可能性を指摘できる。

標石の北辺に接するところで掘り方を検出した。墓壇には標石の一部が落ち込んでいたが、5号墓ほどの落ち込みではなく、墓壇内に一定量の泥が流入するまで、蓋材が標石の重みを支えた様子がうかがえた。積み重なった石が5号墓より少ないといえ、相当量の石の重みを支えられる蓋材が使用されていたことが推定される。検出された墓壇の規模は長さ2.1m×幅約0.8mを測り、墓壇検出面から底面までの深さは0.4mで、墓壇長軸の方位はE-24°-Nであった。墓壇床面両端からは小口を埋め立てた溝とそこに埋まった木片が検出され、他の墳墓同様木棺が使用されていたことが確認できた。また、床面に底板の一部と考えられる木片も残存していた。棺内法の推定値は長さ1.6m、幅0.5m、深さが0.3mである。なお、発見当初、6号墓は小口に板材ではなく枕状のものを使用していた可能性があるとの見解を出してはいたが、西側小口の2つの木片の年輪が同心

円上にあること、また同じ材質であることなどから、板材が腐食によって枕状に残存していた可能性が有力である。棺材以外の域内出土遺物は検出されなかった。

**6号墓出土遺物** 161はやや小形の壺で口縁部と体部上半の3分の1ほどを欠き、全体に風化が著しい。復元値であるが胴部最大径17.0cm、底径6.5cmを測り、平底で底盤と体部の境は明瞭ではなく、緩いカーブをもちながら胸部の膨らみに至る。最大径はおおよそ器高の中ほどにあり、底から体部下半と対称的に口縁部まで内傾して立ち上がる。口縁部と頸部の境は風化した破断面であり明確に確認できないが、不明瞭ながら微弱な段を設けたようである。頸部と肩部の境には段ではなく、3条の沈線が施されている。文様の全体の構成は風化のため不明確であるが、肩部沈線直下に羽状文が施され、垂下する3条の沈線で凸凹されている。この凸凹沈線を境に羽状文の単位の方向が対称的になるように描かれているが、左右で本数に食い違いがあり、意図的な構図であるかは疑問である。162は壺で、頸部以上が大きく欠損しており、また全体にはげしく風化している。底径7.0cm、最大径19.4cmを測る。底部はわずかに上げて底盤と体部の境は明瞭でない。肩部は風化のため明瞭ではないが沈線を利用した僅かな段があるよう見られ、その下に2条の沈線が施される。文様は沈線下に羽状文が施され、その下に2条の沈線、さらにその下に接するように2条単位の重弧文と2条の短い沈線がハの字状に描かれている。調整は外面でわずかにミガキ調整の痕跡が確認できた。163は、無段無文の壺で、口径11.5cm、最大径21.2cm、底径7.5cm、器高21.0cmではば完形に復元できるものである。器形は、高台状を呈する明確な上げ底で、底部から屈曲なく胸部へと立ち上がり、最大径は器高のほぼ中央に位置する。明確な肩部、頸部はなく、傾斜に変換点のないまま、短く外反する口縁部となる。調整は外面にはミガキ調整が施され、内面にはハケ調整の痕がこる。164は、壺の底部と考えられるもので、底径6.4cmを測る。胎土は砂粒を含み、全体に外面は赤褐色を呈する。

棺材165、166、167の材質はすべてカヤ材で、当遺跡では例外的な木材が使用されていた。殮部に加工痕等は残っておらず、板材が腐食して枕状に残存したものと考えられる。

**7号墓** 東区の東半、6、5号墓の縦並びの列からは弧の外側に一つずれた位置に存在する。

標石の規模は、長さ2.4m、幅1.4mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。右の使用個数は20個程度で、規模は中形程度の標石といえるが、使用された石材のほとんどが閃緑岩であり、個々の石も搬して大きく、非常に丁寧なつくりの標石をもつものとい

る。特に閃緑岩にはほぼ限定した石材使用は、標石築造に当たっての石材選定の重要さを物語るもので、他の墳墓との関係を考える上で石材が重要な要素となることを示唆する。石の置き方は、墓壇上面を全体に覆うもので、まず外周の石を丁寧に置き並べ、次いで内部に石を充填したものと考えられる。一部石の空白部があるが、築造当初のものか後世の移動によるものかは判然としない。標石中央からは、

石の間に挟まるように牽1（168）が、また、やや北東にある右の下から牽1（169）が出土している。墓壇は標石の外周に置かれた右の内縁におさまるように検出され、ここでは石材の落ち込みはほとんど確認できなかった。墓壇は長さ2.1m×幅0.8mで、検出面からの深さは0.4mを測り、比較的人形の墓壇が確認された。墓壇の長軸方位はE-38°-Nである。主体部には木棺が使用されており、墓壇底面か

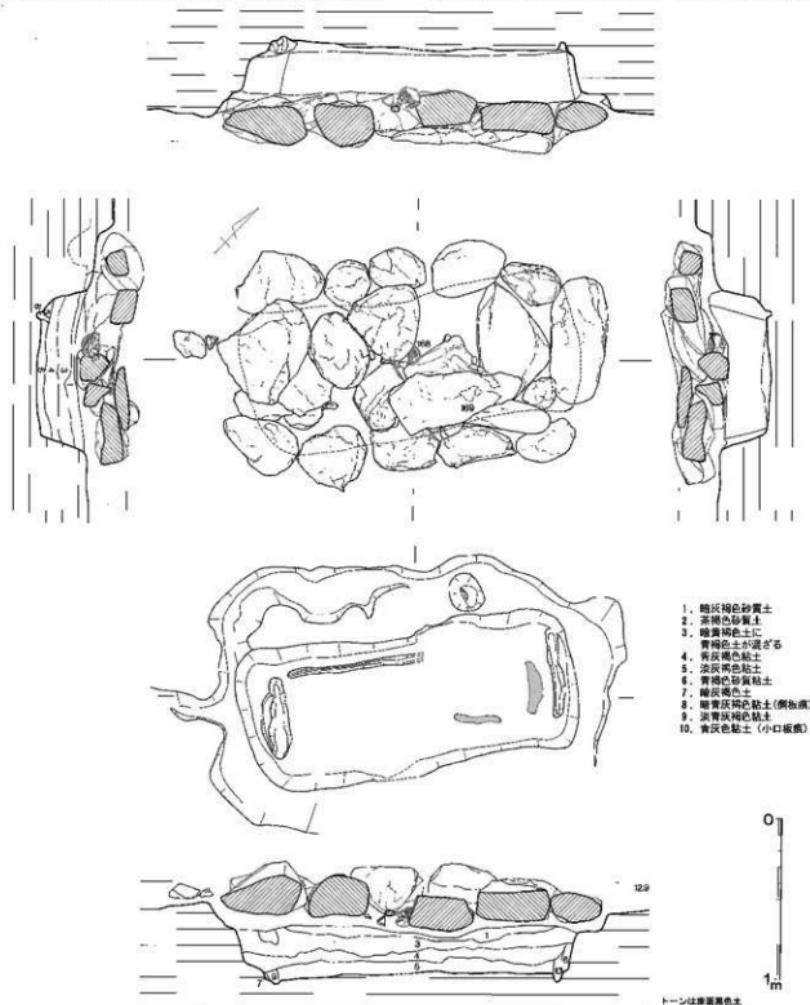


図77 7号墓実測図

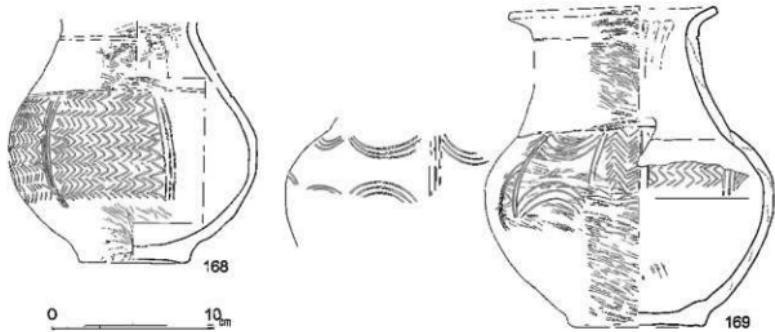


図78 7号墓出土遺物実測図

らは小口板を埋め込んだ溝と側板と底板の痕跡が検出され、また、上層断面の観察からも小口板の立ち上がりが確認できた。棺の内法の推測値は長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.3mを測り、比較的大きな棺であったと考えられる。

なお、墓壇北東脇のピットは遺物を伴わず、時期、性格等に決め手がなく、墓に伴うものかどうかは不明である。

**7号墓出土遺物** 168は小形の壺で、口縁部を含む3分の1程度を欠き、復元で胴部最大径は15.5cm、底径は7.0cmを測る。器形は上げ底状の底部から屈曲して胴部へと膨らみ、全体にやや重心が下半にある玉ねぎ状を呈する。器面全体に風化がなく、丁寧なミガキ調整がなされ、色調は明赤褐色を呈している。文様は口縁部と頸部の頸部と肩部の境に、それぞれミガキ原体でつけたと思われる浅い沈線が1条ひかれて、微弱ながらその沈線を調整した段が作り出されている。また、肩部の沈線の直下には羽状文とそれを区画する縱方向の3~4条の沈線が描かれている。器面は縱線で6区画に区分され、その内連続する4面には羽状文がびっしりと描かれ、残りの2区画には施文がみられず、裏表のある文様構成となっている。施文原体はゆるくカーブした爪形状のもので、D字状についた羽状文の沈線は、すべて右方向にふくらみをもっていた。また、意識したものかは不明であるが、区画ごとの羽状文を構成する斜線の列が、無文の区画から右方向に散えて11列の区、12列の区、13列の区、14列の区と1列ずつ増やして描かれていた。壺169は、復元で口径12.7cm、最大径17.9cm、器高19.9cmで、全体に淡黄褐色を呈している。器形は胴部の最大径がやや高い位置にあって強く屈曲し、比較的長い頸部をもち、底部は円板貼り付けでしっかりと作りつけてある。調整は全体にミガキが施されていた。口縁部と肩部には沈線

から調整した微弱な段がつけられ、肩部段直下から胸部最大径上部で文様が施されている。文様帶は肩部から垂下する2~3条の沈線で不均等に分断され、それに重弧文と羽状文によるバラエティに富む構成で文様が描かれている。また、底部の底面には、縁から7mm前後内側に単線で円が描かれており、部分的には高台状に内部との段差がみられるところがある。

**8号墓** 5号墓、6号墓の継続の間に位置し、9号墓と並列する場所に位置する。

標石は長さ1.4m、幅1.0mで、比較的小形の墳墓で、石もやや乱雑に配置されている。使われている石は、閃綠岩をわずかに含むものの、近隣で採取可能な石材が多く、全体に粗雑な印象をうける墳墓である。ただし、後述するように墓壇内に木の根が侵食しており、上部の配石もこれに搅乱された可能性が大きいことを付け加えておく。なお、標石下から壺1(170)が、また、標石近辺から壺口縁部1(171)が出土したが、いずれも小片であり、墓に供献されたものかどうかは不明である。

墓壇はほぼ標石が置かれた範囲で検出され、平面形は長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれていた。墓壇の大きさは長さ1.4m、幅0.6mで検出面からの深さは0.5mを測るもので、主軸方位はE-17°-Nである。壇内には大きな板状の木の根が侵食しており、土壇断面の観察からも壇内は相当の搅乱を受けたようであった。

墓壇内からは掘り込みや木材の残部などは確認できなかったが、土壇断面から観察された土色番号14番の暗灰色粘土の立ち上がりが、小口材が腐食したものと考え、ここにも木棺が使われていたものと判断した。棺内法の推測値は長さ1.1m、幅0.6m、深さ0.3mである。

墓壇内からの出土遺物はなかった。

**8号墓出土遺物** 170は大形壺の頸部から肩部にかけてのもので、残存部で復元できる径の最大値は44.4cmであり、供献された上器の一一部であるならば、異例の人大きさを測るものである。肩部には内径接合からできる段に沈線を施して調整した微弱な段を有し、現存部で確認できる文様はその段の下に2条の沈線と、さらにその下に2条の沈線を軸にした有輪羽状文が施されている。171は壺の口縁部で、比較的明瞭な段をもち、復元した口径は9.8cmと小形の

ものであった。調整等は風化のため不明である。

**9号墓** 8号墓の南側に並列するように位置する墳墓である。標石は長さ1.9m、幅0.9mを測り、平面形はやや不整形な長方形を呈している。使用された石の数は20個ほどで、積み上げることなく平坦に敷き置かれ、中央部はわずかに落ち込んでいた。石材はドレライト、流紋岩が多く、閃緑岩は数個の使用が確認できた程度である。なお、近辺からは明らかに供献されたような遺物は検出されなかった。

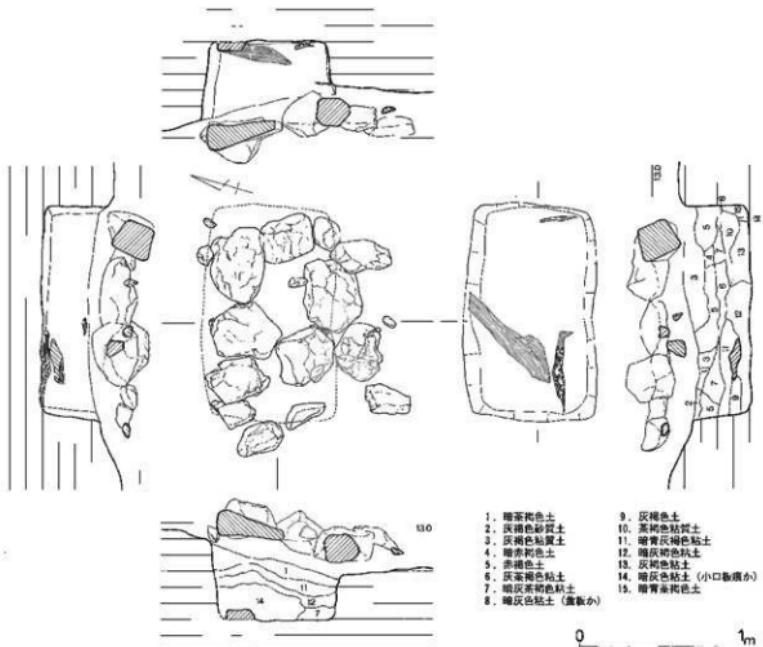


図79 8号墓実測図

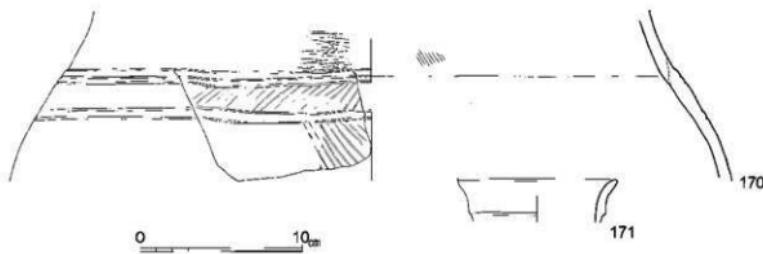


図80 8号墓出土遺物実測図

墓壇はほぼ標石の範囲内で検出され、隅丸の長方形の平面形で、ほぼ垂直の掘り方と平坦な底面をもつ。規模は長さ1.7m、幅0.8mで、検出面からの深さは0.3mを測るもので、比較的浅い墓壇であった。

内部主体には木棺が使用されており、床面には小口板を据える構と、小口部分に炭化した木質が直立して残存していた。また、断面図10の土刷は蓋板材が腐食した痕跡であったと考えられる。標石と蓋板材の痕跡との間には現状で最低でも10cmほどの上が存在しており、上圧を考慮するとそれ以上の厚さの上が蓋板の上を覆っていたことが推定できる。小口板の痕跡等から復元できる棺の内法は長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.2mを測り、比較的小形のものであった。

墓壇の東小口付近で、床面からわずかに浮いた状態で腐食した骨片が1点と、さらにその近くで歯のエナメル質の残部1点が出土した。いずれも分析等に耐えうる状態のものではなかったが、歯の出土で頭位方向がE-26°-Nと判明している。

なお、岡化できなかったが、両小口板の材質はスギであった。

14号墓 9号墓の南西脇に寄り添うように接している墳墓である。標石は橢円形に近い石を3つ、横置きに並べ置いただけの非常に小形のもので、長さ0.8m、幅0.5mを測り、標石の長軸は隣接する9号墓をはじめ、全体の墳墓の列に準じたものであった。標石に使用された石材はすべて閃緑岩で、また、ほ

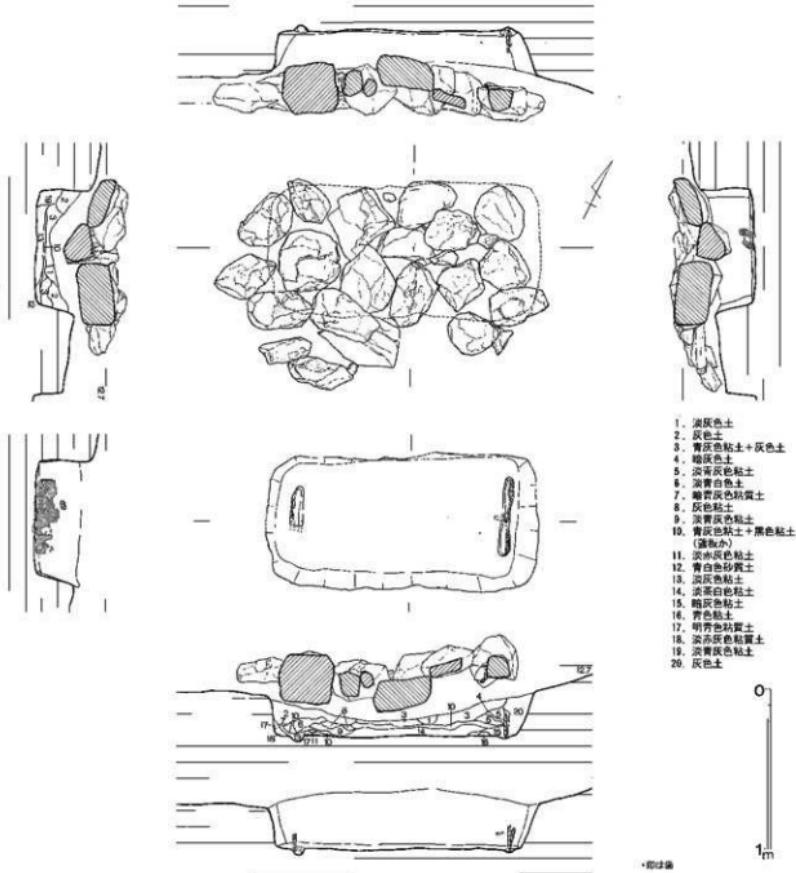


図81 9号墓実測図

ほ形の嵌った石を丁寧に並べている点は、標石の規模とは別の形で、この墳墓への扱いの丁重さを感じられる。標石に伴って、小形の鉢1(173)が石と石の隙間に詰まるように、人形の牽底部1(172)が敷片に分かれて、石の周囲や鉢173の下から出土している。

墓壇は3つの標石をほぼ中央に置き、それを囲む

ような範囲で検出された。規模は長さ1.0m、幅0.6m、深さは検出面から0.2mで、標石と同じく超小形の墓壇であり、深さも浅い。

墓壇床面から小口板を据える溝と、その溝上部で僅かに残存する小口板片とその腐食物が直立して検出され、小形ながらも木棺の使用が確認された。土層観察でも比較的明瞭に棺痕跡が確認できており、

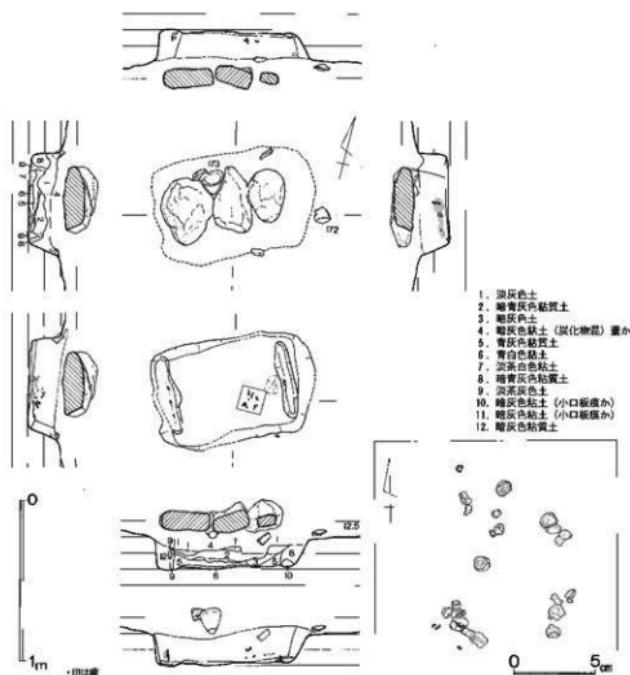


図82 14号墓室測図

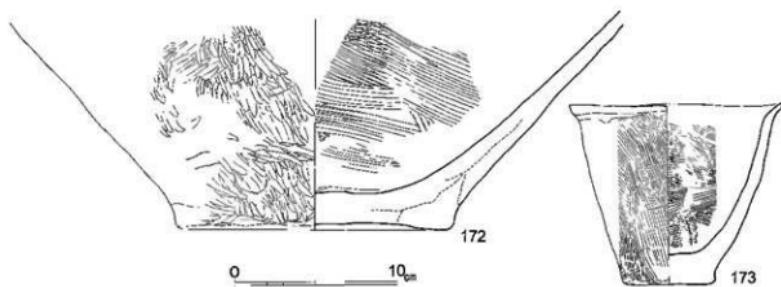


図83 14号墓出土遺物実測図

棺内法の推定値は長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.2mで、子供の埋葬を想定させる規模であった。棺の構造については断定できないが、他の墳墓に比べて小口の溝が墓壇幅いっぱいに作られており、小口板が側板を挟み込むものであった可能性が指摘できる。

なお、残存した西側小口板の材質はスギであった。

墳内の南東よりで10数点の歯牙を検出した。いずれも床面から浮いた状態で、多少の高低差をもちらながら、ある程度まとめて出土しており、その内からシャベル状切歯の特徴を持つ歯牙も検出している（第5章 井上貴央、川久保智智「頸部第1遺跡の人骨について」参照）。また、歯牙の近く、東側小口付近で頭骨片と思われるものも出土しており、頭位方向はE-25°-Nであった。なお、墓にうかうかは不明であるが、墓壇の南東脇から、イノシシのものと考えられる歯牙が1点出土している。

14号墓出土遺物 172は蓋の底部で、底径17cmを測る。大きく広がる胴部と、そこから屈曲して直立する底部をもち、底はやや上げ底状を呈している。外面は底面を含めて全体にミガキ調整が施され、内面はハケ調整の跡が強く残る。173は小形の鉢で、ほぼ完形で出土している。口径13.2cm、底径5.3cm、

器高11.2cmである。器高に比して2cm弱の厚い底部をもち、わずかな膨らみをもちらがら広がる体部と、そこから屈曲して外傾する口縁部を有する。調整は内外面ともにハケ目が明瞭に残り、外面は向かって左上方向、内面は基本的に横方向のハケ調整が施されている。

10号墓 6号墓の南東に位置し、11号墓と並列する墳墓である。

標石は、10個程度の石が主軸に並んだ石の列を中心にな不整形に置かれており、やや粗雑な印象を受ける。標石の規模は長さ1.4m、幅0.8mを測る。石材は流紋岩とドレライトが多く、採取しやすい石で構成されている。標石に伴って遺物は出土していない。

墓壇はほぼ標石の範囲を囲うような位置で検出された。平面形はやや不均整な長楕円形を呈し、長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。墓壇の主軸方位はE-45°-Nであった。掘り込みはほぼ垂直で、底面は平坦に作られている。底面等に積極的な木棺の痕跡は確認できなかったが、土層断面からわずかに木棺の痕跡と、南北小口板の裏込めに使ったと考えられる季大の石が検出されており、ここでも木棺が使用されたものと判断した。棺内法の推測値は長

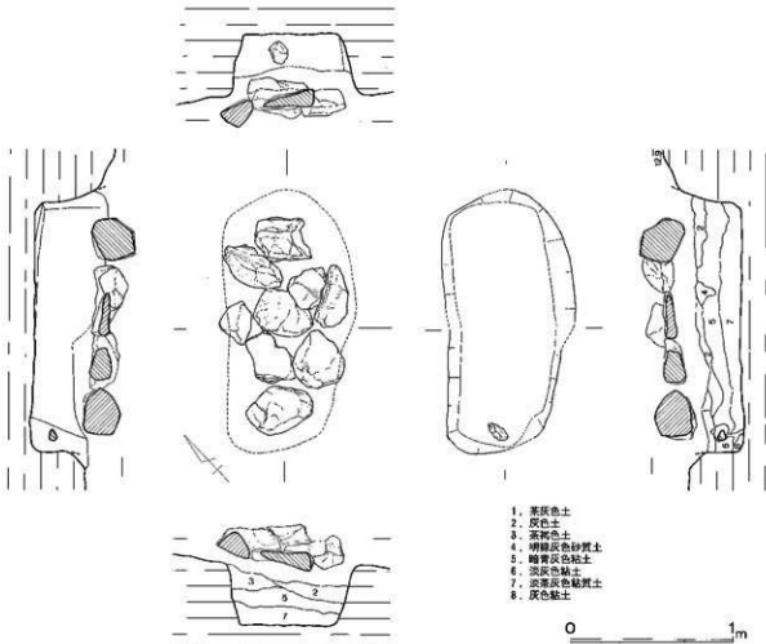


図84 10号墓実測図

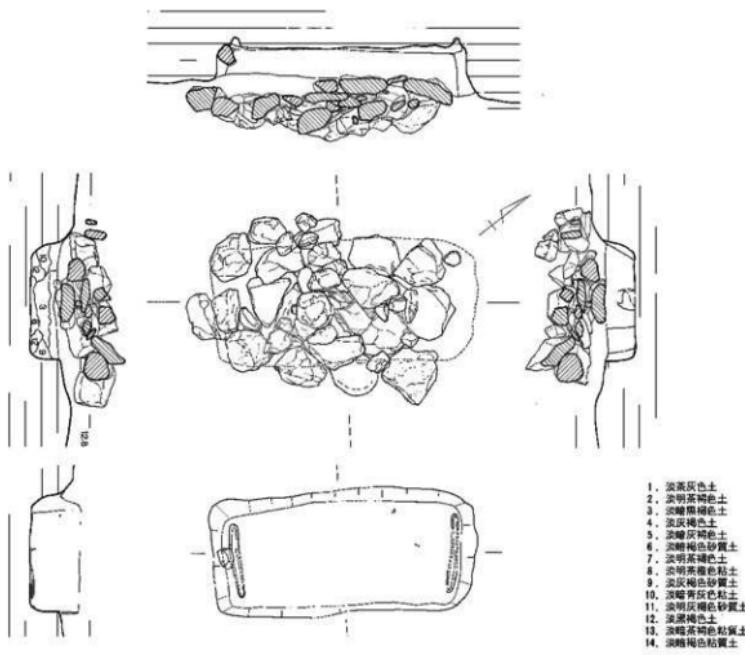


図85  
11号墓実測図

さ1.4m、幅0.5m、深さ0.2mである。

その他、境内からの出土遺物はない。

**11号墓** 6号墓、10号墓の並列する並びのもっとも南東に位置する墳墓で、隣接する10号墓とは、標石の置き方は違うものの、墓壇の規模と主軸の向きがよくそろっている。

標石の規模は長さ1.6m、幅1.0mを測る。特徴的なのは人頭大の石と多数の拳大の石が、積み重なるように數き詰められていることで、やや中央が盛り上がる積石状の標石であった。東区内で標石に拳大の石が多用される例は

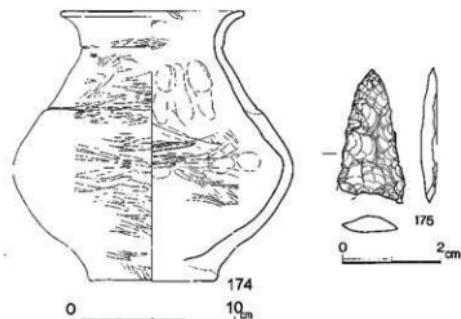
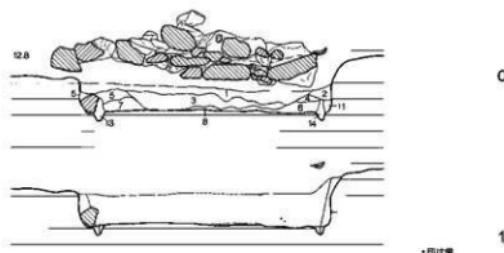


図86 11号墓出土遺物実測図

他ではなく、標石に意図的な識別化がなされたものと考えられる。外周には大きめの石が並べられ、比較的丁寧に平面形を長方形に作り出しておらず、その内側に大小の石を取り混ぜて石を積み上げている。現状では中央部分の標石が墓腹内に落ち込んでおり、本来はもう少し高い横石があったものと考えられる。使われる石材は不明なものが多いが、ドレライト、流紋岩、閃緑岩等が混在しているようである。標石の周辺からは埴1(174)が出土した。体部は数片に散らばり、底部は標石北隅に接して出土しており、供獻されたものと判断している。

墓壇は標石とほぼ同範囲で検出できた。平面形は長方形で、規模は長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.3mである。墓壇中央には上部の標石が落ち込み、底面からは小口板を据え置く溝、土層断面からは棺材の痕跡が確認でき、木棺の使用が確認できた。また、10号墓同様、南西小口の裏込めとして、拳大の石が置かれており、埋葬後は目にみえない墓壇内の情報をも共有していた可能性を考えると、隣接する10号墓との関係が密接であったことが予想される。小口の溝等から復元できる棺内法の推定値は長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.2mで、やや小形のものであった。棺内からは北東側で歯牙が2点検出され、頭位方向はN=40°-Eであった。また、北西側板の東部側で、石鏡1(175)を検出している。棺外の遺物と考えられる場所から出土し、床面からも10cm以上浮いているため、周囲の包含層からの混入した遺物である可能性が高い。

11号墓出土遺物 174は小形の無文壺で、体部の3分の1程度が残存している。復元して口径11.0cm、胴部最大径17.0cm、器高は16.9cmである。11縁部、肩部とともに明瞭な段を持ち、全体にミガキ調整がなされ、色調は淡い黄褐色を呈している。底部は平底で厚く、わずかにひらきながら立ち上がり、屈曲してやや膨らむ胴部へと続く。胴部最大径では強く屈曲して直線的に内傾しながら頸部へと続き、段から直立して、ゆるく外反する口縁部をもつ。175は墨離石製の石鏡で、凹基の基部をもつもので、基部の一部をわずかに欠く。

12号墓 7号墓の南東に位置し、その北西端を7号墓にそろえるように位置する墳墓である。

標石は7個の石を粗雑に固め置いただけのもので、規模は0.8×0.8mを測る。石材はドレライト、流紋岩がほとんどを占める。標石に伴う出土遺物はない。

石材を取り上げると墓壇がほぼ正方形で検出できたが、その上面の一部で焼土が検出された。焼土はブロック状のものと粒状のものが土に混ざったような状態であり、一部境内でも検出された。この焼土については、島根大学総合理工学部の時枝克安教授

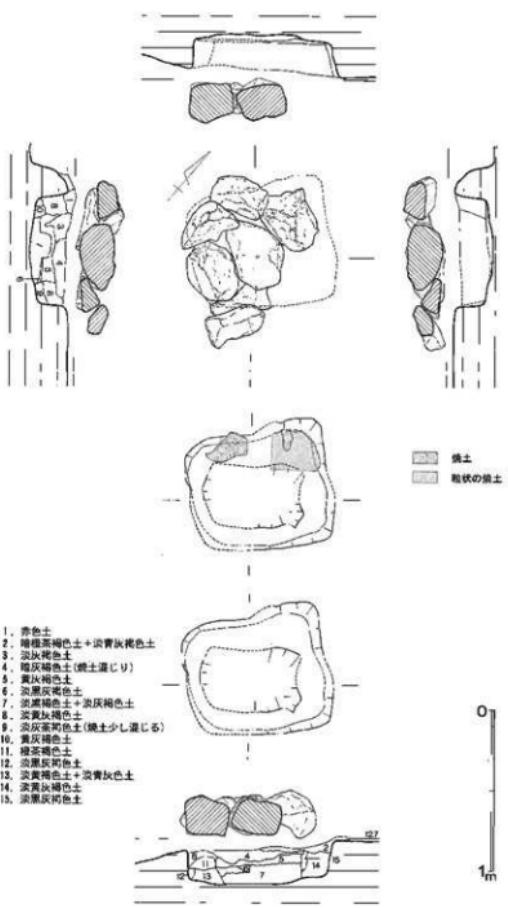


図87 12号墓実測図

に依頼して熱残留磁気測定を行ったが、測定できた磁気は一定方向を向いておらず、試料として年代を測定できるものではなかった。これらのことから、この焼土は、覆土上面で火をいたものが棺材の腐朽に伴い落ち込んだものか、もしくは別の場所で焼

けた土が、墓壇上面に被せられたものであったと推定している。

墓壇の規模は長さ0.9m、幅0.7m、深さ0.25mで、かなり小さい。墓壇の長軸方位はE-43°-Nである。墓壇の底面には、浅い窪みがあり、土質断面でその

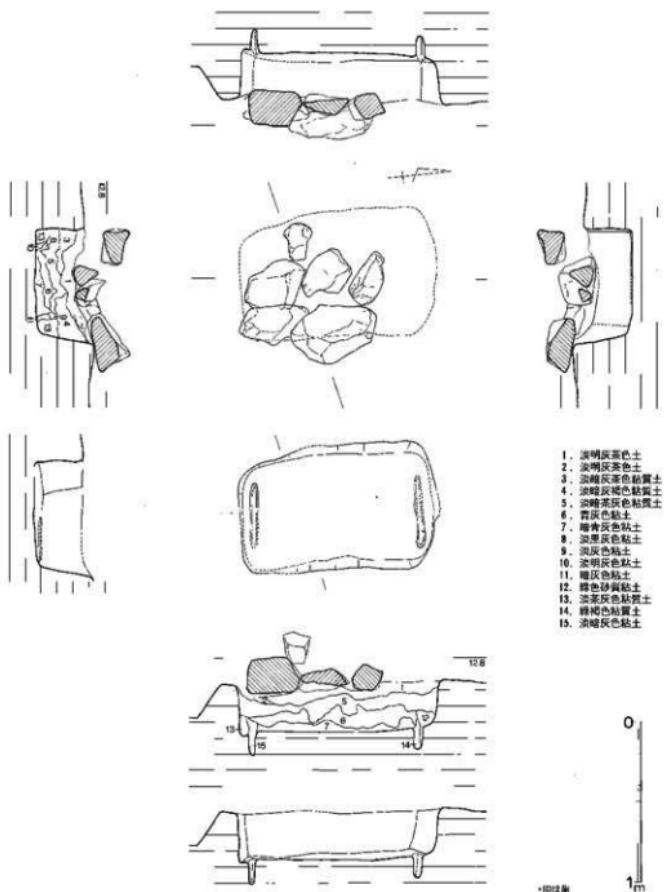


図88 13号墓実測図

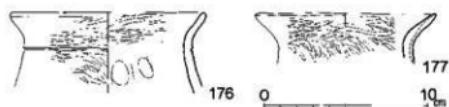


図89 13号墓出土遺物実測図

窪みの端から垂直に立ち上がる覆土の境界が観察された。これらのことから、ここでも木棺が使用されたものと想定し、推定できる棺の規模は長さ0.5m、幅0.4m、深さ0.2mである。なお、棺内からは焼土が検出されず、火葬骨を埋葬したとも考えにくいため、焼土の意味の解釈は今後の類例を待ちたい。墳内からの出土遺物はない。

**13号墓** 東区のもっとも東に位置する。標石は6個の石が置かれ、基本的には2列に石を配したものと考えられる。標石は一見して墳墓の存在が確認できないほど、粗雑な印象を受けるものであり、近接する12号墓に類似する。標石の範囲は長さ0.9m、幅0.8mを測り、石材は流紋岩、ドレライト、閃綠岩が使用されていた。標石の周辺から壺の口縁部2(176、177)が出土しているが、13号墓の供獻土器かどうかは判然としない。

墓壇は標石の範囲より、やや北西にずれた位置で検出された。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。墓壇からみて、標石は南西隅に偏って乗せられていたことになり、墓壇主軸上の3つの標石が落ち込んでいた。標石からは判然としなかったが、墳墓の主軸については、他の東区墳墓の主軸より、立地的な主軸方向の変化を考慮しても、やや北に偏った軸となっていた。墓壇床面には小口板を据える溝と、土層断面で棺の痕跡が確認され、また、標石の中央が落ち込んでいることから、木棺の使用が認められた。小口板はしっかりととした溝を作り据え立てられているのに対して、側板はそれを自立させる溝は検出できず、他の類例から推定すれば、側板が小口板を挟み込む形式の木棺だったと考えられる。棺の内法は推定で長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.2mで、小形の棺であり、子供の埋葬が予想される。棺底面からは歯牙片1が出土し、頭位方向はN-2°-Eと判明した。ほかに出土遺物は検出されなかった。

**13号出土遺物** 176は小形の壺の口縁部片で、復元口径は12.6cmを測る。頸部と口縁部の境には沈線から調整した微弱な段があり、全体にミガキ調整が施されている。177も同じく壺の口縁部片で、復元口径は11.0cmである。口縁部はやや直立してから外反し、先端近くにわずかな内湾がみられ、端部はやや尖り気味に作り出されている。段の有無については、残存部からは確認できない。調整は内外向共にミガキ調整が施されている。

**29号墓** 9号墓の南西にI軸を直列させるように位置する標石である。石材は2個人頭人の石が並べ置かれ、それに小形の石が伴う。標石の範囲は0.6m×0.6mで、推定されるI軸の向きはE-34°-Nである。石材は不明である。

墓壇については、標石下にトレンチを入れ、断ち

削り調査を行ったが確認できなかった。標石が意図的に置かれているものと判断し、ここでは墳墓として扱っているが、墓でない可能性も否定できない。

この標石に伴って遺物は出土していない。

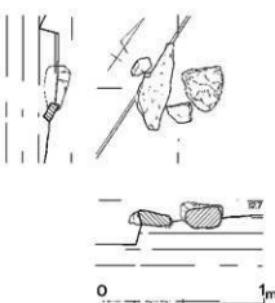


図90 29号墓実測図

## 北東区の調査

北東区では25基の墳墓を検出した。北東区は、福祉ゾーンの整備計画を一部変更して、現地で保存することになったため、標石の汎化と供献土器の採集のみを行い、上体部内の調査は行なっていない。

この調査区は、「長者の墓」の東に位置し、東区から統いて墳墓が弧状に並んでいる。弧の中心をなすのは、44号、31号、32号、33号、34号、35号墓を結ぶラインである。やや離れて49号墓がある。さらにこの弧をもとに放射状にも墳墓が列を作って伸びている。具体的には、31号墓から47号、42号墓が広がり、32号墓からは38号、39号、40号、41号墓が広がる。また、33号墓から43号、48号墓が広がっている。さらに31号墓からは逆に弧の内側に向かって、37号墓が並ぶ。北東区で最も大形の標石をもつ44号墓には、接するように50号、31号墓が存在し、44号墓からは弧の外側に51号、53号墓が、弧の内側には45号墓が展開している。

一方、小児の埋葬と考えられる小形の標石は、これらの弧状、放射状に並んだ墳墓の間に作られている。具体的には36号、46号、54号墓などで、標石そのものも小形の石材を使用している。

弧の中心をなす墓と区の南方にある墓には、閃緑岩を選択的に使用するものが多い。

また、43号墓と48号墓の間にある1個の石材は号墓番号を振ってはいないが、間隔から墳墓である可能性がある。これの北側にある1個の石材と、小砾の群衆も供献土器こそ伴っていないが、同様に墳墓の可能性があろう。この小砾の群衆は、小児の墓の可能性がある。さらに弧の内側を見ても、石材が散在している。この中には明らかな標石より高い位置で出土しているものもあるので、後世に移動したものもあると考えられるが、これらの中にもいくつか墳墓の候補があるので、北東区の墳墓数は25墓を超え、30墓前後になるものと考えられる。

**44号墓** 標石が長さ2.3m、幅1.6mの範囲で検出されている。この標石は下部に小形の石を積み、上部に大形の石材を重ねたもので、東区の5号墓、6号墓に次ぐ大形のものである。使用される石には、さしわたり80cmにもなるものが使われており、墳墓群中でも最大級の石材である。標石は、長方形の平面形を意識しているものと考えられる。西側で50号墓と接しているが、標石に使用する石材の大きさが異なるので、判別は容易である。

使用される石材は下部の小形の石には流紋岩、ドレライト、安山岩を使うが、上部に載せる大形の石には閃緑岩を選択的に使用しているといえる。

標石の主軸は、N-14°-Eである。44号墓の石材は、31号、50号墓の石材に重なっており、31号、50

号墓が先に存在し、この44号墓が後に作られたものと考えられる。

標石に載った状態で壺1を検出している。

**44号墓出土遺物** 壺178が出土した。球形に近い体部からしっかりした段を経て、やや外反する口縁部にいたる。器壁は薄く仕上げている。肩部にはかすかに2条のヘラ描き沈線がある。胸部最大径18.5cmを測る。

**50号墓** 44号墓に隣接する。長さ2.2m、幅1.1mの標石がある。長方形の平面形を意識して石材を縁取るように並べ、その中に石材を配置しているようである。標石は44号墓の下にもぐり込んでおり、44号墓より先行して作られていたものと考えられる。

標石の主軸は、N-17°-Eである。石材は、閃緑岩を主とし、一部にドンライト、砾岩、流紋岩を使用するが、閃緑岩を選択的に使用している。44号墓と比較すると使用される石材が小形である。

標石上から壺1が出土している。

**50号墓出土遺物** 壺179が出土した。やや下ぶくれとなる体部に厚い底部が接続する。肩部にしっかりした段をもち、やはり段をもつ口縁部にいたる。口縁端部を欠く。外腹は磨いて仕上げ、内面には横方向のハケメをとどめる。全体にやや厚手である。胸部最大径13.2cm、底径6.1cmを測る。

**31号墓** 44号墓の北に接する。2.3m×1.1mと細長い標石がある。標石は中央部に石材を並べた後、周辺を縁取るように石材を配置している。長方形の平面形を意識していると考えられる。石材は角砾が多く用され、他の標石とは異なった印象である。標石の主軸は、N-11°-Eである。標石上でつぶれた状態で壺1を検出した。

この標石も44号墓の下に標石がもぐり込んでおり、44号墓に先行して作られていたと考えられる。西区の3号墓と24号、25号、30号墓が墓壙を切りあわせていたとの同様に、ここでは標石を重ねることによって表現される墳墓被葬者間の関係があったものと考えられる。

標石に使用される石材は、板状節理の発達した流紋岩を選択的に使用しているため、角張った石材からなる標石となっている。これにドンライト、砾岩をわずかに交えている。

**31号墓出土遺物** 出土した壺180は、口縁部を欠くが、頭部に突帯をめぐらすもので、算盤玉形の偏平な体部をもつ。外面、肩部の段以下に沈線で凹凸される2段の文様帶をもち、それぞれ無軸羽状文、複合網目文をもつ。底部はしっかりしたつくりである。底部近くに焼成後の穿孔がある。淡茶褐色を呈し、他のものと胎世上が異なる。器形、文様、胎土とも38号墓出土の壺191に類似するが、こちらの方がやや厚手である。胸部最大径21.5cm、底径7.5cmを測る。

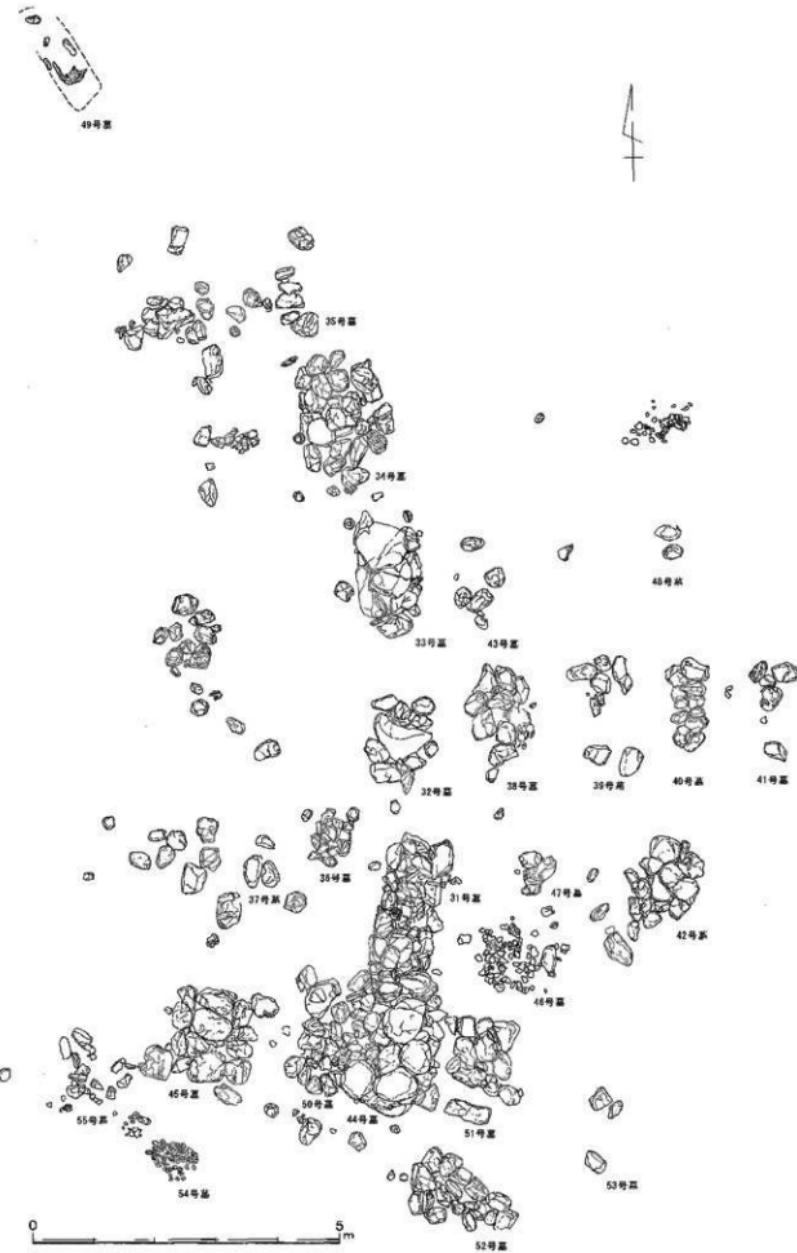


图91 北东区填墓配置图

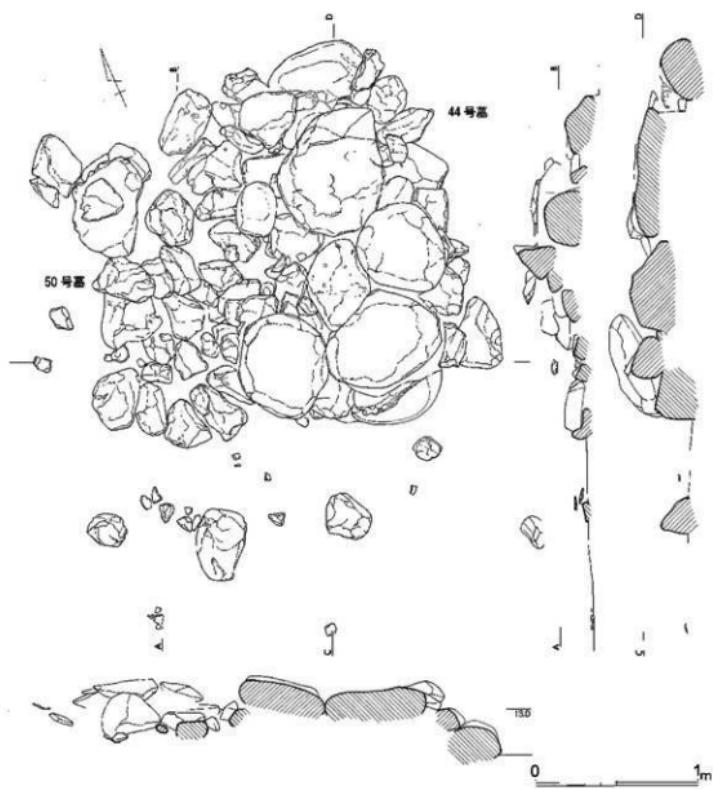


图92 44号墓·50号墓实测图

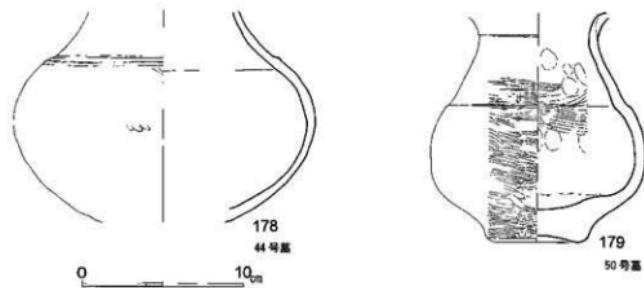


图93 44号墓·50号墓出土遗物实测图

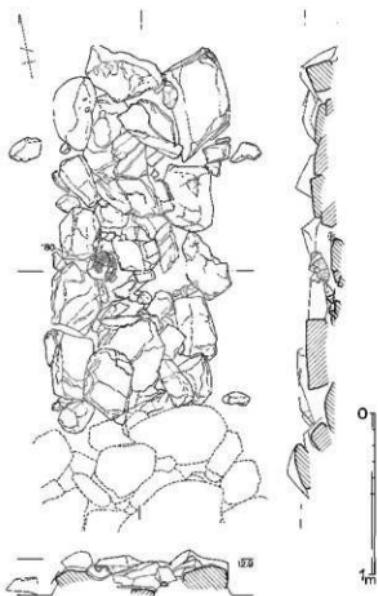


图94 31号墓实测图

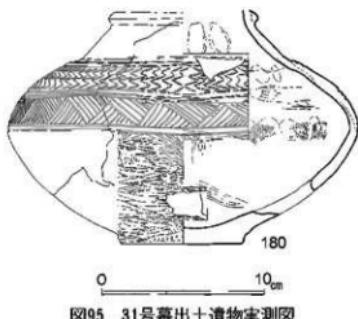


图95 31号墓出土遗物实测图

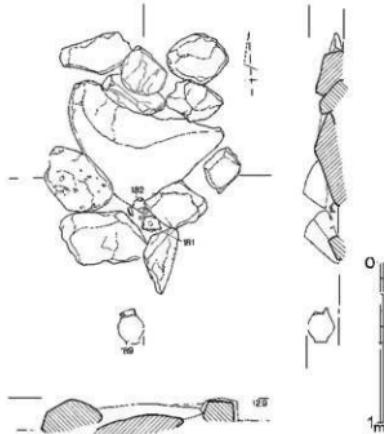


图96 32号墓实测图

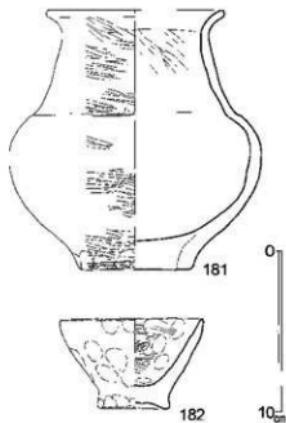


图97 32号墓出土遗物实测图

**32号墓** 長さ1.6m、幅1.2mの11個からなる標石がある。中央に偏平でやや大きめの石材を据え、その南北に石材を5個ずつ配する。石材の重なり方から中央の石材が最初に据えられたものと考えられる。標石の主軸は、N-3°-Eである。

使用される石材は、中央の大形の石に閃緑岩を、その他の石にドレライト、流紋岩、礫岩を使用している。

この中央の石材の南側で、標石に載った状態で壺1、小形の鉢1が出土した。

**32号墓出土遺物** 出土した壺181は、やや小ぶりのもので、肩部にしつりした段をもつが、口縁下端部には段はない。底部は厚手である。外面は磨いて仕上げる。口径10.8cm、器高16.1cm、底径6.9cmを測る。

小形の鉢182は、手捏ねかと考えられるもので、直線的な体部とわずかに上げ底となる底部をもつ。内面にはハケメをとどめる。口径8.7cm、器高5.5cm、底径4.4cmを測る。

**33号墓** 長さ2.1m、幅1.1mの標石がある。石材は小形のものを向長辺側に並べ、この上に大形の石材を重ねている。この大形の石材は南から順に積まれたようだ、石材は南のものに重なるように配されている。標石の主軸は、N-4°-Wである。

使用される石材は、上部の大形の石材に閃緑岩が使われ、下部の石材には流紋岩、ドレライトも使用される。この墓も選択的に閃緑岩が使用されている

ものと考えられる。閃緑岩には、相似た脈をもつ石材が使用されている。

標石北西脇で壺183が、標石上で鉢184が出土した。壺183は、上ドに半裁されており、半裁した口縁部を正位に据え、それに残りの底部をかぶせるという、特異な出土状態であった。かぶせられていた底部は器表が風化しており、長らく地表に露出していたものと考えられる。

**33号墓出土遺物** 出土した壺183は、樽形の体部を有し、口縁を軽く外反させる。口縁外面は横方向のヘラミガキで仕上げるが、肩部は、外面向横方向のヘラケズリを行って、器壁を薄くしている。胴下半部は風化しており詳細は不明だが、一部に砂粒の動きが認められるので、肩部以下にもヘラケズリが及んでいるようである。底部近くに焼成後の穿孔がある。かぶせた底部は、地表に露出していたため、表面が風化している。朝鮮半島松菊單式土器の影響を受けた土器と考えられる。口径9.3cm、器高19.0cm、底径7.0cmを測る。

鉢184は、体部に丸みをもち、端部を欠くが口縁は軽く外反する。底部は厚く、外方にふんばって、かすかに上げ底となる。底径は7.2cmである。

**34号墓** 長さ2.4m、幅1.5mの標石がある。石材は角様が多い印象である。標石は長方形の平面形を意識して積まれているように見える。石材は周辺に長方形になるように並べた後、この内側に石材を積んでいる。中央にやや大形の石が1個載せられている。

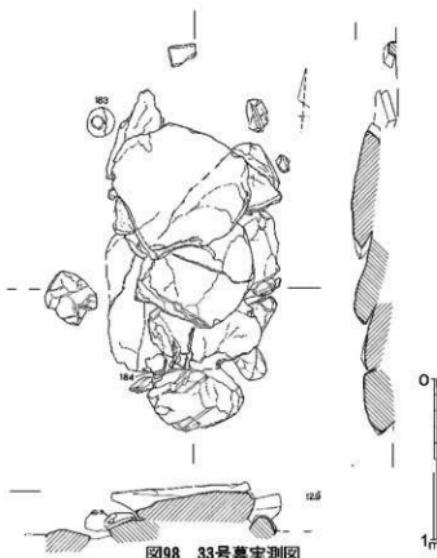


図98 33号墓実測図

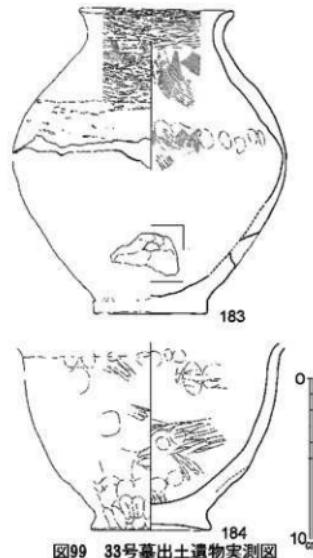


図99 33号墓出土遺物実測図

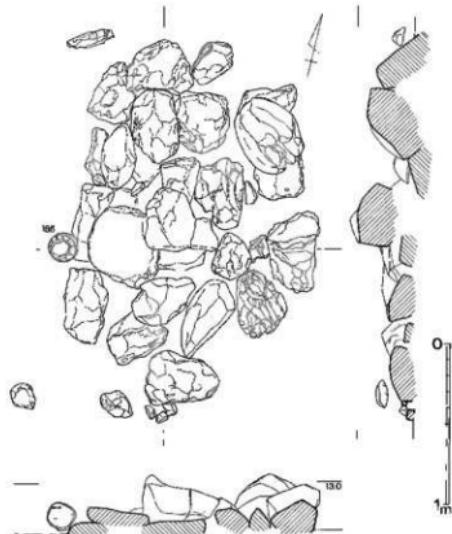


図100 34号墓実測図

内側に載せられた石は、いくらか沈んでおり、下部に木棺が存在したものと考えられる。標石の主軸は、N-13°-Wである。標石西辺傍で正位に据えられたいた壺！を検出した。

使用される石材は、流紋岩を主とし、一部にドレライトを使用する。流紋岩を選択的に使用しているものと考えられる。

**34号墓出土遺物** 出土した口縁部を欠く壺  
185は、口縁下端と肩部に段を有するもので、頸部はやや細い。肩部の段の下に2条のヘラ描き沈線で区画された文様帶があり、この文様帶を縦3本1組のヘラ描き沈線で12マスに区画する。この内の1区画のみ1列の無軸羽状文が縦に描かれている。文様はさほど深く施文されるものではない。胴部最大径18.1cm、底径6.4cmを測る。

**35号墓** 長さ1.8m、幅1.7mの範囲に標石があり、中心の5個が横位に並べられている。周辺のものはレベルが異なるので、後に移動したものか、別の墳墓に伴うもの可能性もある。横位に並べられた標石の主軸は、N-21°-Wと考えられる。

使用する石材は、流紋岩とドレライトである。

**45号墓** 長さ1.9m、幅1.9mの平面形が正方形に近い標石があり、やや大形の石材を使用

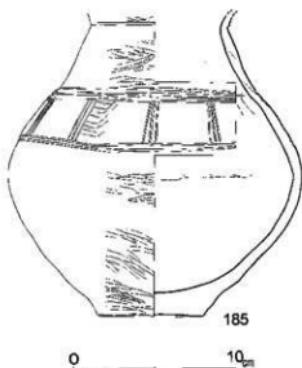


図101 34号墓出土遺物実測図

している。東西の両側辺に石材を並べ、やや大形の石材をこれに重ねている。標石の主軸は、N-14°-Eである。

使用される石材は、一部に流紋岩を交えるが、閃綠岩を主として構成されている。

伴う遺物は認められなかった。

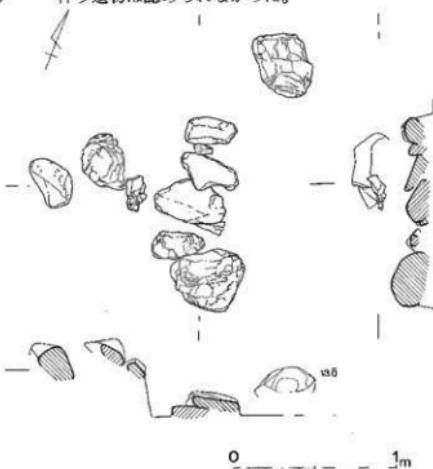


図102 35号墓実測図

**55号墓** 長さ1.4m、幅1.2mの範囲に小形の石材が散在し、これが標石と考えられる。標石の主軸は、N-12°-Eと考えられる。標石の南端で帶1を検出した。標石が小形であるので、小児の埋葬の可能性がある。

使用される石材は、流紋岩を主とし、一部に礫岩、ドレライトを交える。

**55号墓出土遺物** 出土した盃186は、口縁部を欠くが長い頸部を有し、肩部に段をもつ。段以下に2条の沈線で区画された文様帯をもち、この中に横向方向の有軸羽状文と無軸羽状文を2段に描いている。施文は浅い。底部は円盤貼り付けによるか。外面はヘラミガキで仕上げられる。胴部最大径21.2cm、底径7.2cmを測る。

**54号墓** 長さ0.8m、幅0.7mの範囲に拳人の小石が集積され、これが標石と考えられる。標石の主軸は、W-34°-Nで、東西を主軸とするもので、他の墓とは方位を異にする。墓域は未確認だが、標石が墓域の範囲を示すとすると、子どもの埋葬が考えられる。

使用される石材は、ドレライト、閃緑岩をわずかに交えるが、流紋岩を主としている。

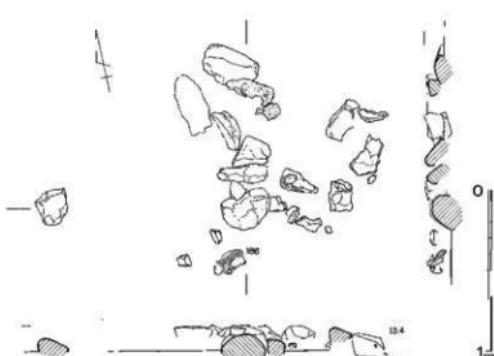


図104 55号墓実測図

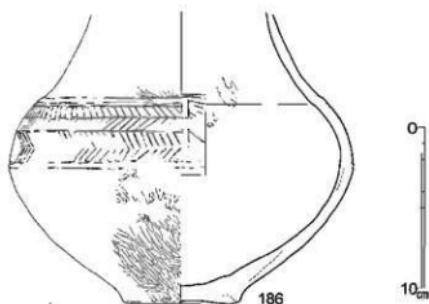


図105 55号墓出土遺物実測図

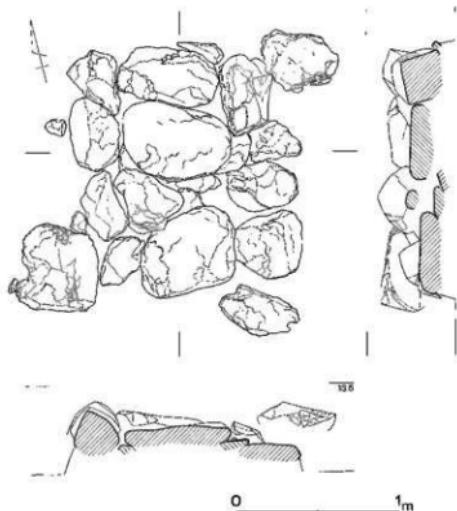


図103 45号墓実測図

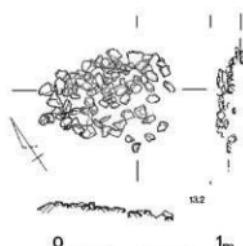


図106 54号墓実測図

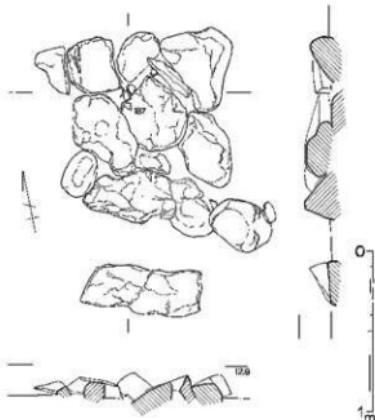


図107 51号墓実測図

**51号墓** 長さ1.8m、幅1.2mの標石がある。標石は長方形の平面形を意識しているようである。南端の石材はやや大形のもので、少し離れる。標石の主軸は、N-11°-Eである。標石上で鉢1が検出された。

使用される石材は、閃緑岩を主とし、安山岩、流紋岩を交える。

**51号墓出土遺物** 出土した鉢187は、円盤貼り付けによる底部から丸みをもって体部が立ち上がり、体部にある浅い沈線でわずかにカーブをかけて口縁部にいたる。口縁下端にも浅い沈線があり、ここからゆるやかに開いて口縁端部にいたる。口縁端には面

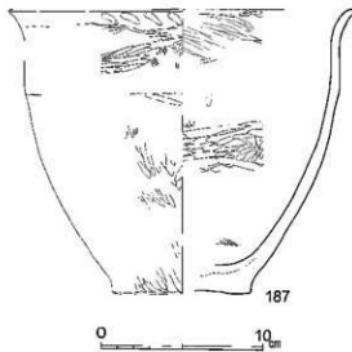


図108 51号墓出土遺物実測図

取りがある。内外面は磨いて仕上げられる。口径21.3cm、器高17.7cm、底径8.5cmを測る。

**52号墓** 長さ1.9m、幅1.2mの標石がある。標石の一部が調査区壁に含まれる。長方形の平面形を意識していると考えられる。標石の主軸は、W-38°-Nで東西を主軸とする。標石の長軸が墓壇の主軸に等しいとすると、他の墓とは頭位を異にするものとなる。標石脇で鉢1が出土している。

使用される石材は、閃緑岩、ドレライト、安山岩、穀岩である。

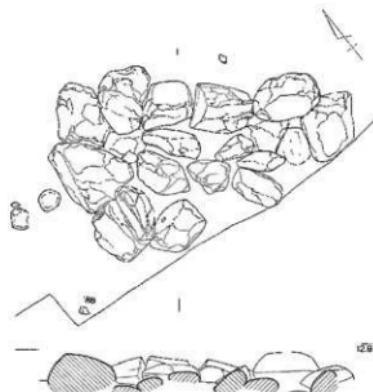


図109 52号墓実測図

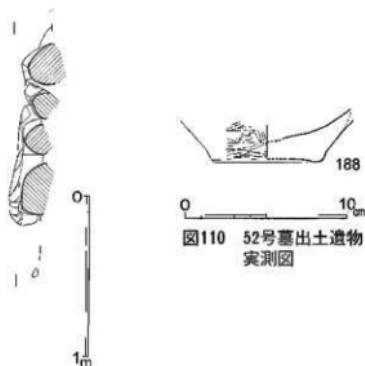


図110 52号墓出土遺物実測図

**52号墓出土遺物** 出土した底部108は、かすかに上げ底となっており、外面を磨いている。底径は7.0cmである。

**53号墓** 3個の標石が長さ1.4m、幅0.6mの範囲にあり、これが基壇の両端を標示するものと考えられる。標石の主軸は、N-11°-Eである。北端の標石に2個の石材が使用されており、あるいは頭位を表したものか。

使用される石材は、閃緑岩、ドレライトで、閃緑岩は両端に1個ずつ使用される。

**37号墓** 長さ2.1m、幅2.9mの範囲に石材が散在し、これが標石と考えられるが、レベルが異なるものもあり、複数の主体部に伴うか、のちに移動されているものの可能性もある。標石の主軸は、N-27°-Eと考えられる。

使用される石材は、閃緑岩、流紋岩、砾岩、ドレライトである。

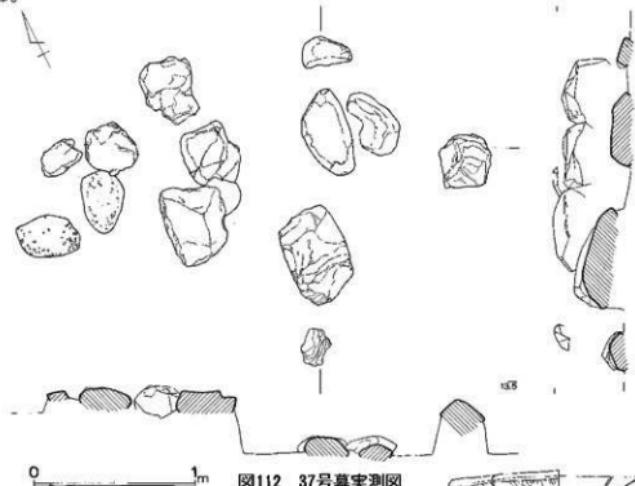


図112 37号墓実測図



図113 36号墓実測図

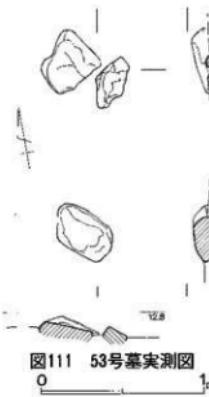


図111 53号墓実測図

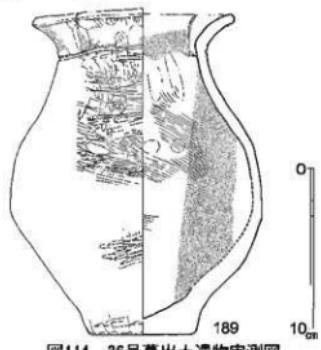


図114 36号墓出土遺物実測図



図115 46号墓実測図

36号墓 31号墓と37号墓に挟まれる位置にある。長さ1.1m、幅0.7mの範囲に小形の石材17個を並べて標石としている。標石、使用石材ともに小さいので、子どもの埋葬と考えられる。標石の主軸は、N-34°-Eである。

使用される石材は、ドレライト、流紋岩、閃緑岩、安山岩である。

検出した壺1は、32号墓の脇で出土しているが、

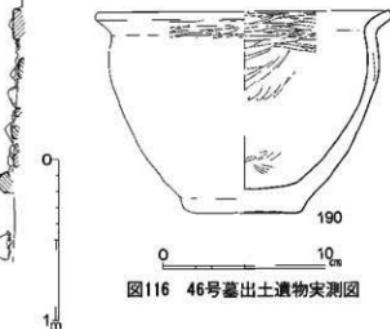


図116 46号墓出土遺物実測図

この墓に伴うものが転がったものと考えられる出土状況であった。

36号墓出土遺物 出土した壺189は、体部やや細長く、肩部に段はもたないが、かすかに沈線を施して頸・胸部の境としている。口縁下端には1条の沈線をめぐらせて、段はもたない。内面および口縁には黒褐色の付着物があり、漆容器であった可能性がある。付着物は、口縁の破断面にも付着しており、こ

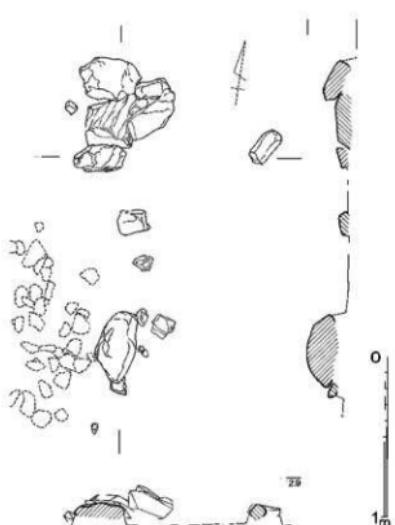


図117 47号墓実測図

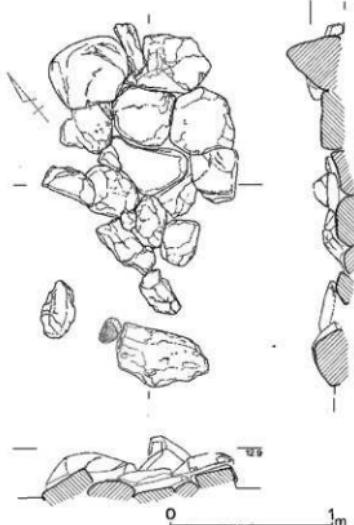


図118 42号墓実測図

の上蓋は容器としての使用時にすでにヒビがあったことがわかる。口径12.0cm、器高20.3cm、底径6.5cmを測る。

**46号墓** 31号墓と47号墓に挟まれる位置にあり、47号墓に接している。あるいは47号墓の墓壙と切り合った関係にある可能性がある。長さ1.2m、幅1.1mの範囲に小形の石材を集めした標石である。正方形の平面形を意識しているものと考えられる。標石の主軸は、N-10°-Eである。標石、石材とともに小さく、子どもの埋葬に伴うものと考えられる。

使用する石材は、流紋岩、ドレライトで、流紋岩がやや多い印象である。

標石南西脇で、伏せた状態の鉢1が出土した。

**46号墓出土遺物** 出土した鉢190は、丸みを帯びた底部から膨らみ気味の体部へいたる。口縁は折曲させて端部を丸く納めている。内外面にミガキの痕跡をとどめる。口径17.9cm、器高12.6cm、底径6.6cmを測る。

**47号墓** 46号墓に隣接して、長さ2.1m、幅0.7mの範囲に大小11個の石材があり、これが墓壙の両端を表示した標石と考えられる。北端側に多くの石材を使用しており、頭位を表示したもののがある。標石の上軸は、N-8°-Wである。

使用される石材は、閃緑岩、流紋岩、安山岩である。

**42号墓** 長さ2.2m、幅1.2mの約20個の石材を使用する標石がある。石材は中央のものを並べた後に、周りのものを配している。標石の上軸は、N-40°-Eで、他のものよりやや東へ振れた方位を示す。北東端の石材に人形のものを使用しており、頭位を表示したものの可能性がある。

使用される石材は、ドレライトを主とするが、流紋岩、閃緑岩、砾岩を交える。中央の石に閃緑岩を据える。

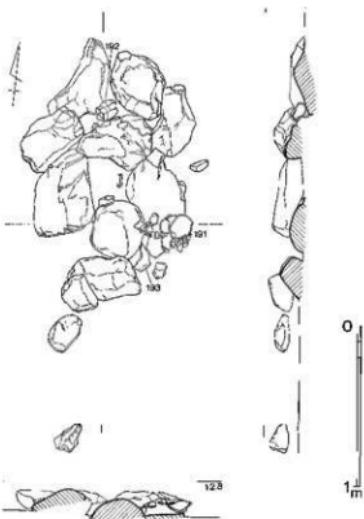


図119 38号墓実測図

**38号墓** 長さ1.9m、幅1.1mの12個の石材を使用する標石がある。中央の石材を据えた後、周りの石材を配している。石材の並べかたは、前述の42号墓と似ている。標石の上軸は、N-1°-Wである。標石上から壺と小形の壺各1が、標石に挟まれるように鉢1が出土した。

使用される石材は、閃緑岩、流紋岩、ドレライトで、中央の石に閃緑岩を据えている。

**38号墓出土遺物** 出土した壺191は、算盤玉形に近い偏平な体部をもち、肩部の段から直線的な頸部に

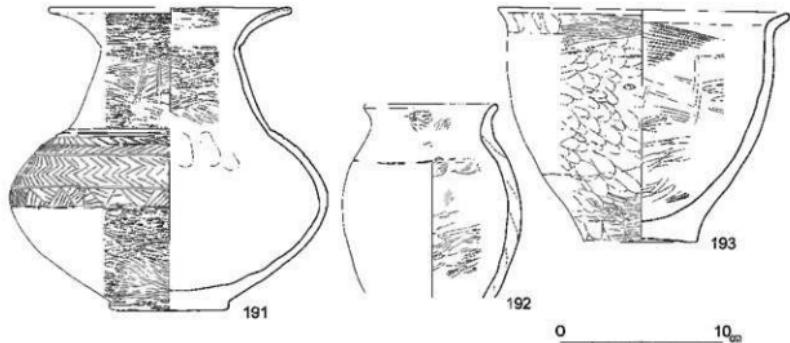


図120 38号墓出土遺物実測図

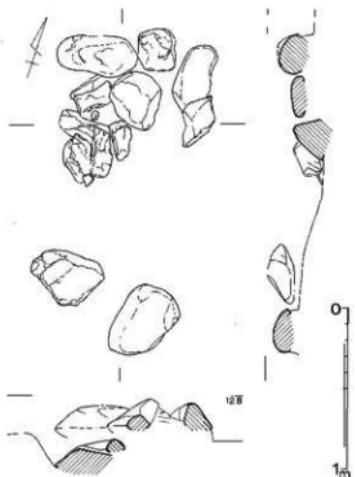


図121 39号墓実測図

いたる。口縁下端にも段を有し、口縁は大きく開く。肩部には2条の沈線の下に有輪羽状文、無輪羽状文、複合鋸齒文をヘラで描く。円盤貼り付けによると考えられるしっかりした底座をもつ。外面の一部に赤色の顔料が認められるので、赤彩されていた可能性がある。器壁は薄く、焼成もすぐれている。茶褐色を呈し、遺跡出土の他のものとは胎土が異なり、搬入品の可能性が考慮される。31号墓出土の180と似る。口径14.8cm、器高18.9cm、底径7.3cmを測る。

小形の壺192は、持形の体部に強く外反する口縁

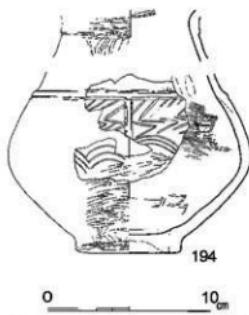


図122 39号墓出土遺物実測図

部をもつ。松菊里式の影響を受けたものか。口径7.8cmである。鉢193は、丸みを帯びた体部から厚みをもたせた如意形口縁にいたる。外面は押圧するようにおしつけたヘラミガキをとどめる。体部に刷の正痕がある。口径17.7cm、器高14.6cm、底径6.9cmを測る。

39号墓 長さ2.0m、幅1.1mの範囲に13個の石材がある。この標石は、南北両端に石材を据えるもので、墓壇の両端を表示しているものと考えられる。標石の主軸は、N=17°-Wである。北側に多くの石材が

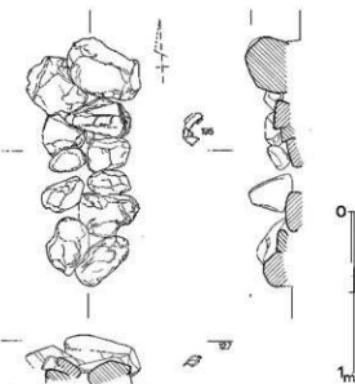


図123 40号墓実測図

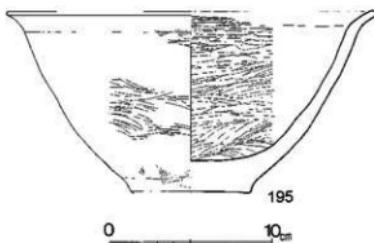


図124 40号墓出土遺物実測図

集められており、頭位を表示したもののがある。中央寄りの石はいくらか沈み込んでおり、下部に木棺があったことを示しているものと考えられる。

使用される石材は、閃緑岩、ドレライト、流紋岩、礫岩である。北側に集められた石は多くが閃緑岩であった。

**39号墓出土遺物** 出上したやや小形の壺194は、口縁下端と肩部に段をもち、肩部に貝殻腹縁による無軸羽状と複線の連弧文が描かれる。羽状文の文様帶は、縦の沈線で区画される。外側は黒塗されているものと考えられる。胸部最大径14.9cm、底径6.3cmである。

**40号墓** 長さ1.5m、幅0.7mの範囲に11個の石材を2列に並べた標石がある。標石は内側に向かって座んでおり、下部の木棺が腐朽した際の陥没を示すものと考えられる。標石の主軸は、N-3°-Eである。北側でやや大きめの石材を使用し、頭位を表示するものの可能性がある。

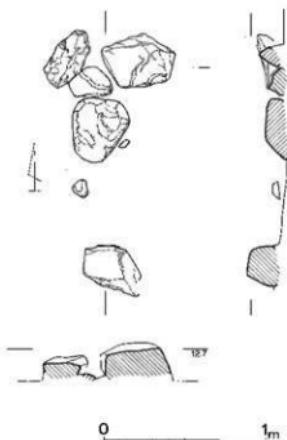


図125 41号墓実測図

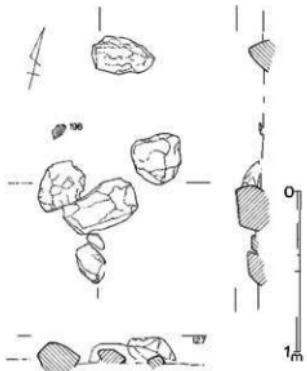


図126 43号墓実測図

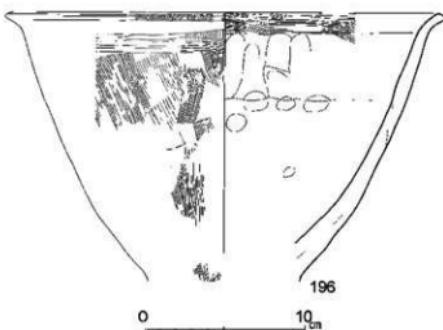


図127 43号墓出土遺物実測図

使用される石材は、閃緑岩、ドレライト、流紋岩である。

標石東側で鉢1が出土した。

**40号墓出土遺物** 出土した鉢195は、厚手の底部から直線的な体部を経て、ゆるく外反する薄手の口縁部にいたる。内外面に横方向のヘラミガキを施すが、外側には底部近くにハケメを残す。口径22.3cm、器高11.3cm、底径7.4cmを測る。

**41号墓** 長さ1.6m、幅0.8mの範囲に5個の石材からなる標石があり、墓壇の南北端を表示しているものと考えられる。標石の主軸は、N-1°-Eである。北側に4個の石材が使われ、頭位を表示するものの可能性がある。中央寄りの石はいくらか沈み込んで

おり、下部に木棺があったことを示しているものと考えられる。

使用される石材は、ドレライト、流紋岩、礫岩である。

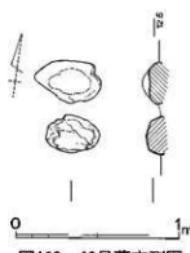


図128 48号墓実測図

**43号墓** 長さ1.5m、幅0.9mの範囲に5個の石材がある標石がある。標石の主軸は、N-13°-Wである。標石脇で鉢1が出土した。

使用される石材は、流紋岩と黒色頁岩である。

**43号墓出土遺物** 出土した鉢196は、直線的な体部を有する。軽く折り曲げる口縁は、両取りをした端部に刻み目を施す。外面と口縁内側はハケメをとどめる。外面は赤変しており、火にかけられたものと考えられ、この墳墓群出土の供献土器にはこのような使用を示すものは他にないことから、あるいはこの墓に供献されたものではない可能性がある。復元口径は26.1cmである。

**48号墓** 2個の石材を並べた標石がある。標石の主軸は、N-8°-Wである。

石材は2個ともドレライトである。

**49号墓** 標石4個が認められ、長さ1.9m、幅0.6mの墓域の掘方を確認した。墓域の主軸は、N-30°-Wである。1点の石材は板状の材が使われ、墓域内に立てられていた。

石材は、流紋岩、ドレライトである。

#### 墳墓群標石の石材

墳墓群の標石は、島根大学総合理工学部（現：島根大学名谷教授）山内靖吾先生に鑑定いただいた。

次ページに示すようにさまざまな石材が標石に利用されている。火成岩である閃綠岩・はんれい岩、ドレライト、玄武岩、安山岩、流紋岩（一部は板状節理がよく発達している）と、堆積岩である流紋岩質凝灰岩、砾岩、頁岩が認められる。

なかでもいわゆる「大芦御影」（閃綠岩・はんれい岩）の利用が目立つ。この大芦御影は、島根半島でも島根町人戸の川麓から鹿島町御津集落東の海岸に限定的に分布している。割れ口が青味がかった黒色（青黒色～緑黒色）を呈し、比重が重く、割れにくいという特質を行っていたため、硬質な加工用の石材として近代まで鹿島町御津集落の東側で切り出されていた経緯がある。標石に使用されている一抱え以上もある大形の円礫となったものは、岬を越えた日本海側から運搬した可能性が高いといふ。

標石に利用された石材のうち、この大芦御影に注目すると、石材の多くのを大芦御影による7号墓、44号墓、45号墓などがある。また、非常に多くの石材を使用する5号墓などはこの大芦御影の利用が顕著である。さらに5号墓、6号墓では標石の頂上に据えられる大石に大芦御影が使用されており、この石材が選択的に利用されていたことが推測される。同様に1号墓、32号墓などでは標石の中心に大芦御影が使用され、あたかも5号墓、6号墓での使用方法を使用石材の少ない標石においても踏襲しているかのようである。

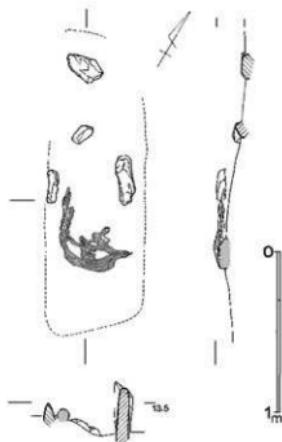


図129 49号墓実測図

標石の石材として大芦御影を選択的に使用している理由として、遺跡の立地する講武盆地では大形の石が産出しないため、岬を越えた日本海側まで採取に行っているものと考えられる。石材の大きさは岬を越ても運搬可能な大きさのものが選ばれたものだろう。

一方、その他の石材に目を転じると、ドレライト、玄武岩、安山岩、流紋岩は付近を流れる講武川の南北川塊で産出するので、講武川流域でも採取が可能であったと考えられる。標石として多く使用されているドレライトは現状では茶系色を呈するが、本米は青～緑味がかった外観を呈する石材である。

また、31号墓のように板状節理の発達した流紋岩を多用して角張った石材ばかりからなる茶系色の標石としたものや、34号墓のように流紋岩を多用して全体に白っぽい標石としたものもある。

上記のように、何色に見えるかという色彩上の選択もはたらいていた可能性がある。大掛かりな標石である5号墓、44号墓では、青黒色～緑黒色を呈する大芦御影が卓越しており、調査時点では淡い緑色を呈していた。やはり本米は青～緑系の色調を呈するドレライトが各標石で数多く認められることから見て、青～緑色にみえる標石を目指す墳墓が多いことが指摘できよう。岬を越えてわざわざ何トンにもなる硬質で比重の重い大芦御影を運搬するのは、風化に堪える石材であるという面がある一方、その石の色調である青～緑色に標石が見えることを望んでいたという可能性も指摘しておきたい。

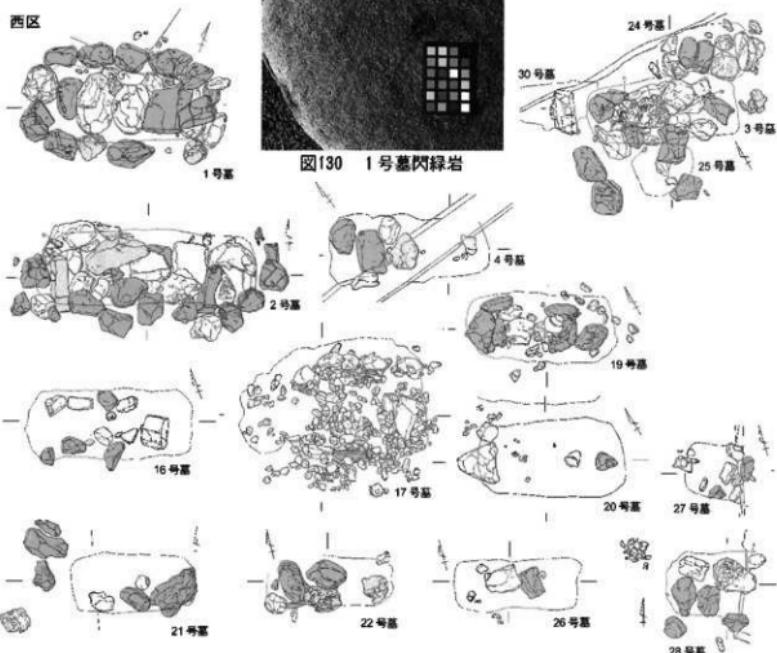


図130 1号墓閃綠岩

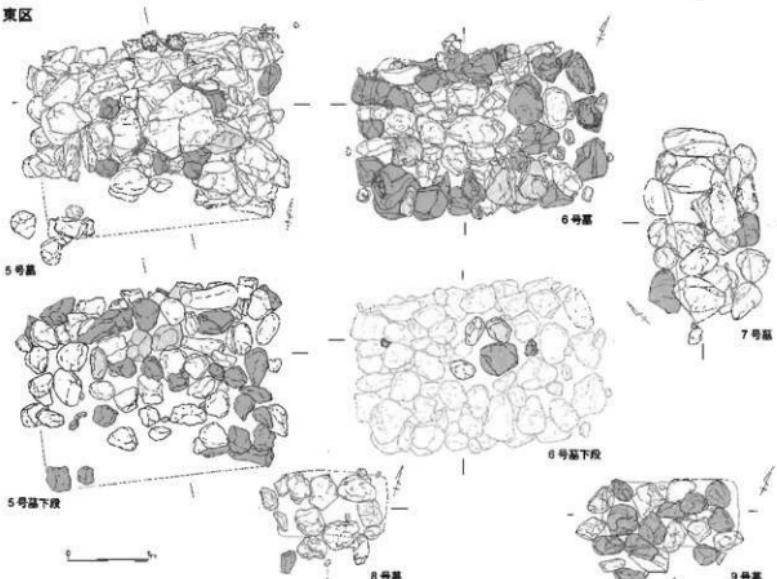


図131 標石石材の同定と使用場所 (1)

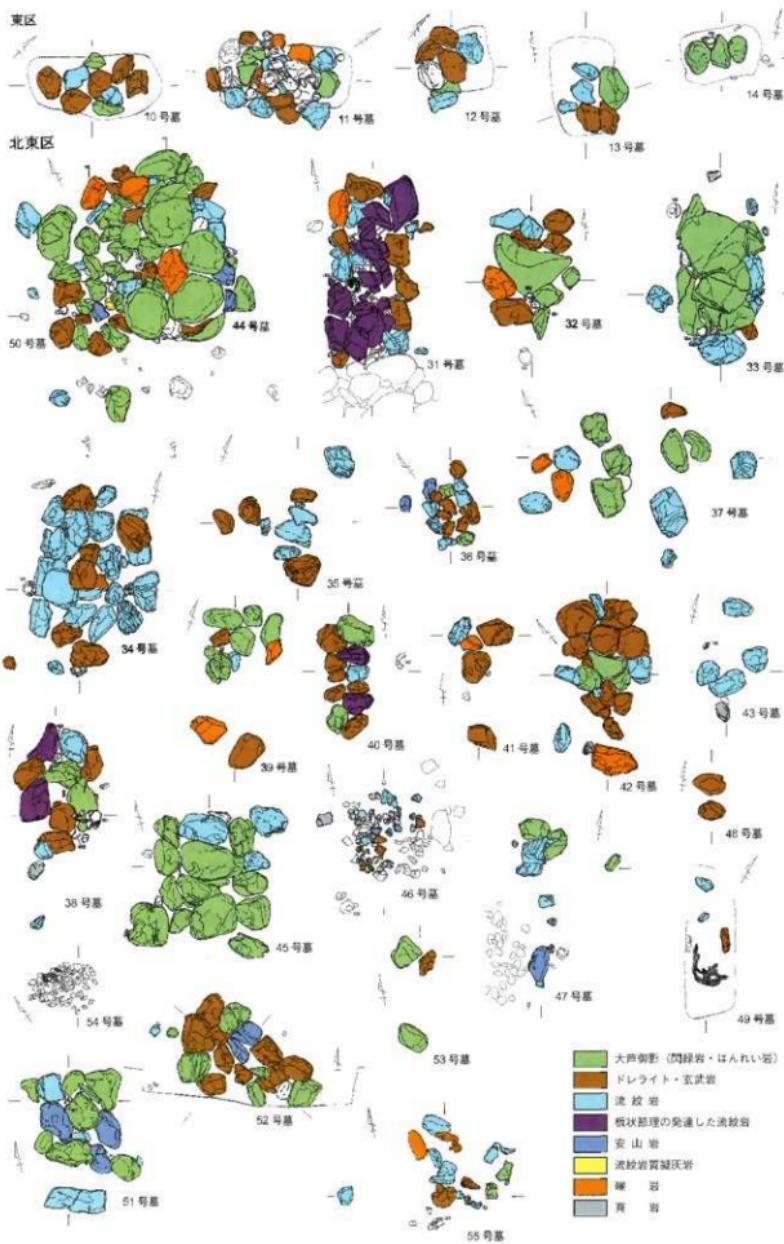


図132 標石石材の同定と使用場所 (2)

#### 第4節 遺構に伴わない遺物

西区：遺構に伴わない遺物の出土状況(図133) 細文時代晚期後葉から弥生時代中期にかけての土器が出土している。石器は、石鋸、叩き石、黒曜石の剥片、石鏃、くさび形石器などが出土している。これらは、尖底文土器や弥生前期土器と同時期のものと思われる。特に、西区北西側では、炭を含んだ黒褐色粘質土中から多量の突帯文土器が出土している。墓壙がこの包含層を掘り込んでつくられているため、これらの土器は墓群が形成される以前に廻棄されたものと思われる。弥生時代前期の土器に関しては、壺・鉢は墓に供獻された可能性があるが、どの墓に伴うものか判別が不可能であった。**206**、**207**、**208**は、墓よりも上位で出土している。

西区：遺構に伴わない弥生土器(図136、137) **197**～**206**は、弥生前期のものである。**197**は壺の上半部である。口縁部と頸部の境に段が形成される。頸部と胴部の境には、粘土板接合により内面に稜があり、外面に段が形成される。さらに、段の上から沈線が施される。胴部は、ヘラにより綫沈線と羽状文が描かれる。**198**は壺の破片である。頸部と胴部の境に段がつくもので、それに伴い内面でも稜がみられる。段の下にヘラによる2条の横沈線が施される。**199**は壺の上半部である。粘土板の接合部で下半部が欠損している。肩部に稜をもつ器形か。ヘラによる横沈線の間に羽状文が描かれる。**200**は壺の口縁部である。内外面ともにミガキ調整で仕上げる。**201**は壺の口縁部である。頸部との境に、段や沈線をもたない。内外面ともにミガキ調整が残る。**202**は壺の口縁部である。頸部との境に、段や沈線をもたない。内外面ともにミガキ調整が残る。**203**は小型の壺である。頸部との境に段がつく。胴部に羽状文、底部に2本の沈線がヘラで描かれる。底部がやや上げ底を呈する。**204**は無頸壺である。外面は、ミガキ調整が残る。**205**は鉢の上半部である。内外面ともに、風化のため調整不明である。**206**は壺で、口縁端部に刻目をもつ。頸部に、ヘラ沈線と竹管による刺突文がある。胴部は、内外面ともにハケメ調整で仕上げる。弥生前期土器のものである。**207**は壺の口縁部と思われる。外面に、断面三角形の突帯が貼り付けられる。弥生中期のものである。**208**は壺の胴部片である。外面は、縦方向のハケメ調整を施したのち、4本1単位のクシ描き直線文を4単位、その間を埋めるように斜格子文、最下の直線文上に刺突文を加える。内外面ともに、ミガキ調整で仕上げる。弥生中期のものである。

**209**～**221**は、底部片である。**222**は壺の口縁部か。内外面ともにミガキ調整が施されるようである。胎土は、比較的の密なもので黒褐色を呈する。**223**～**225**

は、器種不明のものである。板状を呈する**225**は土器を加工したものか。いずれも胎土から弥生前期のものと思われる。**223**は、外面にハケメ調整の上から斜行文が描かれる。**224**は、外面上にヘラ描き斜行文が認められる。**225**は、内外面にヘラによる線刻が施される。

西区：遺構に伴わない突帯文土器(図145～147)

**295**～**376**は、深鉢の破片である。**295**～**298**は、口縁端部と突帯に刻目をもつものである。いずれも口縁部よりやや下がった位置に突帯が貼り付けられる。刻目は比較的細い。**295**は、内面に条痕が残る。**298**は口縁部に高低差があり、波状口縁の可能性がある。

**299**～**314**は、口縁部より下がった位置に刻目をもつ突帯が貼り付けられるものである。**299**は、突帯に逆D字状のしっかりとした刻目をもつ。**300**は突帯に、V字状のしっかりとした刻目がやや斜めにつけられる。内面に一枚貝条痕が残る。**301**は、突帯にD字状のしっかりとした刻目をもつ。内面は一枚貝条痕が残る。**302**は、刻目をもつ突帯が下方に垂れる。**303**は、断面三角形の突帯に斜めの刻目をもつ。**304**は低い突帯に、真っ直ぐの刻目が若干残る。**305**は断面三角形の突帯に、しっかりとしたV字状の刻目が斜めにつけられる。**306**は、突帯に比較的浅いO字状の刻目をもつ。**307**は、突帯にしっかりとしたV字状の刻目が下方に垂れる。**308**は、比較的細かいO字状の刻目をもつ。**309**は、しっかりとしたV字状の刻目をもつ。**310**は、突帯にT字状の刻目がつけられる。**311**は、口縁部がやや外反しながら先細りするものである。断面三角形の突帯にD字状の刻目をもつ。**312**は、断面三角形の突帯にI字状の刻目が斜めにつけられる。**313**は、突帯にやや大きめのV字状刻目をもつ。**314**は、下方に垂れる突帯に、細いI字状の刻目がかすかに残るものである。

**315**～**329**は、口縁部に接するように刻目をもつ突帯が貼り付けられるものである。**315**は、しっかりとしたV字状の刻目をもつ突帯がやや下方に垂れる。**316**は、突帯を口縁部にかぶせて貼り付ける。低い突帯に、しっかりとしたV字状の刻目をもつ。**317**は、O字状の刻目が下方に垂れる。**318**は、突帯を口縁部にかぶせるように貼り付ける。次帶に刻めのV字状の刻目をもつ。**319**は、突帯を口縁部にかぶせて接合し、端部を丸く仕上げる。突帯にしっかりとしたD字状の刻目がやや斜めにつけられる。**320**は、下方に垂れる突帯に比較的のしっかりとしたI字状の刻目をもつ。**321**は、下方に垂れる突帯に不均等な大きさのD字状刻目がつけられる。**322**は、V字状の刻目をもつ突帯がやや下方に垂れる。**323**は、突帯を口縁部にかぶせるように貼り付ける。下



図133 遺構に伴わない土器出土状況 (1:西区 下線のあるものが弥生土器)

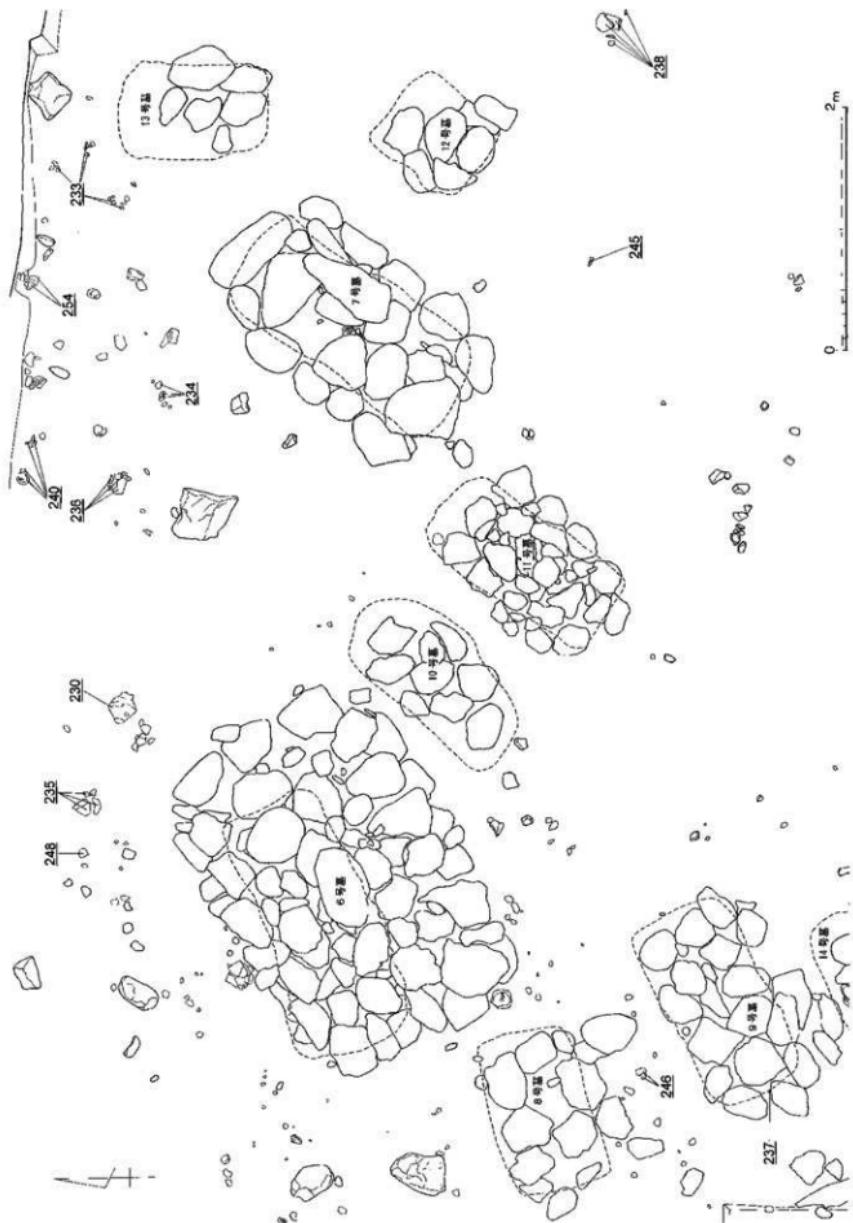


図134 遺構に伴わない土器出土状況（2：東区）

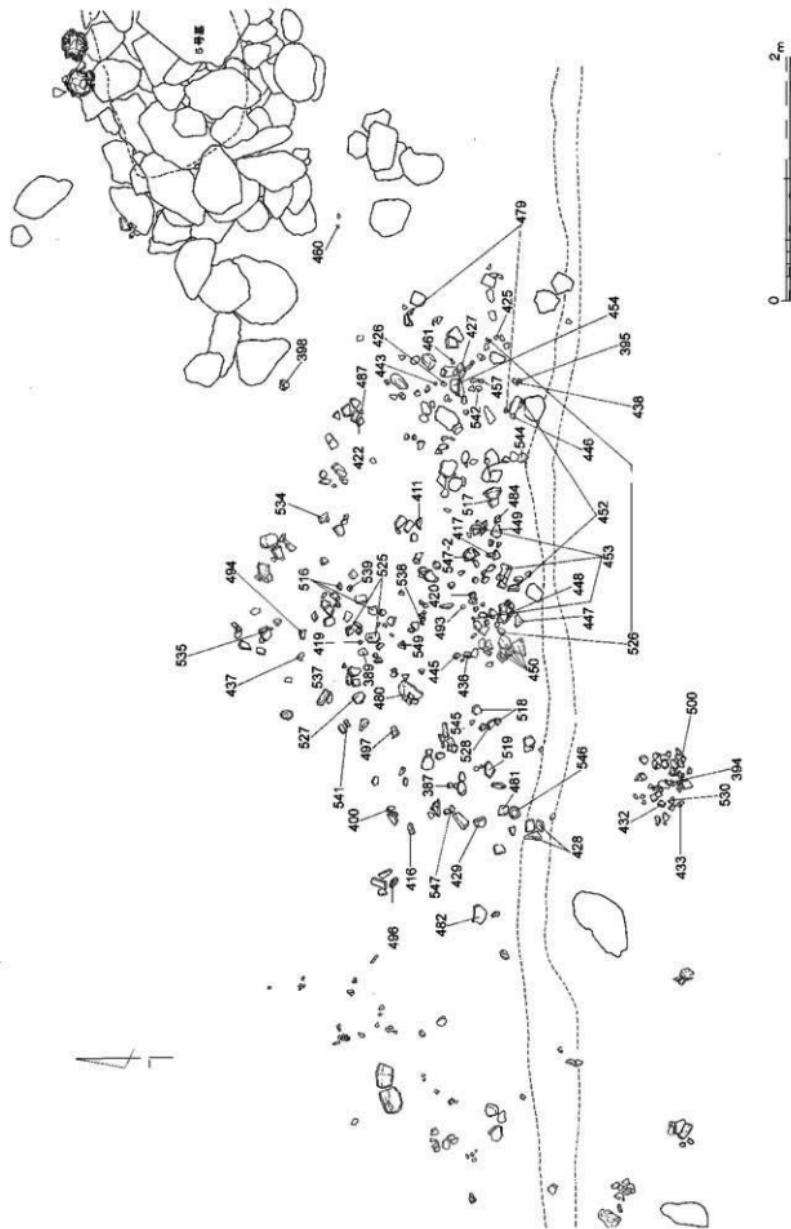


図135 遺構に伴わない土器出土状況(3: 東区 実帶文土器)

方に垂れる突帯は、細くて浅いI字状の刻目をもつ。324は、低い突帯にD字状の刻目がつけられる。325は、下方に垂れる突帯にV字状の刻目をもつ。326は、口縁上部にナデ調整によると思われる凹線状の浅いくぼみが認められる。断面三角形の突帯に斜行する刻目をもつ。327は、下方に垂れる突帯にI字状あるいはV字状の刻目がかすかに残る。328は、突帯に刻目がかすかに残る。外面にT.具の痕跡が若干残る。329は、口縁部にかかるように突帯が貼り付けられる。刻目がかすかに残る。330、331は、他のものに比べて突帯がかなり下に貼り付けられ、さらに器盤が薄く口縁端部が先細りするものである。330は、突帯にI字状あるいはV字状の刻目が斜めにつけられる。331は、下方に垂れる突帯にやや細めの刻目をもつ。

332～353は、口縁部より下がった位置に無刻日の突帯が貼り付けられるものである。332は、丸みを帯びた無刻目突帯をもつ。333は、突帯の下側を強くナデすることで突帯を強調する。334は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。335は、無刻目突帯が比較的高く張り出す。外面に、ナデ調整の痕跡がよく残る。336は、無刻目突帯が下方に垂れる。337は、断面三角形の無刻目突帯をもつ。338は、無刻目突帯の上部が、ナデ調整により平坦に仕上げられる。339は、断面三角形を呈する無刻目突帯が、やや下方に垂れる。340～345は、断面三角形を呈する無刻目突帯が貼り付けられる。346は無刻目突帯の上部が、ナデ調整により平坦に仕上げられる。347は、断面三角形を呈する無刻目突帯が、かなり下に付けられる。348は、無刻目突帯がやや小さい。349は、無刻目突帯を直横に突出させる。350は、断面三角形を呈する無刻目突帯をもつ。351は口縁端部が外反し、断面三角形を呈する無刻目突帯が貼り付けられる。352は比較的器壁が厚いもので、口縁端部を先細りさせるものである。突帯は直横に突出させる。353は、頸部から口縁部にかけて外反する。

354～362は、口縁部に接するように無刻目の突帯が貼り付けられる。354は、無刻目突帯がやや下方に垂れる。355は、無刻目突帯を直横に突出させる。356は、無刻目突帯が下方に垂れる。357は、無刻目突帯が小さく直横に突出する。358は、丸みを帯びた断面台形状の無刻目突帯が付く。359は、無刻目突帯が下方に垂れる。外面に条痕が残る。360は、無刻目突帯が下方に垂れる。突帯上部がナデ調整によりくぼめられる。361は、口縁部と突帯が一体化するものである。無刻目突帯がやや下方に垂れる。362は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。

363～373は、口縁部に無刻日の突帯が接し卡縁状を呈するものである。肥厚する無刻目突帯が下方に垂れるものや、直横に突出するものがある。

374～376は、玉縁状の無刻目突帯上部に沈線文が施される。374は、やや下方に垂れる突帯上部に3条の斜行文が施される。375は、やや下方に垂れる突帯上部に5条の山形文を描く。376は、真横に肥厚する突帯上部に锯齿状の沈線文を描く。

377～380は、彫と浅鉢である。377は彫である。頸部に3条のへラ描き沈線文が施される。頸部内面に、かすかにミガキ調整が残る。胴部内面は、ケズリ調整で仕上げる。378は無類壺である。内外面にそれぞれ2条のへラ描き沈線文が施される。内面の口縁部付近に、ミガキ調整がかすかに残る。379は浅鉢で、頸部と胴部に筋曲部をもつ。頸部と胴部にそれぞれ2条のへラ描き沈線文が施される。内外面ともにミガキ調整で仕上げる。380も浅鉢で、頸部に筋曲部をもつ。頸部に2条のへラ描き沈線文、胴部に1条のへラ描き沈線文が施される。381は浅鉢か。口縁部付近に縱沈線と横沈線がみられる。沈線は、丸みを帯びた原体が使用される。382は浅鉢か。波状口縁で、口縁部に沿って無刻目突帯が貼り付けられる。胴部で屈出し、口縁部にかけて外反気味に立ち上がる。

383～386は、底部である。383は、丸底を呈し、内外面ともにナデ調整で仕上げる。384～386は、平底である。内外面ともにナデ調整が施される。

#### 東区：遺構に伴わない遺物の出土状況（図134、135）

畿内時代晩期後葉から弥生時代中期にかけての土器が出土している。このうち、弥生時代中期土器の出土はわずかである。石器は、石礫、叩き石、石錐、黒曜石の剥片、石錐、くさび形石器などが出土している。これらは、突帯文土器や弥生前期土器と同時期のものと思われる。弥生時代前期の土器は、主に墓群の北側で出土している。壺については、墓群に伴う可能性が高いと思われるが、周辺を精査したが墓壙は検出されなかった。突帯文土器は、2・3号溝より北側にまんべんなく分布しているが、墓群の西側の2号溝北側でとくに集中して出土している。突帯文土器の包含層が、墓群形成時の搅乱を免れたものと思われる。

東区：遺構に伴わない弥生土器（図138～140） 226～241は、弥生前期のものである。226～228は、壺の口縁部である。226は、口縁部が直く外反する。口縁部と頸部の境に段が形成される。外面に、ミガキ調整が残る。227は口縁部と頸部の境に段がみられる。228は口縁部と頸部の境に段がみられる。口縁部と頸部にミガキ調整が残る。229は14号墓の南東約2mの地点で出土したほぼ完形の壺である。墓群のいずれかの墓から転がり落ちた可能性が考えられる。口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ段が形成される。内面は、頸部と胴部の境に段が認められる。胴部側の段の下に、二枚貝の貝殻腹縁

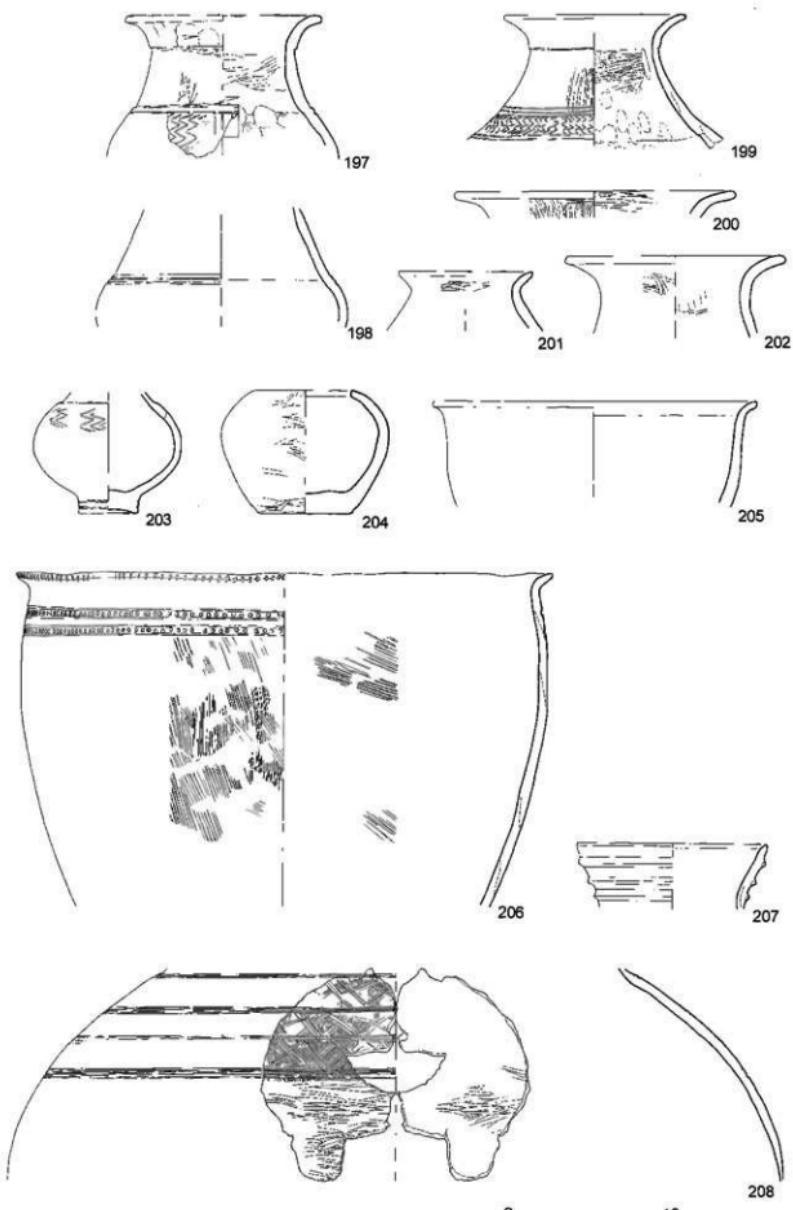


图136 西区出土弥生器 (1)

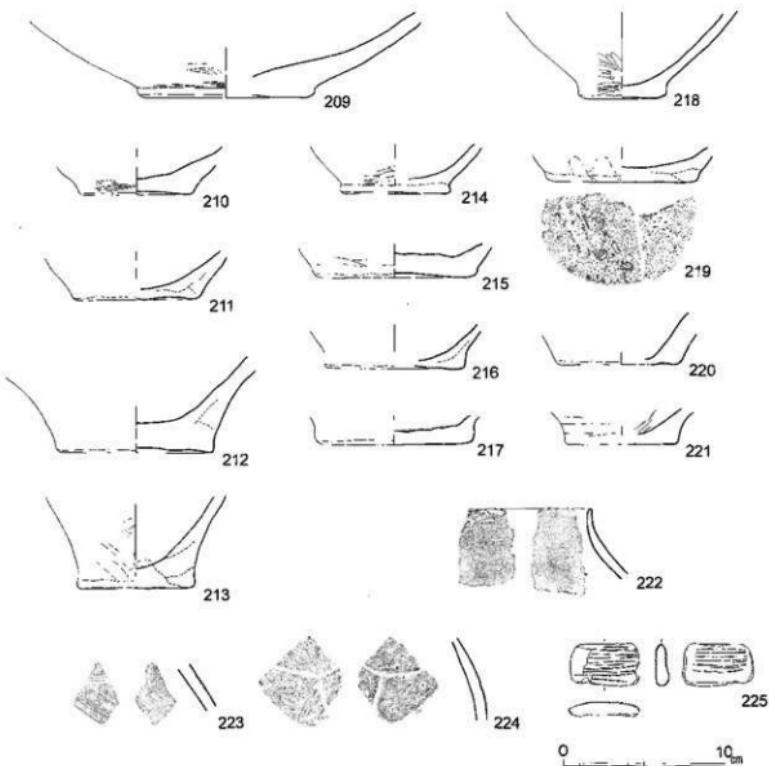


図137 西区出土弥生土器（2）

を使用した2条の沈線が施される。貝殻腹縁を上方向に向きを変えて施している。内外面ともに、丁寧にみがいて仕上げる。230は比較的大形の壺である。底部付近に、穿孔がある。口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ沈線が施される。外面は、風化が著しい。内面に、ハケメ調整とミガキ調整が認められる。231、232は、同一個体と思われる。口縁部と頸部の境にそれぞれ段が形成される。内面は、頸部と胴部の境に稜が認められる。233は、口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ段がある。胴部外面は、2条1単位のヘラ描き沈線文が施される。234は壺の上半部である。口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ段が形成される。胴部外面に、ヘラによる沈線文、破綻文、縦沈線文、羽状文、鋸歯文、斜行文が施される。縦沈線の本数の異なる部分がみられる。頸部外面と胴部内面に、

ミガキ調整が残る。235は壺である。口縁部と頸部の境は、ハケメ原体を使用して沈線が施される。頸部と胴部の境は段が形成される。内面は、頸部と胴部の境に稜がみられる。内面に、モミの圧痕が認められる。236は比較的大形の壺である。口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境にそれぞれ段が形成される。内面は、頸部と胴部の境に稜が認められる。胴部外面に、沈線文と羽状文が施される。内面に、ミガキ調整がされる。237は壺の口縁部である。破片が別の地点にも散在するため、墓に伴うものとは考えがたい。口縁下端に刻印が施される。頸部と胴部の境に段が形成される。内外面ともナデ調整で仕上げる。238も壺である。口縁下端に刻印が施される。頸部と胴部外面は、縱方向のハケメ調整がされる。内面は、ハケメ調整のちナデ調整で仕上げる。239は甕口縁部である。頸部外面に、4条のヘラ描き沈線文が施される。240は、胴部ヒモ部が欠損す

る壺である。口縁部と頸部の境に段をもたない。内外面を、みがいて仕上げる。241は小形の短頸壺と思われる。242は壺の口縁部である。口縁部内面に、2条のへら括き沈線文が施される。243は弥生中期の壺である。244は壺の底部と思われる。外面は縱方向のハケメ調整で、内面はナデ調整で仕上げる。245は鉢の底部と思われる。外面は、ハケメ調整のちミガキ調整が施される。内面も同様に仕上げられる。246～256は、壺の底部と思われる。ミガキ調整が残るものもみられるが、風化の著しいものが多い。257は、弥生中期の壺または壺の底部と思われる。

#### 東区：遺構に伴わない突帯文土器(図148～156)

387～507は深鉢の破片である。387は、深鉢の胴部に刻目突帯をもつ。388は、口縁端部と突帯にしっかりととした刻目がつけられる。389は深鉢の胴部に刻目突帯をもつ。387と同一個体の可能性がある。390も深鉢の胴部に刻目突帯をもつ。391も突帯が胴部につけられる。I字状の刻目がからうじて箇所確認される。392は、口縁端部と突帯にV字状の刻目がつけられる。

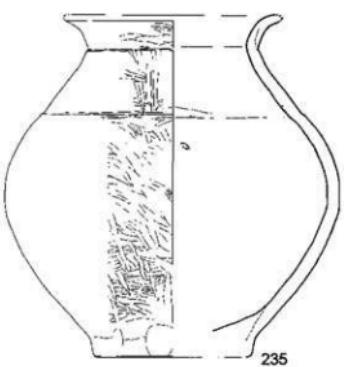
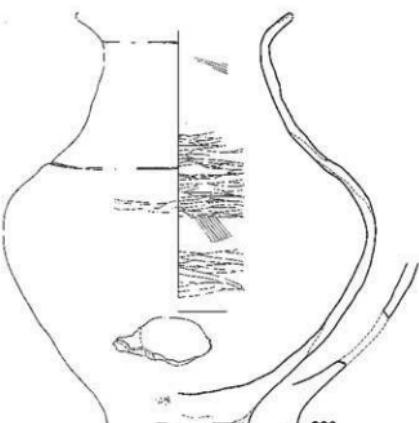
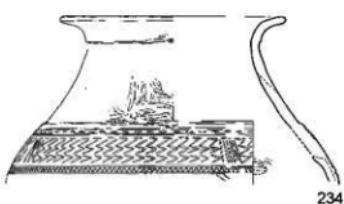
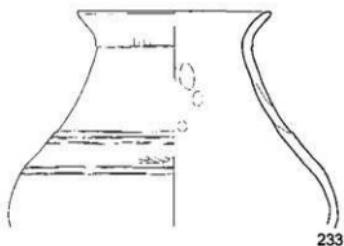
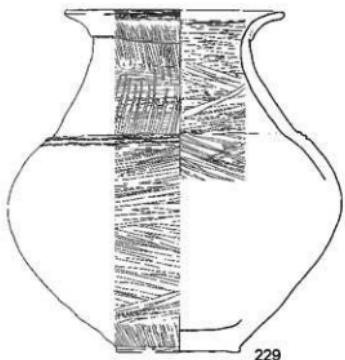
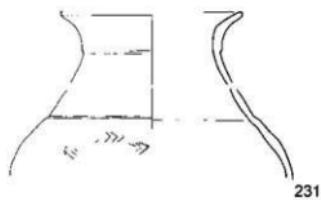
393～408は、口縁部より下がった位置に刻目をもつ突帯が貼り付けられる。393は、突帯に浅くて細いI字状の刻目が斜めにつけられる。394は深いV字状の刻目をもつ突帯が高く張り出す。外面に工具痕が認められるが、最終的にナデ調整で仕上げる。395は突帯にO字状の刻目をもつ。396はやや上向きの高い突帯に、深いV字状の刻目がつけられる。397は高く張り出す突帯に、やや細めのV字状の刻目が斜めにつけられる。398は、深いO字状の刻目をもつ突帯が高く張り出す。内外面ともに工具痕が残るが、最終的にナデ調整で仕上げる。399は下方に垂れ気味の突帯に、しっかりとV字状の刻目がつけられる。400は断面三角形の突帯に、V字状の刻目をもつ。刻日の方向がやや不揃いである。内外面ともにナデ調整で仕上げる。401は、高く張り出した突帯に刻目をもつ。402は断面三角形を呈する突帯に、V字状の刻目が斜めにつけられる。内外面ともにナデ調整が施される。403は下方に垂れる突帯に、狭い間隔の刻目をもつ。内外面ともにナデ調整で仕上げる。404は断面三角形の突帯に、I字状の浅い刻目がつけられる。405は、V字状の刻目をもつ突帯が断面三角形を呈する。406は高さのある突帯にI字状の深い刻目がつけられる。407は、高さのある突帯が下方に垂れる。突帯にV字状の刻目をもつ。408は、突帯に細いV字状の刻目がつけられる。

409～430は、刻目をもつ突帯が口縁部に接して貼り付けられる。409は下方に垂れる突帯に、深いV字状の刻目をもつ。内外面ともに、ナデ調整で仕上

げる。410は、口縁端部にかぶせるように突帯が貼り付けられる。しっかりととしたV字状の刻日をもつ。411は断面三角形を呈する突帯に、V字状の刻目がつけられる。412は下方に垂れる突帯に、D字状の刻日をもつ。413は、V字状の刻日をもつ突帯が断面三角形を呈する。414は、口縁部にかぶせるように突帯が貼り付けられる。下方に垂れる突帯に、V字状の刻目が斜めにつけられる。415はやや下方に垂れる突帯に、小D字状を呈する斜めの刻目をもつ。416は断面三角形を呈する突帯に、比較的深いO字状の刻日がつけられる。417は厚みのある突帯に、斜方向の刻日をもつ。418は、低い突帯にV字状の刻日がつけられる。内面に工具による擦痕がみられる。419は下方に垂れる突帯に、深いV字状の刻目をもつ。420は下方に垂れる突帯に、D字状の刻目がつけられる。421は口縁端部と突帯が一体化し、瘤状を呈する。突帯にV字状の刻目をもつ。422は、突帯に細いV字状の刻目をもつ。摩耗が著しく刻目がほとんど消えかかっている。423はやや下方に垂れる突帯に、斜方向の刻目がつけられる。424は下方に垂れる突帯に、D字状の刻目をもつ。425は、細いI字状の刻目をもつ突帯が断面三角形を呈する。426は、口縁部の内面が一部欠損する。口縁部と一体化して瘤状を呈する突帯に、細くて浅いI字状の刻目がつけられる。外面に擦痕が残るが、最終的に内外面とともにナデ調整で仕上げられる。427は、突帯にV字状の刻目をもつ。内面は、内傾接合によってできた稜線が數条認められる。428は下方に尖る断面三角形の突帯に、刻目がつけられる。429は、下方に垂れる断面三角形の突帯に、V字状のしっかりととした刻目をもつ。外面はナデ調整で仕上げる。内面は工具による擦痕が認められる。430は、断面三角形の突帯が横に張り出す。突帯に、V字状の刻目が斜めにつけられる。

431～436は、口縁端部が先細りし、刻日をもつ突帯が口縁部より下がった位置に貼り付けられる深鉢である。これらは、比較的器壁が薄いものである。西区で出土した330,331と同様のものと考えられる。431は、突帯にO字に近いV字状の刻目をもつ。432は、下方に垂れるしっかりとV字状の刻目をもつ。433は、I字状の刻目がつけられる。434は断面三角形の突帯に、I字状の刻目がつけられる。435は、口縁部が欠損するが、外反し先細りするものと思われる。突帯にV字状の刻目をもつ。436は、風化が著しいが、突帯にV字状の刻目が認められる。

437～458は、無刻日の突帯が口縁部より下がった位置に貼り付けられる深鉢である。437は、かなり磨耗が著しい。小さい突帯が貼り付けられる。438は、断面三角形の低い無刻目突帯がつけられる。内



0 10cm

図138 東区出土弥生土器(1)

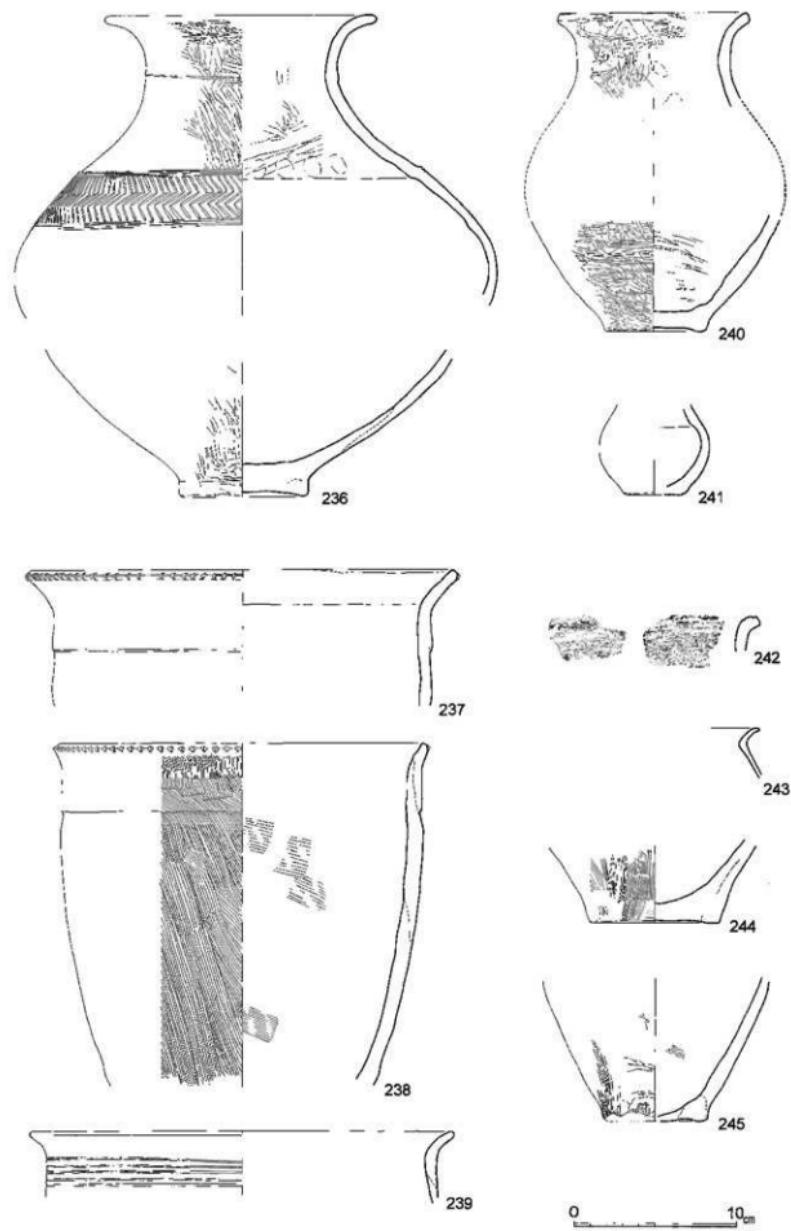


図139 東区出土弥生土器 (2)

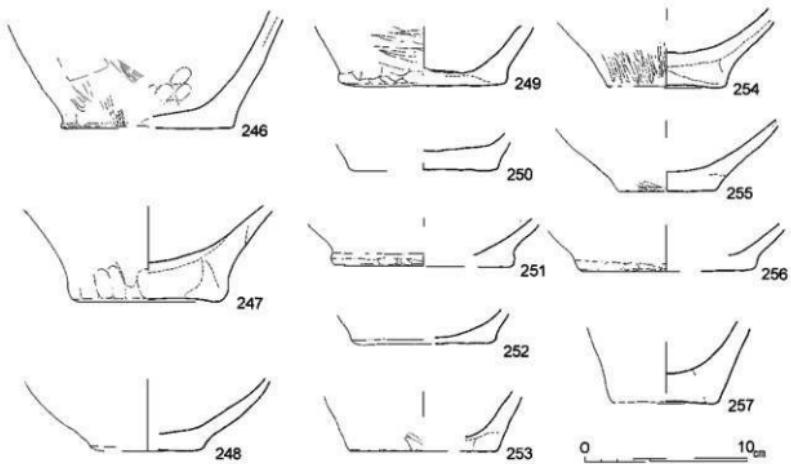


図140 東区出土弥生土器(3)

外面は、ミガキのような条痕が残る。439は、断面三角形の無刻目突帯をもつ。440は無刻目突帯が下方に垂れる。441は、断面三角形の無刻目突帯がつけられる。442は無刻目突帯に厚みをもつ。443は、断面三角形の無刻目突帯がつけられる。444は、断面三角形の小さな無刻目突帯をもつ。445は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。内面に条痕がわずかに残る。446は口縁部が欠損する。断面三角形の無刻目突帯をもつ。董の頸部片の可能性も考えられる。447は、丸みを帯びた断面台形状の無刻目突帯がつけられる。内外面ともに、工具による擦痕が認められる。448は、断面三角形の無刻目突帯をもつ。449は、下方に垂れる無刻目突帯が貼り付けられる。外面は、ナデ調整あるいは工具による調整が考えられる。内面は一枚貝条痕が認められる。450は、断面三角形を呈する小さめの無刻目突帯が貼り付けられる。451は、450と同様な器形を呈するものであろう。断面三角形を呈する小さめの無刻目突帯をもつ。452は董になるか。小さめの無刻目突帯が貼り付けられる。内外面ともに、ナデ調整が施される。453は、低めの無刻目突帯が横に張り出す。外面は、全体的に工具による擦痕がみられる。内面は、ケズリ調整のちナデ調整で仕上げる。454は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。455は、無刻目突帯の上部をナデ調整により、やや平坦に仕上げる。456は、断面三角形の無刻目突帯が貼り付けられる。457は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。458は、無刻目突帯の上部を、ナデ調整によりやや平坦に仕上げる。

459～498は、無刻日の突帯が口縁部に接するよう

に貼り付けられるものである。459は、低い無刻目突帯が下方に垂れる。460は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。内外面に、工具による擦痕が残る。461は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。462は、横に張り出す無刻目突帯により、口縁端部がやや平坦になる。内外面ともにナデ調整が施される。463～465は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。466は、断面三角形の無刻目突帯が貼り付けられる。467は、口縁部と横に張り出す無刻目突帯の境が、ナデ調整によりややくぼむ。468は、無刻目突帯が下方に垂れる。469は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。外面は条痕調整で、内面は条痕調整のちナデ調整で仕上げられる。470は、無刻目突帯が下方に垂れる。471は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。472は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。473は、口縁端部が無刻目突帯とともに平坦に仕上げられる。474は、無刻目突帯が口縁端部にかぶせるように貼り付けられる。口縁端部が、ナデ調整により平坦に仕上げられる。475は、断面三角形を呈する無刻目突帯をもつ。476は、断面三角形を呈する無刻目突帯が、口縁部にかぶせるように接合する。477は、下方に垂れる無刻目突帯がつけられる。器厚も突帯も厚みがある。478は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。外面は、突帯下部に条痕がわずかに残る。479は、下方に垂れる無刻目突帯がつけられる。内外面ともにナデ調整で仕上げる。480は、丸みを帯びた無刻目突帯をもつ。481は、断面三角形を呈する無刻目突帯をもつ。内外面ともに、粗いナデ調整あるいは条痕調整で仕上げる。482は、無刻目突帯がやや丸

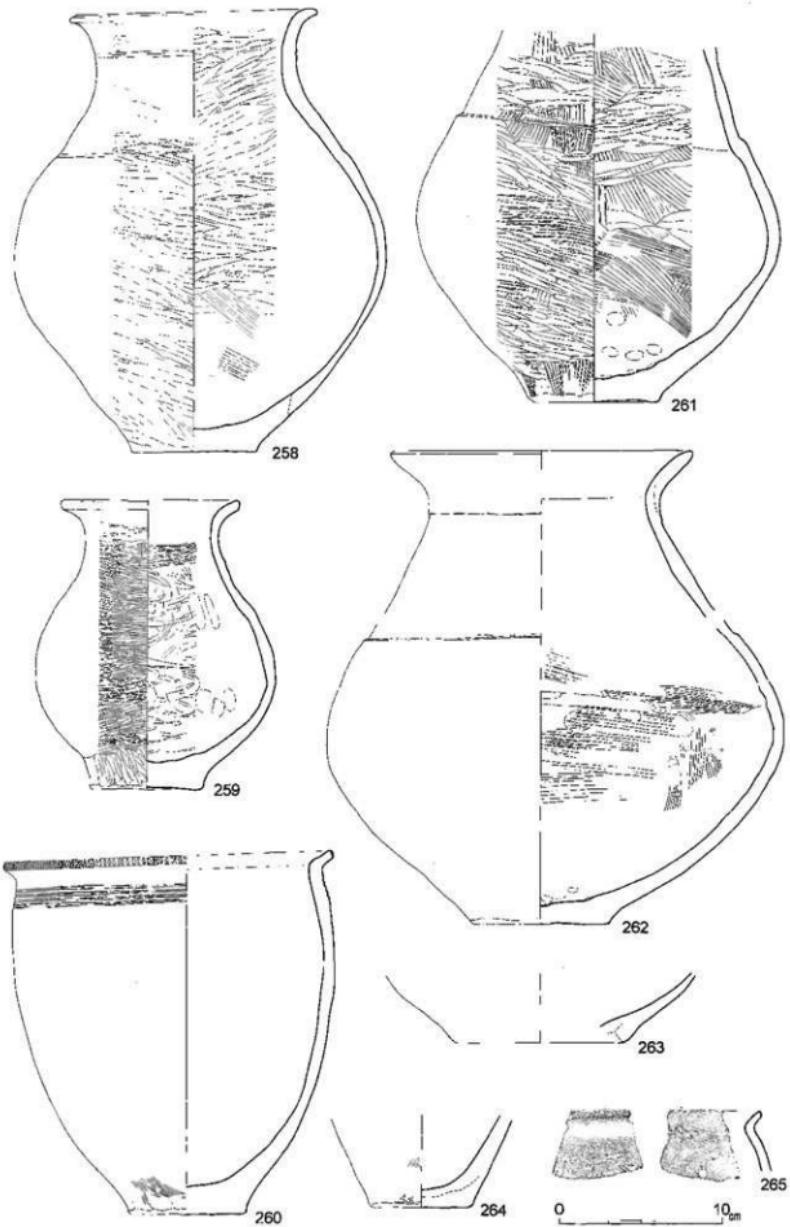


図141 北東区出土弥生土器

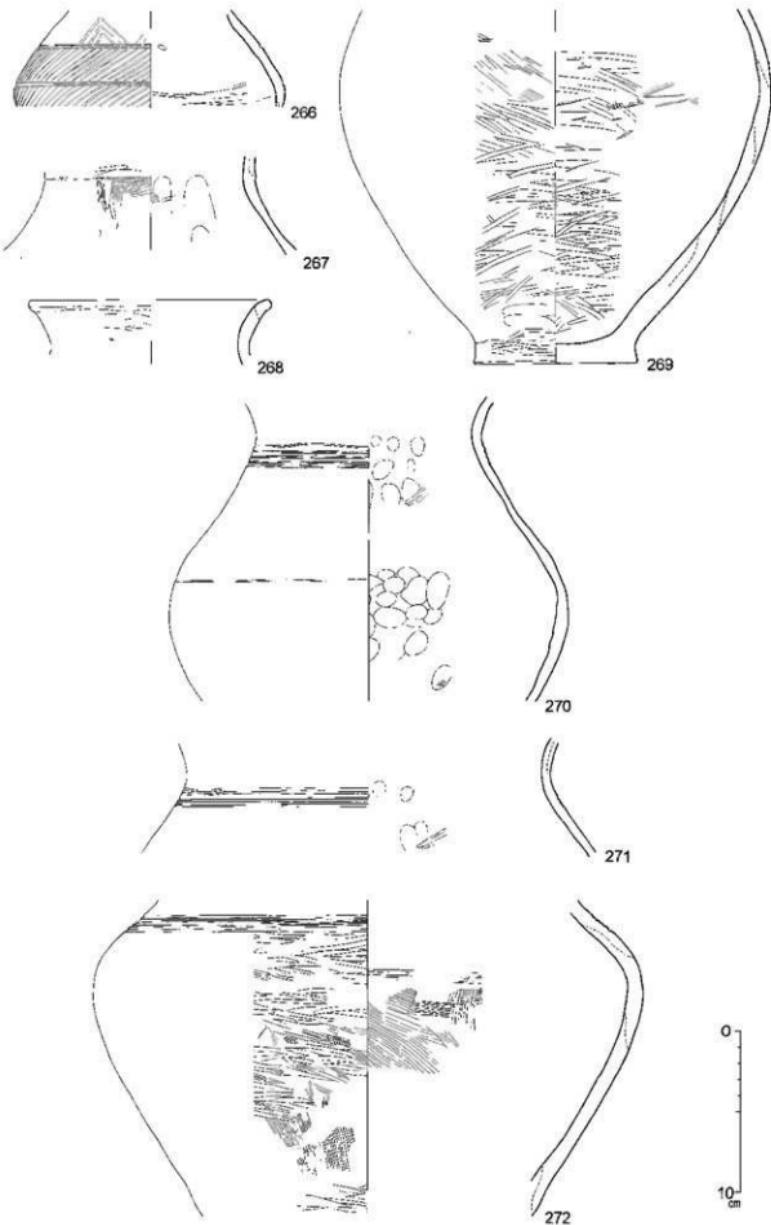


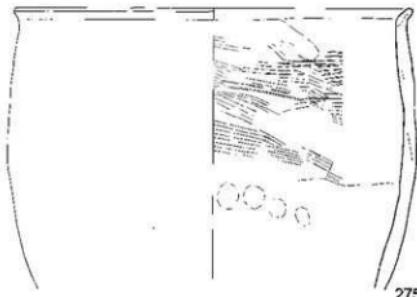
图142 B·C区出土弥生土器(1)



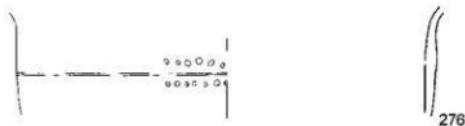
273



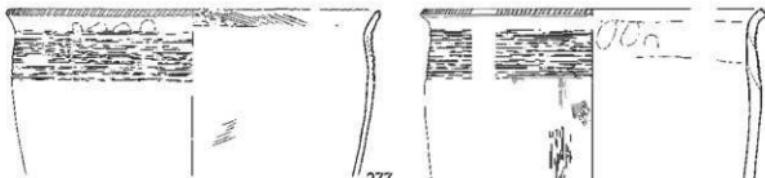
274



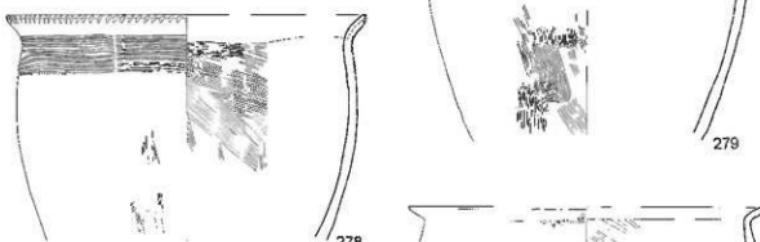
275



276



277



278

280

0 10 cm

图143 B·C区出土弥生土器 (2)

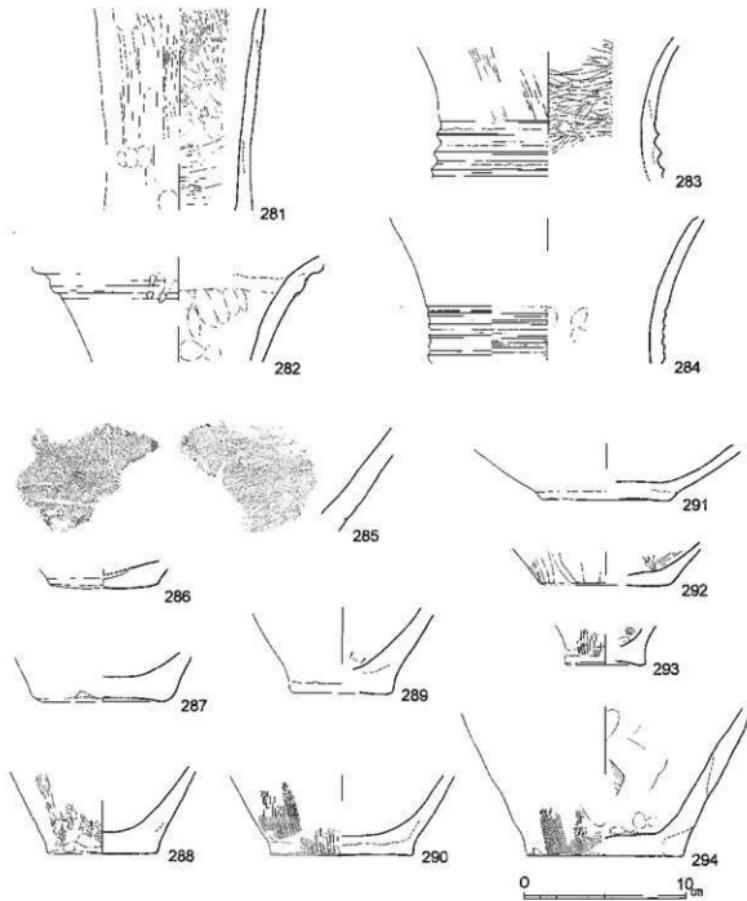


図144 B・C区出土弥生土器(3)

みをもつ断面三角形を呈する。外面は条痕調整で、内面はナデ調整で仕上げる。

483～498は、工縁状を呈する無刻目突帯をもつ。483は口縁部と無刻目突帯が、ナデ調整により平坦に仕上げられる。外面は条痕が残る部分が認められる。484は、厚みのある断面三角形の無刻目突帯をもつ。外面は条痕調整で、内面はナデ調整で仕上げる。485は、無刻目突帯が厚みのある断面三角形を呈する。486は、下方に垂れる無刻目突帯をもつ。突帯に厚みがある。487は厚みのある無刻目突帯が、口縁部にかぶせるようにつけられる。外面は条痕調整で、内面はナデ調整で仕上げる。488は、厚みの

ある無刻目突帯を口縁部にかぶせるように接合する。489は、厚みのある無刻目突帯を口縁部にかぶせる。外面は条痕調整で仕上げる。490は、丸みを帯びた厚みのある無刻目突帯をもつ。口縁部と突帯が、ナデ調整により平坦に仕上げられる。491は厚みのある無刻目突帯が、口縁部にかぶせるようにつけられる。492は、厚みのある無刻目突帯を口縁部にかぶせる。端部が平坦に仕上げられる。493は、窓部に突帯を接合して口縁部とするものである。端部をナデ調整により平坦に仕上げる。494は口縁部にかぶせるように、厚みのある無刻目突帯をつける。端部が平坦に仕上げられる。495は、頭部に突帯を

貼り付けて口縁部とするものである。口縁部がやや逆L字状を呈する。**496**は、口縁部に厚みのある断面三角形の無刻目突帯をもつ。端部が平坦に仕上げられる。**497**は、口縁部に厚みのある断面三角形の無刻目突帯がつけられる。端部が平坦に仕上げられる。**498**は、かなり厚みのある無刻目突帯をもつ。**499**は突帯の破片である。突帯の上部に刺突が施される。

**500**～**502**は、突帯に施文があるものである。**500**は、頸部に突帯を貼り付けて口縁部とする。端部に平坦面をもたせ、3条1単位の山形文が施される。突帯に斜方向の刻目がつけられる。外面は条痕調整で仕上げる。**501**は口縁端部が平坦に仕上げられ、斜行文が施されるものである。**502**は内傾する口縁部である。口縁部に厚みのある無刻目突帯をもつ。沈線文が端面につけられる。**503**は口縁部より下がった位置に、断面三角形の無刻目突帯をもつ。突帯の上下に強いナガ調整を加えてくぼませる。**504**は、波状口縁をもつ深鉢である。口縁部より下がった位置に、丸みを帯びた断面三角形の無刻目突帯をもつ。**505**は浅鉢か。**506**は、波状口縁をもつ深鉢である。口縁部より下がった位置に、比較的低い無刻目突帯がつけられる。**507**は、深鉢の胴部に無刻目突帯が貼り付けられるものである。突帯上部に、沈線文が認められる。**508**は口縁部付近に、渦文状を呈する隆帯が貼り付けられる。器種は深鉢か浅鉢が考えられる。**509**は、無刻目突帯が口縁部に接して貼り付けられる深鉢である。下方に垂れる突帯の下に、斜行する突帯をもつ。内面に工具による擦痕が残る。**510**は浅鉢の胴部と思われる。2条の平行する突帯と斜行する突帯を組み合わせて貼り付けるものである。**511**は、浅鉢の胴部と思われる。**510**と同一個体の可能性がある。2条の平行する突帯が貼り付けられる。

**512**～**515**は、器壁に沈線文が施される。胎土は、突帯文土器と類似する。施文の様子から弥生時代前期の要素を含むものと思われる。**512**は、口縁部が内傾する鉢の口縁部と思われる。口縁端部に、3条1単位の山形文をもつ。内外面には、継及び横沈線がみられる。**513**は、壺または鉢の頸部と思われる。4条1単位のヘラ描き沈線文が施される。**514**、**515**は、壺の頸部と思われる。2条の横沈線の下に、胴部に向かって複数の継沈線を描く。**516**～**519**は、頸部または胴部に横沈線をもつ壺の破片である。**516**は口縁部にかけて内傾する壺である。頸部に2条1単位の横沈線が2単位施される。沈線は、先端の丸いものが使用されるようである。**517**は胴部で屈曲する壺である。頸部と胴部に、2条1単位の横沈線が施される。外面にミガキ調整が若干残る。内面は頸部にミガキ調整が、胴部にケズリ調整が残る。**518**も壺の破片である。頸部に4条の横沈線が施さ

れる。胴部は欠損のためはっきり分からぬが、少なくとも3条以上の横沈線を描くと思われる。外面は、胴部に横方向のミガキ調整が確認できる。**519**は胴部で強く屈曲し、頸部がハの字状に立ち上がる壺の破片である。胴部に、凹線とも呼べる幅広い横沈線が1条施される。外面は、指頭圧痕とミガキ調整が確認できる。内面は、胴部にケズリ調整が確認される。**520**は浅鉢の胴部と思われる。外面は、胴屈曲部に1条の横沈線が施される。さらに頸部にむけて、2条の継沈線が描かれる。その横に、横沈線をかこむU字状の沈線がみられる。**521**は小形の鉢か。胎土は、突帯文土器と類似する。口縁部付近に横沈線と継沈線が施される。**522**～**524**は、浅鉢の口縁部である。**522**は、口縁部内面をナデ調整によりくぼませる。内外面とともに、丁寧なナデ調整で仕上げる。**523**は、口縁端部を丸く仕上げるものである。内面はナデ調整である。**524**は、口縁端部をやや平らに仕上げるものである。**525**は壺の胴部片と思われる。**516**～**519**と同類のものか。胴部に、1条の横沈線が施される。内外面とともに、風化が著しく調整は不明である。

**526**～**531**は、突帯をもたない深鉢の破片である。突帯をもつ深鉢と併存するものである。**526**は、波状を呈する口縁部をもつ。内面は、粘土紐接合時にできた稜が数条認められる。**527**は、口縁部内側が剥離欠損する。**528**は外面に工具による擦痕が認められる。内面はナデ調整が施される。**529**は、内外面とともにナデ調整で仕上げる。**530**は、外面にナデ調整による稜が数条認められる。**531**は、内外面ともに粗いナデ調整が施される。**532**は、小形の鉢の胴部片である。内外面とともに、ナデ調整で仕上げる。

**533**～**536**は、浅鉢の底部片と思われる。**533**は、底部中心部が欠損する。内外面ともにナデ調整が施される。**535**は、底部中心部が欠損する。**536**は、丸底を呈する。外面はナデ調整である。内面は、ナデ調整による稜が数条認められる。

**537**～**547-2**は、底鉢片である。**537**は、やや丸みを帯びる底部である。内外面とともに、ナデ調整で仕上げる。**538**～**543**は、いずれも風化が著しいか、内外面ともにナデ調整である。**544**は底面に刺突が巡らされる。内面にモミ压痕らしきものが確認される。**545**は、外面に工具による擦痕がみられる。**546**は、底部の一部が欠損する。外面は、工具の痕跡が確認される。**547**は、内外面とともにナデ調整が施される。**547-2**は、底部と胴部の境に、比較的強いくびれがある。内外面とともに、ナデ調整で仕上げる。**548**は壺または深鉢の口縁部である。口縁端部を軽く外側に折り曲げる。内外面とともにナデ調整である。**549**は、口縁端部を軽く外側に折り曲げる。端部に、刻目がわずかに残る。頸部に軽く屈曲をもつ。肩曲部

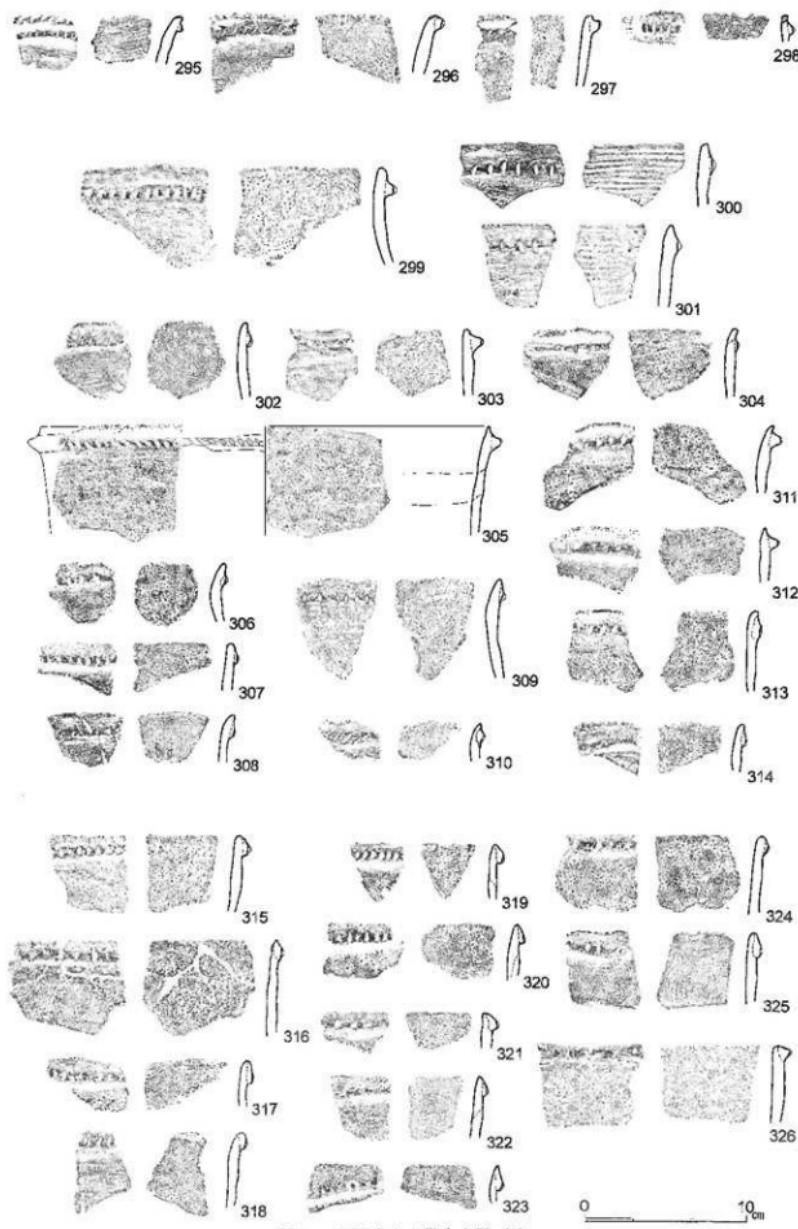


图145 西区出土突带文土器 (1)

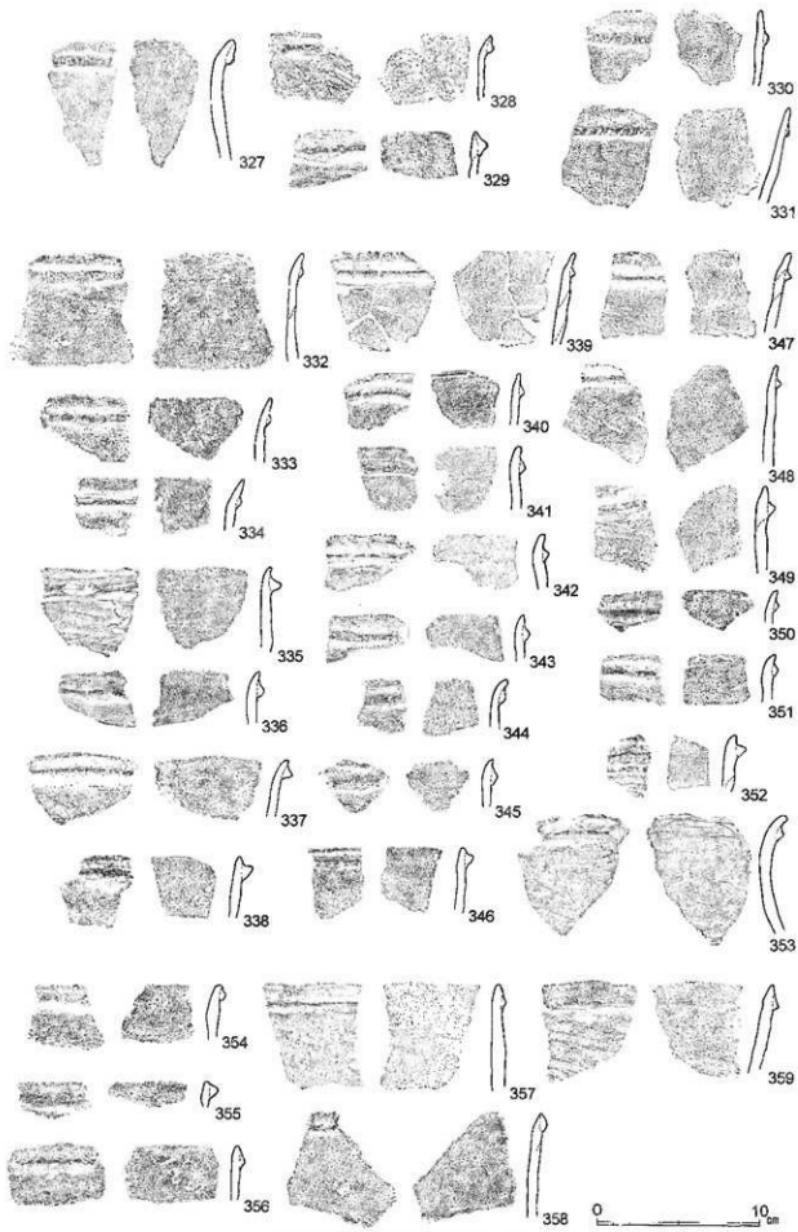


图146 西区出土突带文土器 (2)

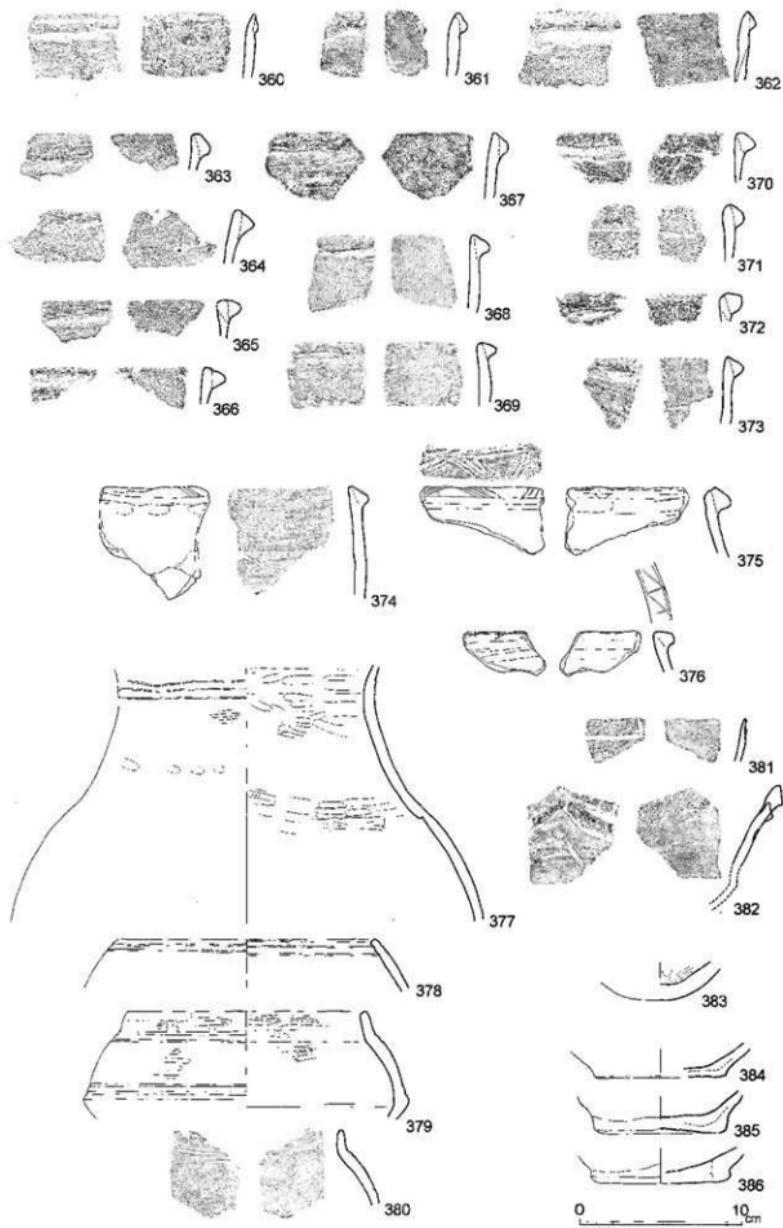


图147 西区出土突带文土器 (3)

より下に、ハケメ調整の痕跡が確認される。

**O・P・Q区：遺構に伴わない遺物の出土状況** 調査区の北半から土器・石器が出土している。縄文時代晚期から弥生時代中期の土器が出土している。石器には、石鉋、磨製石斧などがある。弥生時代前期の壺は、ほとんどが墓群の周辺から出土している。しかし、258は、まったく墓が存在しなかった「長者の墓」の北西から出土している。突帯文土器は、ほとんどが墓群の周辺から出土しているが、562は、「長者の墓」の西から出土している。

**O・P・Q区：遺構に伴わない弥生土器(図141)**

258は、比較的大きな壺である。口縁部と頸部の境に沈線が、頸部と胴部の境に段をもつ。外面は、全体的にミガキ調整で仕上げる。内面は、頸部から胴部上半部にかけて、ミガキ調整である。胴部下半部から底部にかけては、ハケメ調整が若干残るがナデ調整で仕上げる。259は、墓群の北側で出土している。小形の壺である。頸部または胴部に、沈線や段はもない。他のものに比べて底部に厚みがある。外面は、粗いミガキ調整のうちに細かいミガキ調整が施される。頸部に若干ハケメ調整が残る。内面は、ナデ調整のうち大難把なミガキ調整が施される。

260は、頸部がくの字に外反する壺である。口縁端部にヘラによる刻目がつけられる。頸部に、4条のヘラ描き沈線文を描く。底部外向付近に、若干ハケメ調整が残るが、内外面ともに最終的にはナデ調整で仕上げる。底面に、モミ丘痕が3点確認できる。

261は、口縁部が欠損する壺である。頸部と胴部の境に段が形成される。内外面ともに、ハケメ調整が残る部分が多くみられ、ミガキ調整が難であることが分かる。262は、比較的大きな壺である。口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境に段をもつ。内外面ともに風化している。263は、壺の底部片と思われる。264は、弥生中期以降の壺の底部とと思われる。外面にハケメ調整が若干残る。265は、弥生中期の壺の口縁部である。外面にわずかにハケメ調整が残る。

**O・P・Q区：遺構に伴わない突帯文土器(図157)**

550～561は、深鉢の口縁部である。550は、口縁部より下がった位置に、刻目をもつ突帯が貼り付けられる。刻目は、V字状のやや浅めで粗雑なものである。551は口縁部に接するように、刻目をもつ突帯がつけられる。刻目は、V字状を示す。552は、I字状の細い刻目をもつ突帯が口縁部に接する。553は、口縁部に接するように、刻目をもつ突帯が貼り付けられる。また、この突帯から分岐して斜方向に垂下する刻目のある突帯をもつ。外面に工具による擦痕が残る。554は口縁部に接するように、V字状の刻目をもつ突帯が貼り付けられる。

555は、口縁部が波状を呈する深鉢である。波状は、難なつくりではっきりとした単位は分からない。

口縁部より下がった位置に突帯をもつが、風化のため刻目は有無は不明である。556は、口縁部より下がった位置に、無刻目の突帯が貼り付けられる。557は、口縁部より下がった位置に無刻目突帯をもつ。突帯の上端部をナデ調整により平坦に仕上げる。558は、口縁部が玉縁状を呈するものである。厚みのある無刻目突帯が、口縁部に接する。559は、口縁部より下がった位置に無刻目の突帯が貼り付けられる。内外面ともにナデ調整で仕上げる。560は、口縁部が玉縁状を呈するものである。厚みのある無刻目突帯が、口縁部にかぶせるようにつけられる。

561は小形の鉢の口縁部か、頸部に1条の横沈線を施したのち、口縁端部から複数の縦沈線を描く。562は、短頸壺または浅鉢である。口縁部は、波状を呈する可能性が考えられる。頸部と胴部に2条1単位の横沈線が施される。563は浅鉢の底部と思われる。外面はケズリ調整で、内面はナデ調整で仕上げる。

**B・C区：遺構に伴わない遺物の出土状況** 溝あるいは縄文後期土器包含層を掘り下げる以前に、出土したものである。縄文時代晚期から弥生時代中期にかけての土器が出土している。石器もある。

**B・C区：遺構に伴わない弥生土器(図142～144)**

266は弥生前期の壺片である。頸部に、3条1単位の山形文が施される。胴部に、2条の横沈線とその間に斜行文が描かれる。胴部内面に、横方向のハケメ調整が残る。267は弥生前期の壺の頸部片である。頸部にわざかな段をもつ。頸部内外面に、ミガキ調整が残る。頸部内面には、しぶり目も残る。

268は弥生前期の壺の口縁部片である。頸部に、段や沈線はもたないものと思われる。外面は、わずかにミガキ調整が残る。269は、弥生前期の壺片である。上半部が欠損する。内外面ともに、ハケメ調整のうちミガキ調整で仕上げる。270は弥生前期の壺片である。頸部に、4条のヘラ描き沈線文が施される。胴部に、かすかな沈線が確認される。内面は指頭丘痕がよく残る。271は弥生中期の壺片と思われる。頸部に、2条の櫛描文と3条の櫛描文を組み合わせて5条の櫛描文を描く。内面にわざかにミガキ調整が残るほかは、風化のため調整は不明である。

272は弥生中期の壺片である。271と同一個体の可能性が高い。頸部に5条の櫛描文をもつ。胴部にかけて、ミガキ調整が施される。内面は、胴部中位にハケメ調整がよく残る。273は弥生前期の壺片である。外面は、わずかにハケメ調整が確認される。内面は、ミガキ調整で仕上げる。口縁部内面は、すずの付着のため黒褐色を呈する。274は弥生前期の壺片である。口縁部がくの字に外反する。口縁部と頸部の境に段が形成される。外面はハケメ調整で、内面はナデ調整で仕上げる。275は弥生前期の壺片である。

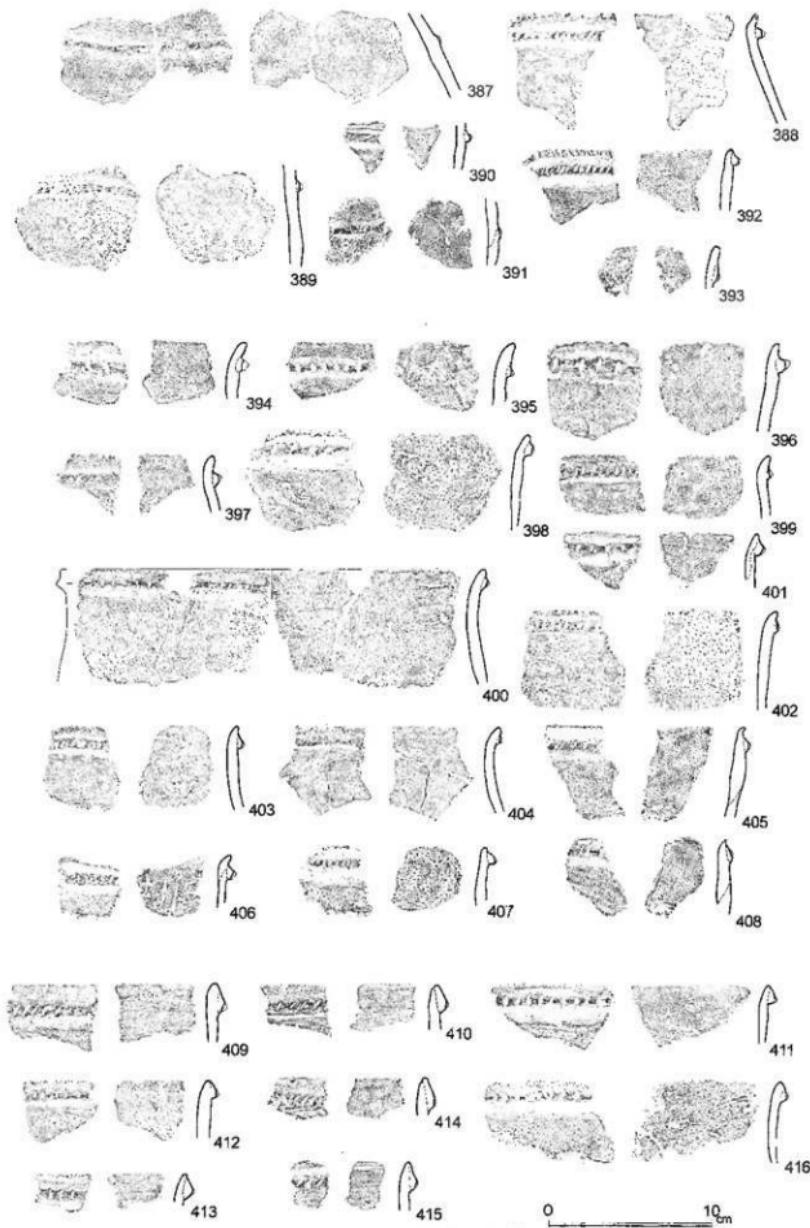


図148 東区出土突帯文土器 (1)



図149 東区出土突帯文土器（2）

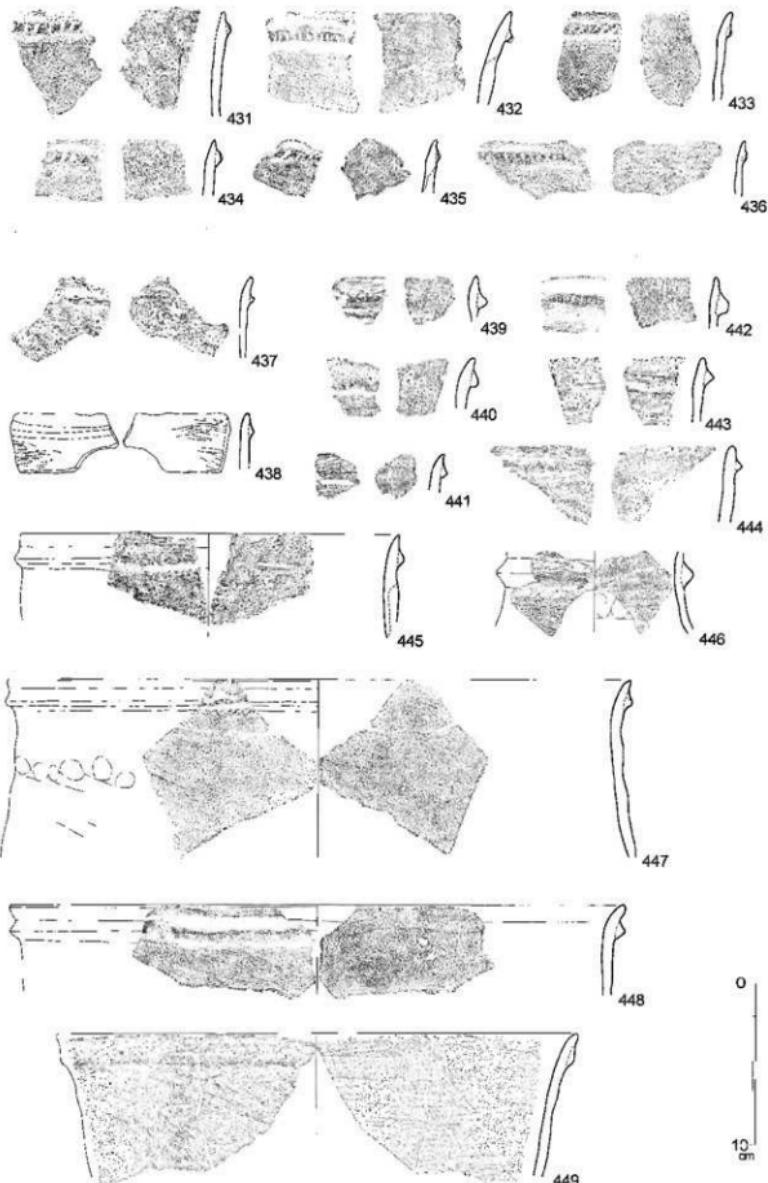


図150 東区出土突帯文土器（3）

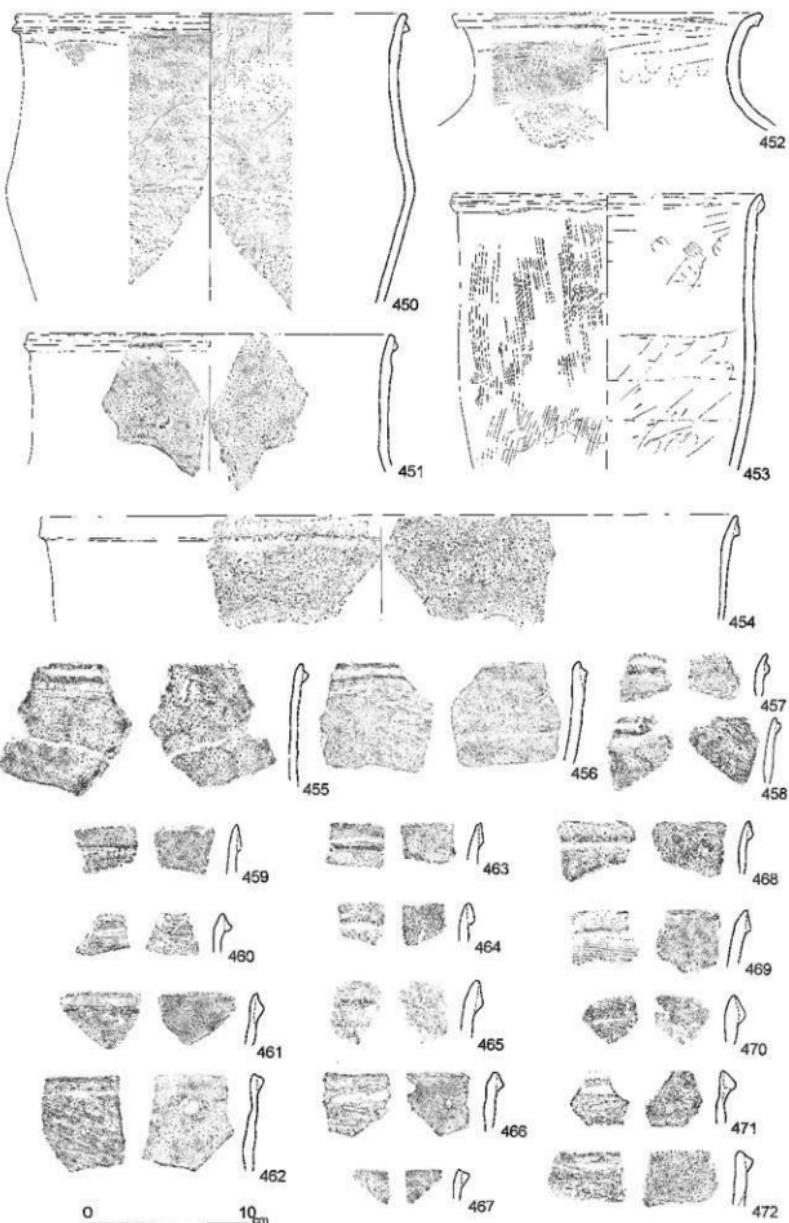
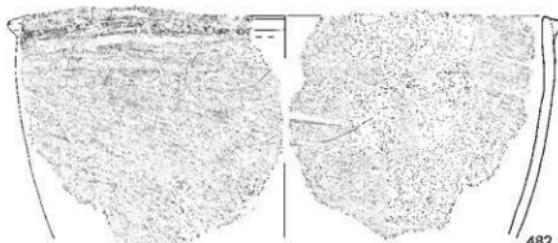
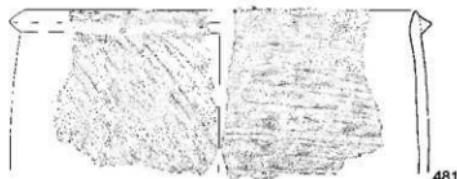
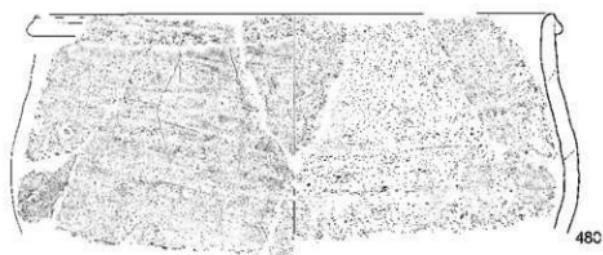
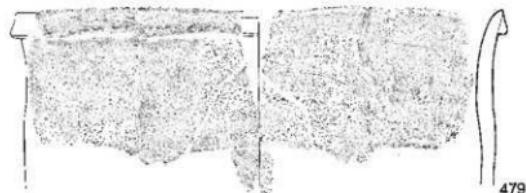


圖151 東區出土突帶文土器 (4)



0  
10 cm

図152 東区出土突帯文土器 (5)

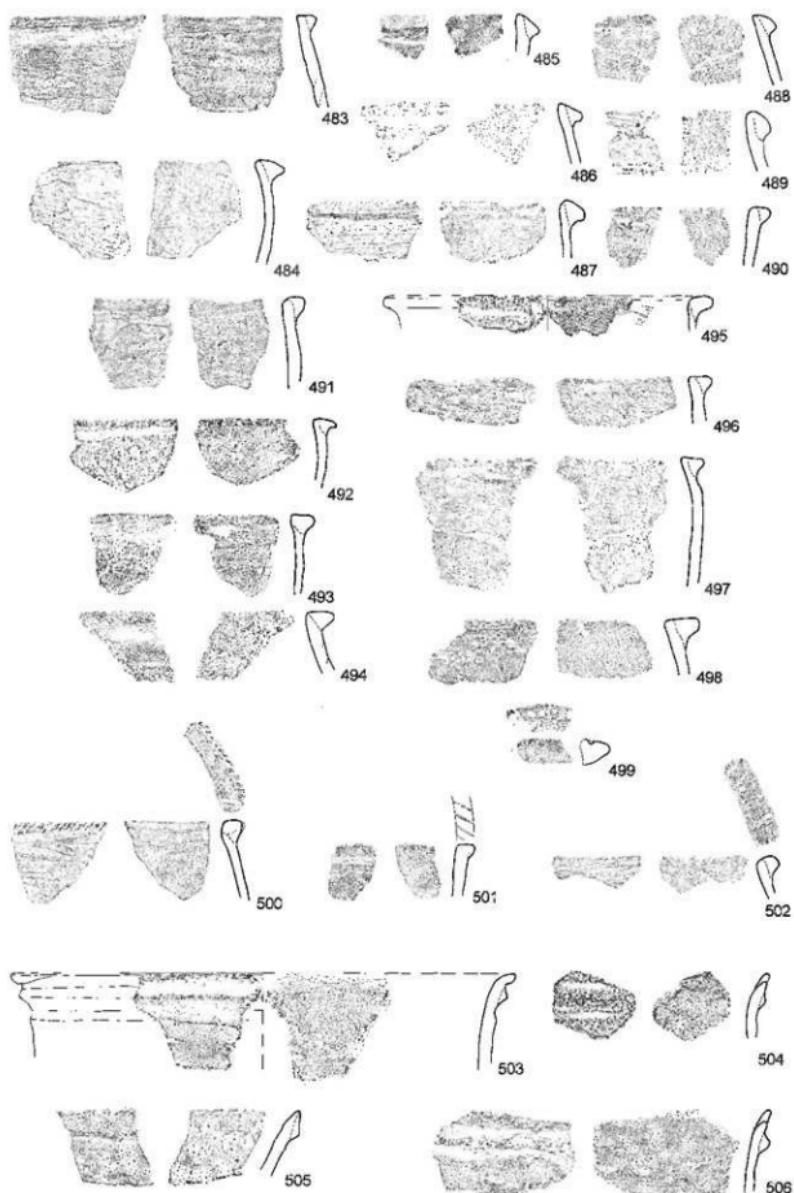


圖153 東区出土突帯文土器 (6)

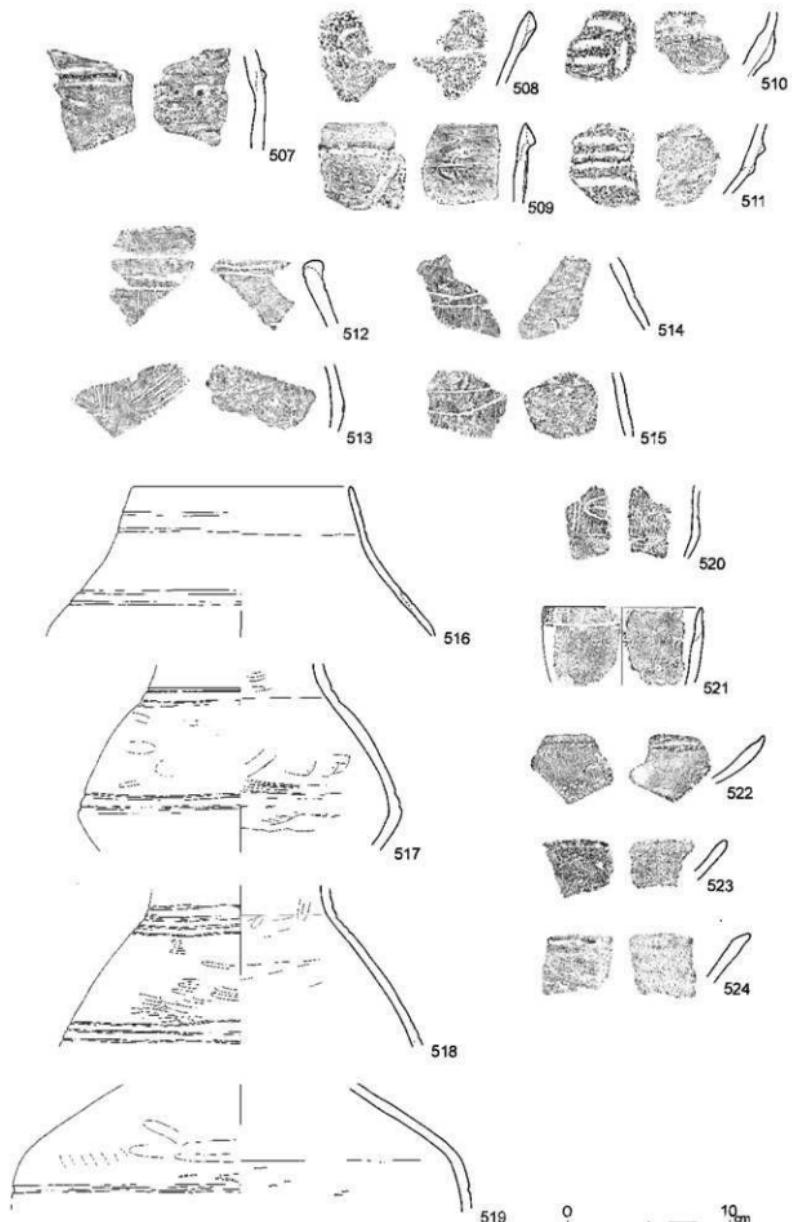


図154 東区出土突帯文土器 (7)

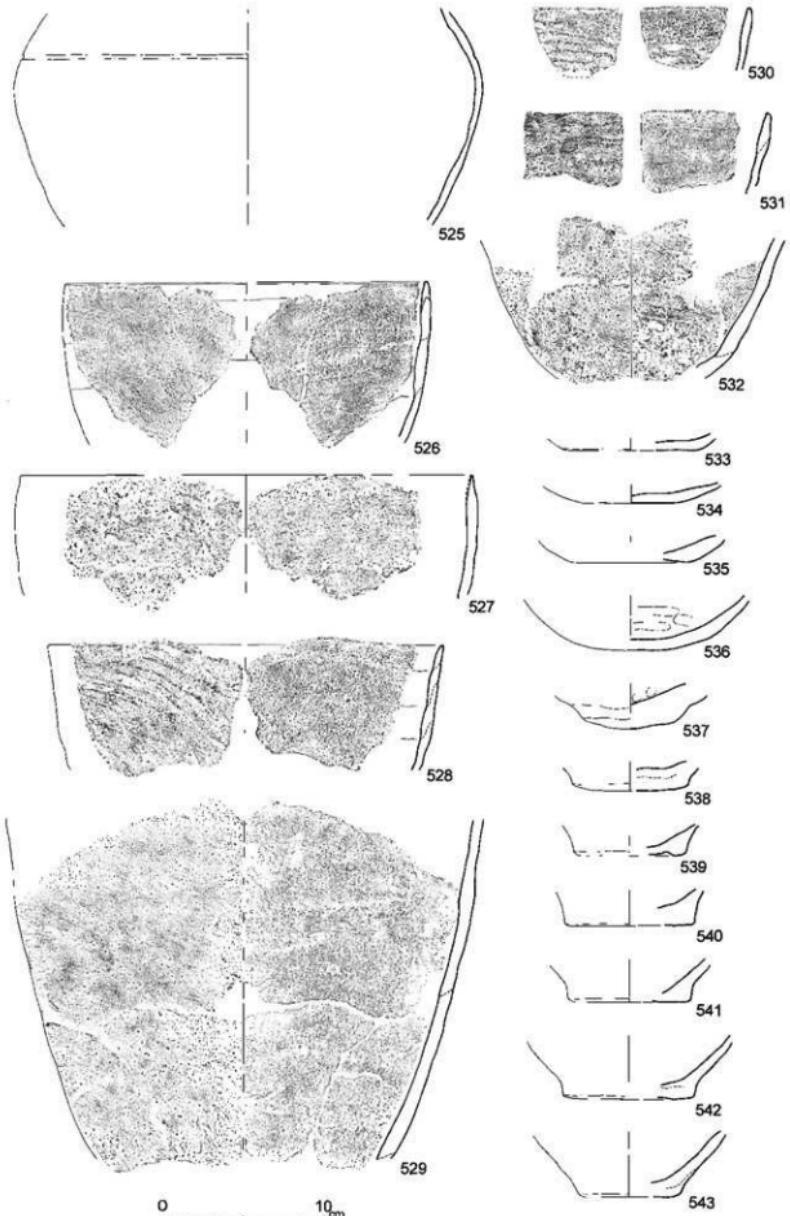


图155 東区出土突带文土器 (8)

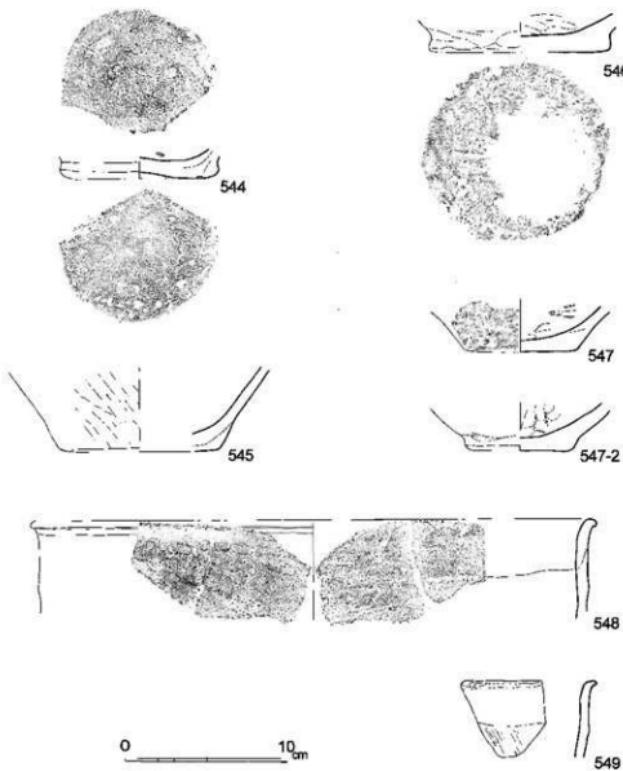


図156 東区出土突帯文土器(9)

口縁部がくの字に短く外反する。外面は風化のため調整不明である。内面は、胸部上半部にハケメ調整が残る。**276**は弥生前期の甕片である。頸部に1条の沈線文を配し、その上下に刺突文が施される。**277**は弥生前期の甕片である。口縁部を軽くくの字状に外反させる。口縁端部に、ハケメ原体による刻目をもつ。頸部に、9条のへら書き沈線文が描かれる。口縁部内面にハケメ調整がよく残る。**278**は弥生中期の甕片である。口縁部をくの字に外反させる。口縁端部は刻目をもつ。頸部は、4条1単位の櫛描文が2単位施される。胸部外面に、ハケメ調整が若干残る。胸部内面は、上半部にハケメ調整が残る。**279**は弥生中期の甕片である。口縁部をくの字に外反させる。口縁端部に、ハケメ原体による刻目をもつ。頸部は、8条1単位の櫛描文を2単位組み合わせて、13条の櫛描文を描く。外面はハケメ調整で、内面はナデ調整で仕上げる。**280**は弥生中期の甕片

である。口縁部をくの字に外反させる。内外面にハケメ調整がわずかに残る。**281**は弥生中期のコップ形の土器である。内外面は、ミガキ調整で仕上げる。**282**は弥生中期の壺の口縁部片である。2条の突帯の上から、2本の棒状浮文が施される。**283**は弥生中期の壺の頸部片である。頸部に、3条の断面三角形の突帯が貼り付けられる。口縁部にかけて、ハケメ調整がわずかに残る。内面はミガキ調整で仕上げる。**284**は、弥生中期の壺の頸部片と思われる。頸部に5条の凹線が施される。風化のため、内外面の調整は不明である。**285**は弥生前期の胸部の下部である。外面は、2条の貝殻沈線文またはハケメ原体による施文が施される。内面はハケメ調整で仕上げる。

**286～294**は底部である。**288**、**290**、**293**、**294**は、壺の底部片と思われる。

**B・C区：遺構に伴わない突帯文土器(図158, 159)**  
**564**は、深鉢の胸部と思われる。胸部に、刺目を

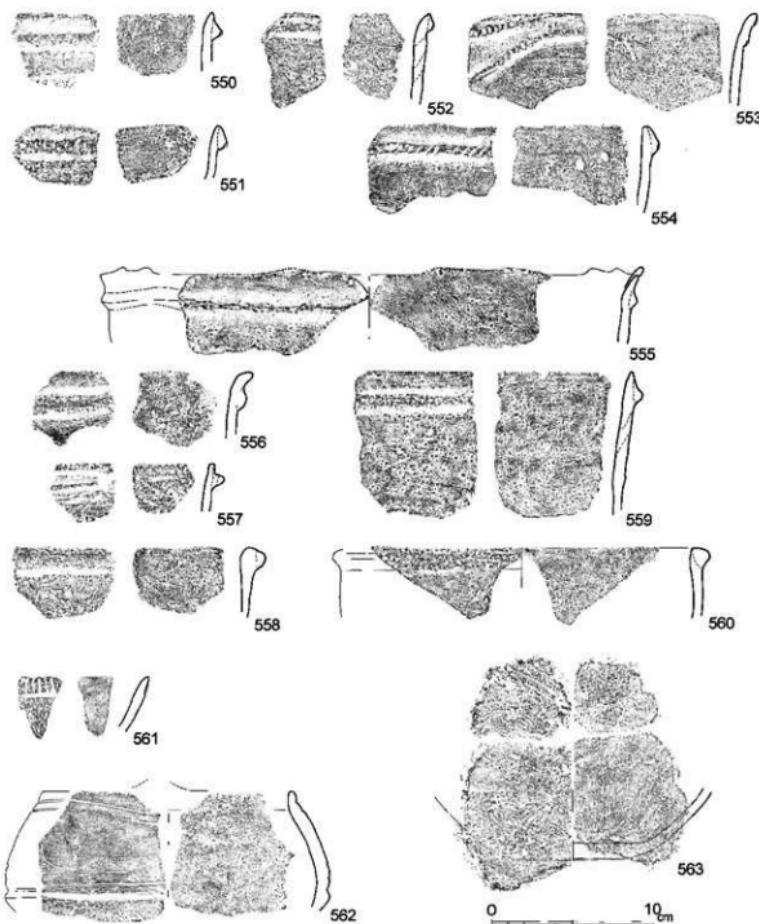


図157 北東区出土突帯文土器

もつ断面三角形の突帯が貼り付けられる。565～573は、口縁部より下に刻目のある突帯をもつ深鉢である。565は、下方に垂れる突帯にかなり深い刻Ⅱがつけられる。566は、O字状の刻目をもつ突帯が横に突出する。567は、刻目をもつ突帯がやや下方に垂れる。568は、わずかに口縁部より下に貼り付けられた位置に突帯がつけられる。低い突帯に、刻目をもつ。569は、下方に垂れる突帯に刻目をもつ。570は、丸みを帯びた断面台形状の突帯に、I字状の刻目がつけられる。571は、丸みを帯びた断面台形状の突帯に、やや斜めの細い刻目をもつ。572は、

口縁部にかぶせるように粘土紐が貼り付けられる。その後、突帯が口縁部より下に形成される。突帯には、斜めの細い刻目をもつ。573は、口縁部にかぶせるように粘土紐が貼り付けられる。その後、突帯が口縁部より下に形成される。刻目をもつ突帯が下方に垂れる。

574～581は、無刻目突帯が口縁部より下に貼り付けられる深鉢である。574は、断面三角形の無刻目突帯をもつ。突帯下に穿孔がある。575は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。576は、刻目をもたない突帯がやや下方に垂れる。内外面とも



图158 B·C区出土突带文土器 (1)

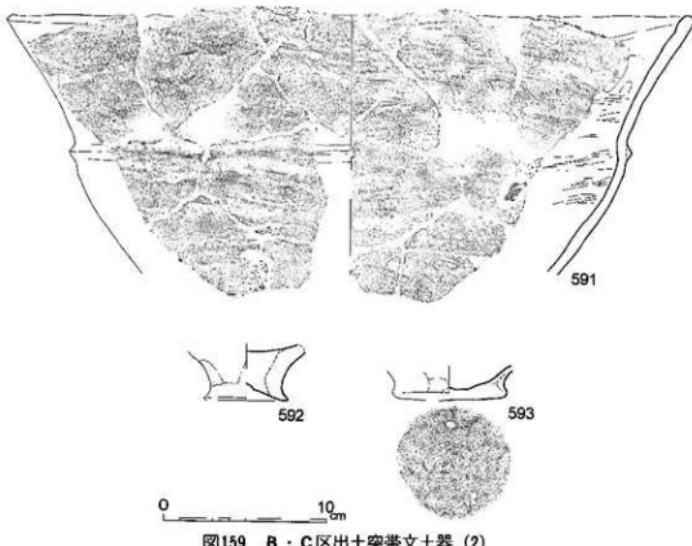


図159 B・C区出土突帯文土器 (2)

に、工具による擦痕が残る。577は、下方に重れる無刻目突帯をもつ。578は、無刻目突帯が断面三角形を呈する。579は、やや器厚が厚いものである。580は、断面三角形の無刻目突帯をもつ。581は、かなり厚みのある無刻目突帯をもつ。

582～587は無刻目突帯が、口縁部に接するように貼り付けられる深鉢である。582は、厚みのある断面三角形の無刻目突帯がつけられる。内面に、工具による擦痕がよく残る。583は、丸みを帯びた断面三角形の無刻目突帯をもつ。584～587は、口縁部が玉縁状を呈するものである。

588は、口縁部がわずかに波状を呈するものである。口縁部より下がった位置に、無刻目の小さな断面三角形の突帯が貼り付けられる。突帯の上下をナ

デ調整して強調する。内面にモミ压痕が残る。589は浅鉢の胴部と思われる。弧状を呈する降帯が貼り付けられる。590は、波状口縁をもつ深鉢片である。口縁部より下がった位置に、無刻目丸みを帯びた断面三角形を呈する突帯をもつ。外面は、工具による擦痕がよく残る。591は、胴部に無刻目突帯をもつ鉢である。胴部で削出し、口縁部にかけて外傾する。口縁部内面は、わずかに肥厚する。突帯は、刻目をもたない断面三角形を呈するものである。内面に、若干ミガキ調整が残る。

592、593は、底部片である。592は、底面にハの字状のくぼみをもつものである。593は、底面にモミ压痕が残る。

### 遺構に伴わない石器

以下に説明する石器は、伴って出土している土器から突帝文期から弥生前期のものと考えられる。

**石鎚** (図160-594~613) 木製品も含め53点出土しており、サスカイトと思われる1点を除き、全て黒曜石製である。うち20点を図示した。形状は四基無芯式がほとんどである。半基無芯式かと思われるものは数点あるが、611や613のように木製品も含まれ、はっきり分類できるものは2、3点である。石鎚の人気さは最大が長さ3.1cm、最小が長さ1.2cmである。基部の抉りは601のように深いものや、598、599のように深いものと色々である。

**石錐** (図160-614~616) 木製品を含め6点出土しており、3点を図示した。615はつまみ状の基部をもち錐部は主に片面への剥離で形成されている。616は棒状の石錐である。全面を丁寧に剥離し形成している。錐部先端は破損している。614は616と同じ棒状の木製品である。柳葉状石錐の可能性もある。614と616は黒曜石製である。

**平玉** (図160-617) 光沢のない黒色の石で表面は滑らかである。平面は梢円で、厚さは4.5mmである。

**石核・残核** (図160-618~622、図161-623、624) 16点出土しており、2点は整玉製で、残りは黒曜石製である。うち7点を図示した。最大のものは長さ8.7cm、幅5.8cm、厚さ3.8cmである。一部に自然面を残すものが多い。

**くさび形石器** (図161-625~629) 17点出土しており、そのうち5点図示した。全て黒曜石製である。上下辺に敲打痕がみられる。また剪断面を持つものもある。この他にも、後述する二次加工のある石器に分類した中にくさび形石器が分割されたものではないかと思われるものがいくつか見受けられた。

**スクレイパー** (図161-632、633) 8点出土している。632、633を含む7点が黒曜石製である。632は正面団左側縁が、633は正面団右側縁が刃部であり、ともに裏面には主要剥離面を大きく残している。

**二次加工のある剥片** (図161-630、631、634~641、650、651、654) 剥片に何らかの二次加工の施されたものは全部で143点ある。そのうちの13点を図示した。他の石器に分類できそうなものも含まれている。630、635、637はくさび形石器の可能性もある。631、636、654は石鎚の木製品にも似るが、631は右側縁につぶれ痕があり、654は石鎚とするには薄すぎる。634は片側縁にのみ剥離が施されている。638は大形の剥片で、正面団が主要剥離面である。一度の打撃で左側面も剥離したものと思われる。二次加工は右側縁に見られる。639は両側縁に加工が施されており、つぶれ痕もみられる。

**使用痕のある剥片** (図161-642~649、652、653)

剥片、チップ等で立った二次加工はないが、縁

辺に使用痕とみられる微細な剥離をもつものが多く見受けられた。そのような剥片は183点ある。ここでは10点図示した。全て黒曜石製である。

**石鏡** (図162-165~655~682) 完形及び完形に近いものは21点出土している。破損品、破片も含めると40点になる。内28点を図示した。約半数のものに摩耗痕がみられ、線状の擦痕を確認できるものもある。摩耗痕は刃部だけでなく器体上部にもみられる。着柄時にできたものか。形状は長方形か基部から刃部に向かって緩やかに幅の広がるものが多い。いわゆる彫形のものは658、662、672、673である。刃部は緩やかに弧を描くものが多い。最大のものは長さ22.7cm、幅8.75cm、厚さ2.8cm。最小のものは長さ10.5cm、幅6.5cm、厚さ1.8cmである。全体的に見ると、長さは12~19cm、幅は7~10cm、厚さは1.5~2.8cmの中にほとんどがおさまる。一番厚みのあるものは4.2cmになる。表面に自然面を残すものも多い。また石材によっては板状の素材から作られたものもある (670、675、663、667、680)。677については基部破片が見つかっており、接合するとはば完形になる。基部よりみると全長の5分の2のところで破損している。681のように器体が刃部側から大きく縱に削ぐように破損しているものもある。刃部の摩耗痕の上からの剥離も多く見られる。ある程度使いこまれた後の刃こぼれであろうか (658、672、673)。678は上部が刃部の可能性もある。厚さ3.35cmの厚手のものである。

**石包丁様石器** (図163-683~685) 683、684はともに石鏡を再利用したものと考えられる。683は上部縁辺と刃部の一部に、684は片面のみに摩耗痕がみられる。685は剥片を加工している。

**その他** (図165-686) 686は薄手の板状剥片の周囲に剥離が施されたものである。刃器であろうか。同じ石材を使った石鎚も多い。

**石剣様石器** (図165-687、図166-688) 同じ石剣に分類したが形態的には異なるものである。687は長さ19.4cm、幅5.6cm、厚さ2.8cmの縱長の石器である。全体的に風化している。全面に加工されているが、器面はでこぼこしている。下部に摩耗痕のようないくつかが見られるが風化のためかはっきりしない。あるいは石鎚か。688は長さ21.3cm、幅3.8cm、厚さ1.5cmの板状素材を利用した未製品である。ほぼ真ん中から割れています。正面団左側面は筋理面と思われる平坦な面であり、先端以外は加工されていない。加工は右側縁の表裏に施されているが、その途中に破損し廃棄されたものと思われる。

**磨製石斧** (図166-689~700、図167-701、702)

未製品、破損品も含め14点出土している。断面は梢円形のものが多い。研磨が施されているのは689~695である。689は風化により器面が剥離している

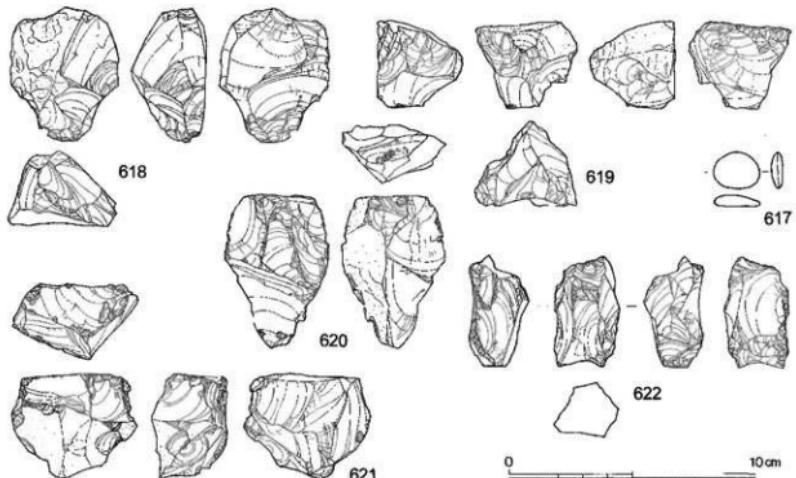
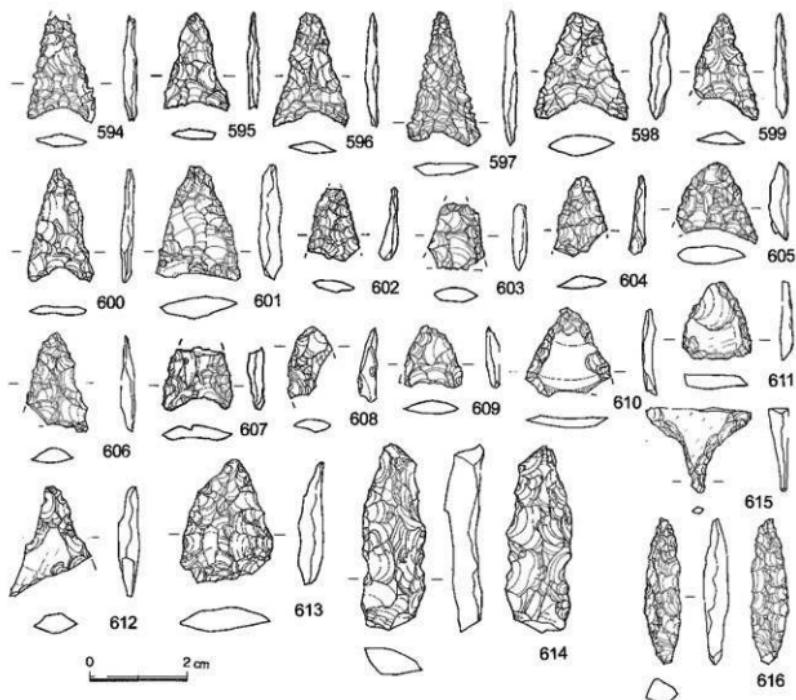


図160 突帯文期～弥生前期層出土石器 (1)

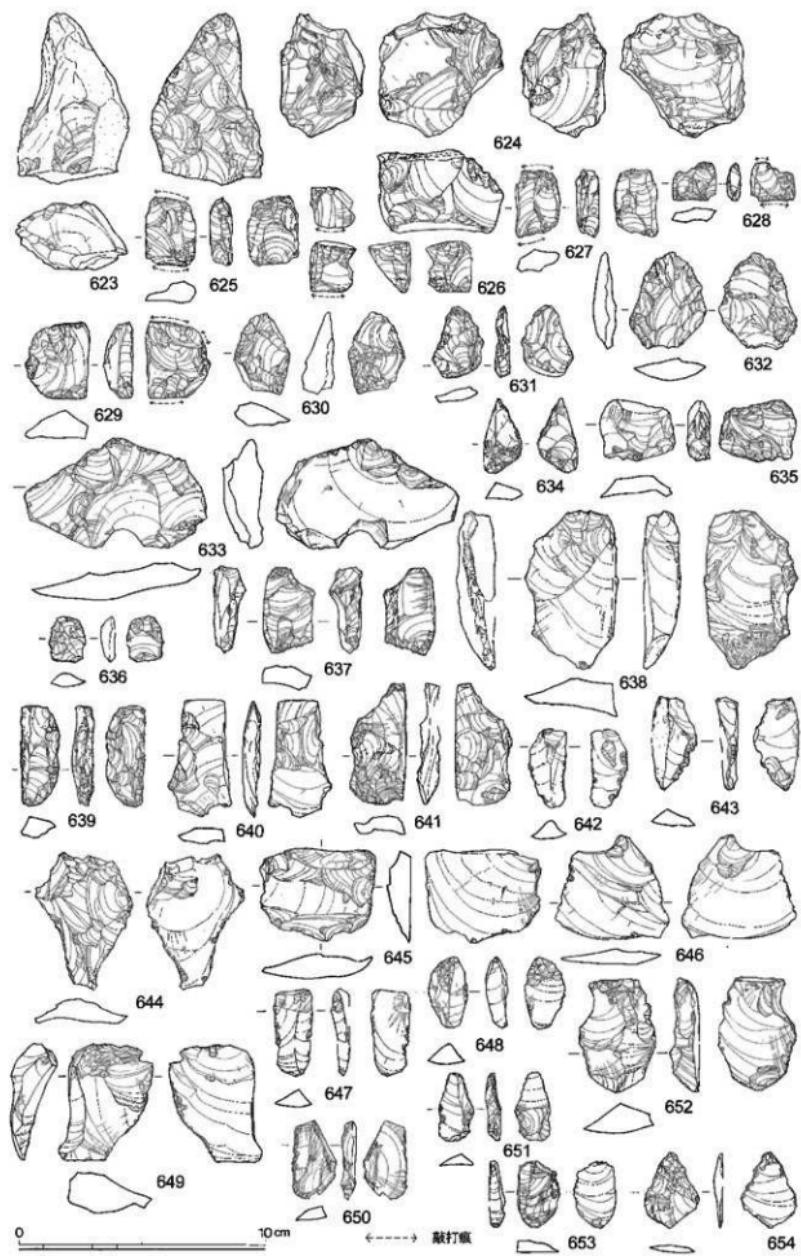


図161 突帯文期～弥生前期層出土石器 (2)

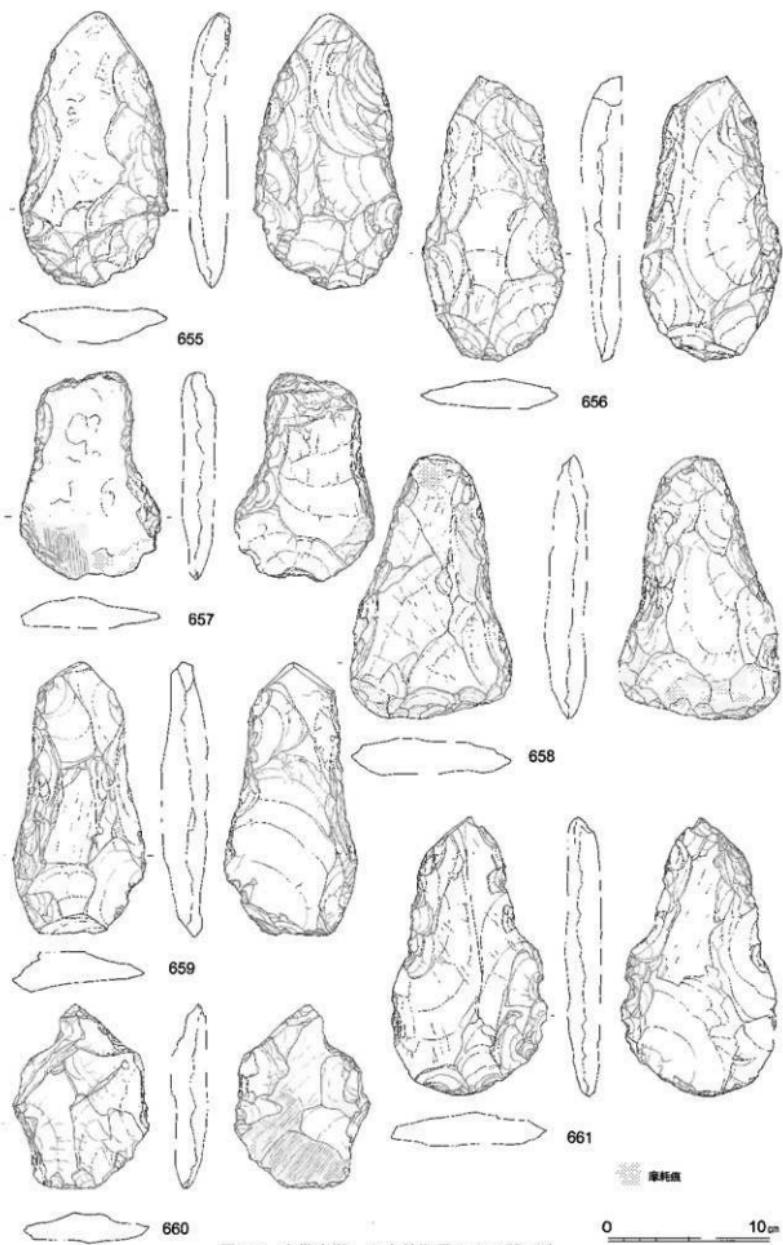


図162 突帯文期～弥生前期層出土石器 (3)

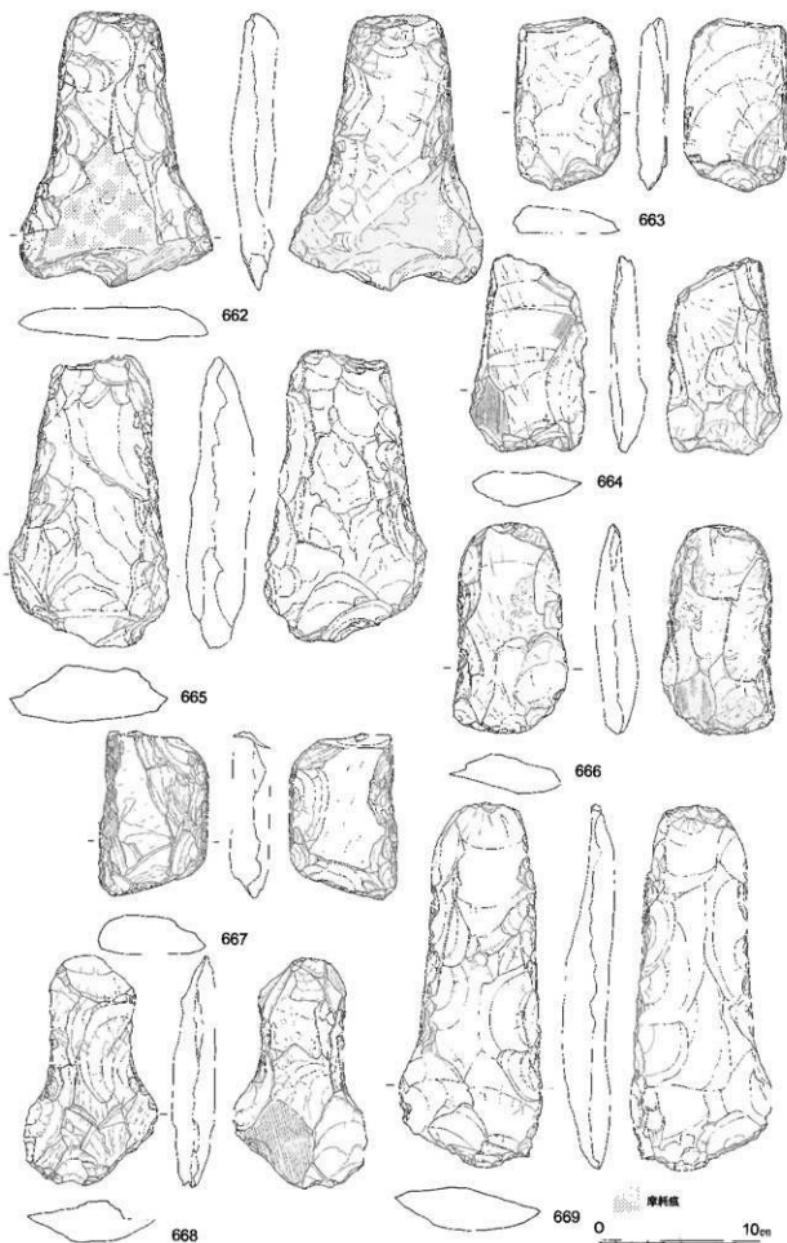


図163 突帯文期～弥生前期層出土石器（4）

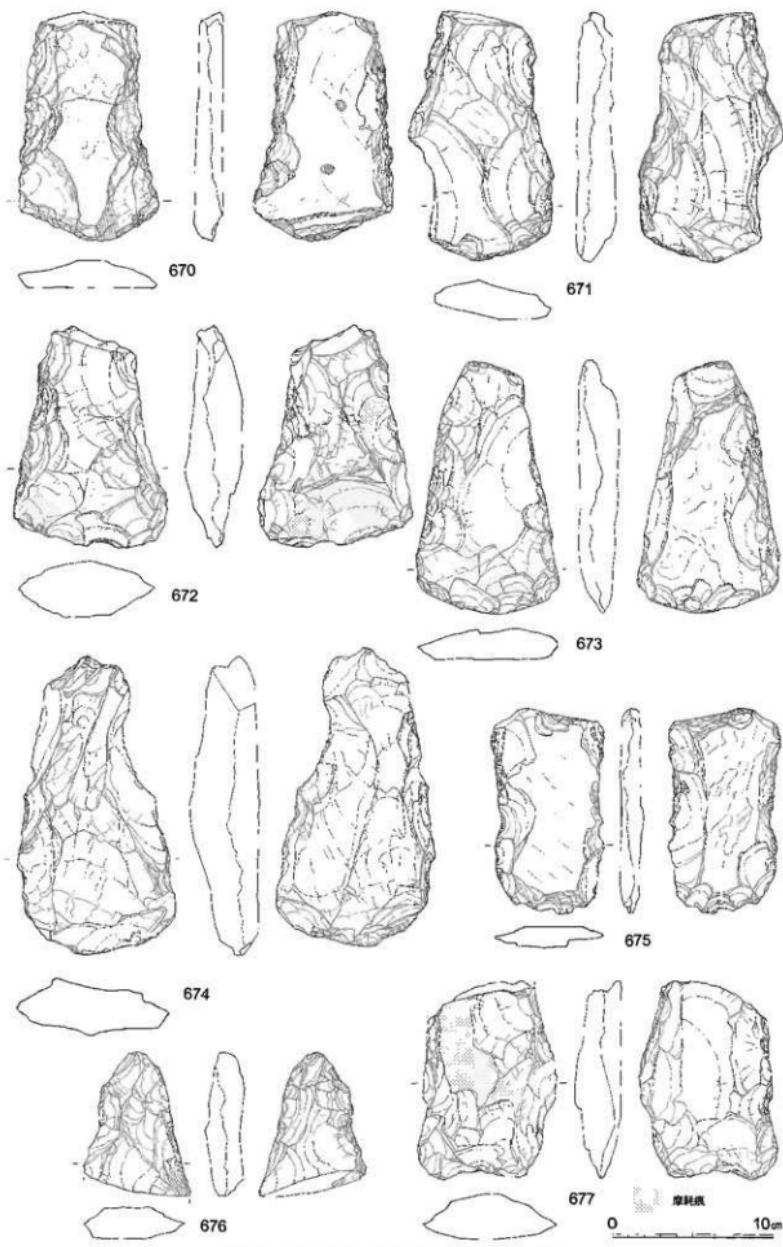


图164 突带文期~弥生前期层出土石器 (5)

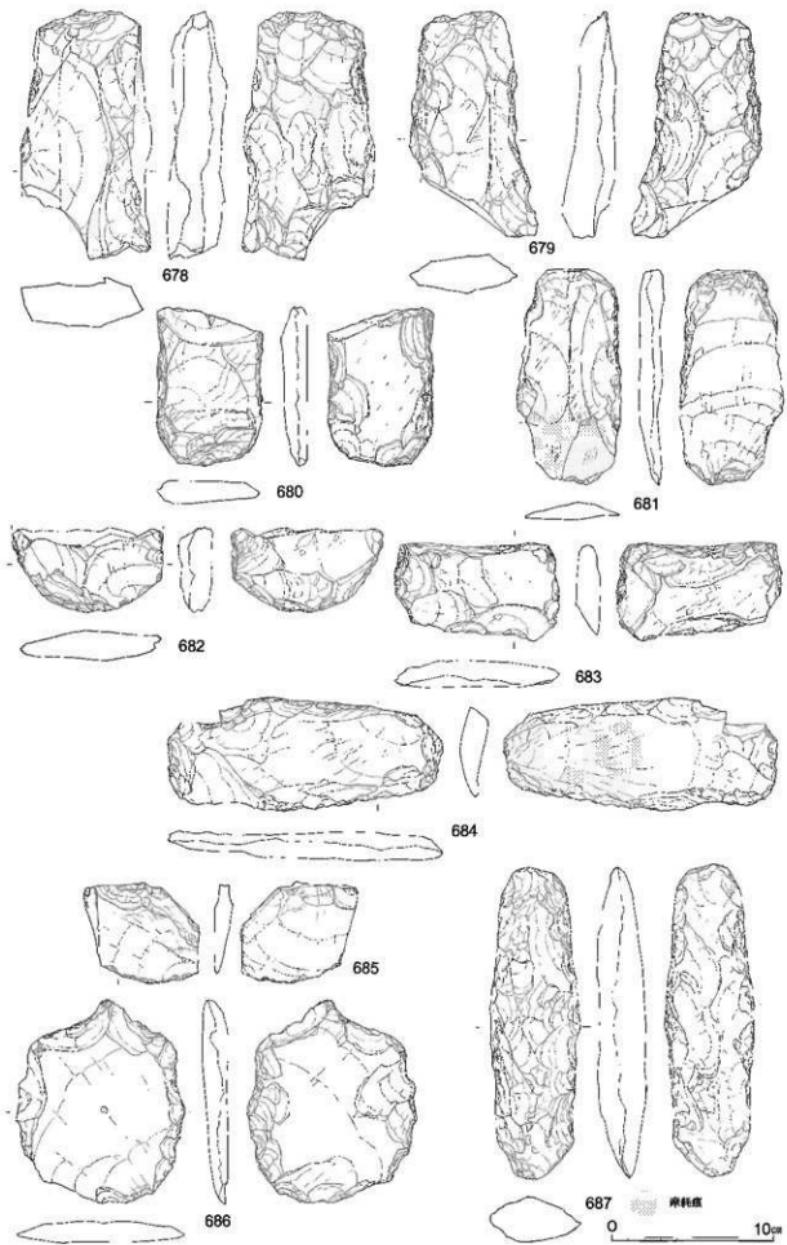


図165 突帝文期～弥生前期層出土石器（6）

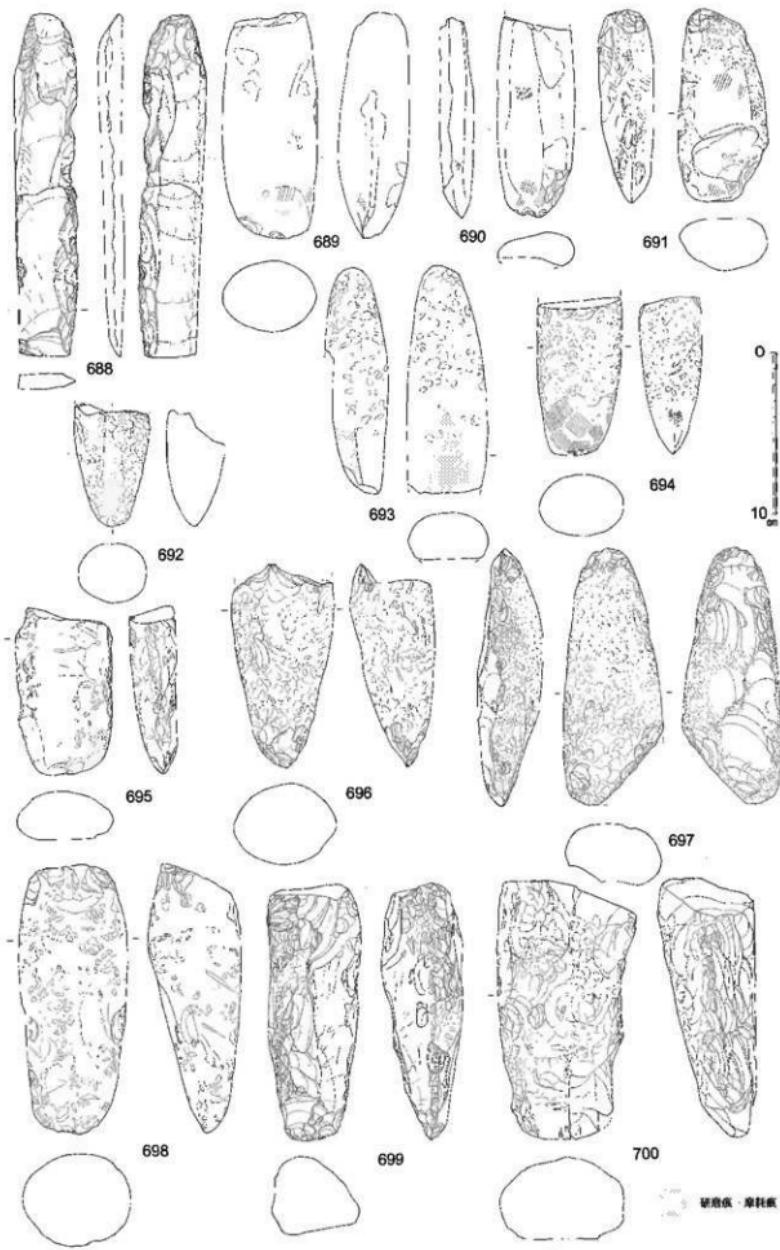


図166 突蒂文期～弥生前期層出土石器 (7)

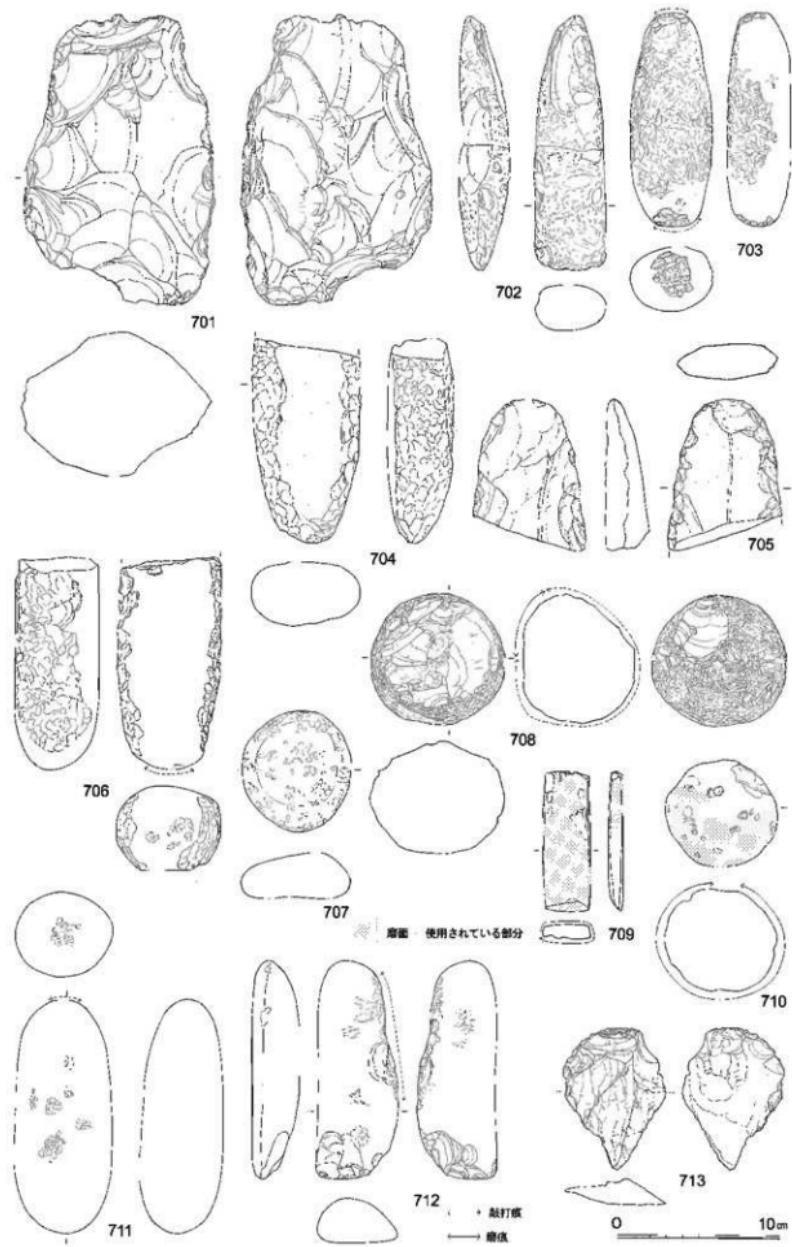


図167 突帯文期～弥生前期層出土石器 (8)

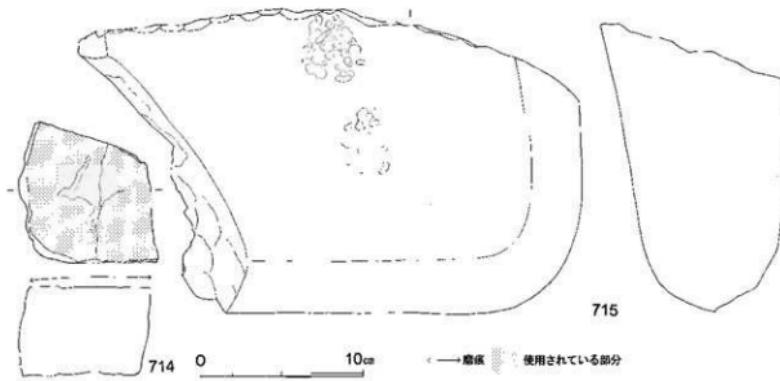


図168 突帯文期～弥生前期層出土石器(9)

が、刃部には研磨痕が残っている。690は裏面が破損しているがほぼ全面が研磨されていたと思われる。691、695も風化しているが刃部を中心研磨されている。692は基部の可能性もある。693、694は器体を敲打痕で覆われ、刃部のみ研磨されている。693は裏面を大きく欠損し刃部を欠いている。その下部の一部にも研磨痕が確認できる。刃部を再生しようとしたものか。696～700、702は剝離と敲打で整形されている段階である。すでに刃部はある程度作られている。701は右斧の素材と思われる。691、694～696、698、699は大きさに比して軽い石材である。敲石・磨石(図167-703～708、710～712) 703は端部と前面から側面にかけて、706は両側面と下端部に敲打痕がみられる。704は前面に自然面を残し、他は敲打されている。あるいは磨製石斧製品か。705も同じく前面に自然面を残す。石礫とも考えられるが、他の石礫では使われていない石材である。707は風化のため使用痕は認められない。磨製石斧の691、694などと同じ軽い石材である。708は土礫製である。正面図の大きき剝離された面に磨痕が認

められる。裏面の剝離面に接合する剥片が見つかっている。剥片の一部と木体の剥片の下になる部分にも敲打痕が認められることから、もとはもっと大きなもので、敲石として使用中にその衝撃で剝離し、その後もさらに使い込まれて現在の大きさになったものと推測される。710はほぼ球形で、表面には多くの自然の産みがある。ほぼ全面に磨痕がみられる。711、712は端部と側面に敲打痕がみられる。

磨製片刃石斧(図167-709) 長さ8.6cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmで全面研磨されている。淡灰緑色の緻密な石材である。

剥片(図167-713) 石材は黄褐色の玉髓である。上部に敲打痕がみられるほかは立った二次加工ではない。

砥石(図168-714) 長さ8.2cm、幅7.7cm、厚さ4.6cmであるが、一部破損か。一面のみ使用されている。

石皿(図168-715) 一部破損と思われる。使用面は平面ではあるが、正面図上部より下縁部に向かって傾斜している。上部端に敲打痕が認められる。

表1 造構に伴わない石器 器種別出土地区一覧(突帯文期～弥生前期)

器種	出土地区													不規	合計			
	A1	A'1	A2	A'2	A3	A4	A'4	A5	A'5	A6	A'6	B	C	O	P	Q		
石器	6	16	3		8	8		2	11	1			1	1			1	56
石斧		1	1		1												6	
石錐																	1	
半玉	1																	
石絆・残核	1	8	1	1	4	3		2	4				1			1	26	
くさび形石器	2	2	1	1	1	7	6	1		1		2	1		1	2	25	
スクレイバー	1		1			4						1				1	8	
石盤			1														1	
二次加工あり	10	24	6	3	33	29	1	2	15	1	3	1	4	8	1	2	143	
使用痕あり	11	50	11	4	25	30		8	20	1	3	3	3	16	1	1	183	
石器	2	4	1	3	4	12		1				4	3	5			40	
石削り棒石器		1	1			1											3	
磨製石斧	1	2			2	4		1	3		1		1		1	1	14	
敲石・磨石	1	1			3	2		1									8	
磨製片刃石斧															1	1		
砥石																	1	
石皿								1									1	

## 第5節 繩文時代後期包含層の調査

**B 5 区**繩文後期土器出土状況(図169) 精製土器と粗製土器が出土している。717は、718と同一層にあることが上層断面で確認された。716は、これらの土器とは少し離れたところで出土し、検出レベルも20cm~40cm程度高いものであった。ここでは、遺構は検出されなかった。

**B 5 区**出土繩文後期土器(図171) 716は、精製浅鉢である。巻貝により凹縞文が施される。一番下の凹縞は巻貝の側面を押し付けた押圧文の内筋に巻貝の先端で刺突を加え、それを出発点として次の刺突へつなげている。内面は横方向のミガキ調整が施される。宮流式の特徴を有する。後期後葉のものとみられる。717は注口部が欠損するが、精製の注口土器と思われる。底部は、くぼみ底である。沈線間に巻貝による擬似縞文が施される。胴部の沈線の上に巻貝による押圧文を施し、さらに沈線下部と押圧文上部に斜位の刻目を周回させる。また、C字に垂下す

る沈線内を刺突がなぞる。横位の沈線間にはミガキ調整が施されるが、胴部下半は条痕調整のうちにナデ調整で仕上げる。元住吉山1式の特徴をもつ。後期中葉のものとみられる。718は、粗製深鉢である。外向は二枚貝条痕が、内面は二枚貝条痕のうちナデ調整が施される。出土状況から後期中葉のものと比定される。

**C 3 区**繩文後期土器出土状況(図170) C 3 区は、1号溝と4号溝の間に位置する。繩文後期土器が分布する土層は、砂質土と粘質土が中心である。この区画で特に集中して繩文後期土器が出土している。精製土器と粗製土器いずれも出土している。また、石器もわずかに出土している。ここでは、遺構は検出されなかった。818、819に関して、819を伏せて掘られたのちに、818を口縁部を上にしてかぶせるかたちで出土している。C 3 区全体に土器が広がって出土しており、随時廃棄されていったようである。ただし大形の粗製深鉢は、ほぼ完形で出土したものがあり、埋葬に使用された可能性も考えられる。い



図169 B 5 区繩文後期土器出土状況

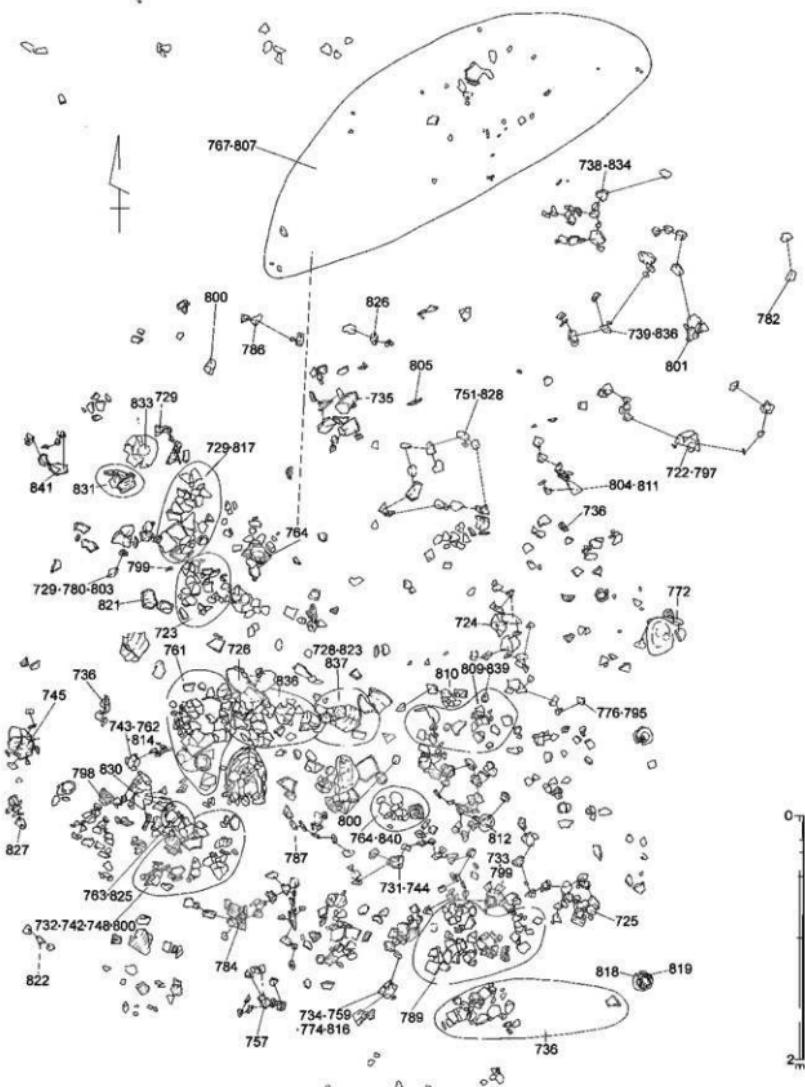


図170 C3区縄文後期土器出土状況

ずれの上器も出土レベルに大きな差はみられず、出土状態をもって上器の新旧を判別することはできなかつた。

**C 3 区出土縄文後期土器(図172~180)** 719は、小形の精製深鉢の破片である。腹部に2本の沈線を施し、沈線上部には刺突文、沈線下部には縦方向の沈線を巡らせるものである。720も、719と同様の深鉢の破片である。719、720は布勢式の特徴を有し、後期前葉のものと思われる。721は、小形の精製深鉢の口縁部片である。沈線を刺突でなぞり、その下に円文を施すものである。722は、精製深鉢の胴部片と思われる。沈線を刺突でなぞるものである。723は、小形の精製深鉢である。縄帶文期のものか。724は、精製深鉢の波状口縁部片である。波状口縁の上端部に刻目を施す。725は、口縁部に突起をもつ精製浅鉢の破片である。突起の下には円孔が穿たれる。突起上面から口縁部にかけて縄文が施される。縄帶文期のものか。726は、口縁部に把手がつく精製浅鉢である。把手部分に縄文が施される。把手上面には2列の沈線に刺突文が、口縁端部内外面にも沈線に刺突文が施される。縄帶文期のものか。727はボウル形の精製浅鉢である。縄帶文期のものか。728は、皿形の精製浅鉢である。内面に沈線と縄文帯をもつ。他は、ミガキ調整である。外面は、横方向の細かい柔線がみられるところから、巻貝の使用が推測される。723、725、726、727は縄帶文期のものとすれば、後期前葉から中葉のものと考えられる。

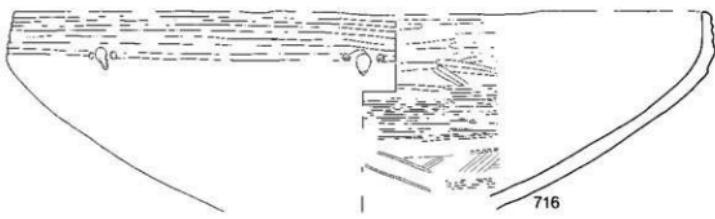
729~787は、福出K 2式に含まれるものである。後期初頭のものと考えられる。729は、方形の精製浅鉢の破片である。口縁部を肥厚させ、胴部にかけて施するものである。730は、口縁部に突起をもつ精製浅鉢の破片である。突起上面に刺突文が1周する。突起下部に円孔が、その周りに刺突文が施される。口縁部から胴部にかけて縄文帯が垂下する。731は精製浅鉢の底部片である。縄文帯をもつ。732は精製浅鉢の口縁部片である。733は精製浅鉢の口縁部片である。磨消縄文帯をもつ。縄文帯付近に赤色顔料らしき付着物が認められる。

734~736は、口縁部が屈曲する精製浅鉢である。口縁部から胴部にかけて磨消縄文帯がある。737~744は、精製浅鉢の破片である。737は、口縁部から胴部にかけて磨消縄文帯をもつ。738は、口縁端部上面に沈線が施される。739は、口縁端部上面に沈線がある。外面胴部にかけて鉤状の縄文帯が垂下する。740は、口縁部をやや肥厚させる。口縁端部に沈線が施される。外面胴部にかけて横位の磨消縄文帯が認められる。741は摩耗のため、縄文の有無は不明である。742は、口縁部付近に横位の縄文帯が施される。743はボウル形の浅鉢である。外面は、口縁部下に横位の縄文帯が施される。744は、精製

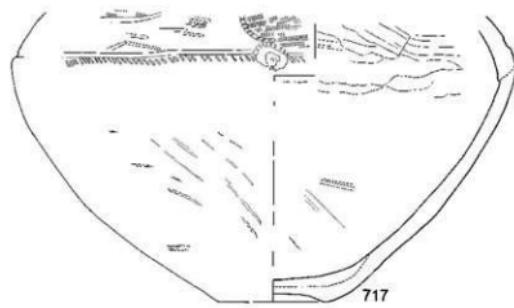
浅鉢の胴部である。磨消縄文帯をもつ。

745~751は、口縁端部に刺突文あるいは刻目をもつ精製浅鉢である。745は、口縁端部に竹管による刺突文が施される。口縁部から胴部にかけて磨消縄文帯がある。746は口縁部片である。口縁端部に刺突文を巡らせる。竹管は用いていないようである。口縁部に接するように横位の縄文帯が施される。747は、口縁端部に竹管による刺突文が施される。口縁部下に横位の縄文帯がある。748は、精製浅鉢の破片である。口縁端部に竹管による刺突文を巡らせる。口縁部付近に横位の磨消縄文帯を施す。外面は、施文部以外の部分に工具の擦痕が残る。745、747と同一個体の可能性がある。749は、深体の可能性もある。口縁端部に刻目が施される。口縁部から胴部にむかって磨消縊文帯が展開する。750は精製浅鉢の口縁部片である。口縁端部を肥厚させ、口縁下端に刻目がつけられる。胴部に沈線が施される。全体的に風化しており、施文の様子は明らかではない。751は精製浅鉢である。口縁端部に竹管文を巡らせる。胴部に横位の沈線を施すが、縄文の有無は風化のため不明である。752~756は、ボウル形の精製浅鉢である。752は、外面に磨消縊文帯をもつ。753は、口縁部付近に沈線が施されるが、縄文の有無は風化のため不明である。754は外向の風化が著しく、縄文の有無は不明である。755は口縁部から胴部にかけて、細めの磨消縊文帯を横位に施す。756は口縁部から少し下がったところに横位の縄文帯と、そこから小さく垂下し沈線を取り組ませる縄文帯が施される。757はバケツ形の精製浅鉢である。口縁部から少し下がったところに横位の磨消縊文帯をもつ。758は、精製深鉢口縁部の上につく筒状の突起である。突起上端部に縄文が施される。本体の口縁部にかけて沈線が垂下する。

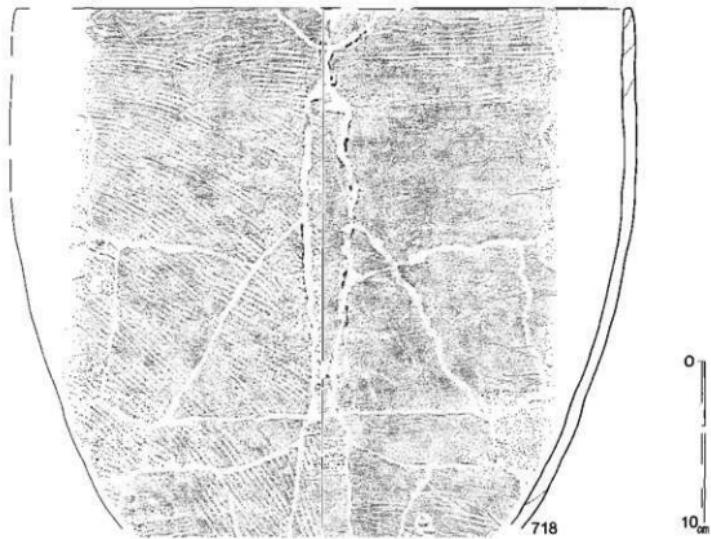
759~799は精製深鉢である。759は、口縁端部の一部を軽く隆起させ、波状に成形するものである。口縁端部と胴部にかけて施文される。760は外面向に沈線文を描く。縄文の有無は不明である。761は、口縁端部に刺突を施す。口縁部から胴部にかけて縄文帯がある。762は、口縁端部に突起をもたせる。沈線を口縁端部にめぐらし、突起上部にむかって螺旋状に巻き上げる。口縁部下から、磨消縊文帯を横位に施したり、垂下させたりする。763は、口縁端部の一部をやや隆起させ、波状をもたせる。764は、波状口縁をもつ。波状の下に丁字文、渦巻文の縄文帯が施される。内面は、胴部に横方向の二枚貝条痕がよく残る。胴部屈曲部から口縁部にかけてナデ調整で仕上げられる。765は波状口縁をもつと思われる。磨消縊文帯をもち、縄文帯の上から円孔が穿たられる。766は波状口縁をもつ。口縁部付近からO字状に垂下する磨消縊文帯が施される。内面は、横方



716



717



718

0  
10cm

図171 B 5区出土縄文土器

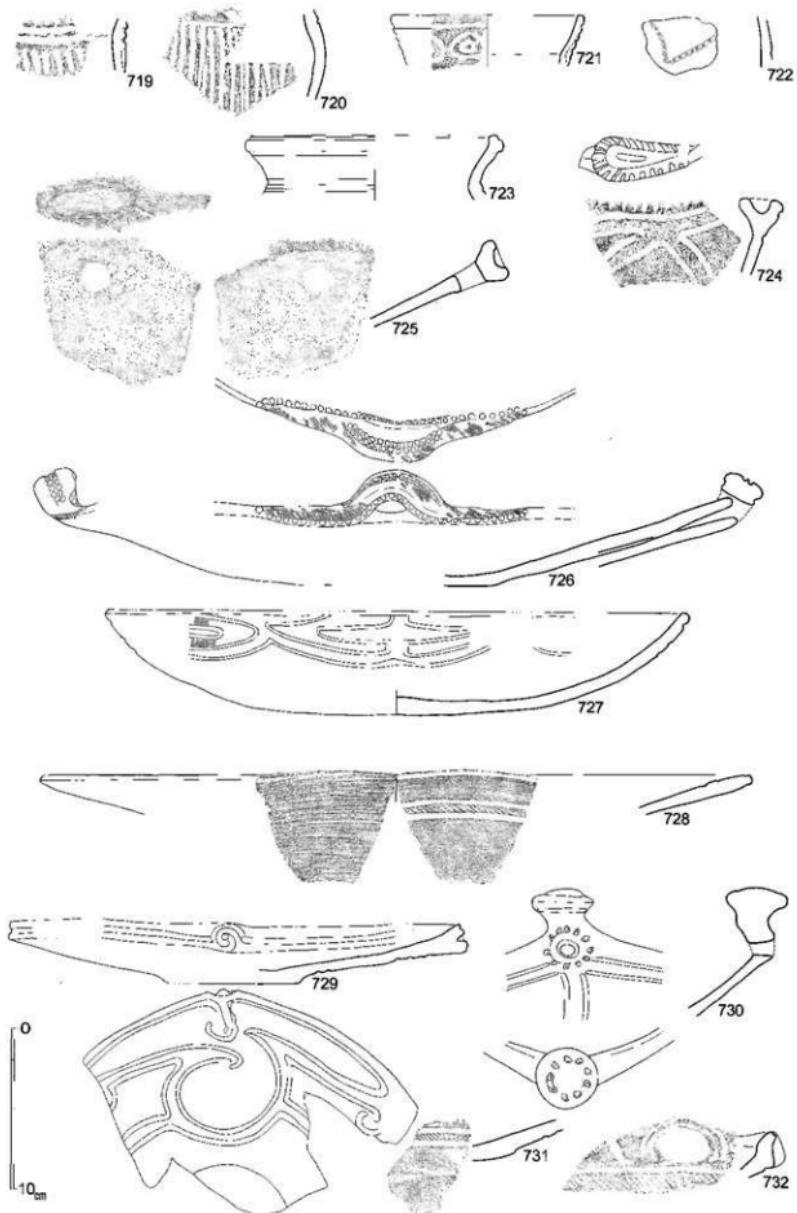


図172 C 3区出土縄文土器 (1:精製)

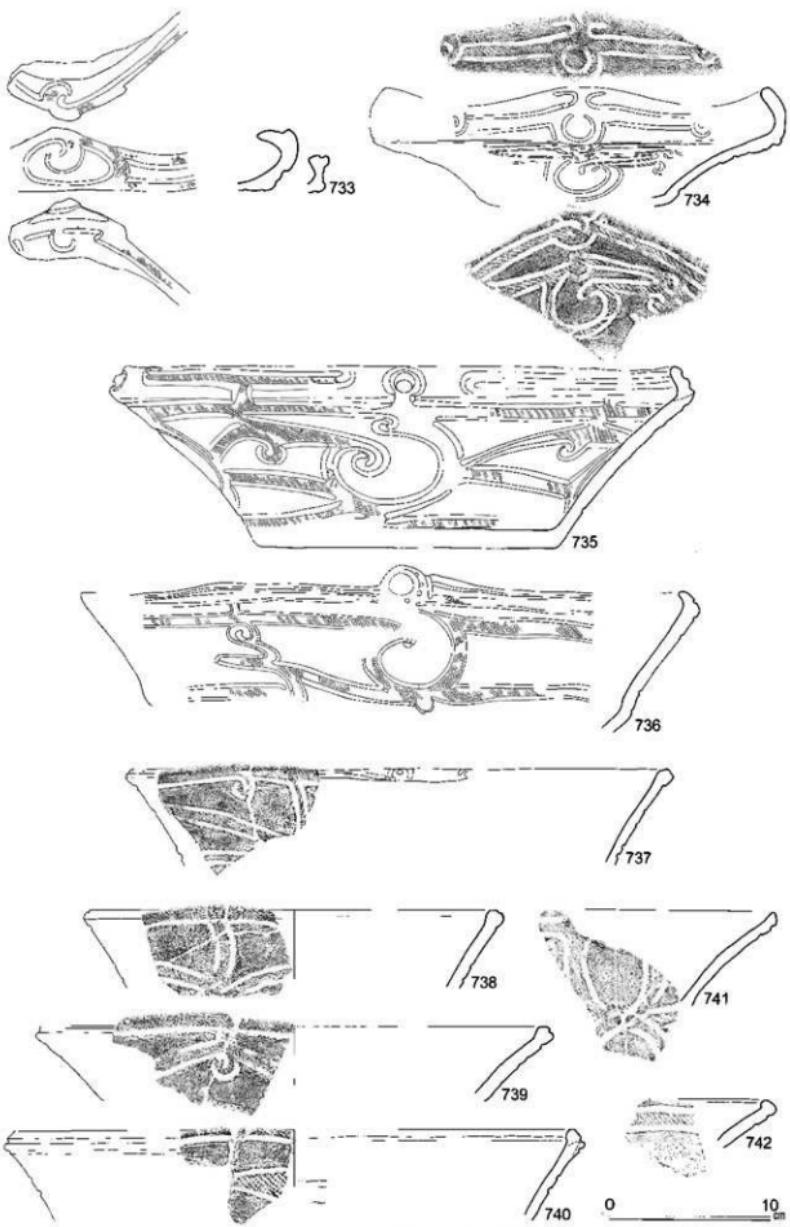


图173 C 3区出土绳文土器 (2; 精製)

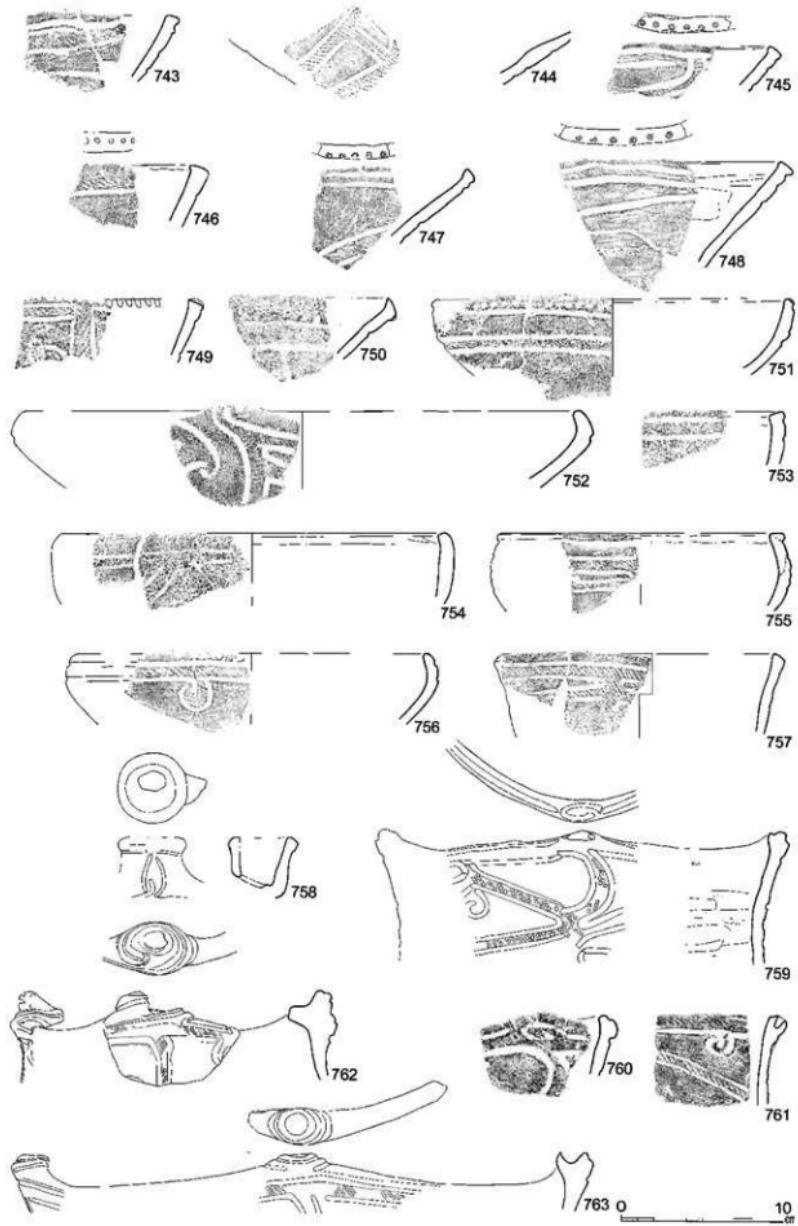


图174 C 3区出土陶文土器 (3: 精製)

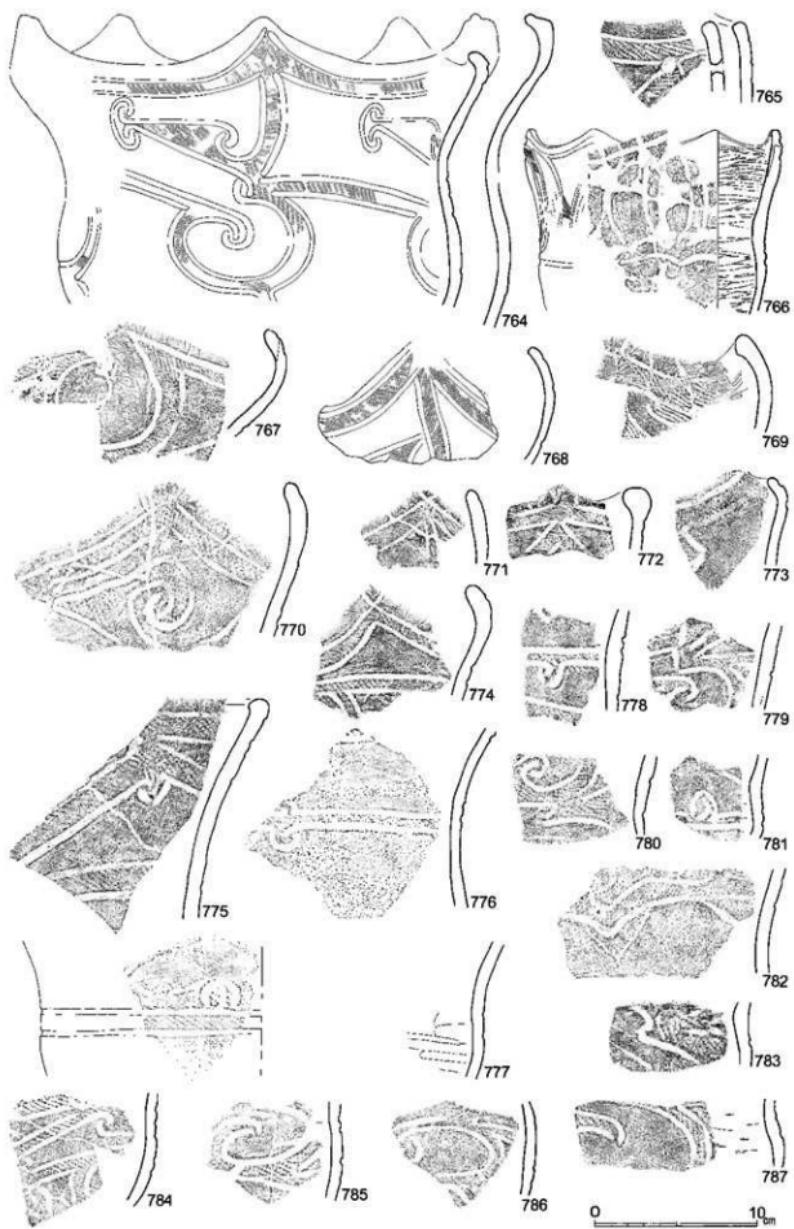


图175 C 3区出土青铜器 (4: 精制)

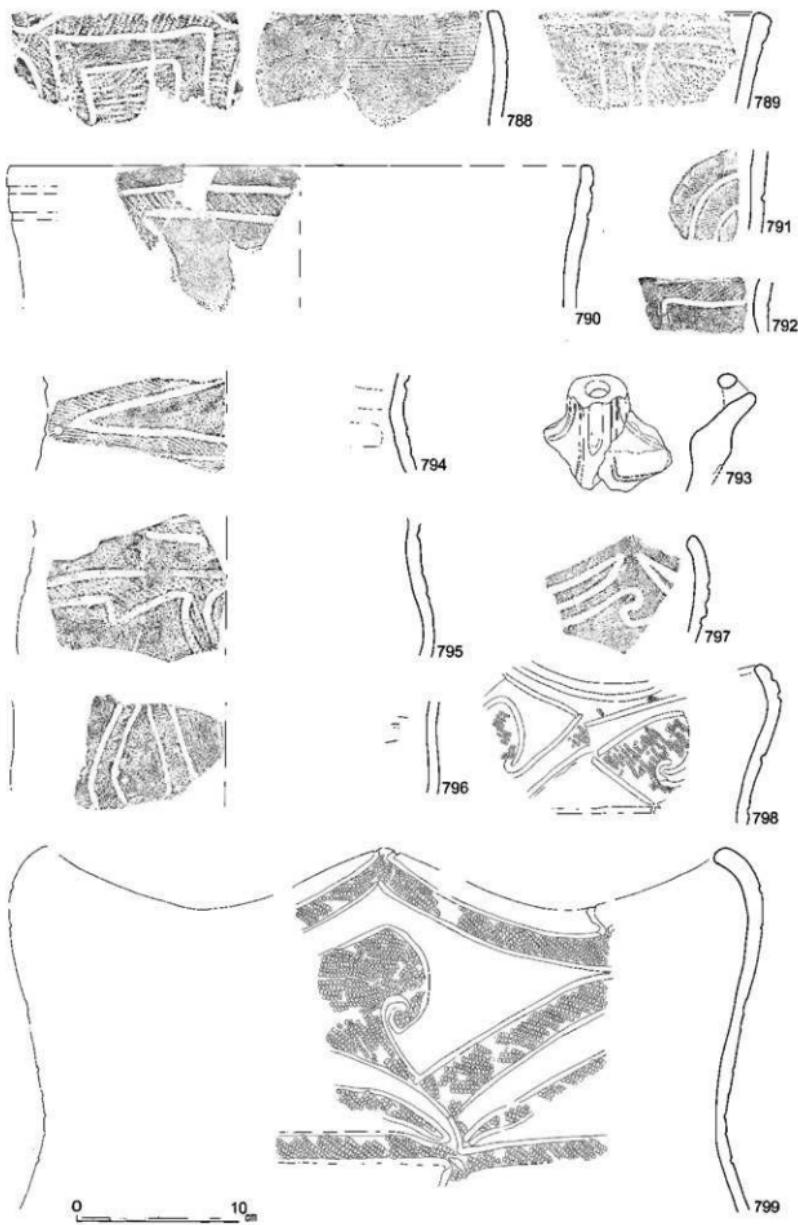


图176 C 3区出土绳文土器 (5: 精製)

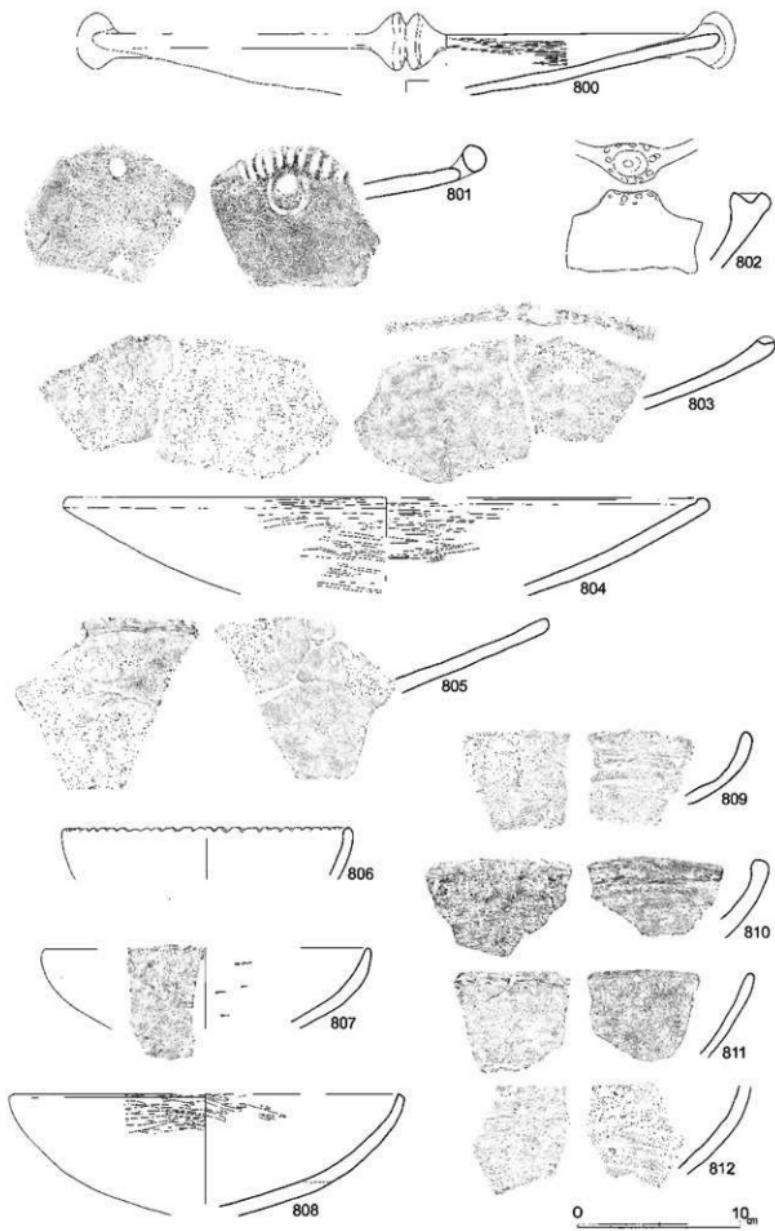


图177 C 3区出土縄文土器 (6: 精製)

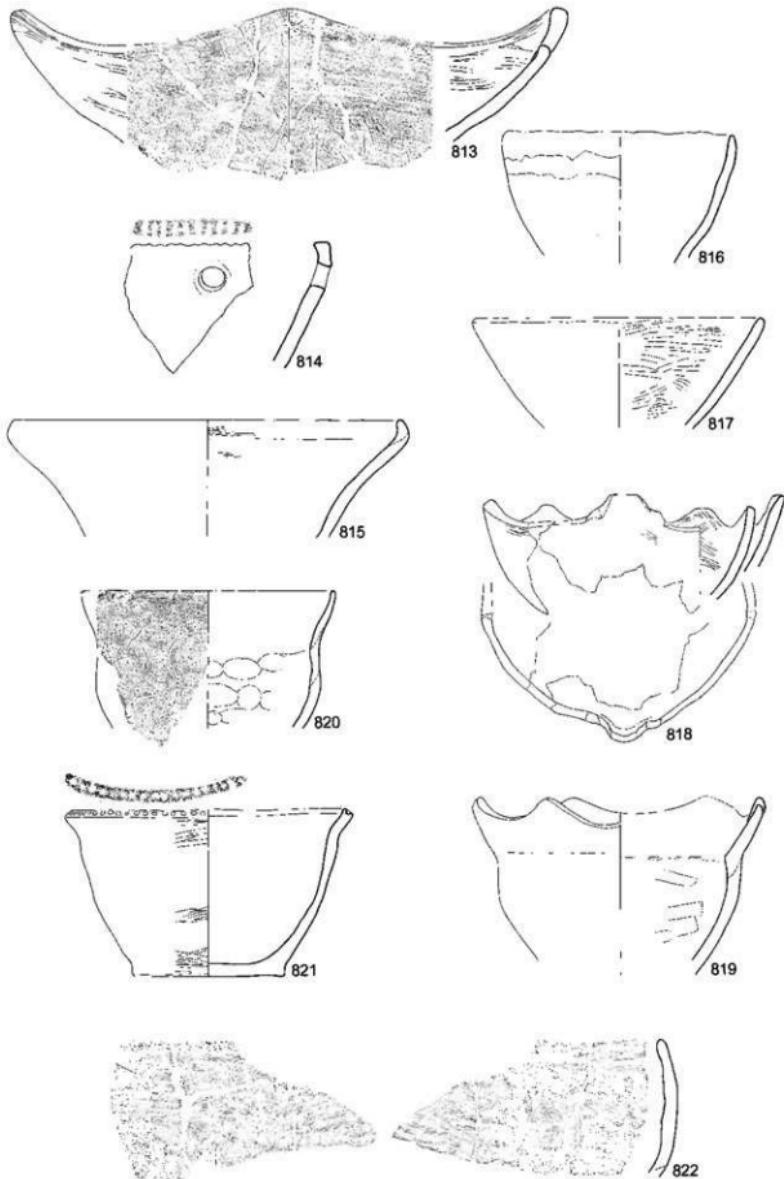


图178 C 3区出土绳文土器 (7: 精製)

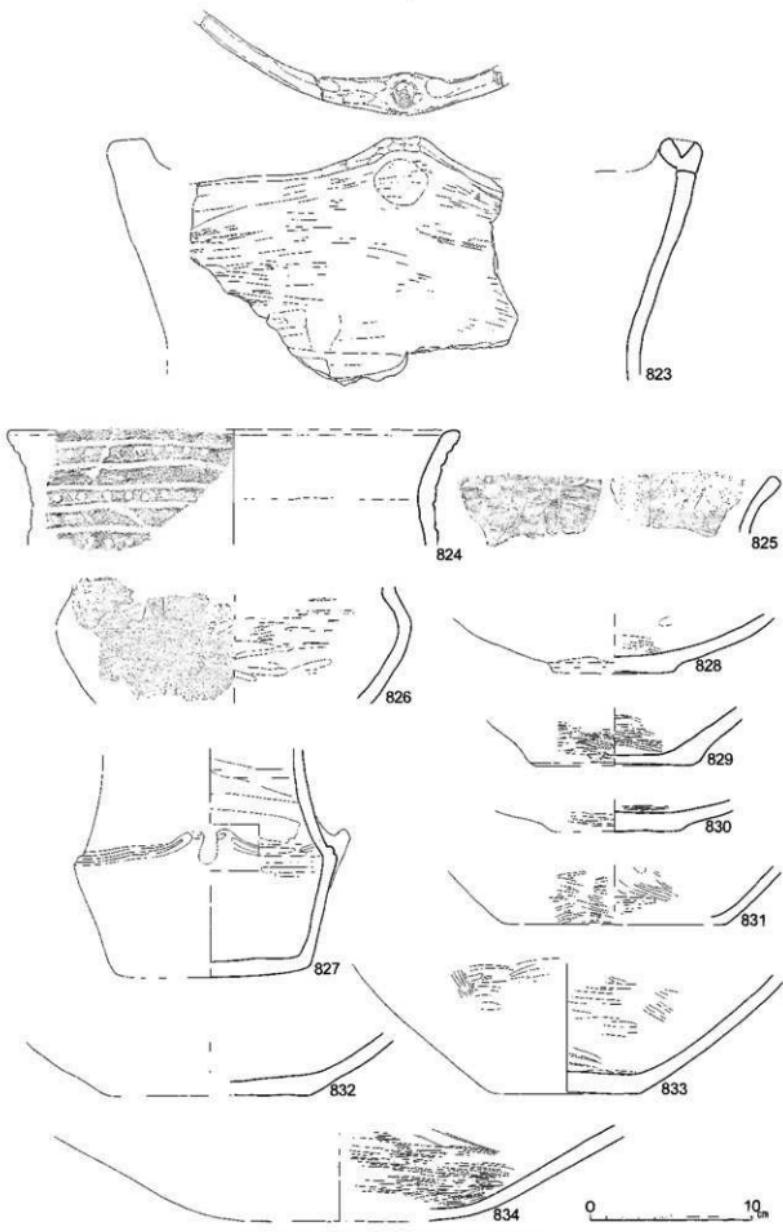


图179 C 3区出土绳文土器 (8: 精製)

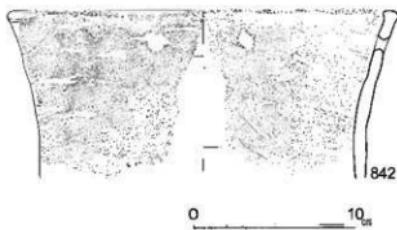
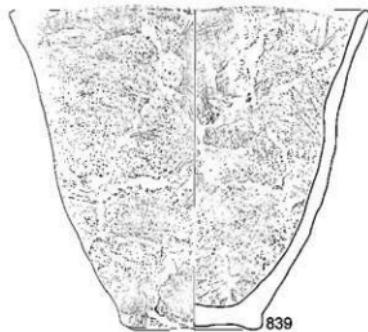
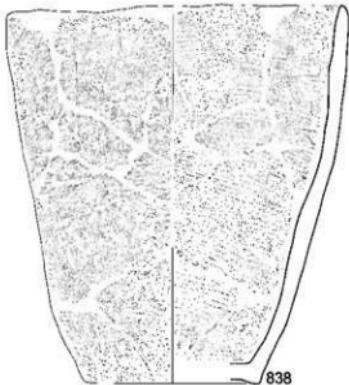
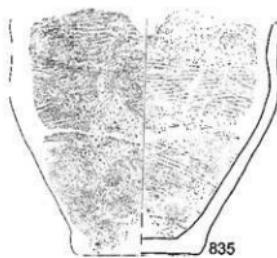


図180 C 3 区出土縄文土器 (9: 粗製)

向のミガキ調整で仕上げられる。767は波状口縁をもつ。768も波状口縁をもつ。J字状の肩消繩文帯を垂下させる。内面は、ナデ調整が施される。769も波状口縁をもつ。外面に、磨消繩文帯をもつ。内面は、口縁部付近にミガキ調整が残る。770も波状口縁をもつ。鉤状の繩文帯が施される。771は波状口縁をもつ。波状の下に繩文帯を垂下させる。内面はミガキ調整が施される。772は、波頂の下に磨消繩文帯を垂下させる。773は波状口縁をもつ。沈線がみられるが、内外面とも風化して、繩文の有無は不明である。774は、波状口縁をもつ。775は平継の深鉢である。外面に繩文帯がある。776は、深鉢の胴部片である。外はは繩文帯をもつ。内面はナデ調整が施される。777は、深鉢の胴部片である。胴部中位で横位の繩文帯を、その上に半円文と逆C字文を組み合わせるように施す。778は、深鉢の胴部片である。横位の繩文帯に入り組み文を加える。779は、深鉢の胴部片である。外面に磨消繩文帯をもつ。内面はミガキ調整が施される。780は、深鉢の胴部片である。外面は磨消繩文帯が施される。内面はナデ調整で仕上げられる。781は、深鉢の胴部片である。横位の繩文帯の上に半円文と逆C字文を組み合わせるように施す。内面は、ナデ調整が施される。782は、深鉢の胴部片である。繩文帯が横位に展開する。783は、深鉢の胴部片である。外面に、クランク状の繩文帯が施される。784は、深鉢の胴部片と思われる。外面に、磨消繩文帯が施される。785は、深鉢の胴部片である。外面に、渦巻状の磨消繩文帯が施される。786は、深鉢の胴部片である。外面は、渦巻状の磨消繩文帯が展開する。内面は、ミガキ調整で仕上げられる。787は深鉢の胴部片である。繩文帯が、張を引きながら垂下する。内面は、ナデ調整と思われる。

788～799は、中津式に含まれるものである。後期初頭に比定される。788は、深鉢の口縁部である。外面に、太めの磨消繩文帯が施される。内面は、口縁部付近で二枚貝条痕が残る。789は、深鉢の口縁部である。外面に、太めの磨消繩文帯が施される。788と同様のモチーフが施される。790は、深鉢の口縁部である。口縁部付近に太めの繩文帯が施される。791は、深鉢の胴部片である。外面に、太めの繩文帯をもつ。内面は、丁寧なナデ調整が施される。792は、深鉢の胴部片である。やや太めの繩文帯が施される。793は、深鉢の口縁部につく突起である。外面は沈線文が、内面はミガキ調整がある。794は、深鉢の胴部片である。外面に、繩文帯と刺突が施される。磨消繩文帯は、沈線が太く、繩文帯もやや太めである。795は、深鉢の胴部片である。外面に、やや太め繩文帯をもつ。796は、深鉢の胴部片である。外面は、やや太めの磨消繩文帯が施される。内

面は、横向方向のミガキ調整で仕上げられる。797は、波状口縁をもつ深鉢の口縁部である。波状口縁の下に鉤状の磨消繩文帯が施される。繩文帯の沈線は切れ目がない。内面は、ナデ調整で仕上げられる。798は、波状口縁をもつ深鉢である。鉤状の磨消繩文帯が施される。繩文帯はやや太めである。799は、波状口縁をもつ深鉢である。鉤状の磨消繩文帯が施される。繩文帯は太い。

800～827は、磨消繩文帯をもたない精製土器である。800は皿形の精製浅鉢で、口縁端部に瘤状の突起をもつ。801は、皿形の精製浅鉢と思われる。口縁部の一部を隆起させ、刻目をつける。刻目の内側に凹孔が開けられる。内面に、この円孔を囲むように半円の沈線が施される。外面とも風化が著しく、調整は不明である。802は、口縁部に突起をもつ精製浅鉢と思われる。突起の上部に窪みをもたせ、そのまわりに刺突文を巡らせる。803は、皿形の精製浅鉢である。口縁端部をやや隆起させ、端部に窪みをもたせる。内外面とも風化が著しいが、ミガキ調整が施されたようである。804は、無文の精製浅鉢である。口縁部の内側をミガキ調整により沈線があるよう見せている。内外面ともに細かいミガキ調整が施される。805は、無文の精製浅鉢である。内外面ともにミガキ調整が施される。806は、口縁端部に刻目をもつ精製浅鉢である。内外面ともに、風化が著しく調整は不明である。807は、無文の精製浅鉢である。外面は、ナデ調整で仕上げる。808は、無文の精製浅鉢である。内外面ともミガキ調整が施される。

809～812は無文の浅鉢である。内外面の両方にミガキ調整があるわけではなく、精製というよりは半精製としたほうが良いかもしれない。809は、内外面ともに風化が著しく調整は不明である。810は、外面が風化している。内面は、ミガキ調整が施される。811は、外面がナデ調整と思われる。内面は、ミガキ調整で仕上げる。812は、内外面ともに風化が著しい。内面は、擦痕がよく残る。813は、波状口縁をもつ精製浅鉢である。内外面ともにミガキ調整が施される。814は、口縁端部に刻目をもつ精製浅鉢である。口縁部から少し下がったところに凹孔をもつ。内外面ともに、風化して調整は不明である。815は、口縁部が扁曲する精製浅鉢である。内面は、ミガキ調整が施される。816は、小形の鉢である。内外面ともに風化している。半精製というほうが良いかもしれない。817は、無文の精製浅鉢である。外面は、風化のため調整は不明である。内面は、ミガキ調整で仕上げられる。818は、819と共作して出土したものである。5単位の波頭をもつ浅鉢である。波頭のひとつは、注ぎ口となっている。内外面ともにミガキ調整が施される。819は、6単位の波頭を

もつ小形の精製深鉢である。外面は、はっきりしないがミガキ調整で仕上げていると思われる。内面は、ミガキ調整が施される。820は、小形の深鉢である。外面は、風化のため調整不明である。内面は、ナデ調整である。半精製としたほうが良いかもしれない。821は、精製浅鉢である。口縁端部に刺突文を巡らせる。外向は、部分的にミガキ調整の痕跡が残る。内面は、風化のため調整不明である。822は、無文の精製浅鉢と思われる。内外面ともにミガキ調整が施される。

823は、波状口縁をもつ深鉢である。波頂部に上から深い刺突を施す。外面に工具による擦痕がみられる。内面は風化のため調整が不明である。824は、精製壺と思われる。沈線の間に刺突文を巡らせる。825は、精製壺の口縁部である。内外面ともミガキ調整が施される。826は、精製壺の胴部である。外面は、部分的にミガキ調整の痕跡が残る。内面は、ミガキ調整で仕上げられる。827は、精製の双耳壺である。耳の1つは欠損している。頸部と胴部の境に粘土紐を巻き、紐の両端をひき上げて耳としている。

828～834は精製あるいは半精製浅鉢の底部と思われる。828は、内面にミガキ調整が残る。829～831は、内外面ともにミガキ調整が施される。832は、風化のため外面の調整が不明である。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げられる。833は、内外面ともにミガキ調整が施される。834は、外面に一部ミガキ調整が残る。内面は、ミガキ調整が施される。

835～842は、粗製土器である。835は、小形の深鉢である。外面は、二枚貝による条痕調整ののちナデ調整が施される。内面は二枚貝条痕で仕上げる。836は、小形の深鉢である。外面は、二枚貝による条痕調整ののちナデ調整が施される。内面は、頸部より下に二枚貝条痕が残る。837は、中形の深鉢である。内外面ともに粗いナデ調整が施される。838は、中形の深鉢である。底部は、やや凹底を呈する。内面は、二枚貝条痕が施される。839は、中形の深鉢である。底部は凹底を呈する。内面は、ナデ調整で仕上げられる。840は、中形の深鉢である。内外面ともに粗いナデ調整で仕上げられる。841は、中形の深鉢である。内外面ともに風化が進んでおり、調整不明である。842は、深鉢の口縁部である。口縁部の下に穿孔が施される。

粗製土器の時期は、精製土器と併行する中津式から元住吉山I式に含まれるものであろう。

#### 縄文後期の石器

突帯文期および弥生前期の石器に比べて、出土量がかなり少ない。

スクレイバー（図181～843） 長さ4.3cm、幅5.8cm、

厚さ0.9cmで石材は黒曜石である。剥片を利用し、その縁辺のみ加工が施されている。正面即右側面は折れ面で敲打痕がみられる。残る3辺に剥離を施し刃部がつくりだされている。土器掘りから出土している。この他にも玉髓と黒曜石のスクレイバーが1点ずつある。

二次加工のある剥片（図181～844） 長さ3.3cm、幅1.9cm、厚さ0.65cmの小形の黒曜石の剥片である。上要剥離面側の1辺に細かな剥離が施されている。土器掘りから出土している。

石槍（図181～845） 長さ5.7cm、幅3.0cm、厚さ0.75cmの石槍の未製品である。石材はサスカイトである。裏面には上要剥離面を大きく残している。両側縁に細かな剥離を施されているが、左上部には自然面が残る。

残核（図181～846） 長さ5.5cm、幅3.5cm、厚さ2.8cmの黒曜石製である。一部に自然面を残している。土器掘りから出土している。

敲石（図181～847、848） 847は長さ10.0cm、幅9.1cm、厚さ4.7cm、848は長さ12.6cm、幅10.7cm、厚さ4.4cmでともに円錐を利用したものである。正面と側面に敲打痕が認められる。

砥石（図181～849） 淡灰色の非常に粒子の細かな石材である。小形で手持ちで使用したものであろう。上部は破損している。破損面以外は表面がつるつるで、全面砥石として使われたと思われる。表裏面に多くの線状の擦痕が残る。正面即左側面にも一部に認められる。ほとんどが左上から右下の方向の線状痕である。

石皿（図181～850） 直径が32cm、中心部の厚さが8.2cmの平面は半円形の石皿である。もとは円形のものが半分に割れたものと思われる。円の外側から内側に向かって緩やかに傾斜し、窪んだ部分には磨痕が認められる。多孔質の石材を利用してい

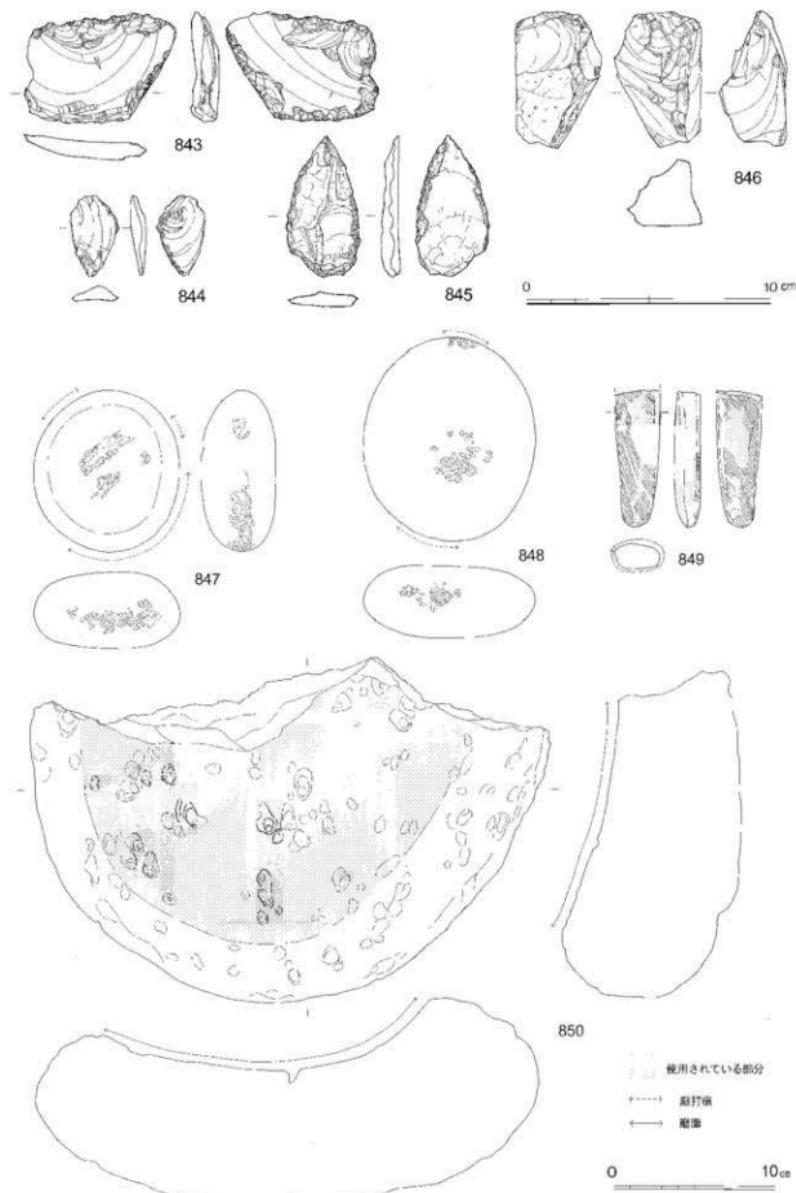


図181 C5区出土縄文後期石器

## 第5章 特論

### 堀部第1遺跡発掘調査に伴う花粉・珪藻分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

#### はじめに

堀部第1遺跡は鹿島町大字南講武地内に立地する遺跡である。

本報は、周辺地域での古植生推定、6号溝の掘削目的および使用形態の推定、16号墓埋葬に伴う献花の推定（埋葬季節推定）のために、鹿島町教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した調査報告書をまとめ直したものである。

#### 分析試料について

図182に試料採取地点を示す。図184のダイアグラム左端に6号溝地点の模式柱状図を示す。柱状図右側にある数字が試料採取層準である。また16号墓では、木棺底板上面の土を分析試料としている。

#### 分析方法

花粉分析、珪藻分析処理は渡辺（1995a, b）に従って行った。

顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。



図182 試料採取地点

#### 分析結果

花粉分析結果を図183、184の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出しスペクトルを表した。ただし、検出手法総数の少ない試料では出現した種類全てを「\*」で示した。また、右端に各分類毎の相対量を示すグラフを付けた。

珪藻分析結果を図185、186の珪藻ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラムでは、同定した珪藻総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルを表した。珪藻総合ダイアグラムでは、左端のグラフでは珪藻総数を、他のグラフでは淡水種の総数を基数として、各生息域を累積グラフで表した。

#### 16号墓の「献花」（埋葬季節）について

16号墓内から得られた試料の分析結果は前述通りである。

針葉樹の木材組織が顯著であり、分析した試料の多くの部分が、棺材の腐敗したものであったと考えられる。

花粉化石の含有量は少なく、僅かにマツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属、イネ科（40ミクロン以上）が含まれていた。しかし、いずれも綺麗な「花」を伴う植物に由来するものではない。また検出された種類から考えて、検出された花粉は棺内に供えたものではなく、埋め土中に含まれていた可能性が高い。あるいは上位の水田土壤から生物擾乱によりもたらされた可能性も否定できない。

以上のように、「献花」についての有意な証拠が得られなかった。

16号墓は棺内に擾乱が起つたことが判明しており、「献花」について考察するには不適当な試料であった。しかし、擾乱が判明した時期と分析が実施された時期がぶつかったことなど、避けられない事柄ではあった。

また今回の分析は「試行」であり、1試料しか分析されなかったが、採取ポイントを多くすることも「献花」について考察するには重要なことであると考えられる。

今後このような課題に対する試料には、充分な注意が必要であろう。

## 6号溝の堆積環境・用途について

### (1) 堆積環境

珪藻分析結果を基に珪藻分带を行い、調査地点での6号溝の堆積環境を各珪藻帯毎に推定する。

### 1) 硅藻分带

硅藻組成の特徴から以下のように地域硅藻帶を設定した。以下に各硅藻帶の特徴を示す。また、本文中では硅藻組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料No.も下位から上位に向かって記した。

#### ① D-I帶 (試料No.5)

淡水・酸性・底生種が卓越し、特に *Pinnularia nodosa* が高率を示す。

#### ② D-II帶 (試料No.4, 3)

淡水・底生種が卓越するが、淡水・アルカリ・浮遊種の *Melosira varians* が特徴的に出現する。

#### ③ D-III帶 (試料No.2 ~ 1)

淡水広布種の *Eunotia formica* が卓越するほか、淡水・酸性・底生種の *Pinnularia gibba*, *Pinnularia nodosa* が高率を示す傾向にある。

### 2) 堆積環境推定

#### ① D-I帶

6号溝を埋める最下部の堆積物（試料No.5）であり、*Pinnularia nodosa* などの淡水・酸性・底生種が卓越する。*Pinnularia nodosa* は沼澤湿地指標種群（安藤、1990）に分類されることからも、水深が浅く滞留した水域での堆積が推定される。つまり、水路（流水環境）であり、アルカリ水城が推定）とは距離を置く結果となった。この層準の記載では、下位層がブロック状に混ざっている様子が伺える。したがって、検出された硅藻化石が下位の層準からの混入である可能性も指摘される。しかし花粉化石において、混入の形跡が全く認められなかったことから、硅藻化石においても混入は無いものと判断した。

#### ② D-II帶

分析を行った堆積物のうち、中位の堆積物（試料No.4, 3）であり、淡水・底生種が卓越するが、淡水・アルカリ・浮遊種の *Melosira varians* が特徴的に出現する。下位のD-I帶同様に水深が浅く滞留した水域での堆積が推定されるものの、D-II帶に比べ若干水の流れが生まれたと考えられる。6号溝の断面観察では、この層準下面に掘り起こされた形跡が認められたことと併せ、この時期に水路として用いられた可能性がある。しかし後述のように、灌漑に用いられたか否かは不明である。

#### ③ D-I帶

分析を行った堆積物のうち、最上位の堆積物（試料No.2, 1）であり、種構成は異なるもののD-II帶と同様の様相を示し、再度水深が浅く滞留した水域での堆積が推定される。

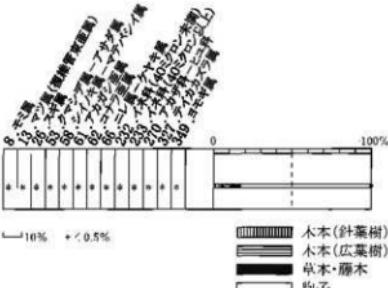


図183 16号墓の花粉ダイアグラム

## (2) 6号溝の用途（性格）について

### 1) 花粉分析結果より

6号溝内の草本花粉の検出量が少なく、特に稱作の目安とされるイネ科（40ミクロン以上）の検出量も極めて少ない。花粉化石の一般的な動態を考慮した場合、6号溝近辺あるいは上流域で稻作が行われていた可能性は極めて低い。しかし、花粉粒に限らず堆積物粒子が逆流する可能性は極めて低いこと、イネ科花粉の移動距離が短いこと（山田ほか、1993）から、下流域での稻作の可能性は否定出来ない。6号溝が（稻作に関連する）灌漑用水路であった場合、上流域の溝周囲では稻作が行われず下流域でのみ細々と稻作が行われていた事になる。一方、細作関連の灌漑用水路であった可能性については、関連する花粉化石が検出されていないことから何も言えない。

6号溝の内側（墓域）は樹木が生育する空間に乏しく、裸地状であったと考えられている。隣接する北講武氏元跡地の花粉組成（此松、1989）で弥生時代前期にはスギ属花粉が卓越することから、6号溝が環境であれば溝内のスギ属花粉の検出量も、もう少し多かったと考えられる。しかし、後述のように周辺地域のスギが伐採されていた可能性も指摘され、今回のスギ属花粉の検出量が妥当であるとする考えもある。また此松（1989）の分析結果では、弥生時代前期までの堆積物中にイネ科花粉がほとんど含まれず、この時期の稻作については否定的な要素がある。

以上の事柄から、6号溝が（稻作に関連する）灌漑用水路である可能性は低く、二者択一とした場合、環濠として存在した可能性の方が高い。

### 2) 硅藻分析結果より

6号溝が掘削され堆積が始まった頃には、溝内には水が溜まっていたものの水深は浅く停滞した沼澤湿地状の様相を示していたと考えられる。したがって6号溝は、「灌漑用（？）水路」より「引丘を隔

ての濠」として掘削された可能性が高い。その後、一時的に水の流れが認められる。この時期には「灌漑用（？）水路」として用いられた可能性もある。しかし、溝が埋まり水深が浅くなると再び沼沢湿地化したと考えられる。

### 3) 既知の地形資料から

6号溝の性格について、自然流路、灌漑用水路、円丘を隔てる濠などの可能性が指摘されている。これらのうち、6号溝の流路が背後の谷筋からの水系を横切っていることから、自然流路であった可能性はほとんど無い。

人為で掘削された「溝」である場合、その用途には灌漑用水路、円丘を隔てる濠などが考えられる。

灌漑が目的であったと仮定した場合、流域面積が狭く、灌漑すべき水田（あるいは畑）の存在そのものが疑わしい。圃場整備前の航空写真では、6号溝流域で灌漑可能な水田はせいぜい1枚にすぎない。しかもこの水田は6号溝直上に位置し、実際に6号溝に水が満ちていた時期にこの水田は存在し得ない。開発直前の水利を確認する必要もあるが、灌漑目的に掘削された可能性はほとんど無いように考えられる。

円丘を隔てる目的で掘削された可能性が最も高いと考えられるが、「長者の墓」に対して掘削されたものであるか、「取り巻く墓域」に対して掘削されたものであるかについては現状では判断ができない。堆積物の観察（断面図の再検討）が必要であろう。

### 4) 断面図の再検討から

断面図を詳細に観察すると6号溝が数回掘り直されており、前述の庄蔵分析から明らかのように、その都度堆積環境が変わったようである。しかし、この間で花粉化石組成にはほとんど変化がなく、周辺の植生が堆積初期から溝を埋めいくことによって同じであったことがわかる。後述のように、6号溝は「取り巻く墓城」と同時に存在していたと考えられる。墓城が維持されていた期間に周辺の植生が変わらなかったとすれば、墓城の形成期とほぼ同時、あるいは維持期に6号溝が掘削されたと考えられる。ただし植生の維持が、先立つ「長者の墓」築造以降のことと考えれば、6号溝の掘削時期は「長者の墓」築造時期まで遡ることが可能である。

### 5) 6号溝と墓城および東・西区の旧河道（溝？）の関係

6号溝は洪水成の疊層により、埋まっている。この疊層の上面は試料採取地点では標高12m程度を示し、6号溝をほぼ埋め尽くしている。また6号溝北西部では層厚が薄くなることから、この疊層が南東（講武）側よりもたらされたことが容易に推測される。一方、この疊層堆積と墓城形成の前後関係は確

認されていない。

船部「遺跡南部の「東・西区」では、6号溝に連続する溝は認識されていない。しかしここでは、墓域外縁に疊層に充填された旧河道（溝？）が検出されている。この疊層は墓域形成後に堆積したことが地層断面から確認されており、上面は標高13m程度を示している。

6号溝とこの旧河道（溝？）が交わる地点の調査がなされておらず、現時点では6号溝と旧河道（溝？）の関係は明らかではない。しかし、墓域の縁が6号溝と旧河道（溝？）により決まっていることから、両溝（？）が同時に存在した可能性は高い。

### 地域花粉帶の設定

6号溝の試料を対象に、花粉組成の特徴から以下のように地域花粉帶を設定した。以下に各花粉帶の特徴を示す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料Noも下位から上位に向かって記した。

#### (1) II带（試料No.7、6）

ハンノキ属が卓越するほか、コナラ亜属、モミ属、マツ属（複数管束亞属）を伴う。また、僅かではあるがトウヒ属、マツ属（單雄管束亞属）も検出される。また、草本花粉はほとんど検出されない。

#### (2) I带（試料No.5～1）

アカガシ亜属が卓越するほか、特に高率を示す種類はない。また草本花粉はほとんど検出されない。既知の資料との比較

鳥根県東部の中海・宍道湖地域では、大西（1990, 1993a）により花粉層序が確立され、渡辺ほか（2003）により修正が加えられている。一方、鹿島町内では本調査地点北方300m地点の北講武氏元遺跡において花粉分析が実施されている（此松, 1989）。また、南西1.8kmの佐太講武貝塚下水管埋設地点（大西, 1993b）、西方3kmの佐陀本郷字船津（高安, 1997）で花粉分析が実施されている。これらの分析結果は大西（1990, 1993）あるいはこれに先立つ報告（大西, 1985）と比較検討されており、それぞれの地点での局地的な植生を反映するものの、地域花粉帶間で対応が付くことが明らかになっている。

今回得られたII带ではハンノキ属が卓越するものの、ブナ属、コナラ亜属の他モミ属、トウヒ属、マツ属（單雄管束亞属）などの冷涼～寒冷要素の樹木に由来する花粉化石が特徴的に検出される。一方で、アカガシ亜属など温暖要素の樹木に由来する花粉化石はほとんど検出されない。このような花粉組成の特徴は鹿島町内3地点では認められず、大西（1990）のムクノキ・エノキ花粉帶（繩文時代草創期）に相当する可能性がある。

発掘成果から、I带層準が弥生時代前期に堆積した可能性が示されている。また、I带ではアカガシ

亜属花粉が卓越し、他の種類はほとんど検出されない。一方、大西（1990）では、弥生時代前期はイネ科花粉帯スギ亜帯に対応し、アカガシ亜属が高率を示しコナラ亜属、クマシデ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴うはかスギ属が特徴的に検出されている。また鹿島町内3地点で得られた弥生時代前期の花粉組成では、弥生時代前期（あるいは初頭）にスギ属花粉が高率になることが特徴である。このような地点間の花粉組成の差は、一般に各地点の植生の違いであるいは微妙な時期差に由来すると考えられる。

#### 古植生変遷

ここでは、花粉分带に対応する時期毎に、花粉分析結果より遺跡周辺の古植生を推定する。

##### (1) II帯期（縄文時代草創期）

得られた花粉化石の多くは遺跡周辺や、集水域内からもたらされたと考えられる。一方で、やや離れた北山山地、あるいは宍道湖対岸の中国山地から飛来したものもあると考えられる。

堆積物の観察から、II帯期当時調査地点周辺は湿地環境であったと考えられる。ハンノキ属花粉が卓越するが、この湿地内、特に調査地近辺にハンノキ類が繁茂した結果であると考えられる。また草木花粉化石の検出量が極めて少ないとから、ハンノキ湿地林の林床植生は貧弱であった可能性がある。

ブナ属、コナラ亜属花粉化石の出現率は相対的に低率である。これら冷涼要素の樹木は、この湿地の回りから集水域内、北山山地、あるいは中国山地の縁辺部に冷温帯落葉広葉樹林を形成していたと考えられる。また同時に検出されるモミ属、マツ属（複数管束被毛）の多くは、落葉樹林に混生していた可能性もある。一方でトウヒ属、マツ属（単数管束東亞属）の多くは、中国山地中の標高の高い地域に分布した亜寒帯針葉樹林より飛来した可能性が指摘できる。

##### (2) I帯期（弥生時代前期）

今回試料を採取した6号溝と内側の墓域について、形成された時期の前後関係に不明な点がある。以下では6号溝、墓域の形成時期に關して2つの場合に分けて考察を行う。

##### 1) 6号溝が墓域に先だって、あるいは墓域が廃棄されたか後に掘削されたと考えた場合

同時期に隣接する北講武氏元遺跡では、スギ属花粉が高率を示しているはか多くの種類の花粉が検出されている。しかし、6号溝ではアカガシ亜属花粉が卓越し、他の花粉化石がはほとんど検出されない。近傍に生育していたはずの樹木由來の花粉がほとんど検出されないことから、6号溝のすぐ近くまでカシ林が迫り溝の上空も枝で被われていたために、飛来する花粉が遮られたと考えられる。

上述のように検出された花粉化石の殆どが遺跡近

辺からもたらされたと考えられる。このため、今回の結果からは広い範囲での植生の推定材料が極めて少ないとになる。此松（1989）などを基に周辺から北山山地にかけての植生を推定すると、概ね次のようになる。遺跡近辺から丘陵にはカシ類、シイ類を要素とし、モミを混生する照葉樹林が分布し、さらに谷筋にはスギが混生する。また、人間生活の影響により丘陵の一部にはアカマツ（？）やナラ類、シデ類を要素とした「雜木林」も分布していた可能性がある。僅かに検出されるブナ属花粉は、植生の垂直分布から中国山地高所から風によってもたらされたと考えられる。

また遺跡周辺での稲作については、前述のように否定的見方ができる。

##### 2) 6号溝と墓域が同時に存在、あるいは6号溝が後で掘削されたと考えた場合

墓域にはせいぜい草木が生える裸地であったと考えられる。このような状況では、かなり広範囲から花粉が飛来し溝内に堆積する。隣接する上講武氏元遺跡ではスギ属が卓越するものの、遅くとも弥生時代後期には激減している。また、墓の棺材として、一部でスギが使用されていることが確認されている。これらのことから、6号溝の掘削、墓域の造成にからみ、遺跡近辺に生育していたスギが伐採され棺材として利用されたと考えられる。また、6号溝外側にはカシ林が迫っていたと考えられる。

遺跡周辺から北山山地にかけてはカシ類、シイ類を要素とし、モミなどの温帯針葉樹を僅かに混生する照葉樹林で被われていたと考えられる。スギは谷筋に生育していたものの伐採され、谷奥に分布する程度であったと考えられる。また、平野部の河川沿いにはニレ科広葉樹が構成する河畔林が分布していたと考えられる。

#### まとめ

今回の分析により、以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集を1、II帯の2花粉帶に分带できた。
- (2) 16号墓について「献花」の可能性を求め分析を実施したが、有意な証拠が得られなかった。
- (3) 6号溝掘削当初は沼沢湿地状態であった。一時期、流水環境に変わるが、水路が埋まるに従い沼沢湿地化した。
- (4) 6号溝の性格として、以下のことが言える。
  - ① 淤泥目的に掘削された可能性はほとんど無い。
  - ② 墓域あるいは「長者の墓」の形成期と掘削時期の関係は明らかでないが、どちらかの造構が造られた時期、あるいは維持管理されていた時期に掘削されたと考えられる。その後度の掘り直しがあるが、上部の礫層が堆積した後には掘り直しがなされなかった。

③ 東・西区に存在する旧河道（溝？）は、6号溝とともに両遺構を外部と隔てる溝として存在していた時期があると考えられる。

（4）遺跡周辺の古植生を推定した。特筆すべき点は以下の事柄である。

① 繩文時代草創期と弥生時代前期の遺跡周辺から北山山地にかけての古植生を推定した。6号溝と墓域の形成時期によって、推定できる古植生に差があった。

② 弥生時代前期では、本調査地点から近隣の北講武氏元遺跡にかけての地域で、稱作が行われていた可能性は低い。

#### 引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理, 42, 73-88.

此松昌彦（1989）北講武氏元遺跡の花粉分析。－北講武氏元遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書, 4, 37-41.

大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）尖道湖湖底下完新統の花粉群。鳥根大学地質学研究報告, 9, 117-127.

大西郁夫（1993a）中海・尖道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化。地質学論集, 39., 33-39.

大西郁夫（1993b）鹿島町佐太遺跡、最上部完新統の花粉分析、山陰地域研究（自然環境）, 9, 1-7. 高安克巳（1997）「忠益城」の古環境を復元する。

-山陰風土記の研究 1 秋鹿郡忠益郷調査報告書

-鳥根県古代文化センター調査研究報告書, 1., 171-191.

山田隆一・西川寿勝・渡辺正巳（1993）イネのプラント・オパールおよびイネ科の花粉の出現傾向と水田遺構の関係について－志紀遺跡におけるプラントオパール分析および花粉分析から－。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 10-11.

渡辺正巳（1995a）花粉分析法、考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳（1995b）珪藻分析法、考古資料分析法, 86, 87. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子（2003）日久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果。鳥取地学会誌, 7, 1-9.

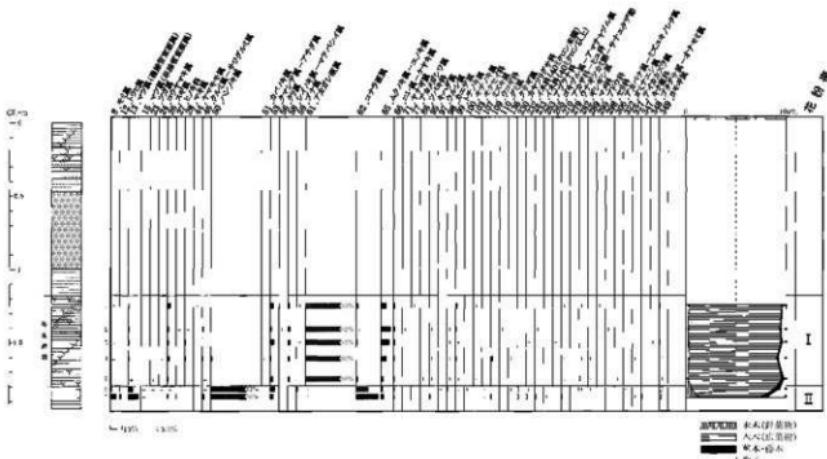


図184 6号溝の花粉ダイアグラム

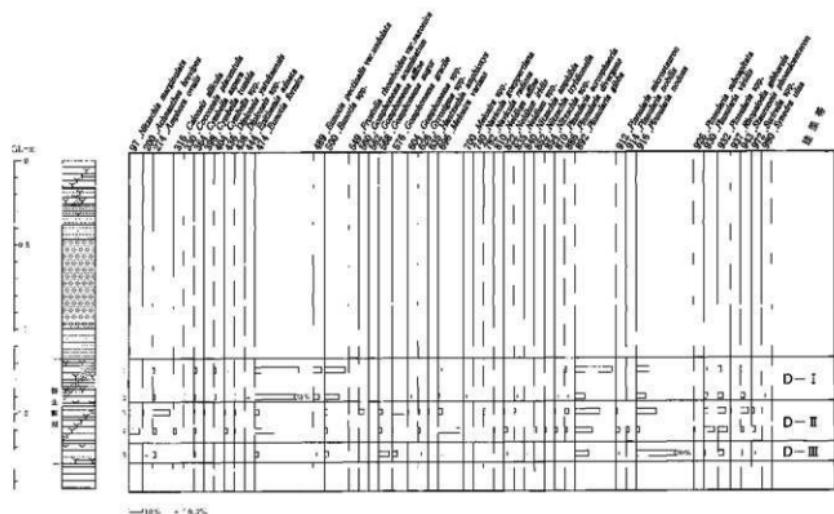


図185 6号溝の珪藻ダイアグラム

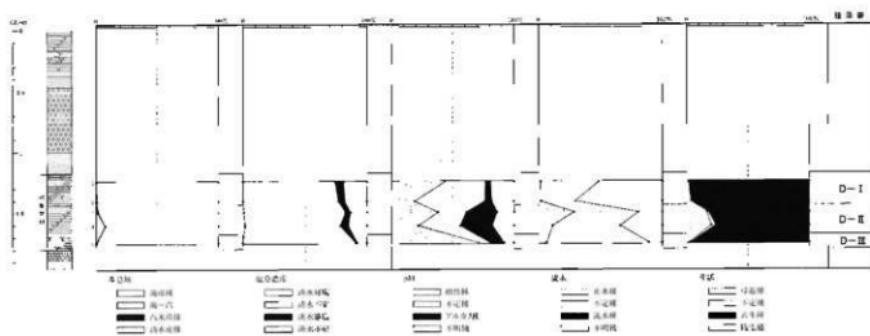


図186 6号溝の珪藻総合ダイアグラム

## 堀部第1遺跡の人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野

井上貴央・川久保善智

### 1.はじめに

堀部第1遺跡は鳥取県鹿島町北譜式に位置する弥生時代前期の遺跡である。多数の木棺墓が検出され、そのいくつかには骨が残存していた。なかには、木棺の木質がよく保存されているものもあったが、骨の保存状態は極めて悪かった。

これらの木棺墓のうち、西区16号墓から検出された人骨は極めて特異的な検出状況であった。人骨の検出状況が不可解であるので、現地に来て欲しいとの報を受け、1999年4月6日に井上が現地に赴き、内区16号墓人骨の検出状況を実見した。その他の墓構については、すでに骨を取り上げられていたり、その後に発見されたものであって、検出状況を見る機会はなかった。

2004年になって、木遺跡の人骨の同定を依頼され人骨が大学に搬入された。保存状況が極めて悪いといえ、自ら取り上げを行っていないものが大部分であったが、図面と参照しながら同定作業を行った。得られた情報は多くはないが、若干の知見について報告する。

### 2.人骨検出基準

墓構から検出された人骨のリストを表1に示す。以下それぞれの墓構の人骨について記載する。

#### 西区1号墓(SX01)

木質に混じって、棺の東寄りの場所から数点の歯牙片が検出されている(図188①)。いずれも細片化が著しく、詳細は不明である。

#### 西区4号墓(SX04)

棺材に混じって、骨片が1点取り上げられている。保存不良で、部位を特定できない。

#### 西区16号墓(SX16)

木棺の木質が良く残っており、蓋板を除去すると底板が検出されたが、その上からは骨は検出されず、骨質は風化してなくなってしまったものと考えられた(図188②a, b)。ところが、底板を除去すると、その下層から、頭蓋骨、肋骨、椎骨、上肢、下肢の骨が検出された(図188②c)。

底板を除去したときの骨の検出状況を図188③に示す。木棺の南東端には頭蓋骨が、東南端から中央にかけての部分には胸部から骨盤部の骨が、中央か

ら西北端にかけては下肢骨が検出されている。これらの骨の全体的な配置を見ると、木棺の南東端に頭部を置き、膝をやや曲げた状態で、伸展位で埋葬されていたものと考えられる。左右を区別できた骨は左鎖骨の1点のみであるが、このことから判断すると、被埋葬者は仰臥位をとって埋葬されていたものと考えられる。

頭蓋骨は風化が著しく、全体の外形は不明である。残存していた部位は、前頭骨と左右の頭頂骨の一部であり、冠状縫合と矢状縫合の一部が残存している。これらの縫合は内板・外板とともに縮合閉鎖をきたしていない。上顎歯は左第1小臼歯が1点検出されているのみである。下顎歯は右側が第1小臼歯～第3大臼歯までの5本、左側が第1大臼歯と第3大臼歯の2本が検出されている。同定できた歯の咬耗度は図187①に示してあるが、第1小臼歯～第2大臼歯ではやや咬耗が進んでいるが、第3大臼歯にはまったく咬耗が認められず、第3大臼歯は未萌出歯か萌出したばかりの可能性が高い。

体幹の骨では、頸椎から胸椎にかけての部位の骨が2点、部位不明の椎骨が1点検出されている。肋骨は取り上げ時に3点を確認している。骨盤の骨では腸骨後陵の一部が含まれる覚骨が認められる。

上肢帶と上肢の骨では、左鎖骨が1点、左右の対と考えられる上腕骨が2点、左右不明の桡骨が1点検出されている。下肢の骨では左右の対と考えられる人腿骨が2点、脛骨が2点、腓骨が1点、中足骨が1点検出されている。

本木棺墓に埋葬された被埋葬者は1体であることは確実である。歯の咬耗度や頭蓋縫合の閉鎖状況から判断して、その年齢は成年～壮年前半と考えられる。性別については、発掘当時の骨の全体的な印象から男性ではないかと思われたが、特定するには至っていない。

次に、木棺の底板の下層から人骨が検出されたという不可解な人骨検出様式について若干の考察を加えたい。もともと、本人骨が上壙墓に埋葬されていて、その後土壙の輪郭に沿って新たな木棺が埋葬されたとすれば、このような人骨の検出様式も説明できる。しかし、その場合は、木棺中の人骨も残っていてもよいだろう。現時点で考えられる可能性として、下記のような状況を想定しておきたい。

本遺跡は河川堆積物のなかから検出された遺構である。大雨や洪水時に本遺跡を埋没するぐらいの大

量の堆積物を作ったかどうかの判断は別にしても、木棺内に雨水の流入が起きたことは想像に難くない。本来は、木棺のなかに大量の雨水が流入したとしても、底板上に置かれた遺体が動くことは考えられない。しかしながら、ある程度腐敗が進んだ遺体であると、体腔のなかにガスが貯留し遺体が浮き上がる。そのときに底板も浮き上がって、本来は遺体の下にあった底板が遺体を覆いかぶさるように移動した、と考えると本遺構の不可解な人骨検出状況も理解できるものと思われる。

なお、本遺構の長軸方向の土層断面図を見ると、頭部が置かれた南東端の地山が傾斜しており、南東端の小口の側板の高さは北西端のそれよりも低い。南東端の地山の傾斜は遺体を安置するときの枕として利用されたものではないかと考えられ、それに応じて南東端の小口の側板の高さが低く作られたのではないかと考えられる。底板が3枚からなり、頭部の方の底板の幅が狭いことも地山の傾斜を枕として用いたことの傍証かもしれない。

木棺墓は、遺体を収めた木棺を墓穴のなかに安置したものではなく、墓穴を掘った後、その底部に板を3枚敷き、その上に遺体を安置して埋葬したのではないかと考えられる。このような状況の想定は、埋葬後に水の流入によって、本来は下に敷かれていた底板が浮き上がり、遺体と底板の上下関係が逆転したとする考え方の傍証ともなる。

#### 西区19号墓（SX19）

北東から西南方向に長軸を有する木棺墓で、木棺の南東端付近から齒が5点検出されている（図188④）。そのうちの1点は上顎右側切歯ではないかと考えられる。いずれの歯も細片化しており、咬耗度は不明で、年齢・性別は特定できない。

#### 西区28号墓（SX28）

土壤墓の半分は切り取られており、残存する骨は非常に保存状態が悪い（図188⑤）。取り上げられた骨の部位は特定できないが、図面から判断すると、伸展位で埋葬された被埋葬者の大腿骨と脛骨ではないかと考えられる。図面に描かれた骨の大きさや木棺内の位置から判断して、1体の成人が埋葬されていたものと考えられるが、詳細な年齢・性別は特定できない。

#### 西区56号墓（SX56）

西北西から東南東に長軸を有する木棺墓で、木棺の東端の底板の上から齒が2点検出された（図188⑥）。そのうち1点は大臼歯ではないかと思われるが、詳細な部位は特定できない。歯は細片化しており、咬耗度は不明で、年齢・性別は特定できない。

#### 東区5号墓（SX05）

東西に長軸を有する木棺墓で、図面から判断すると、木棺の東端に頭部を置き、膝関節をやや曲げて、右側に倒した状態で埋葬されていたように見受けられる（図189①）。骨の保存状況は極めて悪く、歯らしいものが1点と骨片が認められるのみである。歯は細片化していて、歯種や咬耗度は不明である。図面に描かれた検出状況から考えて、左上腕骨、左右の大脛骨、左右の脛骨が検出されていたものと考えられる。また、図面から判断して、被埋葬者は1体の成人と考えられるが、詳細な年齢・性別は特定できない。

#### 東区9号墓

東北東から西南西に長軸を有する木棺墓で、木質部は小口の部分に残っているのみである（図189②）。木棺は全体的に小さい。木棺の東側から歯が2点検出されている。1点は上顎左小臼歯と考えられるが、もう1点は細片化していて歯種は不明である。いずれも咬耗状態は明らかではなく、被埋葬者の年齢・性別は特定できない。

#### 東区11号墓

北東から西南に長軸を有する木棺墓で、木棺の北東寄りの部分から歯が2点検出されている（図189③）。歯は細片化しており、被埋葬者の年齢・性別は特定できない。

#### 東区13号墓

北東から西南に長軸を有する木棺墓で、木棺の中央よりや北側から歯が1点検出されている（図189④）。歯は細片化しており、被埋葬者の年齢・性別は特定できない。

#### 東区14号墓

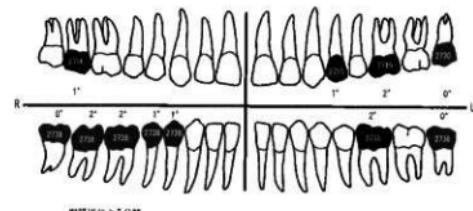
東北東から西南西に長軸を有する木棺墓で、木棺の中央付近から多数の歯が検出された（図189⑤）。また、検出図面によると、棺の東北東寄りの場所からは頭蓋骨が検出されているが、残存する骨からは頭蓋骨を確認できなかった。図面から判断すると棺の大きさは50cm×80cm程度でかなり小さく、小児の埋葬が予測された。

同定できた歯とその咬耗度を図187②に示す。咬耗の進んだ乳犬歯と上・下乳臼歯が検出されており、永久歯については咬耗が見られないことから、被埋葬者の年齢は6～8歳程度と考えられる。性別は不明である。

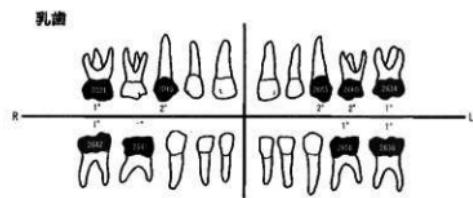
#### 3. おわりに

本遺跡の人骨は保存が悪く、骨そのものから得ら

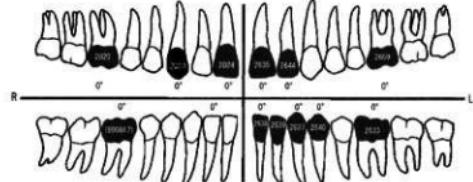
れた情報は極めて乏しい。しかしながら、本稿で指摘した西区16号墓の地山の傾斜を枕として使用した可能性については、今後ほかの遺構でも検討する価値があるものと思われる。また、本遺跡の人骨の分析過程において、木棺墓に収容された遺体を埋葬したものか、あるいは遺体を埋葬した後に木棺の枠を組み上げたのかという木棺墓の埋葬様式そのものに対する問題点も浮き上ってきた。そういう意味でも、本遺跡が弥生時代前期の墓制を明らかにするうえで果たす役割は大きいものと考える。



①西区16号墓



乳歯



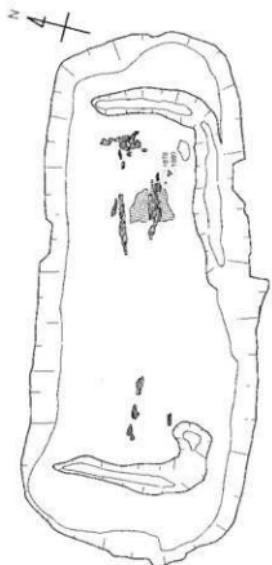
永久歯

黒塗りの歯が検出された部分。歯冠に付した番号は取り上げ番号を、歯根附近に付した番号はMartinの咬耗度を表す。

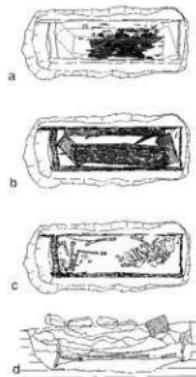
②西区14号墓（上段は乳歯、下段は永久歯）

黒塗りの歯が検出された部分。歯冠に付した番号は取り上げ番号を、歯根附近に付した番号はMartinの咬耗度を表す。

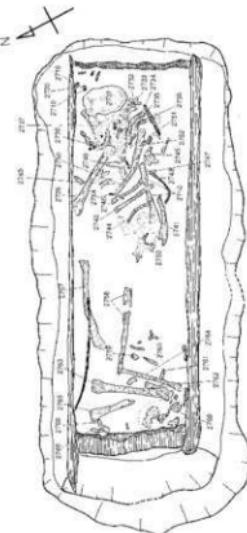
図187 検出歯牙分類図



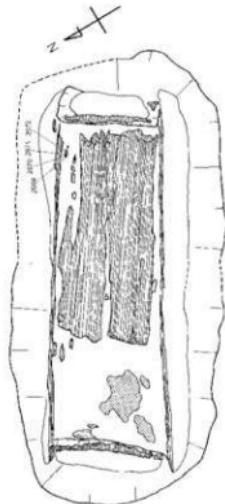
①1号墓



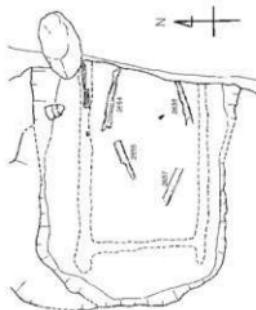
(2)16号墓  
(a:蓋 b:底板と側板  
c:側板と人骨 d:断面図)



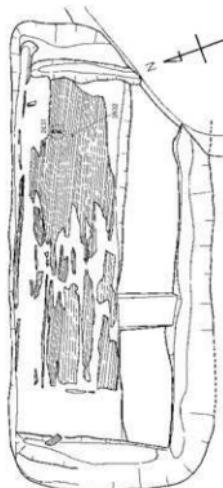
③16号墓



④19号墓

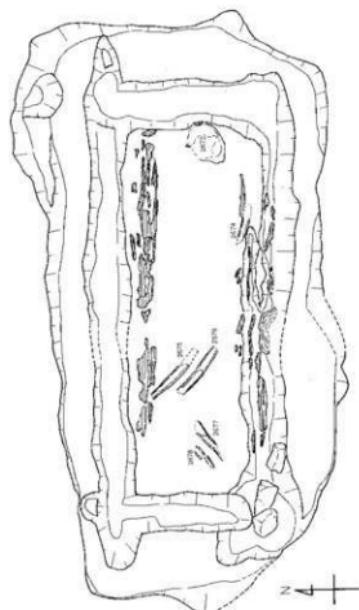


⑤28号墓

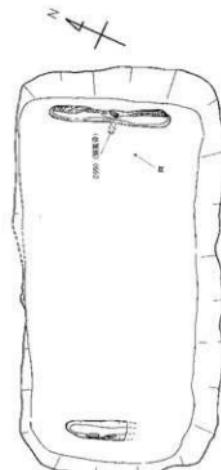


⑥56号墓

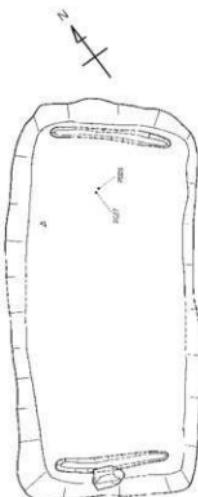
図188 歯牙片および人骨の検出状況 (1)



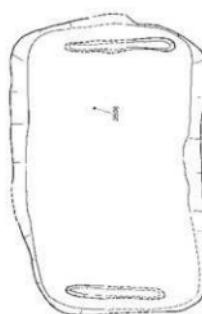
① 5号墓



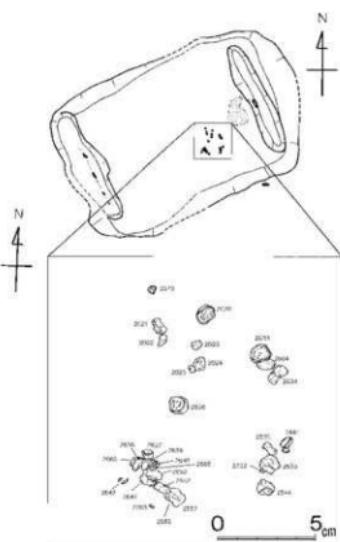
② 9号墓



③ 11号墓



④ 13号墓



⑤ 14号墓

図189 薬牙片および人骨の検出状況 (2)

表2 出土人骨一覧

墳墓番号	取り上げ番号	部位	吸血度(Martin)	備考
西区1号	1878	歯牙小片	不明	
西区1号	1880	歯牙? 牙?	不明	大部分は配
西区1号	歯質頸	歯牙小片	不明	
西区4号	1633	骨片?		状態が著しく悪い
西区16号	2500	腰骨の長骨片		乾燥(白化)している
西区16号	2715	I. 頸左第1大臼歯	2	
西区16号	2716	上顎右第2大臼歯	1	
西区16号	2718	- 骨片?		状態が著しく悪い。眞面に記入なし
西区16号	2719	- 骨片		眞面に記入なし
西区16号	2720	- 骨片		眞面に記入なし
西区16号	2721	- 分骨		眞面に記入なし
西区16号	2722	- 骨片?		眞面に記入なし
西区16号	2723	- 骨片	1	眞面に記入なし
西区16号	2724	- 骨片?		眞面に記入なし
西区16号	2725	- 骨片?		眞面に記入なし
西区16号	2726	- 骨片?		I. 頸左. 前人なし
西区16号	2727	- 骨片		眞面に記入なし
西区16号	2728	喉の臼歯片		眞面に記入なし
西区16号	2730	歯左第三大臼歯?	0	おぞらくシカ
西区16号	2731	歯蓋骨片		前頭骨片. 左右顎骨片
西区16号	2732	頭骨または胸椎		横弓と椎体の部分
西区16号	2733	I. 下位頸椎または上位胸椎		椎突起や椎体など
西区16号	2734	左鎖骨		比較的状態がよく、特に遠位部形状を保っている
西区16号	2735	骨片?		状態が著しく悪い
西区16号	2736	骨片		からうじて骨片であることがわかる
西区16号	2737	骨片		
西区16号	2738(1)	下顎頭		2738(1)~(8)は2733として取り上げられたもの
西区16号	2738(2)	下顎右第1小臼歯	1	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(3)	下顎右第2大臼歯	1	2738(1)~(8)に2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(4)	下顎右第1大臼歯	2	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(5)	下顎左第1大臼歯	2	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(6)	下顎右第2大臼歯	2	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(7)	下顎右第3大臼歯	0	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2738(8)	下顎左第3大臼歯	0	2738(1)~(8)は2738として取り上げられたもの
西区16号	2739	上頸骨		上頸骨ののみ残存しており、他は痕跡
西区16号	2740	上顎骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2741	枕骨の後位端?		からうじて形を保っている
西区16号	2742	骨片?		
西区16号	2743	肋骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2744	肋骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2745	椎骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2746	骨片		
西区16号	2747	骨片		
西区16号	2748	骨片		
西区16号	2749	骨片		
西区16号	2750	骨片?		
西区16号	2751	骨片		
西区16号	2752	長骨骨片?		2733は2つの箱に分けてある。腰骨被覆近が食害されている
西区16号	2753	対骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2754	助骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2755	下位頸椎または上位胸椎、助骨		椎骨の棘突起、椎体、肋骨などが認められる
西区16号	2756	I. 頸左第1小白歯	1	
西区16号	2757	大乳歯		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2758	I. 人歯骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない。 <sup>図3では訂正した番号で記載</sup>
西区16号	2759	骨片?		
西区16号	2760	中足骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2761	中足骨		からうじて骨片であることがわかる。遺迹: つば足の骨?
西区16号	2762	骨片?		状態が著しく悪い。眞面: つば足の骨のよう見える
西区16号	2763	脚骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2764	脚骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2765	脚骨		取り上げ時の判定で、残存資料からは部位を同定できない
西区16号	2766	骨片?		
西区6号	2768	骨片		眞面上では足の骨?
西区16号	2769	骨片?		
西区16号	2770	歯牙小片	不明	2000年7月16日に取り上げ
西区19号	2668	歯牙細片	不明	眞面上記入なし
西区19号	2669	東洋祖母	不明	
西区19号	2670	東洋祖母	不明	
西区19号	2671	東洋祖母?	不明	
西区19号	2672	東洋祖母?	不明	
西区19号	2673	東洋祖母	不明	1999年9月9日に取り上げ
西区19号	2674	東洋祖母	不明	1999年9月9日に取り上げ

検査番号	取り上げ番号	部位	咬合度 (Martin)	備考
西区28号	2654	脊?	-	前面から切断すると大脚骨?
西区29号	2655	骨片?	-	前面から切断すると脛骨?
西区28号	2656	骨片?	-	前面から切断すると大脚骨?
西区29号	2657	骨片?	-	前面から切断すると脛骨?
西区36号	2631	歯牙細片	不明	人臼歯か?
西区36号	2632	歯牙細片	不明	
東区5号	2673	骨片? 骨?	-	秋葉が著しく悪い、根と上顎片あり
東区5号	2674	骨?	-	前面から切断すると左上顎片?
東区5号	2675	骨	-	前面から切断すると人臼歯?
東区5号	2676	骨	-	前面から切断すると人臼歯?
東区5号	2677	骨	-	前面から切断すると脛骨?
東区5号	2678	骨片?	-	前面から切断すると脛骨?
(足)1		骨片	-	
東区5号	(足)2	骨片	-	
東区5号	(足)3	骨片	-	
東区5号	(足)4	骨片	-	
東区5号	2680	骨?	不明	決済が著しく悪い
東区9号	2680	骨片?	-	決済が著しく悪い
東区9号	-	二個左小臼歯?	不明	1999年8月9日(月)取り上げ
東区9号	-	歯	不明	1999年8月9日(月)取り上げ
東区11号	2627	歯牙細片	不明	
東区11号	2629	歯牙細片	不明	
東区13号	2660	歯牙小片	不明	
東区14号	2619	上顎右乳大歯	2	2665と左対
東区14号	2620	上顎左第1大臼歯	0	2659と左対
東区14号	2621	上顎左第2乳臼歯	1	2634と左対
東区14号	2622	歯牙細片	不明	
東区14号	2623	上顎右大歯	0	強いシャベルが見られる
東区14号	2624	上顎心尖歯	0	2635と左右対。強いシャベルが見られる
東区14号	2625	歯牙細片	不明	
東区14号	2633	下顎左第1大臼歯	0	類似に軽度の齧歯あり。1999年8月17日に取り上げ(無差)と左対
東区14号	2634	下顎左第2乳臼歯	1	2021と左右対
東区14号	2633	上顎右中切歯	0	2024と左右対。強いシャベルが見られる
東区14号	2636	下顎左第2乳臼歯	1	2642と左右対
東区14号	2637	下顎左大歯	0	やや強いシャベルが見られる
東区14号	2638	下顎左第4前歯	0	
東区14号	2639	下顎左側切歯	0	
東区14号	2640	下顎左第1?大臼歯	0	
東区14号	2641	下顎左第1乳臼歯	1	2658と左対。歯冠は完形
東区14号	2642	下顎左第2乳臼歯	1	
東区14号	2643	歯牙細片	不明	2636と左対。歯冠は欠損
東区14号	2644	上顎左側切歯	0	
東区14号	2653	(アン)の臼歯片	-	歯冠未形成
東区14号	2654	下顎左第1大臼歯	1	2641と左対
東区14号	2659	上顎左第1大臼歯	0	2020と左右対
東区14号	2660	下顎左第1乳臼歯	2	
東区14号	2661	歯牙細片	不明	
東区14号	2662	歯牙細片	不明	
東区14号	2663	歯牙細片、歯	不明	
東区14号	2664	歯牙細片	不明	子癆?
東区14号	2665	上顎左乳大歯	2	2019と左対
東区14号	2666	下顎切歯?	不明	小片
東区14号	2667	歯牙細片	不明	
東区14号	無番	歯牙細片?	不明	1999年2月12日に取り上げ
東区14号	無番	下顎右第1大臼歯	0	1999年8月17日に取り上げ。2633と左右対。類似に軽度の齧歯あり
東区14号	無番	歯牙細片	不明	1999年10月21日に取り上げ
東区14号	2681	骨の断端	不明	決済が著しく悪い

## 堀部第1遺跡出土木棺材の<sup>14</sup>C年代測定

堀部第1遺跡では弥生時代前期に属する木棺が出土した。また、棺材の構造までは残していないが、多數の墓で棺材の残部を検出している。弥生時代開始期の年代を知るために、<sup>14</sup>C年代測定を行ったので、その測定結果を報告する。ただし、分析を行った試料は、棺材の非破壊を原則としたため、木棺材の任意のポイントで採取したものである。

(鹿島町教育委員会)

### 放射性炭素年代測定結果報告書

(株) 地球科学研究所

#### 報告内容の説明

<sup>14</sup>C age (y BP) : <sup>14</sup>C年代測定値。

試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

補正<sup>14</sup>C age(y BP) : 補正<sup>14</sup>C年代値。

試料の炭素安定同位体比(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

$\delta^{13}\text{C}$  (permil) : 試料の測定<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を補正するための<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比。

この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{\%}) = \frac{(\text{13C}/\text{12C})_{\text{試料}} - (\text{13C}/\text{12C})_{\text{PDB}}}{(\text{13C}/\text{12C})_{\text{PDB}}} \times 1000$$

ここで、<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C<sub>試料</sub> = 0.0112372である。

曆年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中<sup>14</sup>C濃度の変動に対する補正により、曆年代を算出する。

具体的には年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>Cの測定、サンゴのU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により、補正曲線を作成し、曆年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)により約19000年までの換算が可能となった。但し、10000 y BP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高い。

AMS: 加速器質量分析

acid/alkali/acid (前処理) : 酸-アルカリ-酸洗浄による前処理

分析機関 : BETA ANALYTIC INC. (4985 SW 74 Court, Miami, Fl. 33155, U.S.A)

#### <sup>14</sup>C年代測定結果

試料データ	測定値	曆年代			
測定番号 Beta-139785	<sup>14</sup> C年代 (y BP)	交点	B.C. 500	B.C. 465	B.C. 425
試料名 (14143)HB1Sx02	2400±60	2 SIGMA	B.C. 785	to	390
2号墓棺材	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)			
測定方法 Standard-AMS	-23.3				
試料種 wood	補正 <sup>14</sup> C年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 760	to	635 and
前処理 acid/alkali/acid	2430±60	(68% probability)	B.C. 560	to	405
測定番号 Beta-139786	<sup>14</sup> C年代 (y BP)	交点	B.C. 500	B.C. 465	B.C. 425
試料名 (14144)HB1Sx03	2410±50	2 SIGMA	B.C. 775	to	395
3号墓棺材	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)			
測定方法 Standard-AMS	-23.9				
試料種 wood	補正 <sup>14</sup> C年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 775	to	680 and
前処理 acid/alkali/acid	2430±50	(68% probability)	B.C. 550	to	405

測定番号	Beta-139787	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 405	
試料名	(14145)HB1Sx04	2350±50	2 SIGMA	B.C. 750 to 695	and
4号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)	B.C. 540 to 375	
測定方法	Standard-AMS	-23.6			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 420 to 390	
前処理	acid/alkali/acid	2370±50	(68% probability)		
測定番号	Beta-139788	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 375	
試料名	(14146)HB1Sx05	2270±60	2 SIGMA	B.C. 405 to 180	
5号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)		
測定方法	Standard-AMS	-25.4			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 390 to 350	and
前処理	acid/alkali/acid	2260±60	(68% probability)	B.C. 310 to 210	
測定番号	Beta-139789	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 785	
試料名	(14147)HB1Sx06	2540±50	2 SIGMA	B.C. 810 to 525	
6号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)		
測定方法	Standard-AMS	-24.1			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 795 to 765	and
前処理	acid/alkali/acid	2550±50	(68% probability)	B.C. 615 to 590	
測定番号	Beta-139790	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 755 B.C. 680 B.C. 550	
試料名	(14148)HB1Sx07	2490±50	2 SIGMA	B.C. 790 to 405	
7号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)		
測定方法	Standard-AMS	-25.7			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 775 to 500	and
前処理	acid/alkali/acid	2480±50	(68% probability)	B.C. 465 to 425	
測定番号	Beta-139791	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 770	
試料名	(14149)HB1Sx16	2500±80	2 SIGMA	B.C. 820 to 400	
16号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)		
測定方法	Standard-AMS	-24.5			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 795 to 500	and
前処理	acid/alkali/acid	2510±80	(68% probability)	B.C. 465 to 425	
測定番号	Beta-139792	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 415	
試料名	(14150)HB1Sx17	2380±90	2 SIGMA	B.C. 795 to 360	and
17号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)	B.C. 280 to 240	
測定方法	Standard-AMS	-23.4			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 765 to 615	and
前処理	acid/alkali/acid	2410±90	(68% probability)	B.C. 390 to 390	
測定番号	Beta-139793	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 515	
試料名	(14151)HB1Sx19	2440±50	2 SIGMA	B.C. 780 to 395	
19号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)		
測定方法	Standard-AMS	-24.8			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 760 to 635	and
前処理	acid/alkali/acid	2440±50	(68% probability)	B.C. 560 to 410	
測定番号	Beta-139794	$^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	交点	B.C. 395	
試料名	(14152)HB1Sx21	2330±70	2 SIGMA	B.C. 750 to 695	and
21号墓棺材		$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	(95% probability)	B.C. 540 to 340	and
測定方法	Standard-AMS	-24.8			
試料種	wood	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (y BP)	1 SIGMA	B.C. 320 to 205	
前処理	acid/alkali/acid	2330±70	(68% probability)	B.C. 410 to 375	

年代値はRCYBP(1950A.D.を0年とする)で此記。モダン・リファレンス・スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic Acidの $^{14}\text{C}$ 濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。ニーラーは1シグマ (68%確率)である。

# 島根県鹿島町堀部第1遺跡出土炭化米の<sup>14</sup>C年代測定

小林謙一<sup>1)</sup>・春成秀爾<sup>1)</sup>・坂木 稔<sup>1)</sup>・尾崎大真<sup>1)</sup>・新免義靖<sup>1)</sup>・松崎浩之<sup>2)</sup>

島根県鹿島町堀部第1遺跡5号墓出土炭化米の<sup>14</sup>C年代測定を試みた。5号墓は、弥生I-2~3期の土器が伴い、弥生時代前期中頃に位置づけられる。多量に出土した炭化米のうちの破損している粒を3~4粒程度、試料とした。試料番号はSMKC1とした。SMは島根県、Kは鹿島町、Cは炭化物の略号である。なお、別に佐太講武良塚ほかの土器付着物等を採取しているが、それらについては現在測定準備中である。

## 1 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林・新免、炭化材の(2)(3)は、坂木・尾崎が行った。

(1)前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄 (AAA 処理)。

AAA 処理は自動処理器を用いた。80°C、各1時間で、希塩酸溶液 (1N-HCl) で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去 (2回) し、さらにアルカリ溶液 (1N-NaOH) でフミン酸等を除去する工程を5回、さらに2回酸処理 (240分以上) を行い巾和後、純水を使って洗浄した (5回)。

試料は、採集した総重量11.72mg、AAA前処理を行った量 (処理量) 4.69mg、前処理後回収した量 (回収量) 2.96mg、ガス精製に供した量 (精製) 2.68mg、二酸化炭素の炭素相当量 (ガス) 1.72mgである。

(2)二酸化炭素と精製：酸化銅により試料を酸化 (二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3)グラファイト化：鉄 (またはコバルト) 触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミニウムカソードに充填。

AAA 処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で650°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じて

あり、グラファイトはこの鉄粉の周間に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウムカソードに600Nの圧力で充填した。

## 2 測定結果と曆年の較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設 (MALT、機関番号MTC) で行った。

年代データの<sup>14</sup>CBPという表示は、西暦1950年を基準にして計算した<sup>14</sup>C年代 (モデル年代)であることを示す (BPまたはyrBPと記すことも多いが、本稿では<sup>14</sup>CBPとする)。<sup>14</sup>Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差 (1標準偏差、68%信頼限界) である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効率を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比により、<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比に対する同位体効率を調べ補正する。<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比は、標準体 (古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C比) 偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$  (パーセント) で示され、この値を-25‰に規格化して得られる<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比によって補正する。補正した<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C比から、<sup>14</sup>C年代値 (モデル年代) が得られる (英語表記では Conventional Age とされることが多い)。 $\delta^{13}\text{C}$ 値については、東京大学測定分については、加速器による同位体効率補正のための測定であり、表には記さない。

測定値を較正曲線INTCAL98 (曆年代と炭素14年代を曆年代に修正するためのデータベース、1998年版) (Stuiver, M., et al. 1998) と比較することによって実年代 (曆年代) を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定値確率分布として表す。曆年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。() 内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率分布

1) 国立歴史民俗博物館

2) 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部

である。

この試料は、多量に出土した炭化米の一部であり、収穫時期の年代を反映していると考えられる。暦年較正の結果を見ると、紀元前410~350年の可能性が約72%ともっと高く、ついで紀元前290~230年の確率密度が21%である。また、いわゆる2400年問題の部分にかかる紀元前475年付近、同じく445年付近にも交差しており、確率は低いながらも紀元前5世紀である可能性もある。より新しい部分の紀元前200年から350年付近の較正曲線は、大きく波形しており、紀元前200年代の中期中葉の可能性も一定程度示されるが、紀元前410~350年の較正年代がもっとも確率が大きい。これまでに国立歴史民俗博物館が行ってきた西日本の弥生前期・中期の年代測定結果（春成ほか2004）から、この年代だけを取り上げると、弥生前期末葉から中期初頭の年代に相当する可能性が考えられる。しかし、岡山市南方遺跡（小林ほか2004）などの弥生II期最初頭と考えられる土器付着物の較正年代である紀元前380~350年と比べると、紀元前100年以前の年代幅も含み、やや古い年代の所産である可能性がある。わずか1点の測定結果であり、年代決定の資料としては不十分であるが、5号墓が弥生前期中葉頃の土器を伴っていることを考えると、この炭化米の年代は、較正年代の確率分布で示される範囲の前半の年代、すなわち紀元前5世紀（紀元前475~470、445~440、410年ころ）であると捉えたい。

この報告は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア一炭素年代測定による高精度編年体系の構築」（研究代表 西本豈弘）の成果の一部である。

#### 〈参考文献〉

- 小林謙・春成秀爾・坂木稔・今村峯雄・松崎浩之・扇崎由2004「岡山市南方（再牛会）遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『岡山市埋蔵文化財センター年報』3 2002（平成14年度）、岡山市教育委員会  
春成秀爾・今村峯雄・藤尾慎一郎・坂木稔・小林謙・2004「弥生時代の実年代」『日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』

Stuiver, M. et al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24, 000–0 cal BP. *Radiocarbon* 40(3), 1041–1083.

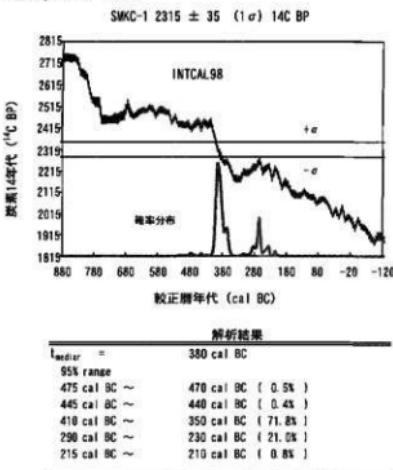


図190 暦年較正確率密度分布

表3 測定結果と暦年較正年代

試料 番号	測定機関 番号	炭素年代 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PPB}}$	$^{14}\text{C}$ B P (補正値)	暦年較正cal BC (2σ) (%) は確率密度
SMKC-1	MTC-04 907	-10	2315 ± 35	475-470 0.5% 445-440 0.4% 410-350 71.8% 290-230 21.0% 215-210 0.8%

註 \*) MALTでの $^{14}\text{C}$ 値は、加速器による測定のため、記載しない。

木棺棺材樹種一覧

(株) 吉田生物研究所

表4 木棺棺材樹種一覧

遺物番号	遺物名	樹種	遺物番号	遺物名	樹種
2号墓材 1	スギ科スギ属スギ		126 21号墓材 1	スギ科スギ属スギ	
2号墓材 2	スギ科スギ属スギ		127 21号墓材 2	スギ科スギ属スギ	
70 2号墓材 4	クスノキ科クスノキ属クスノキ		21号墓材 3	スギ科スギ属スギ	
74 3号墓 東小口	スギ科スギ属スギ		125 21号墓材 4	スギ科スギ属スギ	
3号墓材 1	スギ科スギ属スギ		131 23号墓材 1	スギ科スギ属スギ	
76 25号墓	ミカン科キハダ属キハダ		138 23号墓材 2	スギ科スギ属スギ	
80 4号墓材 1	イチイ科カヤ属カヤ		133 23号墓材 3	スギ科スギ属スギ	
82 4号墓材 3	スギ科スギ属スギ		135・136 23号墓材 4	スギ科スギ属スギ	
83 4号墓材 4	スギ科スギ属スギ		134 23号墓材 5	スギ科スギ属スギ	
81 4号墓材 5	スギ科スギ属スギ		134 23号墓材 6	ブナ科シイ属	
16号墓材 8	スギ科スギ属スギ		134 23号墓材 7	ブナ科シイ属	
16号墓材 10	スギ科スギ属スギ		132 23号墓材 9	スギ科スギ属スギ	
92 16号墓材 16	マツ科モミ属		137 23号墓材 10	スギ科スギ属スギ	
89 16号墓材 17	スギ科スギ属スギ		28号墓材	スギ科スギ属スギ	
93 16号墓材 18	スギ科スギ属スギ		152 56号墓材 3	スギ科スギ属スギ	
91 16号墓材 19	スギ科スギ属スギ		56号墓材 5	スギ科スギ属スギ	
95 16号墓材 20	スギ科スギ属スギ		56号墓材 6	広葉樹	
88 16号墓材 21	スギ科スギ属スギ		56号墓材 7	スギ科スギ属スギ	
90 16号墓材 22	スギ科スギ属スギ		5号墓材 4	針葉樹皮	
94 16号墓材 23	スギ科スギ属スギ		5号墓材 5	スギ科スギ属スギ	
107 17号墓材 1	スギ科スギ属スギ		5号墓材 6	スギ科スギ属スギ	
109 17号墓材 2	スギ科スギ属スギ		5号墓材 7	スギ科スギ属スギ	
106 17号墓材 3	スギ科スギ属スギ		165 6号墓材 1	イチイ科カヤ属カヤ	
105 17号墓材 4	スギ科スギ属スギ		166 6号墓材 2	イチイ科カヤ属カヤ	
108 17号墓材 5	スギ科スギ属スギ		167 6号墓材 3	イチイ科カヤ属カヤ	
110 17号墓材 6	スギ科スギ属スギ		9号墓 東小口	スギ科スギ属スギ	
103 17号墓材 7	スギ科スギ属スギ		9号墓 西小口	スギ科スギ属スギ	
111 17号墓材 8	スギ科スギ属スギ		14号墓 東小口	スギ科スギ属スギ	
104 17号墓材 9	スギ科スギ属スギ		14号墓 西小口	スギ科スギ属スギ	
19号墓材 2	スギ科スギ属スギ				
115 19号墓材 3	スギ科スギ属スギ				
116 19号墓材 4	スギ科スギ属スギ				
116 19号墓材 4 残欠	スギ科スギ属スギ				
113 19号墓材 5	スギ科スギ属スギ				
118 19号墓材 6	スギ科スギ属スギ				
114 19号墓材 7	スギ科スギ属スギ				
117 19号墓材 8-1	スギ科スギ属スギ				

## 第6章 結語

堀部第1遺跡は、縄文後期、縄文晚期、弥生前期の遺物、遺構を含む複合遺跡であった。特に弥生前期の櫛石墓群の発見は、全国的にも貴重な調査例となった。ここで若干の考察を行い、まとめとする。

### (1) 縄文後期包含層

調査区の南側にあたるB区、C区から大量の縄文後期土器が出土した。特にC3区、C4区では集中的に土器が出土している。遺構は検出されず、いずれも包含層出土である。

土器は大きく3つの時期に分かれる。後期後葉の宮窓式と思われるものは、B区内で数点確認されたのみで、出土レベルは他の後期土器に比べ高い地点であった。後期中葉に比定される元住吉山T式土器の特徴をもつ土器は、深鉢と共にまとまって出土した。大形の深鉢の存在は、土器堆の存在を思わせるが確証ではなく、土器には砂質土が覆っており、洪水により流された可能性も考えられる。さらにこの下層、有機質混ざりの砂質粘土から多量の後期土器が出土した。土器は中井式、福田KII式の土器がもっとも多く、それに後続する少量の縁帶文系土器も出土している。時期は後期初頭～前葉に比定されるが、出土状況は包含層内に混在していたもので、層位的な時期の分離は困難であった。

なお、大量に縄文後期土器が出土したことは、遺跡の立地する平野部周辺に何らかの遺構の存在を予想させるものであり、今後、低湿地部での縄文時代の活動がどのようなものであったのかを考える契機となった。また、直線距離で1.8km程にある佐太講武貝塚では、縄文後期の包含層を検出しているが、当遺跡で出土した時期の土器はほとんど出土しておらず、2つの遺跡間の関係も注意される。

### (2) 縄文晚期～弥生前期包含層

弥生前期の墳墓の基盤層から、大量の突帯文土器片が出土した。その検出範囲はほぼ前期墳墓と重なるもので、墳墓の周囲や墓域内覆土、また木棺の裏込みにまで土器片が入り込んでいた。出土した土器片は突帯文を有する粗製深鉢がほとんどで、わずかに半縫製の壺形土器や縁刻による有土器を含む。時期は大きく縄文最終末に含まれるが、出土した突帯の形態はさまざまなものであった。突帯文については、現在詳細な編年が試みられているが、本稿ではその分類は行えなかった。改めて次の分析の機会を待ちたい。漠然とではあるが、突帯の刻み目をもつものと無刻みのものは約半々であり、それに無刻目の土器のものが混在したこと付け加える。ま

た、突帯文土器と弥生前期土器には、粘土の接合や調整の方法に隔絶があることが確認された。

石器については、大量の石錐と黒曜石片、また用途不明の泥岩石器が出土している。石錐は弥生前期墳墓への供献品と考えられるものがあり、あるいはすべて前期墳墓に伴う可能性もあるが、今後の類例を待ちたい。また、黒曜石は石鏃等の製品と多数の剥片が出土しており、石器製作が行われた可能性を示唆するものであった。ただし、調査区からは縄文晚期の確実な遺構は確認されなかった。

突帯文土器に伴って弥生前期の土器が出土した。ただし、墳墓の供献品か包含層に伴うものは、判断が困難な状況であった。突帯文の包含層が墳墓に掘り込まれていたことは、時期差を考えざるを得ないが、土器については、壺形土器が古式の様相をもつもので、他の土器は判然としない。

弥生前期の墳墓に一切の縄文土器の供獻は見られず、包含層を形成する突帯文期には間違いなく生活空間だった場所に、その後どのような過程を経て新時代の墓地が築かれ始めたのか、弥生の幕開けを考える上で、大きな課題である。

### (3) 弥生前期

墳墓は計57基を検出し、内31基を調査した。以下各項目についてまとめたい。

#### 墳墓の配置

墓域全体は、「長者の墓」と呼ばれる円丘裾部の標高12～13mの間に存在し、円丘裾の南東側半面を占地する。個々の墳墓は長軸を等高線に平行させ、全体に綱列配置をとりながら、大きく円丘を取り囲むように弧状に展開している。また、並列する小単位も含む。この列状の配置は縄文時代では確認できない墓地の配置構造であり、弥生新来の墓制を大きく特徴付ける要素のひとつである。墓域は墳墓の存在しない空白域によって3つの区域に分けることが可能で、西区20基、東区11基、北東区26基の墳墓が確認された。いずれの墳墓群も規格性の高い墓域構成をとり、近接する小単位は、被葬者間のつながりを予想せるものであった。

西区では基軸となる墳墓の並びは明確ではないが、2基1組を基本とした並列単位と、それに伴うようによどもの墓が配置され、全体が弧線上に展開する。

東区では、大型の5号墓、6号墓が円丘寄りに並び、小形の墳墓がそれに伴う。この大形の2基は北東区の基軸の延長上にあり、北東区、東区を通じた墳墓の配置構成が予想される。また、円丘から放射

状に並列する単位も確認される。

北東区では、円丘寄りに人形の墳墓で基軸となる縦列が形成され、そこから放射状に並列するように墓が展開する。基数も多く、規律のある配置が特徴的な区域である。

西区に見られた2基1組の配置は北東区、東区では見出せず、逆に墓域の基軸となる墳墓の列は西区では見られない。西区と東・北東区という墓群は、別の規則で作られたものと考えられ、円丘の東西で分かれた2つの集団の墓域の可能性が考えられる。

### 標石

墳墓のほとんどに上部構造である標石がある。基本的に墓壇上面を石材で覆っており、木棺を埋納した後の土まんじゅうの表面に石材を貼り付けたものであろう。

墳墓ごとに石の配置は多様で、個々が特徴づけられる。石材の大きさや使用する個数、使用する石材なども様々で、規模の大小もみてとれる(表8)。以下、標石を形態ごとに分類する(図191)。

A類：基壇状に石を積み中心に人形の石を置く(5号墓ほか)。

B類：右を2列に並べ、その上に右を架構するもの(33号墓ほか)。

C類：周囲に石を配し、その巾を右で埋めるもの(1号墓ほか)。

D類：墓壇上にコの字状に石を配するもの(16号墓ほか)。

E類：墓壇上を右で覆うもの(2号墓ほか)。

F類：墓壇両端を表示するもの(20号墓ほか)。

G類：墓壇中央を表示するもの(26号墓ほか)。

H類：小標で表示するもの(36号墓ほか)。

以上8種に分類可能である。A類、B類がもっとも大形で使用する石の数も多く、石材も人形御影が多いなど、卓越した標石をもつものである。A類は東区・北東区、B類は北東区にのみ存在し、西区にこの形態の墳墓はない。もっとも多いのはE類で、散漫な石の配置で全区画に存在する。H類は北東区のみにあり、墓壇の調査は行っていないが、小児埋葬と考えられるものである。

ただし、調査した墳墓のいずれの標石も、下部構造の墓壇の主軸と規模をおおよそ反映しており、基本的に墓壇の切り合は生じない構造であった。特に墳墓の主軸を表示するという機能は、頭位方向の表示につながるものであり、列状配置をとる墓地構造において欠かせない要素であったと推察される。なお、44号墓と50号墓、44号墓と31号墓のように、標石を重ねて表示される被葬者間の関係もあったようである。

標石に用いられる石材は、ドレライト、流紋岩、碌岩、玄武岩、安山岩、大芦御影(閃綠岩・はんれい岩)などが使用されている(第4章「墳墓群標石石材について」参照)。基本的に近隣で採取可能な石材を用いているが、大芦御影は遠隔から尾根ひとつ越えた日本海沿いで産出するもので、遠方からの運搬が予想される。大芦御影の使用は墳墓により差異があり、5号墓ではこの石が顕著に用いられ、規模とともに他に抜きんでている。標石は、大芦御影・ドレライトを選択的に使用するものは青～緑色の標石に、34号墓など流紋岩を選択的に使用するものは白色の右組に見えたはずで、石材の選択にあたって、その半する色も選択基準になっていた可能性も考えられる。

これらの墳墓において、副葬品からは被葬者の優劣は確認できないが、上部構造である標石においては格差が存在することは明らかであり、すでに何らかの階層性が存在していたことが窺える。

### 木棺

下部構造は、基本的に木棺が使用される。棺材の遺存状態も良好で、板材の組み合わせが確認できたものもある。敷基では木棺の蓋板、底板も確認した。棺材が残っていない場合でも、床面の小口板の掘り込みや、土層断面の観察によって棺の存在を確認している。

最も棺の残りのよい16号墓についてみると、小口板は縦目使いで深く埋め込まれ、これを挟む形で長側板を横目に組む。底には数枚の板が敷かれ、蓋板は棺内に陥没した状況で残存していた。小口板を深く埋め込み、側板でこれを挟むという棺の組み方は

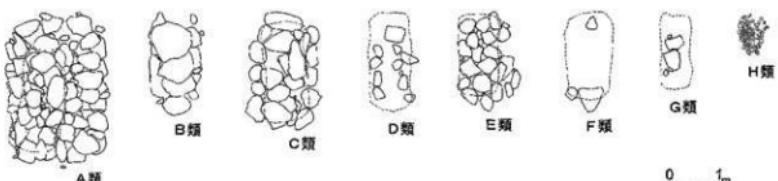


図191 標石の形態分類

ほぼ全基で共通し、底板については数枚の板を使用し、19号墓のように床面を完全には覆わないものもあったようである。蓋板が確認できた例は少ないが、16号墓でみる限り、側板に数枚を構築したものではなく、1枚板を使用したことが残存した木質から判明している。

棺材の使用には数例の例外がある。2号墓の小口板は弧状を呈し、丸木舟材を切断したかのような材が使用され、また床面もU字状に設んでいることから、棺身も舟材の転用か、刳り抜き式の木棺であった可能性がある。23号墓の側板は数枚を上下に組み合わせており、17号墓では、棺裏込めに小石が多数使われていた。

木棺の構造に小異はあるが、近接する墳墓に共通点を持つものがある。棺の東小口が深いものが23、21、03、20号墓。棺南側板外と擴廊の間に空隙があるものが56、20、19、16、4、30、24号墓。西小口に裏込め石を1個置くものが10、11号墓で共通する。些細な点で構造的特徴とまではいえないが、棺をつくるにあたっての細部を、近接する墳墓が共有しており、その被葬者間の関係が密接だったことを示唆する。

木棺に使用された材は、そのほとんどがスギであった。近隣の北講武氏元遺跡の調査では、花粉分析によって同時代の植生を検証しているが、ここでもスギの花粉が卓越しており、もっとも採取が容易な材であったと推定される。棺材にはこの他、例外的にクスノキ、キハダ、カヤ、モミ、シイなどがみられた（第5章「木棺棺材樹種一覧」参照）。

棺材の加工については、16号墓南側板に幅3cm程度の顯著なハツリ痕がみられ、Q2区出土の着製作平片刃石斧（709）のような工具の使用が想定される。また、木取りを確認できるものでは征目に近いものがあり、基本的にはミカン割りによる材を使用

しているものと考えている。また、他の用途の材を転用したものもあった。

#### 棺内法の検討

木棺そのものや木棺の痕跡から、棺の内法が推定できるものが多く存在した（表5）。棺内法が1.7～1.4mのものが成人の屈肢葬に相当するものと考えられ、1.2～0.7mと短く幅の狭いものは小児用と思われる。この区分でみると、墳墓の半数近くが小児用となる。乳幼児埋葬と考えられる土器棺は1基のみで、原則として一定年齢以上の小児は木棺に埋葬されているものと考えられる。また、2号墓は例外的に2m以上の棺が使われるが、2体埋葬、もしくは仲眠葬が予想される。

棺には浅いものと深いもののが存在した。特に隣り合う19号墓、20号墓は20cmもの深さの差があり、意識的な差異の可能性を示唆するが、その意味は不明である。

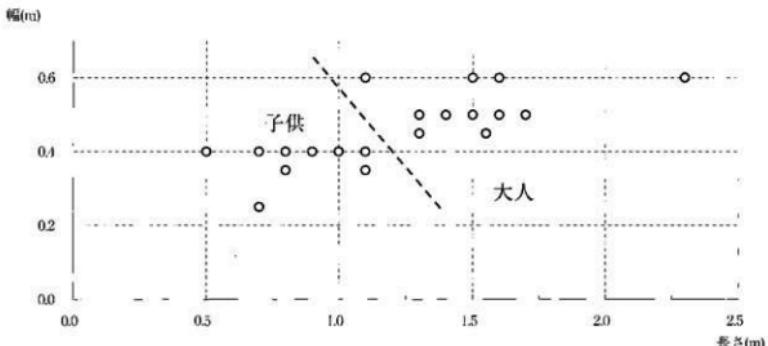
#### 埋葬姿勢

いくつかで人骨が残存するものがあり、遺体は棺内で膝を曲げた屈肢葬であることが判明している。状態は悪いが、現状で確認できる膝の角度は90°前後で、やや緩い屈肢であったようである。これは棺の内法からも確認できる。なお、28号墓の下肢骨の状態は仰臥であったことを推測させるものであった。

#### 頭位方向

木棺内からの人骨、歯牙、玉、櫛などの出土によって、頭位が知れたものが12基ある。これら全てが東頭位とするもので、おそらく墳墓全体で頭位方向が揃えられているものと考えられる。墳墓群は環状に配置されているので、全体では円周に対して反時計回りに頭位を向けて埋葬されていることだろう。

表5 木棺内法



ただし、北東区の52号墓、54号墓は墓域全体の縱列とは主軸を直交させており、墓群内に頭位方向を異なる墳墓が存在している。

#### 出土遺物

供獻土器は、墳墓の多くで確認できている。土器は基本的に遠賀川系のもので、棺内に副葬されるものは一切なく、墳墓の脇や上面に置かれている。供獻土器から墳墓の時期は、前期中葉の限られた時間幅が考えられる。器種には壺と鉢がみられ、個数は壺が圧倒的に多い。また壺は文様をもつものが半数以上で、小形のものが多い。

副葬品は基本的に少ない。装身具類では、2号墓の耳飾りと推定される管玉4本と、21号墓、56号墓で漆塗の堅櫛が各1点ずつ出土した。また、石鎌が2号墓、3号墓、27号墓、28号墓、57号墓、11号墓から出土した。すべて打製石鎌であり、2号墓以外はいずれも1点のみの出土で、突帯文期の包含層からの混入を疑うものも含む。2号墓では床面から14個もの石鎌が2グループに分かれて出土した。詳細は本文で述べたが、副葬とみるか、被葬者に撃ち込まれたとみるか判断の分かれるものである。ただし、例外の多い2号墓だけの事例であり、いざれにせよ当墳墓群で一般的な副葬状況とはいえない。石鎌出土状況は、2号墓が胸とつま先付近、もしくは、2体の胸部、3号墓は胸部の床面よりやや浮いた地点、27号墓、28号墓が下肢付近、57号墓は頭部付近で、5号墓が頭部付近床面、11号墓は棺外からの出土であり、先端の欠損した例は20例中12例である。多くが床面付近の出土で、意識的に副葬されたような位置ではなく、また約半数が欠損品であることから、被葬者に射込まれていた可能性も否定できない。

穏な副葬例として4号墓からエゴノキの実、5号墓から炭化米という植物系の副葬品が検出できた。特に米の副葬は、この墳墓群を造営した集団が、こ

の地での稻作開始者たちであったことを印象付ける。エゴノキの実は食用には向かないもので、民俗例として洗濯・魚糞としての使用例があるといふ。

またこの他、石鎌の供獻や、5号墓脇の旧地表面と考えられる地点から土笛1点が出土している。土笛については、墳墓に伴う初めての出土例であり、葬送禮式での使用を想像させるものである。

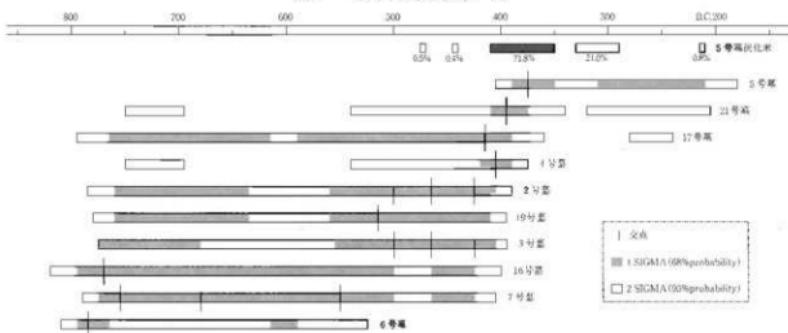
#### 土器の検討

供獻土器からの時期の検討を行いたい。全体は前期中葉、山陰の弥生I-2様式からI-3様式<sup>27</sup>に位置づけられる。おおよそ遠賀川系土器特有の肩部の段が沈線化する前後の段階で、その沈線が多角化する時期のものはない。供獻土器内には無段無文の壺も多数出土している。中には遠賀川系譜の土器とは異質なものも含み、松葉單耳系土器として朝鮮平島との関係で成り立つ土器と位置づけた<sup>28</sup>。これらの土器の時期は決定するに至らず、そのため、単純に肩部の段が沈線化、無文化するという変化過程は考えづらく、また典型的な遠賀川系譜の土器はほぼI-2様式の範囲に収まることから、墳墓の新旧を特定するに至っていない。現状では、比較的短期間に造営された墓地であると判断している。確認できるものでは、6号墓、20号墓等の土器が新しい様相を示している。

#### 年代年代

棺材と5号墓炭化米による<sup>14</sup>C年代測定を行った(表6)。棺材の測定結果の多くは、B.C.800からB.C.400までの間に95%確率で収まり、B.C.700前後とB.C.500からB.C.400の間にそれぞれ68%確率が集中する。例外として6号墓がB.C.800からB.C.500の間とやや古く、5号墓がB.C.400からB.C.200の間でかなり新しい数字が出ている。ただし、5号墓炭化米の測定結果は5号墓棺材の数

表6 <sup>14</sup>C年代測定結果一覧



値に近く、木棺材の試料採取場所による年輪内外の誤差も考慮すると、B.C.400前後の時期が妥当と考えられるが、今後の類例の増加を待ちたい。

なお、棺材による年輪年代測定を試みたがデータは得られなかった。

### 墳墓の系譜

以上の各項の検討を加えて、墳墓の系譜について検討したい。

標石墓は、墳墓の上部に石を配して標示するもので、弥生時代前期においては日本海側に集中して発見される。広義の意味では縄文時代から「配石墓」として存在するが、山陰を含め、西日本で堀部第1遺跡の祖型となる縄文時代の配石墓は知られていない。門遺跡（島根県頃原町）、イセ遺跡（島根県西見町）で縄文晚期から弥生前期の土壙上面に配石が伴うものがあるが、形態は不規則で時期も確定が難しく、堀部第1遺跡の標石の祖型とは考えにくいものであった。いずれにせよ標石墓が縄文時代から当地方で伝統的に営まれた墳墓形態とは考えられず、弥生時代の新米の文化であることは間違いない。

弥生前期の墳墓で、標石が確認できるものは島根県内で7例ほどが知られる。しかし、時期的にはほとんど堀部第1遺跡と変わらないもので、確実に先行する例は今のところ発見されておらず、標石墓の源流を県内で溯ることができないのが現状である。近県の状況に目をやると、墳墓の際示施設として石を用いるものが、土井ヶ浜遺跡（山口）、新町遺跡（福岡）、礫石遺跡（佐賀）などで見られる。弥生文化先進地である北部九州と響灘沿岸部に所在し、時期も堀部第1遺跡より先行するもので、その祖型となる公算が高い。ただし、完全に標石の形態が一致するものではなく、下部構造についても違いがみられる。

その下部構造については、堀部第1遺跡で発見された墳墓は、ほぼすべてに木棺の使用が認められた。その構造も一般的に①小口を溝に据え立て、②その小口を挟む様に側板を置き、③数枚の板を使って底板を敷き、④おそらく1枚板の蓋板をかけるもので、6面をもつ組合せ式木棺であった。山陰で縄文時代に木棺が使用された例はなく、標石同様、弥生文化に伴って流入した新しい文化事象と考えられる。堀部第1遺跡に類似する木棺墓で時期の遡るものは、道場山遺跡（福岡）など北部九州に弥生前期初頭のものがあり、要棺墓が盛行するまで福岡県北部域で一般的な墓制となっている。現状ではこれら先進地からの伝播を考えざるを得ないが、先行する類似の木棺墓には、標石もしくは支石は伴わず、むしろ排他的な分布状況さえ示している。なお、立地においては、沿岸部砂丘地に多い支石墓、標石墓より、木

棺墓との関係が考慮される。

埋葬姿勢については、堀部第1遺跡では程度の綱い屈肢葬が採用されていた。この葬法も弥生新米の葬法と考えられているが、礫石遺跡（佐賀）などの支石墓では、よく似た上部標識をもちらがらも、縄文時代以来の屈葬を採用しているものが多い。これに対して北部九州木棺墓には、人骨等がなくとも棺の内法から、堀部第1遺跡と共通する屈肢葬が確認でき、下部構造との結び付きが強かったものと考えられる。また、堀部第1遺跡では小児も小形の木棺に埋葬されていることが確認できた。これは北部九州の木棺墓制では、ある段階の小児まで土器棺に埋葬することが一般的であり、小児に対する葬法を異にする。埋葬姿勢や小児棺の使用法など、新米の葬法の採用にあたっても地域によって受容の仕方が異なっていることを予想させる。

土器の墓上への供獻行為も地域的な検討が可能である。北部九州の木棺墓では、上器は一般的に棺内に副葬され、墓上への供獻はみられない。逆に西北部九州の支石墓では、墓上の石とともに供獻されるものがほとんどで、墓地の上部構造においては、支石墓からの影響が大であったことが窺える。

この他、「笛の出土」も日本海側での交流を示すものであり、また、墳墓に供獻された土器は遠賀川系の土器がほとんどで、貝殻腹縁で施文するものは山口県綾羅木様式との関係が検討されうるものである。

以上の各事象の検討により、堀部第1遺跡の墳墓の系譜についてまとめたい。

現状では堀部第1遺跡に先行する標石、木棺、供獻土器のセットをもつ墳墓は発見されておらず、直接的な祖型は確認できない。しかしながら、その墳墓の各要素は、北部九州、山口県響灘沿岸部との関係なしでは成立しないものである。特に上部構造の標石は、支石墓の影響を多分に受けていることは間違いくなく、上器の墓上供獻の様子もこれに準じるものである。

現状では、上部構造はかなり変容しているが支石墓を祖型とし、下部構造では北部九州木棺墓の習俗を採用したものと理解するほかない。さらに、その変容の過程を考えるならば、憶測ではあるが、供獻土器から朝鮮半島との間接的な影響が推定されること、また、近隣の古墳砂丘遺跡でも松葉草式土器が出土していることから、あるいは墳墓についても朝鮮半島からの影響を受けた可能性が否定できない。近年、朝鮮半島で見つかり始めてる多様な支石墓の中に、直接的な祖型がみつかる可能性も考えておきたい。

なお、規模や内部主体は違うが、岡192に示した蓋石式支石墓（陥川学浦E地区）<sup>30</sup>はその外観がA類とした標石の形態によく似るものである。また、

B類とした墓域外周の石に人石を架け置くものは、碁盤型支石墓の形態を意識した可能性が推測される。本来巨大な石であった学石の入手が困難であった場合、B類標石のような形態へ変容したと考えても、あながち間違ではないだろう。

いざれにせよ堀部第1遺跡で出土した墳墓は、単純に弥生文化の先進地からの伝播というだけでは考えられない複雑な様相を示している。将来、直接的な故地がいずれかで発見される可能性もあるが、現段階では選択的に墓制の各要素を導入しているとしかいえない状況である。また、標石という形態は、弥生前期の山口、島根の日本海側に頗るなもので、すでに地域色を形成し始めているともいえる。ここに示された様相は当地域における弥生文化受容の過程を如実に示すものだが、未だ疑問点が多く、その過程を復元するにはさらなる検討が必要であろう。

### 集落との関係

遺跡の北300mには、突帯文系の土器と遠賀川系の土器が同一層位から出土した北講武氏元遺跡があり、この遺跡が直接の集落である可能性がある。また、約4km西の日本海岸には、前期から中期にかけての埋葬遺跡である古浦砂丘遺跡が所在する。古浦砂丘遺跡では、堀部第1遺跡ほどの標石はもたないが、両遺跡の関係も今後注目されよう。

また、当遺跡の墳墓群は突帯文土器を含む包含層に掘り込まれており、墳墓との時期的な関係はもとより、両者の土器を使用した集団関係についても弥生文化成立に關する重要な課題である。

今回検出した墳墓群は、墓域前面に広がる講武盆地の水田開拓地の集団墓地と想定している。さらにここでは前期中葉という限られた時間内で形成された墓域の全体を調査しており、出雲地方における初期稻作集団の規模、性格を反映しているものと考えられる。周辺遺跡の状況も考え合わせるならば、当遺跡は日本海沿岸部での初期稻作の導入と展開の経緯を提示しているものと考えられる。

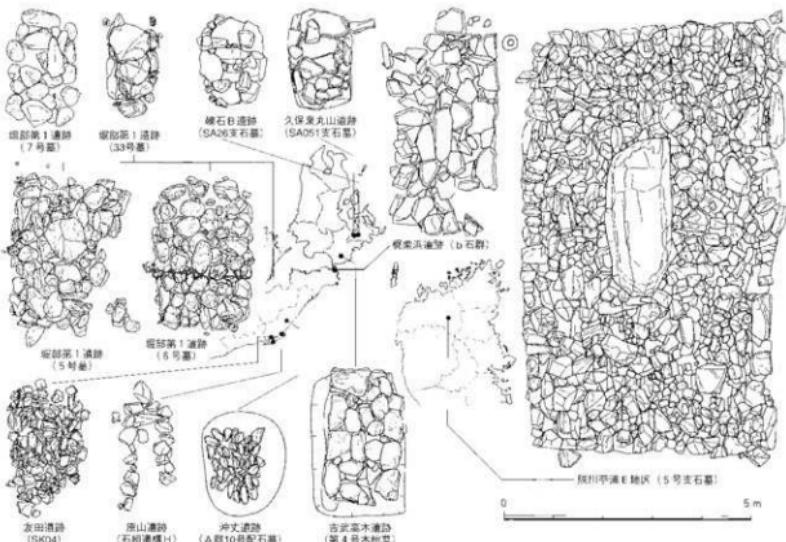


図192 堀部第1遺跡と類似の支石・標石墓

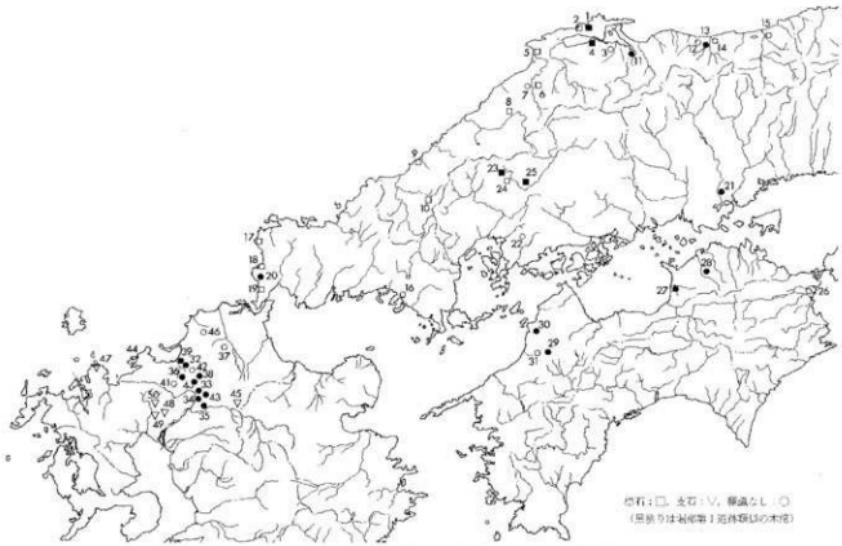


図193 弥生前期墳墓の分布図（番号は表7に対応）

表7 弥生前期墳墓一覧

地図番号	道府県名	市町村名	上位分類	下位分類	土器配置	主な副葬品	弥生前期			備考
							西	中	後	
1	新潟県	守谷市	石室	下位・小石室	仰臥	石器・瓦器・火				全57基、ほぼ今頃を除き、30基を突破。
2	古川郡佐代	(無)	土塚		仰臥	石器・骨器				60基以上のもの横浜、移作、移用。
3	16号		土塚・上部斜面		仰臥	石器・骨器				上野原・上越原1号。
4	夏田	守谷市	石室	(無)	仰臥・側上・横臥					AIA: 26基・山田・羽林原石と鉢形、中輪まで。
5	朝日	守谷市	石室		仰臥					上野原・桃山川河口・羽林原石と鉢形。
6	新潟郡	守谷市	土塚		仰臥					6基・既に横臥の方々で、腰敷を複数。
7	白根		土塚		仰臥					白根郡・守谷市・白根原石と火。
8	市木	守谷市	石室	(A面)	(無)	瓦器・腰敷石類				瓦器・腰敷石類。
9	船原	守谷市	土塚		(無)	瓦器・腰敷石類				瓦器・腰敷石類。
10	ノリヤ		土塚		仰臥					ノリヤ郡・守谷市・瓦器・腰敷石類。
11	30号・31号		土塚							30号・31号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
12	伏木		土塚							伏木郡・守谷市・瓦器・腰敷石類。
13	17号		土塚							17号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
14	鳥屋原郡	守谷市・上郷	土塚・上部・上部斜面		仰臥	瓦器・石器				上野原・桃山川河口・守谷市・中輪まで。
15	45号・46号		土塚							45号・46号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
16	大和郡守店		土塚							大和郡守店・守谷市・瓦器・腰敷石類。
17	百葉	(無)	土塚							百葉郡・守谷市・瓦器・腰敷石類。
18	17号・2号	(無)	土塚							17号・2号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
19	14号	(無)	土塚							14号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
20	15号	(無)	土塚							15号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
21	16号・17号	(無)	土塚・下部							16号・17号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
22	25号	(無)	土塚	下部						25号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
23	26号・27号	(無)	土塚	上部						26号・27号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
24	19号	(無)	土塚	太招						19号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
25	28号	守谷市	石室	土塚	仰臥					28号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
26	29号・30号	(無)	土塚	上部・右側	石室・右側	頭・腰	骨器			29号・30号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
27	31号	(無)	土塚	左側	石室・左側	頭・腰	骨器			31号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
28	32号	(無)	土塚	右側	石室・右側	頭・腰	骨器			32号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
29	33号	(無)	土塚	左側	石室・左側	頭・腰	骨器			33号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
30	34号	(無)	土塚	上部	石室・上部	頭・腰	骨器			34号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
31	35号	(無)	土塚							35号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
32	36号・G-Sa	(無)	土塚	右側	石室・右側	頭・腰	骨器			36号・G-Sa・守谷市・瓦器・腰敷石類。
33	37号	(無)	土塚	左側	石室・左側	頭・腰	骨器			37号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
34	38号・39号	(無)	土塚	上部	二重式					38号・39号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
35	40号	(無)	土塚	右側	二重式					40号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
36	41号	(無)	土塚	左側	二重式					41号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
37	42号	(無)	土塚	左側	二重式					42号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
38	43号	(無)	土塚	左側	二重式					43号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
39	44号	(無)	土塚	左側	二重式					44号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
40	45号	(無)	土塚	左側	二重式					45号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
41	46号	(無)	土塚	土塚	上部・右側	頭	瓦器			46号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
42	47号	(無)	土塚	上部	二重式	頭	瓦器			47号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
43	48号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			48号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
44	49号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			49号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
45	50号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			50号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
46	51号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			51号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
47	52号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			52号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
48	53号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			53号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
49	54号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			54号・守谷市・瓦器・腰敷石類。
50	55号	(無)	土塚	左側	二重式	頭	瓦器			55号・守谷市・瓦器・腰敷石類。

表8 堤部第1遺跡墳墓一覧

区	号	出土遺物				墓の概要(単位: m)						
		供獻品 土 純 石 装	棺内出土品 骨、肉、糞	その他	標石				主体部			測定方向 (推定)
					長辺	短辺	側数	形態	基壇	木棺(内法)	深さ	
尾区	1号	1		骨、端材	2.5	1.5	25	C	2.2	0.9	0.3	E-16°-N
	2号	1	右腰14、菅玉4 棺材		3.3	1.2	30	E	2.7	0.9	0.2	E-3°-S
	3号	1	(縛1)	棺材	1.8	0.8	20	E	1.9	0.8	0.3	E-26°-S
	2.4号				1.3	0.8	10	E	1.1	0.6	0.2	E-32°-S
	3.0号	1	棺材				1	G	1.0	0.5	0.3	E-25°-S
	2.5号		棺材				2	G	0.7	0.6	0.3	E-30°-S
	1.5号		蓋板									
	4号	1	エゾノモの裏 棺材		1.7	0.9	7.2	L	1.9	0.8	0.3	E-35°-S
	1.6号	2	手鏡1 石器1 骨、肉、棺材		1.5	1.0	10	D	2.0	0.9	0.6	1.55 0.45 0.3
	1.7号	1	棺材、石器		1.5	1.3	8	D	2.3	1.6	0.5	E-12°-S
	1.9号	1	棺材、漆		1.7	0.6	15	E	1.8	0.8	0.4	E-29°-S
	2.0号	1	棺材				3	F	1.8	1.0	0.25	1.5 0.5 0.3
	2.1号	1	堅樹		2.5	1.2	9	F	1.5	0.7	0.3	E-2°-S
	2.2号	1	棺材		1.5	0.6	10	E	1.3	0.6	0.2	E-15°-S
	2.3号		右腰1 石器1 棺材				0		1.3	0.6	0.5	E-4°-S
	2.6号	2	蓋板のみか?		0.7	0.4	5	G	1.5	0.6	0.2	E-14°-S
	2.7号	1	石器1		不明	0.7	7以上	G	不明	0.7	0.3	不明 0.35 0.2
	2.8号	2	石器1	骨、棺材	不明	0.9	7以上	E	不明	0.9	0.2	不明 0.4 0.2
	5.6号	1	堅樹	骨、棺材			0		1.9	0.8	0.3	E-17° S
	5.7号	1	石器1				不明		1.0	0.4	0.3	E-23°-S
東区	5号	4	右腰1、米	上面、骨、棺材	3.2	2.4	150	A	2.4	1.2	0.4	1.6 0.6 0.3
	6号	3		棺材	2.1	2.1	90	A	2.1	0.8	0.4	E-24°-S
	7号	2			2.4	1.4	20	C	2.1	0.8	0.4	E-28°-S
	8号	2			1.4	1.0	13	E	1.4	0.6	0.5	E-17°-N
	9号			骨、骨、棺材	1.8	0.9	20	E	1.7	0.8	0.3	E-26° N
	1.4号	1	1	骨、筋の筋肉、骨	0.8	0.5	3	G	1.0	0.6	0.2	E-25°-N
	1.0号				1.4	0.8	10	E	1.6	0.8	0.3	E-45°-N
	1.1号	1	右腰1	歯	1.6	1.0	40	C	1.6	0.8	0.3	N-46°-E
	1.2号		第十		0.8	0.8	7	E	0.9	0.7	0.25	0.5 0.4 0.2 E-13°-N
	1.3号	2	歯		0.9	0.8	6	E	1.2	0.8	0.3	1.0 0.4 0.2 N-2°-E
	2.0号				0.5	0.5	4					
北東区	4.4号	1			2.3	1.6	40以上	B				N-14°-E
	5.0号	1			2.2	1.1	35	C				N-17°-E
	3.1号	1			2.3	1.1	40以上	C				N-11°-E
	3.2号	1	1		1.6	1.2	11	E				N-3°-E
	3.3号	1	1		2.1	1.1	16	B				N-4° W
	3.4号	1			2.4	1.5	30	A				N-13°-W
	3.5号				1.8	1.7	5	E				N-21°-W
	4.5号				1.9	1.9	21	B				N-14°-E
	5.5号	1			1.4	1.2	15	H				N-12°-E
	5.4号				0.8	0.7	小鏡	H				W 34°-N
	5.1号	1			1.8	1.2	15	E				N-11°-E
	6.2号	1			1.9	1.2	20以上	C				W 38°-N
	5.3号				1.4	0.6	3	F				N-11°-E
	3.7号				2.1	2.9	15	E				N-27°-E
	3.6号	1			1.1	0.7	17	H				N 34°-E
	4.6号	1			1.2	1.1	小鏡	H				N-10°-E
	4.7号				2.1	0.7	11	F				N-8°-W
	4.2号				2.2	1.2	20	E				N-40°-E
	3.8号	2	1		1.9	1.1	12	E				N-1°-W
	3.9号	1			2.0	1.1	13	F				N-17°-W
	4.0号	1			1.5	0.7	11	E				N-3°-E
	4.1号				1.6	0.8	5	F				N-1°-E
	4.3号	1			1.5	0.9	5	F				N-13°-W
	4.8号	1			0.6	0.4	2	G				N-6°-W
	4.9号				1.9	0.6	4	D	1.9	0.6		N-30°-W

<註>

- 1.『佐太講式武貝塚発掘調査報告書2』鹿島町教育委員会 1994年
- 2.『佐太講式武貝塚 古墳時代遺物松江鹿島美保関線交通安全施設整備工事に伴う発掘』鹿島町教育委員会 1997年
3. 1998~1999年鹿島町教育委員会調査。『開拓者の眼とところ連報! 堀部第1遺跡木棺墓群』鹿島町立歴史民俗資料館 1999年
- 4.『講式地区奈良宮圓場整備事業免振調査報告書』北講式武氏元道跡』鹿島町教育委員会 1989年
- 5.『古跡追跡』古跡調査研究会、鹿島町教育委員会 2005年
- 6.『志谷奥道跡』鹿島町教育委員会 1976年
- 7.『下谷遺跡・御田遺跡 佐太南地区農村活性化と周辺整備事業に伴う発掘調査』鹿島町教育委員会 1994年
- 8.『佐太前遺跡』鹿島町教育委員会 1987年
- 9.『講式地区奈良宮圓場整備事業免振調査報告書1 名分塚遺跡』鹿島町教育委員会 1985年、『講式地区奈良宮圓場整備事業免振調査報告書3 名分塚川遺跡2』鹿島町教育委員会 1987年
- 10.『南講式武小野遺跡』鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』鹿島町教育委員会 1986年
- 11.『講式地区奈良宮圓場整備事業免振調査報告書5 南講式草平遺跡』鹿島町教育委員会 1992年
- 12.『奥才古墳群』鹿島町教育委員会 1985年
- 13.『奥才古墳群第8支群 黒道御津車生馬跡改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 2002年
- 14.『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 1983年
- 15.『島根県力充電所P-R移設設計案に伴う名分丸山古墳群測量調査報告書』鹿島町教育委員会 1984年
16. 山本清『山陰地方村落古墳の様相-出雲地方を中心として-』『島根大学論叢(人文科学)』9号 1956年
- 17.『菅田考古』17 島根大学考古学研究会 1995年 この報告では円墳として測量、紹介されているが、近年の分布調査の結果、前方後円墳の可能性が高い。
- 18.『講式地区遺跡分布調査報告書2』鹿島町教育委員会 1988年
- 19.注18書。
- 20.井上寛司『佐陀莊』『島根県人百科辞典』山陰中央新報社 1982年
- 21.独立行政法人奈良文化財研究所 深澤芳樹氏のご教示による。深澤芳樹『葬身の負傷者たち』『文化論叢震災』奈良文化財研究所 2002年
- 22.同志社大学人文学院文学研究科(調査担当) 道場史子氏の同定による。洗浄、魚毒として使用する例があるという。
- 23.松葉里式土器にヘラケズリがあることは、独立行政法人奈良文化財研究所 深澤芳樹氏のご教示による。深澤芳樹・李弘輝『松葉里式土器におけるタキ技法の検討』大阪府立文化博物館 2002年
- 生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2002年度共同研究成果報告書』財團法人 大阪府文化財センター 2004年
- 24.山田康弘 2000『山陰における列状配置系城の展開』『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 25.此松雅彦 1989『N・北講式武氏元道跡の花粉分析』『講式地区奈良宮圓場整備事業免振調査報告書4 北講式武氏元道跡』鹿島町教育委員会
- 26.道場史子氏のご教示による
- 27.松本岩雄 1992 17 出雲・尾岐地域。『旁生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡胜夫・松本岩雄編 木耳社
- 28.片桐安二氏のご教示による
- 29.測定は奈良文化財研究所 光谷拓次氏に依頼した。
- 30.河内秀 2000『播磨地方 無文土器時代 墓制(?)様相』『第48回 埼玉文化財研究会会員の墓制(1)』埼玉文化財研究会
- 31.『道場一覧出典』
2. 速井等1987『島根県古浦遺跡』『探訪弥生の遺跡 西日本編』佐京原・上田善通編 有斐閣、3. 建設省松江河川工事事務所・島根県教育委員会1996『柳川遺跡』『柳川遺跡 小久保垣草 神宮寺遺跡』、4. 松江市教育委員会1983『友田遺跡』『松江園都市計画事業乃木木地区西整理事業区内地域文化財勾当課発掘調査報告書』、5. 大吾町教育委員会1986『山雲・原山遺跡免振調査報告書』、6. 島根県教育委員会1998『板屋里遺跡』、7. 岸根県教育委員会1996『門道跡』、8. 邑智町教育委員会2001『仲穴遺跡』、9. 松木岩雄1984『79石船の上城燕群』『さんいん古代史の湖辺 川』山陰中央新報社、10. 邑智町教育委員会1993『イセ遺跡』『ヨレ遺跡、イセ遺跡、竿田遺跡』、11. 米子教育委員会1982『市子諭訪遺跡群免振調査報告書』、12. 大栄町教育委員会1984『向野遺跡』後谷道雄発掘調査報告書、13. 奈古町教育委員会1994『イギス遺跡墓地調査報告書』、14. 財團法人鳥取県教育文化財団1982『長瀬高須遺跡免振調査報告書』、15. 鳥取市教育福井振興会1993『西人路上原遺跡』、16. 山口県教育委員会1973『宮原遺跡・上広石遺跡』、17. 金間丈夫・坪井清足・金間忠1961『山川界上井浜遺跡』『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編、上川ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム1998『上川ヶ浜遺跡』第16次免振調査報告書』、牛井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム1999『牛井ヶ浜遺跡』第17次免振調査報告書』、18. 伊藤照雄1997『山口県北詔沿岸の葬制・下関兩里式古墳跡と豊浦町中の葬跡を中心として』『研究紀要』第1号 下関市立考古博物館、19. 金間忠1961『梶栗浜遺跡』『山口県文化財総覧第4集 墓藏文化財』山口県教育委員会、金間忠1965『梶栗浜遺跡』『下関市史 原始・中世』下関市史編纂委員会、20. 下関市教育委員会1991『御堂遺跡・山口県下関市大字永山郷地内御堂遺跡免振調査報告書』、21. 岡山県古代吉備文化財センター1993『岡山県埋蔵文化財免振調査報告書84 百間川浜遺跡3』旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査報告書、22. 財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター1992『貢村谷遺跡』

- 「広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第99集『金平山遺跡・貝原谷遺跡』」**23**、(財)広島県埋蔵文化財調査センター1994「阿の段C点遺跡」「中國横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(N)」**24**、広島県教育委員会1982「塚追遺跡群」「中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」**25**、広島県教育委員会1971「高平遺跡群」「広島県文化財調査報告書 第9集」**26**、鹿児島大学埋蔵文化財調査室1998「庄・森木遺跡! -鹿児島大学森木キャンパスにおける発掘調査-」**27**、片桐孝浩・信重芳記1998「弥生時代の墓制について-磯ノ口遺跡の事例を中心に-」「研究紀要M」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、**28**、香川県埋蔵文化財調査研究会1999「佐古川・森田遺跡」「國道ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」**29**、愛媛県教育委員会1978「西野Ⅲ遺跡」「愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書」**30**、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1995「持田町3丁目遺跡」**31**、愛媛県埋蔵文化財調査センター1981「長川遺跡」「一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書」**32**、福岡市教育委員会1976「板付周辺遺跡調査報告書(3)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集、**33**、小郡市教育委員会1970「津古内久内遺跡 福岡県二井郡小郡町岸井古所在遺跡発掘調査概要」**34**、福岡県教育委員会1978「ハサコの宮遺跡」「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書XXXI 中巻」**35**、福岡県教育委員会1978「北牟IH遺跡」「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書XXXI 中巻」**36**、春日市教育委員会1981「西平塚遺跡・ナライ遺跡」福岡県春日市文化財調査報告書第10集、**37**、福岡県教育委員会1977「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書XIII」**38**、福岡県教育委員会1978「道場山遺跡2地点」「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書XXV」**39**、福岡市教育委員会1996「下月川天神森古」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集」**40**、福岡県教育委員会1978「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告書XXIV」**41**、那珂川町教育委員会1984「松木遺跡1」「那珂川町文化財調査報告書第11集」**42**、大野町教育委員会1971「中・寺尾遺跡」「人野町の文化財第3集」人野町教育委員会1977「中・寺尾遺跡」「大野城市埋蔵文化財調査報告書第1集」**43**、小郡市教育委員会1986「三園の鼻遺跡II」「小郡市埋蔵文化財調査報告書第31集」**44**、志摩町教育委員会1987「新町遺跡」「志摩町文化財調査報告書第7集」志摩町教育委員会1988「新町遺跡II」「志摩町文化財調査報告書第8集」**45**、福岡県教育委員会1999「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-56-」**46**、宗像市教育委員会1999「川久松ノ瀬遺跡」「福岡県宗像市丘所在遺跡の発掘調査報告-宗像市文化財調査報告書第17集」**47**、呼子町郷土史研究会1981「大友遺跡」「呼子町文化財調査報告書第1集」**48**、佐賀県教育委員会1986「久保泉丸山遺跡」「佐賀県文化財調査報告書第81集」「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)」**49**、佐賀県教育委員会1989「砂石遺跡」「佐賀県文化財調査報告書第91集」「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)」**50**、佐賀県教育委員会1987「黒土原遺跡」「佐賀市文化財調査報告書第19集」

#### <参考文献>

- 赤澤秀則 1999「弥牛農耕成立期の墳墓群-島根県瑞那郡第1遺跡」「季刊考古学」**69**  
鹿島町立歴史民俗資料館 1999「開拓者の風るところ- 遺報! 塙部第1遺跡木棺墓群」  
植原桃代・藤永隆 2000「鳥取県鹿島町塙部第1遺跡」「考古学ジャーナル」**156**  
植原桃代・藤永隆 2000「鳥取県鹿島町塙部第1遺跡」「鳥取考古学誌」第18集 鳥取考古学会  
小林達雄・小川忠博編1989「繩文土器類44 桟梯 晩期 統繩文」柳浦俊一2000「山陰地方绳文時代後期初頭~中業の上雲編年」「鳥取考古学誌」第17集鳥取考古学会  
瀬川亮介2001「II」沖丈遺跡出土の突宍文土器と石見東部の地域性」「沖丈遺跡」凸凹町教育委員会  
西伯著「弥生聚落検討会2001「山陰地方における弥生時代前期の地域相-資料集-」第3回 西伯著「弥生先落検討会」  
埋蔵文化財研究集会2000「弥生文化の成立-各地域における弥生文化成立期の具像像-」第47回 埋蔵文化財研究集会 発表資料  
埋蔵文化財研究集会2000「弥生文化の成立-各地域における弥生文化成立期の具像像-」第47回 埋蔵文化財研究集会 発表資料  
加藤光由2000「石に樹軸した弥生豆の系譜-前期~中期墓制の地域相-」「広島県立廿日市西高等学校研究紀要「江と夢」第8号」  
小川富士雄1991「墓制(2)北部九州を中心に」小川富士雄・轉写二編「古時交渉の考古学 弥生時代編」六興出版  
福永伸哉1987「木棺墓」金闇旭「佐原真編集「弥生文化の研究」8 祭と墓と装い」  
森田等1968「弥生時代の配石墓について」金闇丈夫博士・古希記念委員会編「日本民族と南方文化」平凡社  
片岡玄一1999「弥生時代 渡来人と土器・青銅器」雄山閣  
福岡市教育委員会1996「古武遺跡群」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集」





堀部第1遺跡航空写真

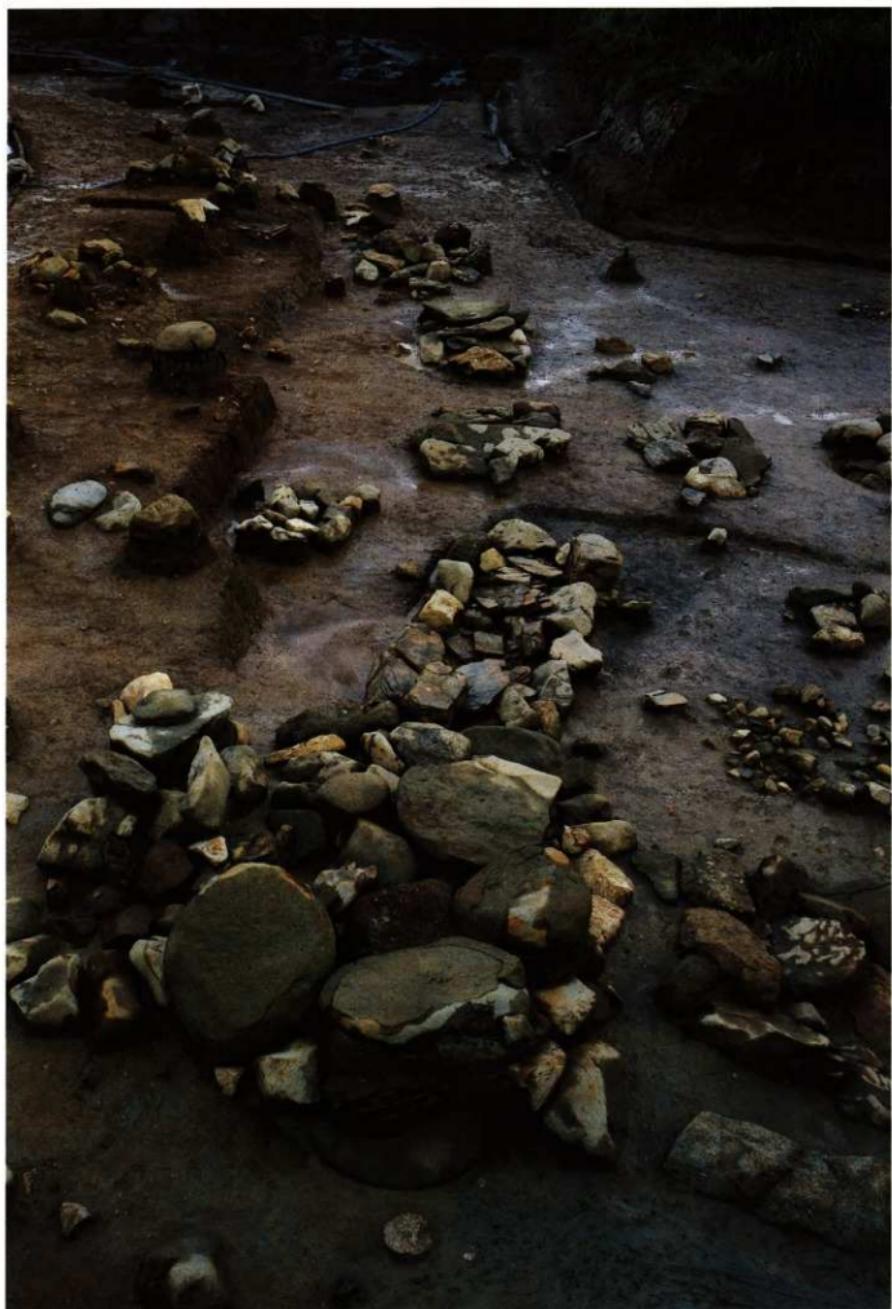
図版2



西区標石航空写真



東区標石航空写真



北東区標石

図版4



19号墓木棺



塚部第1遺跡出土遺物